
超心理的青春

ryouka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超心理的青春

【Nコード】

N0675D

【作者名】

ryouka

【あらすじ】

ある双子のもとに超有名進学校の推薦入学の誘いがきた。2人は入学することになるのだけれど、その学校には日常ではありえないクラブが存在するのだった。

その1 始まる以前（前書き）

高校に入学してからというもの、ろくなことなんてない。何が有名進学校だ。裏を開けてみればこの通り、命の取引を繰り返す日々だ。

今だってこんなことを考えてる場合じゃない、鳴り止まない銃声、張り詰めた空気、弾薬の匂い。ここにいると、この国が平和を唱えていることが嘘のように思えてくる。もうすぐ僕は死ぬのかもしれない、天照もはぐれてしまったし、他のみんなはどうなったか知らない。探そうと思えば超心理の加護で見つけられるんだろうけど、もう疲れたよ。この1年、僕は何をしてきたんだろう。死ぬ前にそれくらいは知りたいよ。

那実、お前ならこの状況どうする？

その1 始まる以前

僕、伊佐^{イサナギ}薙はもうすぐ高校生になる。

現在、中学3年生で、まさに今、高校生になるために受験校へ双子の兄と向かっている。

その学校は日本でも有名進学校で、普通に考えれば僕たちが受験するようなところではなかった。

1カ月前のある日、封筒が届いた。送り主は「京都文化芸能大学付属高校」文章の内容はこんな感じだった。

「あなたを『特別能力開発学科』へと推薦したいと考えています。もし進学校を決定していないのであればこちらにご連絡ください」とのこと。

いきなりのことだったので、わけがわからず、双子の兄である那^ナ実^ミに相談することにした。名前は女^メつばいけど、どこから見ても男である。外見内面どちらから見ても。双子の弟の僕が言うんだから間違いない。

「那実、ちょっと相談があるんやけど」僕がそういうと、いつもより速く反応して、「俺もや、ちょっと聞いてくれへん?」

那実から相談とは珍しいことだ、いったいどういう相談? 恋愛方面は勘弁で。

「薙に恋話しても無駄やろ」悔しいけどその通り。

「もっと別なことや・・・進路のこと」もしかして、那実にも同じ封筒が届いたのか?

「京都文芸高から封筒がきたんやけど」やっぱり。

どういう偶然だろう、話にしては出来過ぎてるし。

「おかしいな、僕にも届いたよ。その封筒」

「そりゃびつくりだ。で、どうする?」那実はどうするんだ?

「俺は一度高校に連絡するべきだと思うけどな」まあ一般論だね

「で、どういふつもりか聞かなあかん」

早速を電話するべきだと思い、部屋に取りに行こうと思うと、那実がもう通話中だった。相変わらず行動が早い。僕が遅いだけか？

「もしもし、京都文化芸能大学付属高校でお間違いないでしょうか？ ハイ、特別能力開発学科について封筒が届いた伊佐那実といします。なぜ僕に推薦の封筒を送ってきたのか気になりました……ハイ、………ハイ」

どうしたんだろ？ さっきから「ハイ」しか言っていない。

「ちよつと待っていただけですか？ ……電話中や黙れ！」

そんなに怒らなくてもいいだろ。早く通話が終わればいいのに。内容が気になって仕方ない。

「わかりました。そちらから伺っていただけるならうれしいことです。では後日、ハイ、お手数かけました」

那実の中途半端に丁寧な敬語がやつと終わった。こいつがこんな話し方すると虫唾が走る、半音高い声も。

「今度の土曜日、家まで来てくれるやつて」

「どういふこと？」

「俺が、詳しいことを聞かせてくれ言うたら、電話ではなんなのでこちらから伺わせてもらいますやて。親にも話があるようやし、それが手っ取り早いと思つて。これでええやろ？」

確かに来てくれるなら、それにこしたことはないけど。

「お母さんに言わなあかんのちゃうの」

「そうやな、土曜日に推薦校の先生来るから空けとけつてな。俺が言うといたるわ」そう言つと、封筒を持って、うれしそうに駆け出しながら、母のいるキッチンへと向かつて行つた。

何故、あんなにも楽天的なんだろう？ 裏があるようにしか僕には思えなかった。

「京都文化芸能大学付属高校」略して「京都文芸高」は日本でも指折りの進学校で、毎年、東大や阪大、京大など、偏差値の高い大学にたくさんの生徒が進学するような高校である。そのような高校

に何故、僕のような特別勉強が出来るでもない、運動で目立った活躍もない、芸術の才能に秀でたわけではない、のに、どうして推薦が来たのだろう。

特別なことは、人とは少し違う境遇で育ってきた、ということだけだ。

しばらくして、お母さんが慌しくノックし、返事をする間も無くドアを開いた。

「あんた京都文芸高から推薦って凄いやないの！！ 今日のご馳走や」そう言つとすぐドアを閉め、一目散で買い物へ出かけていった。

母も浮かれ気味のような。那実も受験勉強をしないで高校にいけるので、上機嫌である。僕はというと少々不安だ。上手い話には裏がある、そういうことだ。

回転寿司にしても安さの理由は奇形魚やその類であり、安い野菜のほとんどが中国産だ。何事もなければそれで良いのだけど・・・。そう思いながらも、久々のご馳走に舌と腹を満たしたのは事実だった。

けれどこのときはまだ思いもよらなかった、そのような類の学校が本当に存在するということに。

その1 始まる以前（後書き）

「始まる以前」を読んでいただきありがとうございます。

第一章は伊佐兄弟の過去のことを重点に話を進めますので、知りたくなければ第二章（その8）に飛んでいただいてもらっても結構です。気になればまた見返してもらえればそれでうれしいです。

もしよろしければ、小説の評価をいただけるとうれしいです、どんな適当な言葉でも良いですので、それがあたしのやる気にも繋がりますので。おねがいします

その2 日常と非日常を分ける土曜日

そして土曜日になった。

僕の心理状態というと、初めは不安だったけどやはり根は楽天的なのだろう。すぐに良い方向へ心を転換させていた。おめでたい深層心理だこと。

太陽が空の天辺で止まったような午後についに訪れた。「ピンポン」というふざけたチャイム音と共に。

お母さんは丁寧ドアを開け、深くお辞儀をしリビングへ案内した。京都文芸高の先生と思われる、その女性は長身でスラッとしたモデル体系で、黒いストライプのスーツがよく似合う、教師にしておくにはもったいないほど綺麗な人だ。後ろに束ねた髪型がまた似合っている。

僕たち兄弟は話を聞こうと思い、一緒にリビングへ向かったが、その綺麗な先生に、「先にお母さんと話をするので、君たちは部屋に戻ってくれるとうれしいな」

とまるで幼児を扱うかのような口調で、（今思うと腹立つけど）そのときはこれ以上に丁寧な言葉で、それでいて優しい発音はあるのだろうか、と感じてしまい考えることもなく、僕は部屋へ戻って行った。

それから20分が過ぎ、ようやくお母さんがリビングの扉を開ける音がかすかに聞こえた。

「お母さん買い物行ってくるから、その間に先生の話の聞いたときなさい」

そう言つと、まるで鼻歌が聞こえてきそうな歩調で買い物へ出かけていった。どれほどの好条件だったのだろうか？ 余計に不安がよぎる。

そして、待つてましたと言わんばかりに那実が口を開いた。

「いきなりやけど、何で俺らをそんな進学校が、推薦までして欲しいがるのか理由を知りたいな」やっぱり気になってたんだ。

「推薦する理由？」

初めて聞いた優しい声質とは違った。

何が変わったといわれても良いにくいけど、声に深みが増したといえはいいのだろうか。

「もちろん、嘘はナシや。まあ時と場合によるけど、今は真実を語るときや」威勢良く、胸を張ってそう言った。まるで演劇会のバカな王様役のように。

「では、話すとしますか」

深く息を吸い、吐いた後、ドラマのワンシーンのようなマシンガントークが続いた。

「この間、学校でIQ測定をしたわよね。学校からの通知では那実さんは110で薙さんは103でしたよね。しかし本当のところ、2人共IQが170を超える天才なワケ」

「どうということ？ 僕らは凡人じゃなくて、天才だったってこと？」

「あなた達に受験してもらおうと思う『特別能力開発学科』では、そういう、『超』の付く天才を集めているの。実際はIQ170以上の人間なんてほんの一握りだからね。あたし達の学校は、国からの指示を受けて『特別能力開発学科』を作成したの。基本的にどんなことをするかというの」

ここまで来てやつと説明に入るのか、よく喋る女だ。

「簡単にいうと『アイデアマン』を作る学校ね」

やっと、合いの手を入れる間を与えてくれた。

「アイデアマン？」

15歳にもなつて「いないいないばあ」されたような顔をして那実はそう言った。

「いつだってそう、歴史は一人の天才によって動かされてきたわ。簡単にいえば天才的なアイデアや発明が必要だったの。そういうの

は結局みんなの力ではなくて一人の力でしょ？ それを鍛える学科なの」

確かにそう言われると、その通りだ。もしエジソンがいなければ、ここまで便利な生活は出来ただろうか？ 坂本龍馬がいなければ、今の日本はなかったかもしれない。

「現在の日本では、偉人と呼べる人間はほぼ皆無で、本当にバカな人間が増えてきてしまったわ。そこで国が危機感を覚えて、我が校にその学科を作ることにしたの」

那実が戸惑いを含んだ表情で、「なんでIQが高いことを隠したんですか？ 別に本当のことを教えてくれればよかったじゃないですか」

確かにその通りだ、なぜ嘘の結果発表をしたのだろう。

「IQ150なんて、実際にいれば凄い問題になるの、週刊誌に載ったりTVに映ったりするかもね。そういう危険性を考えて、あえて嘘を表記したのよ」そんなに高い知能指数を僕達は持っているのかな？

でもそれほど希少価値な人間が1クラス作れるほどいるのだろうか？

「今のところ、この封筒を送ったのは17人よ。ちなみに毎年約20人ほど入学者はいるわね。今年は少し不足みたい。」

そっか中学校みたいは何人以上いないとだめとかじゃないのか、義務教育じゃないもんね。

と頭の足りないことを考えていると、那実が入学を決めたような顔で質問した。

「寮とかあるの？ 学費とかも免除なんかな？ ほら推薦やろ」
えらく現実的な質問だな…。

けれど、確かに一番重要なところだ。僕らの住む町から京都文芸高は電車で約2時間程かかるし、通学には不便だ。

すると、待つてましたといわんばかりのセールストークにも似た口調で話し始めた。

「もちろん学費も免除よ、ちなみにこの学科は全寮制だからね。お金の心配は無用！ 国民の血税から頂いてるから、君達がお金の心配をするのはお小遣いだけよ」

そりやお母さんも浮かれるわけだ。2人同時の入学は経済的になり負担だし、うるさい息子2人が出て行くし、最高じゃないか。おまけに超一流進学校。おまけとしてはでかすぎるけどね。

まあ、ただひとつ気になるのが税金にお世話になるってコトくらいか。

一通り話を終えると母が帰ってきた。

「じゃあ、私はこれで失礼します。あなた達が我が校の門をくぐるのを望んでいるわ。それじゃあまたね」

「またね」の言い方がまた幼児のように扱われている感じがしたが、なぜか心が和らいだ。

玄関で母とすれ違い様、少し会話をして「おじゃましました」と深くお辞儀をして京都文芸高の先生と思われる女性は帰っていった。そういえば、名前とか聞いてなかったなあ。

と思うと机の上上品な名刺が置いてあった。どうやら和紙で作られているようだ。

「京都文化芸能大学付属高校 特別能力開発科教師 沖田馨」
おきたかある

その沖田先生が帰るとき、すれ違いに何を話したのか気になってお母さんに聞くと、「せっかくだから、晩御飯を食べて帰りなさいっていったのよ。まだ仕事があるので、って断られちゃった」

そりゃ断るだろ。初対面でしかも仕事先で、飯をご馳走になれるわけがない。そうお母さんに文句を言いながらも、僕の脳内は京都文芸高でいっぱいだった。

その2 日常と非日常を分ける土曜日（後書き）

「日常と非日常を分ける土曜日」を読んでいたきうれしいです。

見切りをつけないでその3も読んでいただけるコトを願います。

沖田先生はいかがでしたか？

もしよろしければ評価をお願いします。

その3 青天の霹靂の薙

沖田先生が来た日の事を思い出しながら、電車は京都へと向かう。

今は2月、ハッキリいつて寒いとしかいいようがない季節だ。

寒いのは嫌いだけど、冬の凜とした空気は好きだ。隣に座る双子の兄弟の那実はどう思ってるか知らないけど。

忘れてるかもしれないけど、僕と那実を受験校である京都文化芸能大学付属高校へと向かう途中だった。

何だかんだ言って、僕も受験勉強をしなくて良いという楽な道を選んだのだ。

クラスにいて思ったけど、あのピリピリした空気はなんともいえないものだ。あぁなってしまうのなら、少々危ういけども超有名校に推薦入学した方がましだと考えた。

まあ言い訳だけど。

駅から徒歩10分。京都文芸高は驚くべきところに所在した。

あの世界遺産、東寺から直径200mにあるのだ。ハッキリいつて丸見えである。こりゃ寺マニアとかにはたまらない学校だ。僕はマニアじゃないけど。

京都文芸高は、校舎も変わっていて、おそらく周りの景色に溶け込むためか、和風で、寺や神社のような形をしていた。簡単にいえば3階建ての平等院鳳凰堂みたいなやつ。10円玉に書いてるアレね。校内もやはり変わっていて、坊さんになった気分がする。でも制服は普通の学ランとセーラー服だった。

そんな校舎なのだから、迷ってしまうかもしれないと不安に思ったけれど、面接をする教室の案内図が貼ってあったので簡単にいけることが出来た。

教室の前には、数人の生徒が座っていた。特に緊張の面持ちは無

い様に見えた。僕もそれほど緊張してない、落ちる事の無い受験だと知っているからだ。

推薦なのに落ちるわけがないよな、ただの顔見せ程度の面接だろう。

今日の予定は、先日送られてきた「推薦入学者受験日予定表」に記させていた

（午前9時30分面接開始、それを終えると健康診断を行い、午後からは保護者説明会を行う）

学力テストもなしか……。本当にIQが高いつてだけで合格なんだな。でも健康診断はするんだ、まあそういうことしないと保護者とかうるさいしね。

面接はなんてことなく、中学の思い出や、この学校の印象を聞かれただけだった。面接の先生はフランクな方で話しやすかったし、沖田先生の姿もその中に見えた。あまり話してなかったけどね。

そして健康診断へ那実と共に向かった。そこで身長、座高、体重、内科検診、心電図、脈拍、採血、最後に最近この近所で流行っているらしいインフルエンザのワクチンを打ってもらい、健康診断を終えた。

午後から行われた保護者説明会の内容は、先月、沖田先生が話してくれた内容に、この学校の校風などの説明を付け足したものだ。知らない間に、ここ最近で最も強い眠気に襲われて眠ってしまった。

目覚めた頃にはもう終わりかけで、お母さんに、「兄弟そろって寝てるんちゃうわ」と吐き捨てられた。

那実も寝ていたのか。そりゃ一緒の話を2回も聞くと眠たくなるよな、そこまで興味もないし。

4月まで用のなくなった、これから我が母校になる京都文芸高を一瞥して、こんな変わった校舎もありだと考えていると、どこかで見たようなやせ気味でちょい幸薄そうな顔の中年男性が前から歩い

てきた。

やけに目に付く人と考えるのは当たり前で、この中年男性は今日の面接官だった先生だ。確か名前を本居って言ったっけ？

「さようなら」と挨拶をしようとする刹那、その声はまるで底のない沼のようで暗く、僕達兄弟にとって最も聞きたくない、日常会話で使用する頻度は0に等しいその言葉は、僕の心臓を打つ脈よりも確かに鼓膜に響いた。

「腹違いの双子」

その3 青天の霹靂の薙（後書き）

「青天の霹靂の薙」を読んでいたいただきありがとうございます。
その3まで読んでくれてうれしいです。

このタイトルは「青天の霹靂の素」だったんですけど、「その4」が「那実」と言うことなので、「素」から「薙」に変更しました。

もしよろしければ、小説の評価をお願いします。
指摘などでもうれしいです。

その4 青天の霹靂の那実

眠い……。

すっかり寝息をたててしまった保護者説明会のせいで、頭がボーっとする。そんな眠気眼の脳みそにも、この状況は理解できた。というより肌で感じたと言った方が良いだろう。その空気の違いに。いつも温厚な薙が凄いい形相で睨みつけている。

その辺にいる不良のメンチが微笑みに思えるほどだった。誰を相手にそんな目つきで見ているんだ？

どうやら相手は今日、面接官をした先生だ。名前はなんだっけ？ そんなことはどうでもいい、おかんがある前でそれはあかんやろ。てか何でそんな怒ってるんだ。こいつ尋常じゃない顔してるぞ。

「やめろ」と声をかけようとすると、かすかに薙の声がした。

「誰に聞いた」

何を？

「何でそんなことをお前が知ってる」

だから何を。

意味不明な問いを受けている先生を見ると、不敵な笑顔。

その瞬間、一気に目が覚めた、というより脳みそが目覚めた。

もしかして、あのことを言われたのか？ 先生の顔はそのことを物語っているかのようだった。

薙が先生の腕を握ろうとした瞬間思わず声が出た。

「おい！ 薙、どうした」

その声到我を取り戻したように、薙は自分の手を制服のポケットに入れた。

よく見ると体が震えている。

「先生、俺ら兄弟に何の用や」

このおっさんが何を言ったか多少の予測は出来るけど、何故この

タイミングで言ったのだろっ、そして何故この事実を知ってるんだ。考えすぎた脳みそに、普段映らないような美人が映った。ああ沖田先生か。

「すみません伊佐君。本居先生！　なんで言っただんですか！　取り返しのつかないことを……」

すごい勢いで走ってきて、すごい勢いでキレる沖田先生に圧倒された。当事者のおっさんはまだへらへらしてやがる。

待てよ、このことを何故、沖田先生が知ってるんだ？

「沖田先生は何故このことを知ってるんですか？」

と質問をしたと同時におかんがこっちに歩いてきた、いつまでも進もうとしない双子に注意と、先生にあいさつを、って所か。「はよせなバス行ってまうやないの。先生、これからお世話になります。ほら行くで」先生に軽くお辞儀をしながらおかんは、俺ら二人の手を引いた。

この歳になつて手を引く張られると思ってもなかった。

耳元で雑に問いかけた。

「偽者って言われたんか」

「よう似たことや……。腹違いやて」

もう二度と言いたくないという言い方と、これ以上ない無表情に、その先の話はしなかった。

後ろを振り返ると沖田先生が100人中90人がわかるようなジエスチャーで「ごめんね」と「電話します」をしていた。にしてもその姿が可愛い。

俺が手を振ると、優しく手を振ってにっこり笑ってくれた。惚れても良いですか？

何とか、おかんにこのことは悟られることなく、事なきを得た。

それだけでも十分だろう。

それだけは俺達も避けたかったことである、本当に。

この学校の推薦を取り消されることよりも避けたかった。

それにしても、学校に行つてからやけに体がだるい、色々ストレスもあつたんだろう、薙もあれから全くしゃべってない。聞いた言葉は「いただきます」くらいだ。「ごちそうさま」も言えつての。もういいや、大分早いけど寝よう。

その日の夜、留守電に沖田先生からメッセージが入っていた。「明日の5時、駅前の喫茶店でまっています」と。

その4 青天の霹靂の那実（後書き）

「青天の霹靂の那実」を読んでいただきありがとうございます。

那実くんはいかがでしたか？変な奴、設定なんですけど・・・伝わってるかな？

でも意外と常識人だったりします。

もしよろしければ、あたしへの褒美として小説の評価をしていただくとうれしいです。

その5 水も滴るいい女は沖田薫

留守電のことを那実から聞き、朝から少し憂鬱な気分になった。そら見る、こういう日に限って雨が降る。

雨は嫌いだ。なんといつても気持ちが悪くどうしようもなく暗くなってしまう、それに僕のテンパが余計激しくなる。

気分の盛り上がりがない学校は、時の流れを遅くする効果があるらしく、登校3日分の疲労感が降りかかる。その上、あの怪しげな学校の先生と会わなければいけないとは、正直しんどい。昨日、あんなことがあるんなら、あの道は通らなかつたし、面接にも行かなかつたのに。

未来はいつも僕の期待を裏切る。早くタイムマシンが出来れば良いのに。

それはどんな想いよりも切実だ、好きな人に好きと言えないもどかしさに似ているかもしれない。

「タイムマシンなんか完成したら、世界は終わるで」

そんなことないだろう、未来がわかればどんな災いも未然に防ぐことが出来るんだ。これほど素晴らしいことはない。

子供を見るような目で那実はこう言う、「そんなん作つたら、みんな自殺するわ」

何を言ってるんだ？ 人を救うのになんで自殺しちゃうんだよ、わけがわかんない。

そんなことはいいとして、遅い。待ち合わせをした当事者が遅れるとはどういうことだろう。あの先生は本当に。まだ綺麗だから良いものの、もし森三中みたいな不細工だったら、説教してさっさと帰ってやるのに。

「森三中やつたら帰ってるわ」と那実が鼻で笑った。

たしかにそうだな、ここに来た理由は第一に先生を見ること、その次に昨日の話しをするために来たんだから。まあ僕は第一に昨日

のことだけど。

それにしても本当に遅い。猫舌の僕だけど、コーヒーを半分は飲み終えた。那実は二杯目を注文しようとしている。

すると、「ガシャーン」という破壊音と共に、髪と足元がかなりの湿度を誇る美人が現れた。誰か言わなくてもわかるだろう。

「ごめんなさい、遅れた」

そんなこと言われなくても、時計を見れば遅れた事はわかる。にしても良い大人だなと思った。どうしようのない大人なら、ここで謝らずに言訳から入るだろう。一応礼儀として遅れた理由を聞いておこう、肩で息をしたからには、相当急いできたんだろう。責める気はないですよ。

「学校でトラブルが起こっちゃって、でも急げば時間には間に合いそうだったから連絡しなかったの、でも駅までついたら道に迷っちゃって」

いやいや、道に迷うって、ここ駅前だから。迷う意味がわからないし、ここに来いって言ったのは沖田先生だろ？

「わたし、ちょっと方向音痴で、一度来ただけじゃ道を覚えられないの」道を覚えるとか方向音痴とかそういう問題じゃないだろう。この人とともに話は出来ないな。

さっさと事を済ませたいので、昨日のことを聞いてみる。僕が聞くんじゃなくて那実が聞くんだけど。

「昨日のことなんですけど、あれ……、先生が僕達に対して知っていること、全て言ってもらえますか？」

「でも、ここは人が多いし」

確かに人が多い、ここの喫茶店はコーヒーが美味くて有名だから、いつも結構込んでいる。その上、今日は雨で、家からの迎えを待ったサラリーマンや高校生でにぎわっていた。

「いけますよ、こんなに人がいて騒がしかったら、俺らの声なんて聞こえてませんし」

逆転の発想か

「そうですか……では、あの、話しますね」そう言っておどおどする沖田先生は小動物みたいで可愛い。

「あの……あなた達2人は、本当は双子じゃないってこと、お母さんが違うのよね。那実さんのお母さんは今一緒に住んでいる人で、薙くんの母さんは産んだ後亡くなって」

そして大きく息を吸って、唱えてはならない呪文のように、僕達に聞こえるギリギリの音量で話す。

「たまたま同じ日に生まれて、顔も似ていることで、親戚が双子だって勘違いしたのが始まり。あたしが知っているのはここまで。あつてるかな？」

意外とよく知っているので正直驚いた。でも、僕らが産まれた頃のことしか知らないのか。

「他に聞きたいことありませんか？」なぜか半泣きの沖田先生がそう言った。

何で泣きそうなんだ？ 僕達の話ってそんな可愛そうか？ とうかここで泣かれるのはまずいんだけど。ファッション雑誌から出てきたような美人が双子の中学生に泣かされている図を想像する。

思った以上にやばい。

またそうやっていらないことを考えてるうちに那実が結論を出した。

「ありがとうございます。これでスッキリしました」

それは誰が聞いてもスッキリ、といえる声質だった。那実はこのとき炭酸飲料を越えたね。

「よかった……」

カウンターに千円札を置いて、慌しく、帰る用意をする沖田先生。もう帰るのか？ 来てから二十分も経ってないよ。

「ごめんね、学校にまだ仕事残してるの。ここはあたしのおごりにするから、今日のお礼も込めて」

そして口元に人差し指を伸ばした仕草で、「それから今日のこと

は絶対秘密。お願い」

おそらく、その仕草と話し方で秘密をバラす男性は世の中にいない。それくらい素敵だった。

そうやって一度店を出た沖田先生が、すぐ戻ってきて、出入り口付近から、思い出したといわんばかりの大声で、ひとこと言うて帰っていった。

僕は沖田先生が帰ってからもしばらく話しを続けた。内容はもっぱら、沖田薫が最後にした可愛い仕草についてだった。でも気になるところがある。

先生が最後の最後に慌てて叫んだひとこと、先生からすれば結構重要だと取れる言葉だと思う。那実に聞いても意味がわからないらしい。

「ヤギにはならないでね」

その5 水も滴るいい女は沖田薫（後書き）

「水も滴るいい女は沖田薫」を読んでいただきありがとうございます。

その5まで読んでくれて、あなたはすっかりはまってる気がします。そのままの思いでいてくれるとうれしいです。

沖田先生のことを知ってもらうことを考えた話です。

もしよろしければ、小説の評価をお願いします。

その6 伊佐兄弟の過去

喫茶店の帰り道、まだ雨は続いていた。

空は日中よりさらに暗くなり、気温も下がり、雨が肌に当たり、いつもより寒く感じる。風に肌を引っ掛けられながら、齒を「ガタガタ」幼児のように震わせながら、家路へ向かう。

沖田先生に過去の話しをしたせいで、脳内を巡るのはあの日の事ばかり……。嫌な日には、嫌な思い出が泡のように溢れ出す僕の性格を恨んでみる。

恨んだって何も変わらない、僕の性格も、今日のこと、そして過去のこと。

僕の唯一の肉親である父が亡くなったのは今から六年前。

父は家に帰ることがめつたになく、1年に1度帰ってくれば良いほうだった。幼い頃からずっとなので、僕達は顔も覚えていない状態だった。そんな父が、家にいることの方が不思議で、特別番組のような頻度の一家団欒も、家族が揃ったというのに居心地はよくなかった。

彼はもう父とは呼べない存在だったのかもしれない。家族とも。帰ってこない理由を幼いながらの僕は、お母さんに問いかけたときもあった。さすがに年に一度しか帰ってこない父親は不自然だから。

理由は仕事が忙しいから、それだけしか言わなかった。

お母さんはその話しをすると、どこか寂しげにうつむき微笑む。僕は本当に仕事なのか疑っていた。でもそれ以上は聞けない。お母さんを悲しませることは、牢獄に入れられるよりも重罪に感じていた、まあ言えば死刑だ。

父が帰ってこない理由が「単身赴任」に切り替わったある日の事、今から六年前。いきなりお母さんに起こされ、向かったのは葬祭会

館だった。

どうやら父が仕事の最中に事故で亡くなったらしい、僕達家族は特に悲しい表情をせず、それこそ無表情で、周りから見ると悲しさのあまり表情を失っているのとれるくらいだった。僕ら兄弟が悲しむ理由などなかった。

初めからいるかいないかわからない存在だし、話したことも記憶にない人が亡くなった事にたいして、涙など流せるわけがなかった。飼っている金魚が死んだ方がよっぽど悲しいよ。

それから四年後お母さんは再婚した。

父が亡くなつてから三年間は何の音沙汰もなかったけど、その後は何か吹っ切れたようにお母さんは恋に没頭した。その相手が僕の現在の父であり、心から家族といえる初めての父親だ。

どうやらお母さんは狙った獲物は逃さないように、仕事も出来て容姿端麗で家族思いの男性を手に入れた。そのときのお母さんの喜びようは異常で、十年越しに咲いたひまわりのような表情をしていた。余程うれしかったのだろう。まあ前に愛した人がどうしようもない人で、先立たれたなら、気持ちもわからないでもない。

それにお母さんは僕達の妹を身ごもっていたしね。

僕の苗字が「伊佐」となつてから、半年が過ぎた日の事。本当の悲しみを知る日が訪れた。

「伊佐」となつてからの家族は本当に幸せな一般家庭で、毎晩一家団欒の夕食をとり、週末には遊園地やら水族館で、家族サービスも欠かさなかった。僕達にとって初めての喜びでもあり、この頃に兄弟の絆は深まったのだろう。

でも、長くは続かなかった。

妹は生まれてこなかった。

お母さんは流産をし、これからの人生、子供を産めない体になってしまった。女性にとっての存在意義を剥奪されたお母さんは、目が死んでいた。

よく先生が「お前達の目は死んでいる」とか言うけど、あんなのまだ輝いてるよ。そんなこと言う教師は本当に目が死んでいる人を見た事ないだなんて嘆きたくなる。

まああんな顔、見ないほうが人生楽しく暮らせるだろうね。

でもどれだけの悲しみが降り積もるのだろう、僕は想像が出来ない。本当に愛した男性との間に生命を宿せなかったことを。お母さん、ごめんね。

父さんも悲しそうだったけど、その悲しさを見せないよう、気持ちを隠すために、その悲しみの十倍の暖かさで母に接した。

お母さんが退院する目途が立った日の事、僕達兄弟はお母さんに呼び出された。

この日初めて、兄弟は腹違いで、僕は母さんと血が繋がっていないことを知らされた。僕はその日まで気付かなかった、この人が僕と血の繋がりが無いってことに。お母さんはまるで、人を七人殺した罪を償うくらいの涙を流しながらこう言った。

「わたしはずっと薙を恨んできた、前の父さんとの浮気相手の子供やし、それを黙って育ててる自分自身にも。でもあの子、あなた達の妹、私達の娘が亡くなって教えられたわ。……ごめんなさい。これからはちゃんと那実と同じように、それ以上に愛するから許して」

そう言うとお僕を抱きしめ、声を出して泣いた。

泣き声は波音のように僕の心に響き、ふって出た僕の悲しみを包み込み流してくれた。

心の中で、僕は言わなければわからなかったのに、と考えていた。それほどお母さんは僕に対しても完璧なる愛情を注いでいたのだろう。もしかすると僕があまりに嫌な思い出だったから忘れ去ったのかもしれないけど。

僕達家族はそれから幸せな家族を築いた、でも何か失った感はない。否めない。

木の枝が折れたほどの違和感だけど、それはもしかすると家族には

大事なこともなのかも知れない。そんな日の事を僕は思い出しながら
玄関のドアを開ける。

あと何度、この言葉をお母さんに言えるだろう。
「ただいま」

その6 伊佐兄弟の過去（後書き）

「伊佐兄弟の過去」を読んでくれて本当にありがとうございます。

この話しは、この物語の重要な部分ですけど、うまく表現できなかつたか不安です。

なかなかヘビーな環境でしょうか？伊佐兄弟。

もしよければ、小説の評価をお願いします。

少々面倒だと思いますが、その面倒が、あたしの原動力となるのは間違いないです。

その7 那実と香美にひとまずの別れを

『汚れちまつた悲しみに

今日も小雪の降りかかる

汚れちまつた悲しみに

今日も風さへ吹きすぎる……』

中原中也の詩が頭を巡る。俺と薙は明日、この住み慣れたと言っているのかな、まあ十数年も暮らしてきた街と、共に過ごした仲間
に別れを告げる。少し心残りもある。

でも京都なんてそれほど遠くないし、会おうと思えばいつでも会える距離なので、そんな汚れるほどの悲しみではなかった。けれど、そう思えたのは昨日までだった。

寂しさや悲しみというものは、夕立のように現れるけど、夕立のように素早く去ってはくれない。本当に面倒だ。

出発前夜ということで、前々から遊ぶというか、お別れ記念とでもいうのかな。彼女の香美と会う約束をしていた。

出会いは中一の頃だった。

同じクラスとなった香美は、隣の小学校だったので、見たこともなかったし聞いたこともなかった。けれど、なかなか、可愛い顔をしていたので俺達の間で話題になったりもした。でも俺は香美の顔がそれほどタイプではなかったので周りの男子のように一目惚れはしなかった。

しかし運命とは皮肉なもので、神様は香美の席の隣をその男子達には与えず俺に与えた。

せっかくだから話してみると、顔に似合わずズバットものを言う奴でそこがおもしろく、授業中や休み時間によくじゃれあったり、話をしたりした。

昼ごはんも一緒に食べることがあった。

まあさすがに二人で食べるのは恥ずかしいし、周りから勘違いされても困るので、他の友人と交えて食べた。

このときは香美に対して、おもしろい奴以外の感情はなかった。

それから一年と二ヶ月が経った初夏のこと。香美は家庭科の授業で作った蒸しパンを俺にくれた。

「これ食べてよ。余分に作ったのよ、那実のために」

俺はその蒸しパンを口に入れる前に友人を呼んで、みんなで食べた。理由は簡単、おいしそうだからみんなで分けた方が楽しいし、香美もその方が喜ぶと思ったから。

でも実際は違った、みんなで分け合い「うまいなあ」なんて言っている俺達を見て、香美は少しうつむきながら悲しそうな目をして微笑んだ。その瞬間フラッシュバックというのかな、あの日の事が浮かんだ。

小さい頃、父さんが帰ってこない理由を聞いたときのおかんの顔に。

今、思えばなんて俺は鈍感だったのだろうと思う。おかげでその日から香美が俺に対して口を開くことはなかった。

その頃、香美と席が前後ということで、その気まずさは限度を超えていた。本当に早く夏休み来ないかなあ。

全然来なかった、夏休みまで残すところあと三日というのに、時間が全く進まない。香美と仲が良かったときは、それこそあつという間で、一日が三時間ほどしかないと感じれるほど楽しかった。

そんなことを考えている間に夏休みは訪れ、終わり、二学期が始まった。

香美の席は隣ではなかった。神よ仏よ心からありがとう、毎日仏壇に祈ったかいがあったよ。そして十月を過ぎた辺りのこと、俺は悲しみに汚れた。

妹が生まれてこなかったのだ。

学校を三日休んだって、何の気休めにもならなかった。黒い幕を覆った俺に、久しぶりに会った友人達は優しさのつもりなのか、関わるのが面倒なのかはわからないけど、近寄ってくる奴はひとりもいなかった。

友人と話すという日課を忘れかけた日の事、机の中に今朝配られた学年通信が折りたたまれて入っていた。何か書いてるのかもしれない、そう思い開いてみる。

ただひとこと、「校舎裏に来てください」と書かれていた。名前すら書いてない。

最近、無愛想だったから、仲間にもリンチにあうのかなと考えながら校舎裏に足を運んだ。

校舎裏に着くと意外な奴が話しかけてきた。

「那実、最近元気ないやん」

香美だ。話すのは何ヶ月ぶりだろう。というより話したい気分じゃないんだけど。

「すっかり心が悲しみに覆われたんや、それだけのこと」俺は吐き捨てるようにそう言う。

「何？ 中原中也のパクリ？」香美は本当に驚いた顔をしてそう言った。

誰だ？ 中原中也って。

俺はその頃、その詩人の名を知らなかった。もちろんその詩も。だからパクツタなんて気持ちにはなかった。

ただ、あの頃は本当にそういう心境だった。

「知らないの？ 『汚れちまった悲しみに』」

「しつこいなあ、だから知らんて」

「しょうがないからあたしが朗読してあげよう、今の那実にぴつたりやで」そう言うと言をつむり、デコに手の甲を当てて、苦しそうな顔で朗読し始めた。

「汚れちまった悲しみに、今日も小雪の降りかかる。」

汚れちまった悲しみに、今日も風さえ吹きすぎる……」

後から聞いた話だけど、香美はこの日のためこの詩を覚えてきたらしい。

「汚れちまった悲しみは、例えば狐の革衣。

汚れちまった悲しみは、小雪のかかって縮こまる。

汚れちまった悲しみは、何望むなく願うなく」

これこそ一生懸命と言っただな、と感心した。

「汚れちまった悲しみは、けだいのうちに死を夢む」

香美の気持ちは、何よりもまっすぐで、純粹で、それなのに傷つくことを恐れない。そんな気がした。

「汚れちまった悲しみに、痛々しくも怖気づき。

汚れちまった悲しみに、なすところもなく日は暮れる……。おしまい。どう、よかったでしょ」

そんな今まで生きてきた幸福を全て集めたような笑顔をされると笑うしかないだろう。

でも実際の俺は泣いていた。

何で泣いていたんだろう？ 本当は凄くうれしくて、素晴らしい詩に出会えたことも、香美の優しさにも。

「普通こういう時って、励ましの詩を聞かせるんちゃうんか」泣きながら言う俺に説得力はゼロだった。

「でもよかったやろ。やっぱりぴったりやったわ」そう言うとき、た笑った、でもその目には涙が潤んでいた。

香美のそういうところが好きなんだ。

「香美もやで」

いきなり意味不明な言葉を発する香美に驚いて涙が止まった。「何が？」

「那実、今、香美に対して好きって言うたやんか」

どうやら知らないうちに言葉に出ていたらしい。

そう言われると体中が急激に暑くなった、その暖かさは風邪をひいた時とは違うどこか心地いいものだ。

「顔めっちゃ赤いで」これこそ悪戯な笑みというだろう。

でも香美、お前も顔が赤いで、多分俺より。

俺がそう言っていると香美は自分の顔に手のひらを当てた。

「ほんまや。香美たちアホみたいやな」

「ほなら、付き合うか」

「うん。ハイ、握手」

そう言っていると、手を前に出して、さらに顔を赤くした。もう絞りたてのトマトジュースより赤いなこれは。

仕方ないので、握手をした。ただ、それだけじゃあれだったので、抱きしめた。香美の思った以上に線の細い体を。あの頃は、キスとかそういうことを、ちゃんと知らなかったからアレが限界だったのだろう。今思い出しても恥ずかしい。

「ありがとうございますあ」

いつも行かないような店で俺達は少し高い夕食を済ました。

せっかく、最後の晚餐だというのに（別れるつもりは無いけど気分的に）香美は、いつもみせる縁日の金魚みたいな元気良さは無かった。しょうがない、あのお礼に小話でもしてやるか。

「人間で、何から出来たか知ってるか」

少し考えてから、ひらめいたという表情で、「骨と肉と血」

まあそりゃそうやけど、そんな簡単な問題を出すわけないやろ

「宇宙のチリからできたんや」

明らかに誰が見てもちんぷんかんぷんな顔をしている。というより、この子頭がおかしくなったんじゃないの？ 的な顔だ。こいつ殴ってやろうかな？

「地球や、その他の動植物や空気も、チリからできたらしいで、TVでどっかの教授が言ってた」

だから？ 見たいな顔しやがって、全部は言いたくないんだ、恥ずかしいから。でも仕方ないか。

「俺達は、例えば血の繋がりがなくなったら、存在した時から繋がって

るんだ。それこそ、俺達が生まれる以前から、考えられないほど古代からも。だから、そんな五十キロや百キロ、それに三年間離れるくらいで暗い顔するな。この空気を俺と思え、隣の人を俺と思え、そこらにある木を俺と思え、なんなら香美のペットも俺と思え。いいな」

俺がそう言うと、香美はやつと笑った。

その笑顔は縁日の金魚というよりひまわりに似ていた。

「意味わからへんけど、まあなんとなくわかったわ」

なんとなくでいいと思う。

二人が好き合う理由も、生きる意味も、中原中也の詩も、世の中、判りきつた事ばかりじゃおもしろくないしな、香美。

とうとう出発の日が来た、俺と薙は京都駅に向かう電車を待つていた。実際三回ほど乗り継がなきゃいけないんだけど。本当にめんどくさい。もちろん見送りには香美もいた。ついでに友人も。昨日あんなこと香美に言つときながら、やっぱり寂しいな。なんか、こう、香美にひとこと言わないと物足りなくなってきた。

「二番ホームから普通、天王寺行き、天王寺行きが四両で入ります」

別れの時間が近づいてきた。香美にいつも言いたくて言えなかったこと……。

これだ！

けれど、こんなこと、みんながいるところで言うのか？ 地元に帰れなくなるかもしれない……。でもここで言わなきゃいつ言うんだろう。

俺はジェットコースターの安全バーなしに乗るよりも思い切って言った。

最近、好みになってきた香美の顔を見て、「香美、今まで言われへんかってごめん、なんか言ってもうたら、気持ちが減ってまうよ。うな気がして言われへんかったけど」

まだ、ジェットコースターは発車しない。

「なによ？」

生涯で何度ここまで気持ちを込めてこの言葉を言えるだろう……。

「好きだ」

その7 那実と香美にひとまずの別れを（後書き）

「那実と香美にひとまずの別れを」を読んでいただきありがとうございます

大好きな作家さんの詩を物語りに入れました。
ちよつと冒険でした。

これで第一章を終えます。
次からは高校生です。

第二章からが始まりですので、お楽しみに。

ここまで読んでくれたことに感謝をいたします。

もしよければ第一章の感想をいただけるとうれしいです。
節目ですので、お願いします。

その8 天照沙希と黒猫（前書き）

ここから高校生編です。

お待たせしました。

やっと物語に進展が出てきます。

伊佐兄弟は巻き込まれていきます、何に？読んでください（笑）

その8 天照沙希と黒猫

桜の花が新入生を手招きするかのように、綺麗に彩った桜並木道。そして、この日を待ってましたといわんばかりに桜がよく似合う東寺。その隣になぜか、僕が通う京都文化芸能大学付属高校が、東寺という神聖なる場を汚さぬように所在している。本当に、何も知らない人を見ると、学校には見えないその外観は、寺に近い形だった。全てが色濃く見えたって言えば大袈裟になるかもしれないけど、最初で最後の入学式を終えてから1ヶ月以上も経ち、桜は乙女チックなピンクから青年の凛々しさを感じる緑へと変化していた。変化したのは桜だけではなく、僕の日常はそれ以上に大きく変わった。

ピンクからまたピンクになるくらいだ。いや桜が梅に変わるくらいといった方が正しいのかな？

どうあれ、僕は変わってしまったのだ。

あの女と関わってから。

初めて自分の教室に入ったとき、少しだけ違和感を感じた。違和感というより、安心感？一体感に近いものを感じ取れた。それは僕だけではなく那実もそうらしく

「この学科ってIQが高い奴ばかり集まってるから、そんな気がするんとちゃうん？」と軽く流した。

いつも那実はこうだ、何か不安定要素を感じると話をそらす、まあこの態度が正解って事なんだろうけど。

まず最初に入学式の後のHRで何をするかといえば、やっぱりメインは自己紹介でしょ。

心のどこかでIQが高い奴ばかりだから、自己紹介も堅い内容で、みんな真面目君みたいな顔してるんだろうなと思っていたけど、実際、中学のときと雰囲気も容姿も、それほど変わりはないように見

える。表面上は。

そんな中、1人だけ明らかに違うオーラというかそんなような物を感じれる奴がいた。

そいつは日本人みたいな顔してるけど、顔の所々が外人っぽい。例えば、目の形が少しだけ外人らしいとか、顔の骨格が少しだけ日本人ではないとか。鈍感な人ならハーフと気付かないだろう、俺もその鈍感の1人だけだ。

そんな鈍感野郎でも明らかに日本人と違うとわかるのは、目の色と肌の色だ。

目は完全に青かかり、海の色に似ていて、肌は北極から来たの？って言うほど白く、アマテルサキほぼ絵の具の白色だ。

「初めまして、天照沙希です。出身は神奈川県で、見てわかるようにあたしの祖母はイギリス人です。けれど父と母は一応日本人です。これから3年間、よろしくお願いします」と清楚で普通といったや普通だけど、それが上品さを漂わす自己紹介を終えた。

第一印象は、クラスメイトになったことで、人生の半分の運を使ったのではないかというほど、綺麗な人。

沖田先生がファッションモデルなら、この方は若手女優って感じがする。双方捨てがたいが、高校生の身分としては後者を選んでしまふ。どのくらい綺麗かというと、人形みたいなんてありきたりな表現もアレだし、整っているなんてもっとありきたりだ、そうだなあ、理想の女性を思い浮かべて、それよりもワンランクくらい上かな？ オードリーにはかなわないか？ いや21世紀のオードリーと言われても否定は出来ない、それくらいの美顔だ。

後々気付くことにけど、人は見た目が4割なんて言葉があるが、こいつほどそれを実感し、その言葉を破壊させた奴はいないだろう。学校に慣れ始め、兄弟で昼ごはんを食べることがなくなり始めた、入学式から3週間目。ある出来事が起きた。

その日は、いつもなら寮から一緒に学校へ向かう那実も、今日は少し寝坊していたので、僕だけ早く家を出ることにした。たまには

1人で登校するのもいい、町の景色をゆっくり眺められるし、色々な考え事も出来るし、今日は時間に余裕がある。それに那実は歩くのが遅いから、あわせて歩くのが疲れてしまう。

これからも1人で登校しようかと考えていたら、いきなりすごい音がした。車がぶつかっただのかな？前を見ると200m程先に黒い動物が倒れている。しかも歩道の真ん中に。もしかして、車が猫をひいたのか？　たくひき逃げなんてするなよ。しかも歩道の真ん中だからすごく目立つし。処理してあげたいけど朝からあんなグロテスクなもの見ていたら、今日一日が最悪だ。

なので、前方に手を合わせてお悔やみをして、道路を横断した。これで一応の心残りもなく立ち去れる。猫にはかわいそうだけど、これも運命だ。

そう思っ て歩いてみると、僕の横を風を切るカマイタチ並のスピードで横切り、引かれた猫へまっしぐらに女子高生が走っていく。よく見るとうちの制服だ。しかもあの後姿……誰だっけ。道路を横断する刹那、すごく白い横顔が見えた。

天照さんだ。すごい慌てた顔……もしかして飼猫猫なのか？

僕も少し心配になり、彼女に付いていった。彼女はすばやく血にまみれた黒猫を抱えて、すぐ隣の公園へ運ぶ。それにしても全く追いつかない、あの娘、走るの速すぎる。

肩で息をしながら公園に入ると、端の方にある木の近くで彼女を見つけた。三角座りして何かを見つめている。

さっき引かれた猫を埋葬しようとしてるんだな。なんて心優しい人なんだ。学校から『猫を供養したで賞』の賞状を全校集会で授与すべきだよ。

そんな彼女の優しさにふれた僕は、手伝おうと思い彼女のそばに近づく。

しかしその光景を見た瞬間、そんな妄想は全て消え去る。

天照さんが木の棒で、死んだ猫をつついていたのだ。

これは見なかったことにしようと思い、彼女が振り向く前に全力

疾走で公園から逃げ出した。何だあの娘は？ 異常者なのか、何フエチなんだ？ 死んだ猫を棒でつつくために朝から全力疾走したのか？

考えると、こつちがおかしくなりそう。もうよそう、あの事を思い出すのは。綺麗なものには毒があるというじゃないか、そういうことにしておこう。

「薙、どうしたんや、そんな顔して、お前、先に家、出たんちゃうんか？」

びつくりしたあ、なんだよ那実か。天照さんと思ったじゃないか。それにそんなこと言われても、あんな光景を目にしたらそんな顔にもなるわ。でもあの事は言わないほうがいいな、彼女のプライベートルトだし。

「いや別に、お前もえらい速いな、走ってきたんか」何とか話をこまかそうとする。

「遅刻しそうやからな、あと5分で本鈴なるで」

本当に？それはやばい、走るぞ。

「わかってるわ、お前に言われらんでも」

僕達はなんとか遅刻することはなく、席に付くことが出来た。けど天照さんはまだ来ていない。次の教科の先生が来る間に、遅刻しないように走った汗を、せめて顔だけでも流そうと急いでトイレにむかった。だけどその途中、嫌な奴とすれ違う。

本居先生だ。

あんな奴先生と呼ばなくてもいい、これからは心の中では呼び捨てだ。本居め……。

あの面接日からどうも気に食わない。こいつとすれ違ったびに、駅にある改札口を通るときに、通れるか閉まってしまうか、みたいな、ドキドキ感を味わってしまう。ようは心が落ち着かず、イライラして、また何か言われるんじゃないかっていうストレスに襲われる。

そんなことを1日に5回以上しているので、精神的にかなりきている。朝のあの光景も付け足して。

けど実際は何も言われることはないんだけどね。でもなんか嫌だ。あいつには気持ち悪いオーラが漂っている。

下校時、いつもなら一緒に帰るはずの那実がなぜかいなかったの
で、隣の席の小野君と帰ることにした。那実の奴、最近どこか変だ。
深夜に物音はするし、いきなり「ヒヤッ」って驚いた声とか出すし、
本当に変だ。

今日は、もしかして香美ちゃんとデートするのか？寮にいたら
そのことも含めて問いただしてやる。

しかし、そんな気合を発揮することなく、もう夜の9時。時間が
経つと共に上がる僕のボルテージ。結局那実が帰ってきたのは10
時半過ぎだった。

俺は今までためていたボルテージを吐き出すように、隣的那実の
部屋に向かい叫ぶ。

「こんな時間まで何してたんや、言わなもつと大声だすで」
すぐにドアが開いた。

「うるさいな、沖田先生に呼び出しされたんや、お前のことで」

沖田先生が？

しかも僕のことで？

何でお前に？

「明日きけや、結構おもしろい事するなお前。俺はもう眠いから。
おやすみ」そう言うどドアを閉め、その不機嫌な音が廊下に響いた。
なんだろう、僕のことと呼び出しをされるなんて、何も悪いこと
なんかしてないのに…。

もしかして今朝のこと？ そんなわけないか。でもそうやってら
嫌だなあ。一緒に天照さんの性的異常を治すの手伝ってとか言われ
たらどうしよう。

考えるまでもないか、断固拒否だ。

昨日、色々あったからか目覚めがよかったのは僕だけではなく、
那実も同じらしく、今日は一緒に登校することになった。昨日みたいに遅刻ギリギリではなく、引ったくりに遭遇しても追いかけて捕まえられるほどの時間の余裕だ。

そんな少し機嫌のよかった俺を、いきなり未知の感情へと落とし込む事件が起きた。

昨日、猫が引かれた場所付近を通り、少し憂鬱な気分になる俺は、いきなり叫んでしまった。

「どうしたん？いきなり大きい声だして、みんな見てるで」

確かに登校をしようとしてる生徒、会社に向かうサラリーマンその他諸々の人々が僕を見てる。しかし俺は見ていた、視線をそらすことなくただ黒く動く生物を

「猫がおる」昨日の黒猫に似ている、見間違いか？

「そりやおるやる猫くらい、野良犬やったらちよつとびつくりやけど、まあ朝から黒猫なんかちよつと縁起悪いけど」

『縁起が悪い』で済むならいい。どこからどうみても昨日の猫だ。その証拠に、体に傷が付いている。しっかり見ないとわからないけど確かに傷はある。

おかしいことはそれだけではなかった。

それは2時間目の社会の出来事だ。今日の授業内容は前に行われた実力テストの返却が主らしい。

「伊佐薙くん。ハイ、おもしろい結果だったね」

沖田先生は今にも噴出しそうな顔で僕の目を見てそういう、けど一瞬、ほんの一瞬だろうか？ 真剣な顔になり、「おめでとう薙さん。羊さんでしたね」と耳元でささやいた。この先生はいつも意味のわからない言動と行動をするので、特に気に留めないで席に着いた。テストの点数は42点。ギリ補習を免れた…。

ってあれ？このテストすごく自信あったのに。テストが終わった後、自己採点したんだけど70点はあった気がする。

その後、先生が答えの解説を進めると同時に僕の顔色も青くなつていく。そのありえない現象に。あれ…なんで？　こんなケアレスミスありえないぞ。見直しも2回したし、答えを全部埋めていたのに。

その現象は30問ある問題の15問目から起こっていた。

「問題と答えが全く違う」

その8 天照沙希と黒猫（後書き）

「天照沙希と黒猫」を読んでいたきありがとうございます。

その9 カードと1週間

僕は授業が終わると、すぐに沖田先生の元に駆け寄った。

「先生！これはどういうことなんですか？僕のだけ問題が違ってたんじゃないんですか？」

それしか考えられない。なぜ30ある問題で15問目から全くの見当違いの答えを書くんだ？意味がわからない。僕はそんなボケてなんてない。

だいたいそこまで難しい問題じゃなかったはずだ、テストの問題を思い出してみただけ、一番難しい問題が『クロマニヨンとアウストラロピテクスの違いはどこですか』位のレベルで、それに僕は答えた。「絵を描くか書かないか」だ。改めて、携帯で調べてみただけで正解だった。

「薙くん、まあ落ち着きなさい」につこり微笑むその笑顔は園児をなだめる保母さんのそれとよく似ている。

僕も園児と同レベルなのか、その顔を見ると黙るしかなかった。

「今は心理的に不安定なようね、放課後もう1度きてくださいね」なんだよそれ、種明かしは放課後って事？そんなに待てない。

と思いながらも、放課後は結構な速さで僕の足元に寄ってきた。職員室のドアを開けると、沖田先生は待ってましたといわんばかりの目でこちらを見つめる。誰かがドアを開けるたびにこんな目してたんだらうか？

「あの、テストのことなんやけど」

「このテストはそんな重要じゃないのよ。そんなことよりこのテストの方が大事よ」

いきなり何言ってるんだ？しかも教師の発言とは思えないし。妙に力の入った言葉から、用意されたのは1〜25問まで書かれた問題用紙だ。さっきのテストより5問少ないのか。沖田先生は優しい、もう1度テストをさせてくれるのだから…。そう思ったのが

間違いだった。

先生はランプによく似たカードを引き出しから取り出し自慢げな顔で、「ここにある25枚の『薰透けないカード』を今からよく切るから、その順番を当ててみて。カードの裏には数字が書いてあるから、問題用紙に薙くんが思い描く数字の順番を書いてよ。はい、スタート！」

そのなんだ『薰透けないカード』って？ 変な名前だし、さっきのテスト関係ないし。

でもおもしろそう。

こういう未知なるパワー、第六感的なものは好きだ、せっかくだから全部当てやる。

僕は思いついた数字を問題用紙に書きなぐった……。

「はあー終わったあー」

「ご苦労様、よく集中がきれずにできたわ。みんな始めての頃は半分くらいでやる気なくしてたのに」

僕も危うくシャーペンを置くところだったけど、みるみる数字が浮かぶから、置く暇がなかったんだ。てか僕以外の誰かもこのテストやったんだ。

「では、結果発表」

勢いよく先生がそう叫びにも近い大声を出し、先生が手に持つ、よく切られたであろうカードの一番上をめくった。少しドキドキする、これで当たったら25分の1だよな！結構すごいよな。

「まず最初は8。どう薙くん？」

「あー、違います、僕は6って書きました」ちょっと期待した僕がバカだった。

「残念、まあ全部合うことなんてめったにないからね」

全然残念そうに見えず、どちらかといえば「落胆」に近い声色だ。それから次々とカードをめくっていくけど、ことごとく外れていく、これでもか、ってほどに。

「はい、2」

「僕は9です」

初めと違って少しずつテンション下がってきたな、沖田先生。俺が悪いのか？てかさんなバンバン当たったら気持ち悪いよ。

「12問までいって正解0とは前代未聞よお、あたしでも1枚は当てるわ」

こんなの、「あたしでも」は関係ないだろ。誰がやっても一緒、運だろ、運。

13問目にやっと一枚当てた僕だったけど、その後はまた、ス力の連続で結局、「25分の1ねえ・・・、まあ1枚当たっただけましかな？」

マシどうこうより、このテストにどういう意味があったのか僕は知りたいよ。

「いずれわかる 때가くるわ。・・・ヤギならわからないけど」わけのわからない言葉はさておき、とりあえず1週間このテストを続ければ、テストの点数の見直しを考えてくれるそうさ。先生の趣味に付き合っただけテストの点が上がるなら、これ以上の好都合はない。

職員室を出ると、前方から天照さんがこっちに向かってきた。職員室に用でもあるのかな？

昨日のこともあり、僕は気まずいのでUターンして、職員トイレに行くフリをした。あくまでさりげなく、彼女に気付かれないように、自分の中で最高のUターンを決めて、トイレに向かう。

しかし彼女は職員室の入り口を素通りして、僕の方へ歩いてくる。俺に用なのか？

落ち着いた雰囲気ですぐに話しかけてきた。それは一国の姫が家来に話しかけるような感じでもあった。

「何で避けるんですか？まあこちらにしても避けてくれた方がうれしいけれど」

バレバレだったか。それより矛盾したことを言う。まあ、この人

は行動も奇怪だからな。

「いや、避ける気はなかったんやけど、トイレ行きたくなってな」

「まあどちらでもいいけど」

「どうでもいいんなら言うな。」

「昨日のネコのことは誰にも言わないで下さい」

「誰にも言う気はないよ、天照さんが死んだネコを棒で突つuit
たなんて・・・」

僕は今朝のことを思い出す、というかあまりに嫌な出来事だったから脳が勝手に忘れさせようとしたのかもしれない、あんなこと忘れるはずがないのに。

「あのネコに似たやつ、今日見かけたけど気のせいかな？」

「さあ、知らないわ。それよりキミは何か人と変わった体の部分はある？」

いきなり何を聞くんだ？

「目が大きいとかかな？」

「そういうことじゃなくて、大袈裟に言う指が6本とか」

そういうこと？何かあったけなあ…、思い出した。

「確か歯医者に行ったとき、歯が普通より2本少ないって言われた」

「やつぱりね、ありがとう」

なんて事務的な「ありがとう」なんだろう、感情の「か」の字もない。それにやつぱりってどういう意味だ。

「歯が2本少ないこと聞いて意味あるんか？」

「さあ？ … いずれキミにもわかるときがくるわ、あなたはあたと同じオーラがするから」

なんだそれ？ 沖田先生と似たようなこと言いやがって、それにいつからお前はスピリチュアルな人になったんだよ。

彼女はそれだけ言い残して、最小限の足音と最高速の徒歩で、僕の前からさっそうと消えた。一体何が言いたかったんだあの人は？ それにしても、トイレの前まで来たらなんだか用を足したくなっ

てきた。

用を足しトイレから出ようとした瞬間、ガラスが割れるくらいの声が聞こえた。

「私に触れるなっ！」

思わず声の元へ走る。そうしたのはその声が彼女に似ていたからだろうか。職員室方向の最初の曲がり角を右に行くと、やっぱり彼女は居た。

天照さんと制服を着崩した男がにらみ合っている。よく見ると男の頬が赤く腫れている。一体どうしたんだ？

あの男は一体何したんだ？ 僕がトイレに行っている間に、人の持つ怒の感情をあれほどまで引き出すのは簡単じゃないはずだ。

男は情けない声で、くだらない青春ドラマのちょい役の如く、「おぼえてやがれ」と言っただけで去って行った。

あんなへばい奴が不良だったら、不良の価値が下がる、と訳のわからないことを考えながら、激昂する天照さんへ近づいた。

「どうしたんや？ そんな怒って、変なことされたんか」

「告白されただけです」

酷く興奮しているようだ、体が震えている。

「告白されただけであんな声出せへ」

「あいつが私の肌に触れようとしたから」

僕が全ての言葉を言い終える前に声をかぶせてきやがった、どれだけ興奮してるんだこいつは。

「まあおちつけよ」

「わ……にな」

小声すぎて何を言ってるのかわからない。耳を近づけた瞬間。

「私に近づくなっ」

落雷のように響き渡る天照の声。鼓膜は破れる一歩手前で耐えてくれた。結局なんなんだあの女は？

天照は昨日の見とれるようなフォームではなく、運動が苦手な女

子のような走り方でその場を去っていった。それは変な走り方なのに速かった。

それから1週間がたった

1週間のうち変わったことといえば、天照が死んだ黒猫をつついていた公園で、のら黒猫に餌付けしているくらいかな？ それと5日間行われたカード当てが今日でやっと終わること。これはうれしい。僕は、「よくきつたカードの順番当て」をやり続けたけど、結果は1枚正解のみ。あたらずぎてイライラするだけだ。たしか1回だけ2枚成功があったつけ、あの時はうれしかったなあ。

そして最後のカード当てが終了した。結果は…1枚だ。

「はあー、今までありがとう。薙くん才カルト的なことあまり信じてないみたいね」

「どうなんでしょうかね？ 好きは好きやけど」

「好きと信じるは違うわ」と沖田先生は不機嫌に答えた。

どうやらテストの結果に満足行かなかったようだ、まさか社会のテストの約束なしにするってことはないよな。

「那実くんとは違うみたいね」

「那実がどうしたんですか？」

「なーんでもないのよ、とりあえずお疲れ様、社会のテストの件は覚えてるから安心して」

沖田先生はそういうと机に顔を引っ付けて、呼吸をする頻度でため息を吐き続けた。どれだけ不服だったんだ？ なんか僕が悪いことしたみたいだ。

放課後、校門近くで那実がいたので一緒に帰ることにした。

「今日も天照さん黒猫にエサあげてるんかな？」

「さあな、それよりエサって言い方は良くないやろ」

どうしてダメなんだ？ 動物に与える食事はエサって辞書にも書いてるぞ多分。

「エサっていう響きは奴隷という言葉に似てる気がする」

そうですか、勝手に言っと思ってください、君の戯言はもういいよ、
那実くん。

「だからヒトも動物な訳やん、なら黒猫にも食事って言うたほうがええやろ」

もう一回言つて。

「だから『猫に食事あげてるんかな』が正しいんちゃうかなってことや」

そうやって差別差別言ってる奴が一番差別してる気がするのはい気のせいかな。そんな話をしているうちに黒猫がいる公園に着いた。

「誰かおるで」

天照さんと違うの？

「いや、ちゃんと見えへんけど男3人と女1人、それにうちの制服や」

頭にふと、思いがよぎった。

もしかしてあの時、天照に告白した不良が「おぼえてやがれ」を実践しにきたのかもしれない。そう思うと、駆け出さずにいられたかった。

どうか勘違いでありますように。

その10 ルールと夕陽

公園の近くまで駆け寄って見てみる。やっぱり天照だ！

確実に助けを手伝ってくれるだろう人間を呼ぶ。

「那実、やっぱり天照さんや」そう言って振り向くが彼はいない。
・。どこいったんだ？

見つけた。

なんと那実は走ることもなく、いつもの下校時と変わらない速度で寮の方向へ歩いている。こいつは何を考えてるんだ？僕は怒りのオーラをまとい急いで那実に近づく。

「何考えてるねん？早せな天照さんボコボコにされるぞ！」

「それよりもやばいコトされるかもな。それには俺も興味あるし影から覗こうかな」

冗談を言ってる場合じゃない、なぜこいつがこんなに悠長なのか意味がわからない。

「あの男、前に薙が言うてた、天照沙希に振られた不良もどきやろ？」

「そうや、だから助けたらなあかんやろ」こんな話しをしている場合じゃない、1秒を争うんだよ。

「天照沙希が悪いんや、この際、あいつの変な性格を治してもらうべきや、自業自得」

その言葉を聞いたときに思い出した。あれは確か中学2年のころ、2人で電車に乗って服を買いに行った帰りのことだ。

その日の電車は日曜の夕方だというのにやたらと混んでいた。確か終着駅の近所で有名歌手のライブがあるとかそんなところだった。

そのとき那実は、運良く座席に座ることが出来たけれど、その目の前には年老いたおばあさんが、四方八方から押し寄せる人の波に

埋もれて、苦しそうに、「うう……」とうめき声を上げている。
その姿は、弱り、年老いた野良犬がエサを求めているようにも見え
る。

「那実、席ゆずれよ」僕は、一般的な優しさを示す方法を、那実
の耳元で囁いた。

すると那実が、憤りを感じさせる表情で「この席は俺が手にした
んや」

何言ってるんだこいつは？

「この電車に乗ったときから、イチバン最初に降りるかもって奴
に目えつけて、それが当たって手にした座席や、何で譲らなあかん
ねん」

おばあさんがしんどそうにしてるからだろう。誰が見たってそう
言うよ。それに年寄りだし。

「年寄りやからって、優遇なんて気に食わん。自分の体が不自由
と思うんやったら、人が減るかもしれへん次の電車に乗るべきや、
それかタクシーか何かに乗るか。あのおばはんは自分でこの満員電
車に乗ることを決めたんや」

そのおばあさんの勇氣に免じて席を譲ってやれよ。僕がそう言う
と、那実は「こいつはバカなのか」という目つきで

「甘やかしたらあかんやろ、そんな甘えに浸ってたら、いつか偉
い目にあう。雑が言うてることは嘘の優しさや。そんなこと言うて
るから戦争が起こるんねん、差別がなくならんのか」

最後、話しが飛びすぎだろう？

今まで教えられた道徳を、正面から崩す、那実の言葉は耳を離れ
ることはなかった。2年経った今も。

「天照沙希なら大丈夫や、お前が行っても無駄なだけ」

こいつに何を言っても無駄ということを思い出し、僕は公園へ走
り出した。

公園に近づくとなぜか声が届く。男子生徒が何か言ってる

がよく聞こえないので、走りながらも耳を澄ます。

「この前のことを謝れよ、さもないと、この黒猫どうかしてまうぞ」黒猫が無邪気に「みゃー」と鳴く。

あいつら、黒猫を人質にとるなんて。どうしようもない人間だ、一緒の種族だということに悲しさを覚えるよ。天照も黒猫が気がかりなのか、声を出さずに男子生徒を睨んでいる。

すると、また男の表面から悪意がもし出される声で、「上の服脱げよ、ほら、ほら、早くしないとこの猫、踏みつけるぞ」

あいつらはそいうと気色の悪い高笑いを響かせた。マジで最低だ。

でもプライドの高そうな天照のことだから、脱がないだろう、と思っていると。肩にかけているカバンを下に置き、制服の上着に手をかけた。

僕はさらに加速する。そんなことをすれば相手の思う壺だ。これでも那実は傍観者でいるつもりなのか？

そんなことを考え、後ろを振り返ろうとした瞬間、天照が思いがけない行動を起こした。

反撃開始。

まず足元に置いてあるカバンを思い切り蹴って、左にいる男子生徒の股間に命中させた。当然そいつはうずくまる。そして手にかけていた制服の上着を、あの日天照に振られて、今は黒猫を抱いている生徒の頭に投げつけ、そいつが上着を頭から取るうとする隙に黒猫を奪った。

まるでアクション映画のようだ。

すると那実が駆け寄ってきた。今更なんの用だ？

とりあえず僕はキャミソール姿の天照を助けるために近づく。その距離残り10m。もう少しだ。

しかし、先ほどかばんを股間にぶつけられた生徒が怒りを前面に

押し出し天照に襲い掛かる。すると天照は左右にステップを踏み、構え、黒猫を草むらに放った。・・・どこかで見たことのある構えだ。その構えはどんな攻撃もかわしてしまう気がするほど隙のないように見え、何よりも綺麗だった。

思ったとおり、襲い掛かった生徒が繰り出した大降りの右ストレートは空を切り、空振るコトで前のめりになった生徒に、天照はすごい勢いのアッパーを繰り出した。そしてすぐ隣にいるもう一人の生徒を回し蹴る。その回し蹴りは相手のこめかみを見事にヒットさせ、一撃で気を失わせた。

強すぎる。現実を起こっている出来事とは思にくい。

しかしそれは実際に起きていて、僕はあまりの華麗さに見とれて足を止めていた。ただキャミソール姿というのが少しおかしかったけど。

最後の一人は殴ることをせず、相手の繰り出す蹴りを見事に左へ受け流し、軸足に足払いをした。

それは気持ち良いくらいの勢いで決まり、「ゴン」という尻と地面がぶつかる音が響く。

「天照沙希のやつ、パンツじゃなくてスパッツかよ」

何だいきなり？ そう思い振り返ると那実が不謹慎なことをつぶやいた。いつの間にそこにいたんだ？ 那実を一瞥して、天照のほうを見る。

まだ止めを刺していないのか？僕は思わず言葉に出てしまう、「マウントとれよ！はやく」

しかし一向に相手を覆いかぶさる様子がない。

それは一瞬のことだった。

相手は刃物を取り出し天照の体にぶつかっていった。天照の腹部にはナイフが刺さっている。赤い血が噴出する。

滴り落ちてなんていなかった、ドラマのように衣服ににじむこともなかった。噴水のように噴出す血液がこれほど綺麗だと思ったことはない。

僕はあまりの衝撃にこれ異常ない程の声で叫んだ。

「おい！薙、どないしたんっ」

那実のその声で気が付いた。瞬時に那実に問いかける。

「天照はどうなったんだ？」

不思議そうな顔で那実が言う

「まだマウントも取らんと相手を睨んでるで、見たらわかるやん」
どうなってるんだ？

正面を向くと確かに天照が、1週間前に交際を断り、黒猫を人質に取った生徒を睨んでいた。

すると、またさっきの走馬灯に似たものと思い出される。もう声に出さないでいられなかった。というより勝手に出た。

「天照！そいつナイフ持ってるで」

僕が精一杯の声で叫ぶと生徒は立ち上がり、1度こっちを見て仕方ないなという手つきでナイフを取り出した。

その瞬間が命取りだった。

天照はそれはそれは綺麗な曲線を描く一本背負いによく似た投げ技を繰り出し、止めを刺した。

投げ終わった瞬間、天照は携帯を取り出し、「すみません、洛南公園まで来て下さい。襲われました」

その落ち着きようは襲われた奴の言うセリフじゃなく、いたずら電話に間違われても仕方がないほど感情の変化はなかった。

「天照沙希はボクシングと何やったけなあ？イギリスの伝統ある格闘技を習ってるんや」

まるで自分のことのように言う那実を見つめた。なんでこいつがそんなこと知ってるんだ？

「グリマよ、それに人のことをどうのここの勝手に言わないでくれる？」電話を切りすぐに、那実を睨みつける。

「そや、レスリングみたいな奴やろ？」

「もういいわ」

那実の言葉を一蹴する。それはさっきの回し蹴りより美しい。

僕はひとつ気になることがあった、「どうしてマウントを取らなかったんだ？」

そうすれば一瞬で勝負は決まっていたのに。

「グリマのルールでそういう行為は反則とされているの」

そう言つて、地面に落ちている上着を2、3回手ではたいて、また着た。

「今は試合じゃないだろう」

これは正当防衛であり、悪く言えば喧嘩だ、そんなのにルールがあるなんて聞いたことがない。

「確かに試合じゃないわ、でもそういつてる人はみんな弱いだよ」彼女にそう言われるとそうかも知れないという、妙な説得力があるのは、さっきのボクシング兼グリマの試合というか、一方的な展開の喧嘩を見たせいだろうか。

「もうすぐ警察が来るわ、あなた達、巻き込まれなくなったら早く帰った方が良いわよ」

天照はそう言う草むらに投げた黒猫を拾い上げた。

最後に何故、主犯格と思われる告白をした不良に手を挙げなかったのか聞こうと思ったけれど、色々事情があるのだろうと思いやめた。

それに僕は面倒事は嫌いなので（特に警察）さっさと立ち去ることにした。天照も、もう大丈夫そうだし。

僕が背を向けると、天照が忘れ物を拾うような声で、「なぜあいつがナイフを持っていることがわかったの？」

そんなこと僕も疑問だよ、本当のこと言っても信じてもらえないし。とっさ過ぎて言訳が思いつかない。

5秒くらいの間が空いて、感だよ。と言つのが限界だった。

すると天照がほんの少し微笑み

「そう、・・・そうしたら月曜日の放課後、空けといてくれるとうれしいわ」

特に断る理由もないし、彼女の初めて見せる笑顔に思わず、YESを出してしまった。これが過ちだったのかもしれない。

僕は、天照を公園に残し、寮へ帰る事にした。

「だから大丈夫って言ったやろ？」那実の顔は少しこわばって見える、気のせいかな？

「ホンマに強すぎやろ？あんなTVみたいなん初めて見たわ」

僕は少し興奮をしていた、そりゃあんなアクション映画もどきを目の前で見れば誰だって昂ぶるだろう。

「にしてもなんで、那実が何で天照が格闘技強いって知ってるんや？」

一瞬考えたような顔をした気がしたけど、いつもの変に自信のある声で、「俺を誰やと思ってるんや？クラスの情報通やぞ」

本当にこいつは・・・またつまらない事を言っただけ、しかしその言葉は同時に安心感を与えた。

思い出したように後ろを振り向くと、天照が腰を曲げ、深くお辞儀をしていた。

「あれもグリマのルールのひとつか」

「そうかもな」

そう言っただけは夕日を見つめた。その眼は夕日より遙か先を見つめているようにも見えた。

その11 七不思議と真実

いつもの登校時、よりも少しテンションが高めなのは、那実が寝坊して1人での登校を楽しめるからではなくて、先週の金曜日、天照から放課後の約束をされたからだろう。

今でもはつきりと思い出せる。約束を承諾したときのあの微笑。よほど僕と話がしたかったんだと思う。

クラスでも人気があって、いつも友人が取り囲んでる状態だから、このことを伝える時間がなかったのだろう。

それとも助けてくれたお礼に放課後遊びに行きませんか？ とか言われたりして。

あんな綺麗な女の子に好かれるなんて、僕にとっては奇跡的だよ。きつと僕はある程度は好かれてるだろう、那実と僕との態度の違いを見れば、一目瞭然だよ。

それにしても那実は何でアレほどまで嫌われているんだろう？

まああいつの変に理屈っぽいところは妙に鼻につくし、脳につく。僕も好きじゃない。

この調子で告白されたらどうしよう……。

返事は間違いなくNOだ。

別に彼女のことを嫌いではない。華麗だし、綺麗だし、猫の死体で遊ぶ変体チックな所も僕にとっては少し好印象だ。

けれど僕には好きな人がいる。

そう強く胸に刻み、10m先の花屋を見つめた。いや、花屋ではなくそこで店の手伝いをしている少女に。

見た感じ中学生の彼女は、朝から汗をかき、店内と店の前を歩き来している。

ずっと見すぎたのか、目が合ってしまった。

彼女は僕に営業スマイルという言葉を知らないような微笑みを繰り出し、思わず僕も微笑み返す。

きつと気持ちの悪い顔になってただろうな、彼女の心を暖めるような笑みとは違って。

彼女はすぐに作業に戻り、いつもと同じように、忙しく店内にある花達を店の前に並べている。開店準備を手伝ってるんだろう。朝もゆつくり寝ることも出来ず、家の手伝い。僕には出来るわけがない。それに清純度MAXの仕事っぷり。

いつか話せる機会があればなあ。

いつもの眠たい、しんどい、だるい、の三拍子が揃った授業を終えて、僕は放課後、天照との約束を守るためにあの黒猫公園へ急いでいた。

本当に天照は変わった奴だ。

あの日、場所の指定をされていなかった僕は学校に行けば、下駄箱や机の中に手紙的なものを入れられているのだろうと思っていたけど、そんなものは一切なく、不安になって天照に聞くことにした。移動授業のとき、彼女が1人になる隙を狙って。

「天照さん、放課後はどこに行けばいい？」

長い髪を丁寧に耳にかけて、「あなたの机に書いたはずよ？」そう言って天照は、すばやく僕の元を立ち去り、音楽室へと向かって行った。

いやいや、書いた場所を教えるんなら、待ち合わせ場所をここで言えよ。

教室に戻り、自分の机を見みると確かに書いてあった。右下の隅に小さく上品な字で「黒猫のいる公園」と。

これが机じゃなくて、せめて紙に書いてくれれば絵になったかもしれないのに。まあこれはこれで芸術的か。

放課後、授業終了のチャイムが鳴ると同時に公園へ向かった。のは僕ではなく天照であって、僕はいつもと同じペースで向かった。公園に着くと天照がベンチで座りながら、あの黒猫とじやれていた。

天照は右手にねこじやらしを持ち、ひざの上にいる黒猫は必死になつてそれを引っかこうとしている。2人とも幼稚園児のように無邪気で、声を上げて遊んでいる。普段のお嬢様の風貌を纏っている彼女が嘘みたいだ。

これはこれでいい構図なのかもしれない。僕に絵をかく才能があれば、ここで黒猫と天照をスケッチするだろうな。

けれど、僕にはそんな才能も道具もないので、無邪気に遊ぶ黒猫とお嬢様もどきに近寄る。

「もう来たの？ 人がせつかく楽しく遊んでいたのに」

楽しそうだったのは万人が見てもわかるよ。それに僕はそんなの見に来たんじゃない。

「それより話つてなんや？」

出来るだけ自然に話しかけた。心臓はありえないくらい縮んだり膨らんだりを繰り返してるけど。

「あなたは知ってるかしら、この学校にある7不思議のひとつで、特別能力開発科にいる生徒の半分が行方不明または死んでしまう、という噂を」

「聞いたことはあるけど、そんなどうせ噂やろ」

入学してから1週間後くらいに、その噂はクラスで話題となった。自分の属する学科にそんな不吉な噂があるとなったら話題にもなるだろう、でも今じゃみんな忘れてる。そんな流行が過ぎた話しなんか聞きたくないんだけど。

「今の3年生は10人しかいないのよ、初めは18人の生徒がいたのに」

それも知ってる。噂を確証したい奴が言う決め文句だったわけ？

「そのことをクラスの奴が先生に聞いたら、勉強についていけずに転校や退学したって言っていたで」

そのことが、クラスに知れ渡ったことで、その7不思議は影を潜めたんだ。そのこともクラスで知らない奴はいないだろう。それにうちの学科は天才を養成する学科だから、授業内容も難しい、大い

に納得できることだ。

「それが一般生徒の答えね。ありがとう」

普通の生徒よりも、僕はこの件を知っている方だと思う。

何でって？ この噂の真相を突き止めたのは那実だからな。

よくあいつにそのことについて色んな話を聞かされたよ。本当にあいつは生粋の噂好きだ。何か秘密を知れずにはいられないのだから。

「まあいいわ、このことはいずれ知る日が来るでしょう」

全然知りたくないんですけど、そんなおっかないことの真相なんて。

天照は黒猫をひと撫でして、僕の目を見た。

今思えば、今日まともに目が合ったのは初めてだな、こいつずっと猫見てたし。

それにしても嫌な予感がする。背中が冷たい。冷気を吹きかけられてるみたいだ。

なんだこいつは？ その眼はなんなんだ？

「あなた今、すごい悪寒がするでしょ？」

何でわかったんだ？

僕は鳥肌が止まらない。

「その表情を見るとあつてるようね、やっぱりあなたは」

天照が少し緊張した表情を見せ、さらに僕を睨みつけた。

その顔は、初めて人を殺す表情に似ているのかもしれない、と何故だか思ってしまった。

「あなたは超能力者よ」

僕は緊張の糸が切れた。

何だこいつ、やっぱり頭がおかしいだけか、こいつの脳内を見てみたいよ。

僕のどこが超能力者だ？ 意味不明だ。

「テレビの見すぎだろう？ ほな」

僕はもう、こんなアホと話すこともないので、アホと黒猫に背を向けて、公園を出入り口へ足を進めた。

「理由を言うわ。何故あなたはさっき、悪寒や鳥肌が止まらなかったの？」

「お前が怖い顔するからや」

「いいえ、違う。あなたは私が何を言うか直感的にわかって、それを聞くのが怖かったからよ」

後ろを振り向けば、必死な表情をしてるんだろうなと、天照のその顔を想像して、こりゃ振り返ったら帰れないなと思い、さらに足を進める。

「これが決め手よ」

決め手も何もないよ。

「何故あなたは、あの日、あいつがナイフを持っているかわかったの？」

そんなの知るか。また嫌な予感がする。僕はいつの間にか早歩きになっていた。

「見えたんでしょう」その言葉に思わず振り返ってしまった。

何でこいつが知ってるんだ？ あの時、僕は確かに天照が刺された映像のようなものが脳内に流れた。でもそのことは誰にも言っていないはず。それは那実にも。

その驚いた表情を見て天照は言う

「これから、薫のところへ行くけど、あなたも来なさい」

天照はそういうと黒猫を膝から下ろし、公園の裏口から学校へ歩いていく。

思わず僕も彼女へ付いて行く。この胸騒ぎを抑えるにはこれしか方法はないだろう。

天照は僕の顔を見ず、前を見たまま、「本当にあなたはヤギなのか羊なのかよくわからないわ、まあ信じるも信じないもあなた次第だけだ」

と、どこかのお笑い芸人の決め文句に似たようなことを言った。

その12 IQとトラウマ

天照はその長い足を器用に使い、訓練されたみたいにキレイなフォームで、競歩並みのスピードで歩いていく。そんなに早く歩いて疲れないのか？ 僕も歩くスピードについては定評があるので（自分で言うのもなんだけど）天照に追いつくためにフルスピードで足を動かすことにした。

僕は男のクセにデカイ尻をしているなあと言われる、たまにその尻を見て「良い野球選手になれるよ」とまで言う奴がいるけど、良い野球選手は野球の練習で鍛えられて良い尻になったのであって、勝手に大きくなった尻を持つ僕が良い野球選手になれるわけがない。実証するように僕は90kmのバッシングマシーンを全部空振りした実績もある。長くなっただけど、この尻は、野球のためでなく、早く歩くためにあるのだと自負している。この尻には早く歩く筋肉が詰まっているのだと。

けれど甘かった、女だからすぐに追いつけるだろうと思ったけど、この俺の競歩とここまで良い勝負する女子がいたとは。男子を一気に3人も片付けたことがうなずけるよ。歩いて1分程過ぎたけれど、全くその差は縮まらない。僕と天照はほとんど同じスピードなのだろう。

しかし、このままじゃ一向に追いつく気配がない、仕方がない・・
・、最終手段だ、少しプライドが傷つくけれど。

走るか。

僕は天照の真横に並んで歩くような形をとり、これから何をするのかたずねてみた。

天照は僕の方へ顔を向けることもなく正面を見て、表情を変えず、「あなたが超能力者であるという確信が持てたから、薫に伝えるの

よ」

「何で沖田先生に言わなあかんねん、てか僕は超能力者ちゃうわ！」

何故、超能力のことと沖田先生が関連するんだ？ 彼女はやはり何か隠してたのか？ あの実験も何かのため？

「あなたは超能力者よ。昨日でやつと確信が持てたんだから」

えらく自信があるように見える横顔とその声は、少し投げやりな感じにも聞こえる

「私の言うことが信じれなくても薫がちゃんと立証してくれる、安心しなさい」

「そんなこと言われても安心できるか！」

僕の会心のツツコミにも天照は眉ひとつ動かさず、僕の方を一度も見ることなく、その会話を終了させた。

もういいや、こいつと話していても全く信じるとかそういう気になれないし、本当のことに近づけない気がする。沖田先生に聞けば早いことも事実だ。あの実験のことも気になるし。

僕と天照は、歩くということを超越した速さで、学校に着き、そのまま職員室に向かった。

と思ったのだけれど、天照は職員室を素通りする。いやいや、沖田先生はここやる？

「着いてきて、薫は今そこにはいないから」

何か他の仕事でもしているのだろう、職員室にいるだけが教師の仕事じゃないし。

天照が職員室の隣の教室のドアを開き手招きをする。

案外近かったんだ。僕は校舎中をくまなく探す覚悟をしていた。何ていったって沖田先生だ、こういう行動をしているか思考をしているのか、全く予測不可能な人だからな。

教室へ入ろうとドアに手をつけた瞬間、体中を電気が流れるような感覚にあい、一瞬目眩がした。さっきの公園で出たような鳥肌も、僕自身が鳥になったんじゃないかと錯覚するほど出た。

公園とは明かに体の示し方が違う、体全体が教室に入るなと危険信号を出しているみたいだ。これが虫の知らせとういうものなのか？ けれどそれを認めてしまうこと〃自分が超能力者だと認めてしまふ気が何故かしてしまい、僕は教室に足を踏み入れた。

自分がそんな能力を持つていないと思うために、誰かに否定してもらったために。

教室を見渡すと沖田先生がいた。彼女は机の上に座って腕を組み、こちらを見ている。

それ以外に人がいる気がしたのもう1度見渡してみるけれど、僕と天照と沖田先生しかない。

「来てくれたのね難くん、ありがとう。あなたの性格じゃ来てくれないって思っていたけど。うれしい」

机を椅子のようにして座り、キレイで長い足を地面に伸ばす沖田先生は、満面の笑みで、それはそれは、心がうれしいで埋め尽くされたような声色で僕に言った。

それにしてもこの美女2人は何を隠しているんだ。嫌な気がしてならない。教室の空気も最高に悪い。

中学校の受験前の寒々と緊張が混ざった教室の空気の方がまだマシだ。沖田先生がどれだけ自分の周りに花を浮かせても変わることなどない。

天照は沖田先生に背を向け、黒板の方向を見てドライアイスのように冷たい声で、「薫、早く彼に説明して、彼はものすごく頭が固い人だから、あたしがどれだけ理解させてあげようとしても全くダメ」

なんだ？ 沖田先生を下の名前でしかも呼び捨てにしているから、仲が良いと思っただけと全然そうは見えない。逆に嫌ってるように見える。

「そうね、それじゃ早速本題に入りましょうか」

沖田先生の顔が強ばり、眉の位置がセンターに少し寄って、眼の色が変わったような雰囲気とする。

「あなたは超能力者なの、わかる？」

「そんなことはさっき聞きました。ていうかわかるもクソもないですよ」この人は何を突拍子もないことを言い出すんだ？

「そりゃそうよね、いきなり言われてもわかるわけないか」

口を手で押さえて、笑いをこらえるように喋る。

一体何がおかしいんだ？あんたの方がよっぽど面白いよ。

「これは前に薙くんによってもらった実験の結果よ」

そう言っ僕に解信用紙を渡す。

「何もなかったんやろ。先生落胆してたやん」

「あの時は気付かなかったのよ、でもこの実験結果を本居先生が見ておかしいことに気付いたの」

おかしいこと？ それより何故あの忌々しい本居の名前が出てくるんだ？

「本居先生が関係してるんですか？」

「それもあとでちゃんと説明するから」と子供をなだめるような言い方と声色を沖田先生にされる。

「実は言つとあの解信用紙の答えだけど、5日中3日は全問正解だったのよ」

とここで天照が口を挟む、もちろん黒板を見たまま。

「ある意味よ、ある意味全問正解ってこと」

「ある意味ってどういうことなん？俺も解信用紙見たけどあつてたの1問か2問やつたで」

「今から説明するわ」

沖田先生は自分が発見したような者の言い方で僕に説明をする。

「まず1日目の回答結果を見て13問目だけあつててでしょ」

その通り、全25問中13問目だけが正解したんだ、確かそれは最終日も同じだった気がする。

最終日も同じ？ 偶然にしては凄い確立じゃないか？

「薙くんは1問目の解答欄に25問目の正解を書いたの、そこから順に2問目は24問目の答え、3問目は23問目の答え、・・・」

と永遠に「何問題は何問題の答え」と続く気がしたので、僕は「10問題は16問題の答え」を言うところで先生の言葉を止めた。

「もうわかったよ先生、ようするに正解と問題を逆の順番で書いてたってことやる？」

「わかつてくれた？ それじゃ、わかったでしょ、あなたは超能力者なの」

「わかれへんよ。そもそも偶然やるこんなこと？」

言っている自分でも矛盾していることはわかっていた。こんな凄い偶然が何万分の一なんだろう、でもそれにかけてみたい。

「一回そんなことあっただけで超能力あるなんて決めつけるんやったら占い師は超能力者やないか」

何故この結果を見て信じないの？ と呆然として目が点になる沖田先生。

彼女が黙ると教室は静かになり、時計の秒針の音だけが響く。この空気どうにかしてくれ。

すると天照が平坦沈着な声と表情で僕を見た。

「まだ信じないの？ 往生際が悪い」

そう言つと沖田先生が持つもう一つの解答欄を持って話を話した。

「2日目はハズレ、3日目は無理やりつなぎ合わせた感じだけ言葉で説明するのがめんどくさいから黒板に書く」

そう言つて黒板に白いチョークで数字を書きなぐる、速い割に上手な字を書く。沖田先生の字よりも明らかに上手い。

天照は黒板にはこう書いた。ピンクのチョークで書いた部分は正解しているところらしい。

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・
14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・
24・25

1 2・2 4・2 3・2 2・2 1・2 0・1 9・1 8・1 7・1 6・
1 5・1 4・1 3・1・2・3・4・5・6・7・
8・9・1 0・1 1・2 5

「ちょっと不規則になつてるのはあなたの心理状態のせいかもしれないわ、けれど法則性はある。4日目はハズレで5日目は・・・あなたが考えてみて、わかるでしょ」

問題用紙を見て少し考えなくてもわかった。1日目の結果と一緒にだった。もうなんと言つていいのかわからない。

こんなことが実際にあるんだろうか？僕は目ではなく自分の脳と記憶を疑った。

「その表情を見ると、答えはわかつてるようね、沖田先生、彼は納得したみたいよ」

「違う！ この結果は認めるけど、僕が超能力者になつた経緯とかが全くわからん。せやから認めへん」

いきなり目覚めるなんてそんな理不尽なことありえるのか？どこかにきつかけがあつたのか最近の記憶を探るけれど見当たる気配すらない。いたつて普通の日常を過ごしてきたぞ、僕は。

変なことといえばこの学校の推薦届けが来たくらいだ。

「薫、止めを刺して」そう言つた天照の顔は、あきれた顔の代表として、記憶に留めたいほどだ。

「はい。じゃ薙くん、いきなりだけど、あなた面接の日、健康診断でインフルエンザの予防注射されたわよね」

確かにされた。それがどうしたんだ？

「あの注射には超能力に目覚める素みたいなのが入ってるの」「なんやねんそれ？」

天照が掃いて捨てるように言う、「詳しく言つてもあなた理解できないでしょ、脳内のシナプスを活性化させるのよ」

「活性化させたら目覚めるんか？」

「人の脳は80%は眠つた状態、それで一生を終えるわ。でもそ

の眠った脳内に超能力があるという実験結果が出たの。それはもう半世紀も前のことよ。それから研究を重ねて、その眠った部分を起こしやすくする薬が開発されたってわけ」

「その薬を僕は注射されたのか」

「薙くんだけじゃないわよ、天照さんも含めて特別能力開発科の生徒みんな」

「なんでや？ 僕らのIQが高いからか？」

「あなたまだそんなこと信用してたの」

「えっ？」

僕はもう何が何だかわからない。もしかしてだまされたのか？この学校に。

「IQはあなた達のような一般の生徒を入学させるための口実よ、だから嘘」

「ごめんね薙くん、嘘ついちゃって」

「ごめんで済むか」

僕は沖田先生が、何故この話をへらへらして話しているのかわからない。イライラが積もる。

「人は死に直面したときに風景がスローになる。走馬灯が見えたとか言うでしょ？ あれも一種の超能力なのよ、でも死に直面するときにしか能力が発揮されないんじゃない命が何個あっても足りないでしょう？」

「僕は死にそうじゃないのに能力が使えたで？」

「それはそうしているからよ薙くん。集められた生徒はIQが高いんじゃないくて、心に傷を負っているの、深い深い。普通の日常じゃ考えられないほどの深いトラウマを持つてるのよ」

「もしかして」

僕はやつとつかめてきた、この能力が使える時が。

「死とトラウマは似ているのよ。その心の衝動を脳が勘違いして超能力を引き起こさせる。まあ死に値するトラウマを持った人間なんてそんなにいないのよね、それにそれを頻繁に思い出せるメンタ

ルもないわ、けど薙くんはそれができるのよ」

「じゃあ、天照も」

「私は、別よ」

そう言つと逃げるように教室を出て行つた。

過去のことは聞かれたくないのか。

「天照さんは少し違うのよ、まあ私の口からは言えないわ」

ちよつと引つかかるところがある。何故僕はこの問題をしているときはトラウマも思い出してないのに、能力を発揮できたんだ？

「私もその薬を注射したのよ、するとそういう超現象を引き寄せやすくする能力が身についたの」

「その、身につく能力つて人それぞれなんですか？」

「そうよ、あなたの心の傷の一番深い記憶のときに強く望んだものがあなたの超能力になるのよ」

つてことは、この人は超現象を引き寄せる能力が欲しかったのか。やっぱり変な人だ。

けれど少しずつこの能力のことがわかってきた。

あれ？ 知らないうちに僕は信じてしまったのか、このありえないことを。でも先生が言つてゐることは間違つてゐるように見えないし、それに俺の能力も恐らくは・・・。

自分の能力が何か考えていると、教室のドアが開いた。

ふと、目をドアの方へやる。

那実ともうひとりとは…通学路にある花屋の女の子だ。

どういう組み合わせ？ てかこの教室にこのタイミングで来たつてコトは……。

その13 崎野心花と黒い夢

開かれたドアの先には、驚いた顔をする僕によく似た顔と、毎朝花屋で見かける小さな顔に大きな目をして艶やかな唇をした中学生がキョトンとしていた。

空気は沈黙。

僕も驚いて声が出せないでいる。何故奴がここにいるんだ？ いや考えなくてもわかることだけれど、一応確かめてみよう。そう思い口を開こうとした瞬間。

「うっそお？ 凄いわぁ」

鼓膜が痺れるほどの声で、桃の花びらのような顔をした中学生が言った。どこからそんな声が出るんだ？

「なー君、いつからそんな超能力使えるようになったん？ 分身の術って忍者みたい」

そう言っ腹を抱え、涙を流す。大爆笑だ。それより『なー君』とは那実のことか？

「そんなすごい能力使えるなんて知らなかったわ。コノ力を驚かすためなん？」

笑いをこらえながら必死で話すけれど、たまに堪えきれず唇から空気が漏れる。

そこに那実が空気を元に戻すかのよう冷静に、「ちやうよ、これは兄弟の雑や」

「兄弟？ ってことは双子やったん？ 初耳やぁ」

そう言っ彼女が僕の顔をまじまじと見る。そんなに凝視されると照れてしまう。

「ほんまや、ちょっと顔違う。ごめんなさい笑ったりして」

そう言っ斜め45度くらいに背中を曲げて、お辞儀を慣れたようにする。いつも店の接客でやってるからなれているんだろう。

「ここにおるってコトは・・・」

彼女はそう言うのと沖田先生に目配せをした。恐らく僕が超能力者かどうか確認を取ってるんだろう。

「超能力者なんやあ、これからよろしく」

そう言うのと僕の方に一步近づき、

「あたしは崎野^{さきの}心花。よろしくお願いします」

そう言うのと営業スマイルとは別の、親しみが伝わってくる笑顔を僕に向けた。

照れ隠しに僕は、「花屋でサキノってなんかネタみたいやな」何を初会話の人に失礼なことを言ってるんや僕は。

僕はパニックになると、後先考えずに出てきた言葉を口から発するタイプの人間のようなのだ。

しかし彼女はそんな言葉を気にすることなく、

「でもなんか運命みたいやろ？ 花屋をする運命に生まれたって気がして。あたし、生まれたころから花が好きやから、やっぱり運命かなって思う」

今の言葉で何回、運命って言葉を使っただろう。それほど日常会話に出てくる言葉じゃない気がするんだけど。

と、ここで薙が割り込んできた。人がせつかく崎野さんと話してるのに、邪魔するなつての。

「お前ほんま、何でここにおるねん」こいつはさっきの話を聞いてなかったのか？ 呆れる奴だ。

「だから超能力があるからここにおるんや」

「それはわかってる」

なんだとこいつ、わかってるんなら、そんな質問するなよ。

「俺は何でお前がここにおるんか聞いてるんや」

「たくめんどくさい奴だ、いちいち説明するのがめんどくさいけれど、こいつがこんなに興奮しているのはあまり見たことがない。

仕方ないのでここまで来た経緯を説明した。

「そうか、そうやったんか」そう言うとうつつむいて、落胆の表情を映す。

なんだこいつ。わかってるんなら、そんな質問するなよ。

「天照沙希が、やっぱりあいつが要注意人物やったんか」

どういう意味？

「俺はお前を超能力を持ってることに気付いて欲しくなかったんや」

沖田先生は那実を試すような声色で言う

「あら、それはどうして？」

少し口をもごもごさせて那実は言う。なんだ？ そんなに言いにくいことなのか。

「嫌な雰囲気があるんや、この組織には、先輩とかもだんだん・

・

「おっと那実くん、言つて良いことと悪いことがあるわ」

沖田先生はいつもみたくのんきな声で言つたけれど、その中に明らかに怒りを感じた。

那実はなんて言おうとしていたんだ？

「那実、その組織つて何なん」

「まだ聞いてなかったんか」驚きと、やってしまったという声が聞こえてきそうなくらいの表情をしてそう言つた。

「今から説明するわ、薙くん」

いつもの雰囲気に戻る沖田先生。凄い感情の切り替えだな、やっぱり女性は怖い。

「この学校では、あの薬を打たれた生徒の中で超能力に目覚めた人に限り、ある活動をしてもらうの」

「ある活動つて？」

「国を守つたり、悪い人を捕まえたりするの」

そんなことをするの？ ていうか、「そんなこと警察に任せればいいじゃないですか」

「出来ないから言ってるのよ」

どういうことなんだ、警察が解決できないようなことを僕らがやるって言うのか。出来るわけじゃないじゃないか。

「裏の警察ってコトよ。警察は市民のためでしょ
そりゃそうだよ。」

「で、私たちは、国を守るためにがんばるの」
国のために僕達が、何をどうがんばれるのが全くわからない
だけだ。

「簡単に言っちゃえば、国にとって邪魔な存在を消してしまうの
よ」

暗殺者ってこと？

「まあよく似てるけど、殺すことまではしないでいいわ、その手
伝いをしてもらうだけ」

「例えばどういうことするんですか」

それは正義なのか悪なのか、ちよつと微妙だぞ。邪魔な奴を消す
って言うところが怪しい。

「うーんとね、最近、有名な映画監督が脳卒中で倒れたわよね」

確か、ニュースでも取り上げられて、監督の作った映画の出演者
たちが、メッセージを送る映像はよく流れていた。まあ彼らが本当
に心配しているかどうか気になるところだけれど。その監督とどう
関係あるんだ。

「あの人は脳卒中で入院してなくて、死んでいるわ」

どういうこと、ニュースじゃ病気と言われて、最近じゃ、監督は
容態も回復してきて、朝のニュースで生電話もしていたぞ。もしか
して、この組織にはマスコミを動かすほどの力を持つってコト
なのか。

また沖田先生のちんぷんかんが飛び出したのか、本当のことを言
ってるのか気になって、斜め後ろにいる2人を見たけど、2人は俯
いたままだ。

「那実、どういうことなん」

僕は出来るだけ、落ち着いた声で言っただけだけれど、実際、
声はビブラートしたみたく震えていた。

「俺は何にもしてないで、先輩達がやったことや」

決して目を合わせようとしない、こういったときの那実は高確率で嘘をついている。けど、今の空気は問いただせるようなものではない。

「能力が発覚して半年は研修期間だから、難しい事件には関わらせないようにしているわ、極力」

極力ということは、関わることもあるっていうことだよな。それよりももっと気になることがある。

「何故、その映画監督を殺したんですか」

「私たち、組織のことを感じらせるメッセージを含んだ作品を作ったことと、国民に対して不安を与える物語だったからよ」

日常会話のように言う様子に、人を殺すという罪は全く感じられなかった。

もしかして本当にやばい組織なのかな、誰か冗談だと言ってくれないよ。

「大体わかりました、ほな僕はこの辺で」

もうこの場にいたら頭がおかしくなりそうだな。そう思い右足を前に踏み出した瞬間。

壁や那実たちがゆがんで見える、沖田先生の声が機械音のように、一定の高音を鳴らし続けている。どうしたんだこの教室は。もしかして、他の超能力者が僕を教室から出さないようにしているのか。負けじと僕は左足を踏み出した瞬間、バットで殴られたような感触が後頭部に響き、目の前が真っ暗になった。

そこは何よりも暗く、暗闇なんかよりずっと暗く、太陽が消えた世界。

僕は不安になって光や声を探すけれど見つからない。

その不安はどんどん膨らんでいつて、それを抑えるために僕は走り出した、走れば何も考えずにいれると思って。

けれど、そんなことで断ち切れなかった。5分ほどするとまた次の問題が発生する。

「一体どこまで走れば、家や電柱なんか見えるんだろう」

周りを見渡しても、何も無い。あるのは黒、見えるのは自分の体だけ、でもあるという実感がない。

僕は何か叫ばずにいられなくなっていた。

「誰かおるんか？ おるやろ、返事して」

ひたすら繰り返すけれど何も聞こえてこない、自分の声すらも聞こえてこない。

不安は積み重なる一方、今は何時なんだ、時間は進んでいるのか、一生このままなのか？

このままなのか。

その言葉を脳内で浮かべた瞬間、叫んだ。

それは泣き声にも似ていたのかもしれない。響かないから聴こえないけれど。

しばらくして、叫ぶことに疲れた僕は、うずくまって何も考えず、ただ暗闇を眺めていた。

すると何か聞こえた気がした。

白い靄がかかったような声で、しっかり聞き取れない、もしかしたら幻聴かもしれない。

けど次の瞬間、しっかりとした声に暗闇は包まれた。

「崎野はもう帰り、夜も遅いし」

那実の声だ。

その声は僕の脳内で何度も何度も巡り、脳内がその声で埋め尽くされた瞬間、崎野さんの顔が見えた。僕は驚いて反対側に顔を向ける。

つて、ここはどこなんだ？ そう思い僕はすぐに体を起こす、その瞬間、頭に軽く電流のような痛みが流れ、僕は痛みよりも驚きで「イタッ」ッと言ってしまった。

「大丈夫う、薙くん」

最初に声をかけてくれたのは崎野さんだった。次に、「いきなり

倒れるからびつくりしたけど、仕方ないか」何が仕方ないんだかわからないけれど、それよりここはどこだ？

周りを見渡しても見慣れない場所だ、ベッドや消毒液、何かの錠剤が見える、保健室なのか？ けれど、定番の体重計や人体模型やら、学校にある保険の道具が見当たらない。

「ここはどこや」

考えても答えにたどり着けないしこれ以上考えると頭が割れそうなので、那実に聞いてみた。

「ここは組織のためだけの治療所や、まあ学校の中やけどな」

そうなのか、組織のための・・・、って保健室のほかにこんな部屋があつたのか、学校に。

そういえば、沖田先生は？

「仕事で大阪にいったよ」

「生徒が倒れたのに看病もなしか」

「よくあることなんや」何がよくあることなんだ？ 主語を言え主語を。

「沖田先生が出張によく行くことと、超能力を使いすぎると、脳に負担がかかって眠ってまうことや」

強制終了ってわけね。

「ほなお前も目が覚めたことやし帰るか」

「すまんな心配かけて。崎野さん、夜遅いのにごめんな」

「全然ええよ、コノカも心配やつたし」

そう言つて、微笑む姿を僕は一生忘れないように目に焼き付ける、あの暗闇の中でも見えるように。

帰り道が一緒なので3人横に並んで歩く。真ん中に崎野さん、その左に僕、空いた所に那実というポジションだ。

那実がいなければ最高の帰り道になったんだろうけれど、3人で他愛のないことを話す帰り道もそれはそれで楽しかった。天照だところはいかないだろうな。

「僕、最近やけど崎野さんを登校時に見かけるで」

「え？どこですかあ」いやいや、その質問はおかしいやろ？今朝だつて笑いかけてくれたじゃないか。

「今朝、花屋で見かけたんやけど」

「そうやったんですか、ごめんなさい、あたし仕事中は仕事しなくつて」どういう意味？

そんなこんなで話しているうちに、いつの間にか崎野さんの家である花屋の前辺りまで来たので、サヨナラを言おうとしたとき、

「月曜日からはよろしくお願いします」そう言つて、手を振りながら笑顔で、店じゃなくて家の方に走つていった。

「どういうこと那実」

「どうもこうも、彼女は来週からうちの学科に転校してくるんや」

「崎野さんつて高校生やつたん？」

「そうやで、飛び級とかじゃなく純粋な高校生や、まあ間違えても仕方ないやろ」

僕の目がおかしいのかもしれないと思い、振り返つて崎野さんを見た。

手を振りながら僕らを見送る彼女は、高校生と認識してもやつぱり中学生にしか見えなかった。

双子のフリをして歩く帰り道、那実の言葉を右から左へ受け流し、僕は暗闇の夢のことが頭から離れなかった。

その13 崎野心花と黒い夢（後書き）

「崎野心花と黒い夢」を読んでいたくださりありがとうございます。
組織についてはまだまだ秘密はたくさんあります。

もしよろしければ小説の評価もお願いいたします。

その14 滅亡と唐突

衝撃的な出来事の帰り道。僕はまだ錯乱状態ということを知ってか、那実は話しかけてくる。頭痛もする、頼むから少し黙ってくれないかな。

「お前は薫ちゃんが本当に超能力あると思うか」僕の顔を見ず、どこか遠い目をして那美は言った。

「あるっていったじゃないか。超現象を自分の身に起こりやすくする能力やろ」沖田先生はそう言った。嘘をついてるようにも見えなかったし、間違いはないはずだ。それにそれが嘘とわかる根拠なんてどこにもないはずだ。嘘発見器的能力が、もしあるなら人間不信になって、今頃、僕は火に焼かれて小さい箱の中だよ。

「嘘なんや、薫ちゃんの言ってることは」だから、「根拠なんてどこにもないやろ」

「お前はわからんのか？」本当に深刻そうな顔をして那実は言った。

「薫ちゃんには超能力者特有のオーラが感じられへん」またわけのわからないことを。そういう霊的な話ばかりしていると頭が可笑しくなってくるぞ。ってもうおかしいか。

「お前はまだ能力に目覚めたばかりで気付かんだけやけど、いつかは気付けるはずや」こいつはなんか違う』っていう雰囲気」

それは、動物にある危機察知能力に似ているものなのかもしれないと那実は言った。

「なんで沖田先生はそんな嘘をついたん？」そうだよ、すぐにばれる嘘を。そんなことを言って超能力者になれるわけではないし、信頼を得れるわけでもないし、逆に不信に思ってしまうだろう。本当によくわからない人だ。

「俺にもあの人の真意はわからへんよ。でもお前も超能力が身についてよかったよ本当に」屈託のない笑顔で僕を見る那実。わから

ないことがあるとすぐ話を帰るのはこいつのクセだ。

それにしてもどうしたんだこいつ？ 放課後の時は「なんでここにおるんや」って迫ってきたくらいなのに、今じゃその笑顔かよ、お前もやつぱり変な奴だよ。

「夕方はあんなけ拒否しといて今じゃ大喜びか。ホンマにコロコロ変わる奴やな」

「それは組織の集合場所におったから言っただけや。超能力が身につくのは大賛成やで」そういつて那実は落ちていた空き缶を蹴った。空き缶はクルクル回って車道に出て行く。

「超能力が身につくのが何でそんなにいいこと何？」僕がそう言った瞬間、那実が蹴った空き缶が車の車輪に見事衝突して、ペしゃんこにならずにこちらに跳ね返ってきた。

僕は何も出来ず、ただその缶を眺め「あの缶、アルミじゃなくてスチールだな」くらいしか考えられなかった。あまりにも唐突過ぎで。しかし那実は驚くほどの反射神経と冷静さで、時速80キロはある空き缶を華麗にカバンで弾いた。曲芸すぎる。僕はただ呆然とするしかなかった、あわや顔面流血になりかねないその出来事を、花を摘むように簡単に防いでしたことに。ただ、ただ、驚愕のひとつことだった。

これがお前の能力なのか那実。

「と、まあ訓練すればこういうこともできるようになるねん、あともうひとつは・・・」呆然としている僕をそっちのけで話を続ける。「地球がもうすぐ死ぬんやってさ」

何と大それたことを日常会話みたいに言うんだ？ またいつもの冗談だろ。

「冗談ちゃうよ、ホンマのことや。あと約10年後かな？ これは裏社会では常識らしいで」

「ってことは、僕らの寿命もそこまでってことか」

あまり信用しない方がいい、こいつは恐らく夢で見た出来事と現実の出来事を区別できない人間なんだから。軽く聞き流す程度に・・・

・しておきたいけど、『裏社会』てのが気になる。

「誰からそんなわけのわからんこと聞いたねん」

「薫ちゃんや」

また沖田先生かよ。一体あの人は何者なんだ。

「組織の幹部で俺たちの指揮官的存在やで」

「だからあの人は僕が超能力者になったことを喜んだのか、コマは1つでも多い方がいいもんな」その一言がいけなかったのか、那実は僕をにらみ付けた。何を怒ってるんだこの野郎。

「薫ちゃんはそんな人やない、お前の人の見る目のなさには驚きやわ」

それはご苦労なことだ。勝手に驚いてくれ、世の中にはもつと驚くことがあるだろ？ スイカが野菜っていう方がまだ驚けるよ。

「まあ薫ちゃんのいい人具合はこれからわかるやろうな、いくら人間不信のバカヤロウでも」僕のこと言つてのかこいつ？

「そんなことより、お前が超能力者であることに喜んだ最大の理由それは・・・」那実は不敵な笑みで僕の顔を見る、そんなに僕の驚く表情を拝みたいのかこいつは。仕方ないか、今日は色々面倒かけたから、誠心誠意を込めて演技してやるよ。感謝の意を込めて。

「超能力を持つ人だけが、宇宙に脱出できるんや」

僕は驚くフリが出来なかった。あまりにも意味がわからなく唐突すぎて。もうなんだか唐突なことばかりだな今日は。恐らく僕が無表情だったからだろう、もう1度那実が言う。

「だから、超能力を持つ人だけが爆発する地球から逃れられるんや」

いい加減慣れたものだ、こういうとんでも発言には。けど何度聴いても慣れる兆しが見えやしない、ここから富士山を見ようとするくらいに慣れることは無謀かもしれない。そんな気がする。

僕は息を整え、やっと一言口にする。「なんで超能力を持つ人だけなん？」

「全国民を乗せれるようなロケットなんか作れるわけないやろ。」

だから特別な能力がある俺たちに行く資格があるらしいで」

「なんだか納得いかないけど、そういうことなんだろうきつと。というか納得なんてしたくないけどな、こんなことに。」

「まあ詳しいことは明日、薫ちゃんに聞きゃ」

「明日会いに行くんか？」

「そうや、朝から行くで、だから今日は深夜番組なんか見てたらあかんで、遅刻したら怒られるからな」

それはそうだな、人を待たすのは最低なことだし、けど沖田先生が遅れてくる可能性はかなり高いよな。まあいいか。ていうか、朝からののか。先生の都合もあるんだろうけど、休日くらい午前中は布団の中にいたいよ。

「何をだれたこと言うてんねん、高校生がそんなこと言うたらあかんやろ」

誰がそんなこと決めたんだよ、そんなことを言う高校生的の方が圧倒的多数だと思うけど、まあこれ以上反論しないでおこう、頭も痛いし、それに何だかんだ言うてこいつはこいつなりに僕のこと気にかけてくれてるんだな。

満月が照らす帰り道、その不気味な輝きを忘れて僕の心はただ高鳴っていた、これから出くわすであろう、非日常的な日々、漫画やドラマや小説の出来事のような世界が本当にあるんだということに、ただ、心が満たされていた。崎野さんのことを忘れるほどに。

その14 滅亡と唐突（後書き）

これにて第二章が終わりです。
読んでくれて本当にありがとうございます。

その15 那実の角（前書き）

ここから第二章です。

その15 那実の角

僕は何かおかしな夢を見ているんだろうか。

そうとしか考えられない。一般の高校生が、訳のわからない薬剤を投与され、そのお陰で超能力を身につけ国を守ってくれたとさ。

僕らが戦隊ヒーローっていうのか？ 本当に馬鹿げている。どういう社会の仕組みでそういう組織が生まれたのかイマイチわからないし、なぜ、僕らみたいな少女に、そのような危険な真似をさせるのかもわからない。別に自衛隊が何かそういう組織の大人達に任せればいいもののに、全く答えが見えてこない。

それは今、この状況にしてもだ。

照りつける朝日の中、僕と那美はバス停の前にいた。

こんな快晴は久しぶりだろう、完璧な行楽日和だ・・・そう、行楽。

朝早く那美にたたき起こされ、寝ぼけた体に担がされたバトミントンセットとビニールシート2枚。

「沖田先生と話が出来るって言われたから来たのにこれはどういうことやねん」

昨日の頭痛もまだ治っていないというのに、何故休日の朝7時に起きてピクニックに行かなきゃならないんだ。せつかくの休日くらい寝かせろって言うんだ、せめて10時まででは。

「いつも授業中寝てるやないか、何を偉そうなこと言うてんねん」確かに那美の言うとおり、僕は授業の7割は寝て過ごしてるけど、そんなことはどうでもいいんだよ。問題はそう・・・

「ピクニックってなんやねん？てか僕とお前だけなんか？何が悲しくて兄弟でそんなことしなあかんねん」

「ホンマに誰も来えへんなあ。集合の8時までもう5分前やで」僕の話しを聞き流すように那美が言っつてすぐ、東方からものすごい

い勢いで走ってくる人が見えた。朝日のせいで姿かたちをよく確認できないけれど、その横を走る小動物を見ればわかることだ。

「やっと来たか、意外と時間にルーズなんやな」と那実がどうでもいいことを言う。

「黒猫も一緒に、やっぱり変な女や」と僕もどうでもいいことを言う。

それにしても、何故黒猫も一緒に来てるんだろう？

天照は僕らの前まで来て急ブレーキをかけた。徐々にスピードを落とせばそんな忙しく止まらなくて済むのに。

彼女はあれだけのスピードで走ってきたのに息も切らしていないし、汗もかいていない。流石と言うべきだろう、黒猫ですら息が上がつてるのに、恐るべし体力だなこいつは。

「すまない、少し起きるのが遅れたから遅刻してしまった。いや、ギリギリセーフか？」

「残念ながら、ギリアウトやで」と僕が言うと、天照は肩を落とし、もう1度僕らに謝罪をした。

すると微笑みながら那実が天照に尋ねた。「なんで遅れたんや」

「だから言っただじやない。寝坊だつて」そう言つて那実を凄い剣幕で睨んだ。どうやら天照は『僕ら』に謝罪しているわけではなく、僕に謝罪していたようだ。

「寝坊？」そう言つと那実は不適に笑う。天照も不安になったの

か、少し恐れるような顔になる、けれどそれでも那実を睨み続ける。

「何よその顔は」

「天照沙希、その長い髪に付いた物はなんや？」今にも噴出しそう言った。

それを聞いて僕も天照の髪を見ると、木の葉が付いている。さらに服を見ると、木の枝が引つ付いていた。続けて那実が訊ねる。

「その黒猫はどうしたんや、何でついてきとんねん」

「たまたま公園を通りかかったら付いてきたのよ」

そりゃそうだろ、わざわざ公園で飼っている猫をピクニックに連

れて行くような女じゃないだろう、この女は。けど……。

「それやったら何で木の葉や木の枝が天照沙希の体についてんねん、ゴミをひきつける能力でもあるんか？　そうやったら人間掃除機とでも呼ばしてもらおか」

「私をからかってるの？　それ以上言うとお痛い目合うわよ」冗談と思って、2人の会話を聞いていたが、天照の表情を見ると、その考えが甘かったと気付かされる。衝突間近だ。

けど、想像してみると偉く滑稽だ。わざわざ公園に寄って、体に枝やなんやら付くほど、黒猫を探し、そのせいで遅刻するなんて。子供みたいにかわいい一面もあるんだな。本当にガキっぽい、けどそのガキっぽさには共感が持てる。

天照の弱点を握って上機嫌にヘラヘラしている那実の電話が鳴った。

「もしもし、伊佐やけど……あつそうなん？　OKわかった、ほなまた」

一体誰からだろう、というかこのピクニックに誰を誘ったのか気になる。

「コノ力は後から来るって、ほんで沖田先生も一緒にくるみたい」
「ってことはこの3人で、しばらく過ごさなくてはいけないのか？　それは気まずいぞ、「何時くらいに先生らは来るん？」」

「現地に行つという言われたからなあ、でもあの2人弁当係りやから昼までには来るやろ」

それじゃ、長くて4時間はこの3人でいなきゃならないのか。一気に時間の流れが、飴を溶とすように遅く感じる。

「あれ？　まだ来てないんじゃない」

「せやで、先輩のクセに遅刻やて、情けない」慌てて僕は聞き返す。

「まだ誰が来るの？」一体誰なんだろう？先輩？何の先輩なんだ？
「俺ら1年の教育係みたいな人やな、あの人のことを知る為に呼んだんや」

口を尖らせて、天照は「無理に決まってる」と断定の言葉を吐いた。

「電話してみるわ、まだ寝てるかもしれんし」そう言って、那実は僕らより5歩くらい離れていった。

ふと、天照を見ると、スカスカのリュックを背負っていた。やっぱり那実の言うことは間違ってたんだな。そう思うと、あの天照の態度がやけに可笑しく見えて、笑いをこらえることが出来なかった。

「電話中やぞだまっとけ」

「私を見て笑ってるの？ ちょっと失礼すぎるでしょ」そんなこと言われたって、つばに入っただから仕方ないだろ、人の感性をくすぐるものがどこにあるのかわかったもんじゃないよ本当に、それより、「どこまでピクニック行くか聞いている？」

あきれた表情の天照が猫を抱き上げながら言う。

「目的地も聞かされずによくピクニックに行こうと思ったわね」だから、僕はピクニックに行くことを知らなかったんだよ。

「あなたはそこまでバカじゃないと思ってたけど……。行く場所はあるあなたがよくご存知の場所よ」

って遠まわししないで言ってくれよ、いちいち回りくどいやつだな。

「少しは考えるってことを知らないのかしら、行く場所は……。」と唾を飲む天照。

引つ張りすぎだろ？早く言えよ。

「大仙公園よ」

ああ、あそこね……。って遠すぎだろ！！てか地元じゃないか！一体、那実は何を考えてるんだ。

あいつの思考を理解することは特殊相対性理論を理解するよりも難しいのかもしれない。

その16 一言もって上筒は蔽う

第三の男を待つこと、はや30分。

いくら先輩だからといって、これだけ遅刻すると許されるものではない。ほら見る、天照も平常心で黒猫と戯れているように見えるが、時々表情に苛立ちを感じ取れる。那実にいたっては10分ほど前から貧乏ゆすりが止まらない。

「ホンマに。電話したとき、今家出たから言ってたのに。どんだけ遅いねん」

あまりの遅さに我慢できず、那実はジーンズのポケットから携帯を取り出し不機嫌にリダイヤルを押した。

「先輩？ 遅いんやけど。は？ もうおる？ どこに？ 隣？」

電話と話す那実は、困惑を隠しきれない表情で周りを見渡し始めた。どうやら先輩はもう来ているようだ。

「どこですか？ もう時間だいぶ過ぎてるから変な小細工やめて早く来てくださいよ」那実がそう言って電話を切った瞬間、「キヤッ」という声がした。

その声の主は…天照だ。いきなりどうしたんだ？

「何するんですか、猫を離してください」

その声を聞き、天照の方へ振り返った。あの黒猫は首元を持たれ、力が抜けたような目をし、タラーンとして動かない。てか誰だお前は？

黒猫の首元を持った人物を僕は見たことがなかった。と言ってもその男はマスクとサングラスをして汚らしいつなぎを着ていて人物を特定できる服装ではなかった。ホームレスかな？ 懐かしい。大阪に居た頃は目にすることがあったけれど、京都に来てからはめったにその姿を見ることがなかったからな。

「おっちゃん、その猫はこの子のや、返したってくれへん？」僕はそう言いながら、ホームレス男へ歩み寄った。すると、そのホー

ムレスはポケットから光る物を取り出した。まさかこんな朝っぱらからそんな物見るなんて思ってたなくて僕は歩み寄ることをやめ、息を呑んだ。黒猫がやられる。

「やめて!!」天照がそう言っただけパンチを繰り出そうとしたけれど、一足遅く、その光物は黒猫の背中に刺さった……。

鈍い音がした。それは光物が黒猫に指された音ではなく、天照が握った拳によるものだった。そのホームレスは軽く3メートルは飛ばされた。黒猫は空中で一回転を決め見事着地。

着地？

どうしてだ？ 明らかに包丁のようなもので背中を刺されたぞ？
すると傍観者と化していた那実が声を上げた。

「先輩遅いつて」

どこにいるんだ？ その先輩って。

「今、天照沙希が殴り飛ばした」

えっ!?! どういうことだ。

すると、殴り飛ばされたホームレスはゆっくりと体を起こし、サングラスとマスクを取って、「今は時速120kmを越えていたよ、さすがだね。けどおもちゃだよ」と気味の悪い笑みを浮かべた。どうやら、あの光物はおもちゃのようだ。猫にも傷は付いていないようだし。

「つまらない冗談をするからです」そう言っただけ天照は黒猫を抱え駅の方へ歩いていった。

「猪だね」と訳のわからないことをつぶやき、その先輩は僕の方へ歩いてくる。

彼は表情を無にして言った、「伊佐那実のアメリカン・サピ
上筒乃雄。まあ名前なんてどうでもいい、ホモ・サピエンス・サピ
エンスと呼んでくれてもかまわないよ」

「何自己紹介してるんすか？ それより遅れたこと誤りよ」那実は怒りを抑えきれず、刺々しい声を出した。それもそうだろう、乗るはずのバスを3本見過ごしてるんだからな。それより天照の奴ど

こ行くんだ？ バスはあと2、3分で来るのに。僕は慌てて天照を追った。

上筒先輩だっけ？ 本当に変なやつだ。何がホモ・サピエンスだ？ 訳わかんないよ、それにホームレスの変装で黒猫を殺すフリをするし、あれに何の意味があるっていうんだ、ただ場の空気を悪くするだけじゃないか、ただし那実を除いて。

「天照さん、もうバスが来るから歩く方が時間かかるで」そう言っ
て、彼女の肩に手をかけた。

「いちいち私に触れるな！」どうやらまだ彼女の怒りは収まってい
ないようだ。僕は適当なことを口にする。

「上筒先輩やったっけ？ 彼にも何か意図があってそうしたのか
もしれないし、だからゆるしてやんなよ」

「意図？」天照はしばらく考え込み、「そういうことね、あたし
がバカだったわ。けれど、許す気にはなれない。だからあたしはバ
スには乗らないから。この距離なら走った方が速いし」

そう言っ
て天照は走り去って行った。仕方ない、バスに乗るとす
るか。彼女の足についていける自信など毛頭ないからね。

バスに乗り込んだのはよかったけれど、思った以上に人が多く、
座ることが出来ず。僕らはつり革に身を任せることになった。

そして、バスの中でも上筒先輩の謎発言は止まらなかった。

「君が噂の時速30万キロメートルか」な、さっぱり意味不明だ
ろ？

「はあ、そういうことですかね？ でも噂ってどういうことす
か」意味不明な部分は省いて話すことにしよう、この人とは。

「おしべのように」

もう話にならない。那実、解説を頼む。

「噂？ 徐々に広まってるってことちゅうん？」

「誰に」

「クラブにや」

僕のことがあの国専用警察というところでもない場所で広がってる

つてことか。

「そこにはどれだけの人がおるん？」

「1年が俺らを含めて4人、2年が多分6人で、3年が3人かな？」

「自信なさげやけど、つて在学生しかおらんの？」

「卒業したらそのあとは知らん。俺かてみんなと会ったことないし、基本的に秘密主義やからね、あそこは。なあ上筒さん、」

「私は知らない」

とまあこんな感じで、会話が成立することなくバスは京都駅に到着した。

天照が本当にバスよりも早く着いてるのか少し不安だったけれど、そんな感情は無駄なようで、彼女は京都駅のバス停の前で息を切らず汗もかかず佇んでいた。

「上筒さん、先ほどは失礼しました。私が浅はかでした」と彼女は先輩に謝罪をし、一同はホームへと向かった。天照の言った「浅はか」というところが気にかかるけど、あいつも変な奴だしそこまで気にすることはないか。

電車内では三者三様を終始続け、終着駅へ向かう。

天照はリュックを前に背負い、少しでも開けたチャックに片手を入れてごそごそしている。知らない人からすれば、この人は何をそんなにごそごそして探してるんだろう、探しにくいならチャックを全て開ける。と思うだろうが、僕達には何をしているのかわかる。恐らくリュックの中にいる黒猫とじゃれているのだろう。

上筒先輩は何やらぼそぼそつぶやき続けている。気になって耳を澄ましてみると「節足動物、軟体動物、うーん……やはり空気圧が大切だ」なんのこっちゃ。

那実はというと、つり革にもたれかかりずっと眠ったままだ。よくそんなに揺れるのに眠られるな。少し感心してしまう。

そして1時間20分の静寂の中たどり着いた、最寄り駅。久しぶりに見た、見慣れた光景は少し僕の心を浮つかせた。さて、行くと

しようか。と公園の方へ足を踏み出した瞬間、肩に何かを担がされた。自分の荷物くらい自分で持てよ。僕は考えることなく、そうした奴の目を見た。こんなことをするのはこのメンバーでお前しかない。

「那実、ラケットくらい自分で持てよ」

「すまん、俺は特別ゲストを呼びに行ってくるわ。先行つについて特別ゲスト？ まああの機嫌よさそうな顔を見れば、誰だかわかるけどな。」

ゲストなんてどうでもいい、それよりこの気まずい空気をどうにかしてくれないか。

そして、どうすることも出来ず、一同は、足音だけを鳴らし、公園へと向かった。

もう溜息も出やしない。

その17 知らぬが薙

大仙公園は向かうというほど、駅からそれほど遠くはなく、徒歩5分程度の場所にある。

踏切を渡ると、公園に行くルートが二手に分かれている。そのまますぐ行つて1つ目の信号を左に曲がると、仁徳陵古墳を見て公園に行くことができ、踏み切り沿いの道を行けば、7分程度で駐車場から一番近い公園の入り口へ行くことができる。

どちらのルートがいいか一応先輩に尋ねてみたが、案の定無言。仕方なく天照に聞くと、「どちらでも変わらないでしょ？ 一応言っておくけれど、あたしは別に古墳なんて見に来たんじゃないから」駐車場のある入り口から行けばいいじゃないと、どうして素直にいけないのだろう。聞かないで自分で考えた方がよかったかもしれない。

時より横切る新幹線の風を感じながら、僕らは大仙公園へ向かった。

かれこれ何分間沈黙が続いているのだろう、そんなこと気になつても仕方のないことだけれど、あまりに誰も話さないで僕から話題を振ろうと試みる。けれど、残念ながら、言葉が見つからない。僕は小さい頃からずっと聞き役で、話し役ではなかった。なので突っ込むことに対しては人並み以上に出来ると思っっているけれど、いざ、ボケとなるとそれは3級品どころから5級品あればいいところだろう。

たまには話し役もするんだった。と過去の自分を責める僕に、やっと思みとなるであろう携帯電話の着信音が鳴った。公園の入り口は目の前だ。

「はい、薙ですけど、もう着いた？」通知者表示は「崎野心花」。この人が来なければ僕はこのピクニックに参加してなかっただろう、これは絶対だ。

「薙くんですか？ コノ力達はこつちですよ」って言われても、場所を言ってくれなきゃわからないだろう。相変わらずの天然さんだ。

「すみません崎野さん、『こつち』って言われても場所言ってもらわなわからんよ」

「あつ、そか、ごめんなあ。あはははっ。えつと…多分右かな？ 手振ってるからわかると思うでえ」

なんだか雰囲気グピクニツクぽくなってきたな。やっぱりあちらと向こうでは華やかさが違う。まさに陰と陽だよ。

「えーつと右…」
いた。

小さな体を精一杯伸ばし、そして手を左右に大きく振る少女の姿が見えた。その横に女性の姿も見えるので、多分それが沖田先生だろう。僕は見つけたという合図を込め手を振る。

僕らはその微笑みのある方へ歩み寄った。

「なー君はどこいったん？」と崎野さんは落ち着きなく周りをキョロキョロしながら言う。恐らく彼女は初めてこの公園に来たのだろう、けどそんなに珍しいのかな？

「那実？ あいつは特別ゲストを呼びに言ったで」

「ええ？ 誰やろちよつと楽しみ。もしかしてなー君の彼女さんかな？」

意外と鋭いな。ポケットとした雰囲気だから、そういう感も鈍いと思ってたけど。

「そうでしょうね、そのときは仲良くしてあげてください」

「何をそんなま改まってるん？ 当たり前やん、コノ力はまだ高校生やで」

そういうことに高校生も小学生もないだろうに。まあこの人に関してはそれほど不安は感じないけれど、問題は天照だ。こいつは何をするのか分かったもんじゃない。

「ところで薙くん。ここは遊べる場所はないのかな」

そういうのは、1本ねじの外れた天真爛漫、容姿端麗、沖田先生だ。20代だと何をして遊ぶと楽しいのだろう？

「バドミントンやったらできますけど」そう言って僕は、ラケットを振る。

「あたしは場所を聞いているの」

「そっか、ほな子供が遊ぶ遊具ならありますけど」

「観覧車とかそういうのはないの？」

何を言ってるんだろう？ 公園と遊園地を勘違いしてるんじゃないか、この人は。

「先生、ここは公園やで？ そんな機械仕掛けな物、置いてませんよ」

「そうなの？ つまんない」子供のように、転がる石を蹴ってそう言った。

どうやら機嫌を損ねてしまったようだ、その年になって拗ねるなよ。

僕は仕方なく沖田先生が楽しめそうなの提案をした。何度も行き、そして何もない所の代名詞とでも言おうか。

「仁徳陵古墳に行くってのはどうですか？ 今10時過ぎやし、ゆっくり行つて戻ってくればちょうどお昼くらいですよ」

「あ、そうか、古墳あるんだよね仁徳の！」仁徳って、あんたの友達か？ 仮にも天皇やで。

「そうですよ、世界三大古墳ですよ。どうします？」

「もちろん行くわ！ みんな拒否は許さないよお」

そう言つと、沖田先生は誰の意見を聞くことなく歩いていった。

まあこのメンバーで反論する奴なんていないか。

「なあ、薙くん。その古墳で確かめっちゃ大きかったでなあ」と崎野さんが上目使いで言うもんだから少し頬を赤らめてしまった。

いつも思ふけど、何故女性の上目使いには心を揺さぶるものを持つてるんだろう。もしもそれが男性だったなら明らかに威嚇しているとしたか取れないのに、性別によってこれだけ変わるんだから、性

別つて不思議だ。なんてこと考えてないで早く答えないと。

「大きいって言うか、でかすぎて何が何かわからんくらい」

「へえー。すごいなあ昔の人って」彼女はそう言うとおごに右手を添えて考えるそぶりを見せた。

一体何を考えてるんだろう？ 古墳の作り方かな？ それとも大きく作った理由かな？ まあどちらにしろ僕の脳内にインプットされてないから答えることは出来ないけど。

「2人ともベチャついてないで早く！ てか薙くん！ あなたがいないと場所、わからないんだから早く来なさいよ」といつものおっとりした雰囲気忘れさせる怒号で、沖田先生は僕らを呼ぶ。思わずビクついて駆け出してしまった。

走りながら崎野さんは冗談を言うように言った。少し唇を尖らせるフリをして。

「薫先生って自分の好きなことだと何フリかまわないよね」

「本当。自分勝手な大人だよ」

「でも、コノ力。ああいう人に憧れるな」それは少し分かる気がした。

前列に左から崎野さん、僕、沖田先生と歩き。その後ろに自由気ままに天照さんと先輩が続く。ついでに黒猫も。

後ろの2人と1匹は知らない間に消え、知らない間に戻ってきたり、幼稚園児のようによくわからない行動を繰り返していた。忙しないのでここに来たときと同じように黙って着いてきて欲しいんだけど。けれどそれを言うと天照がどうせやかましいので、言葉をガムのように飲み込む。

仁徳陵古墳へ出発してから5分程度過ぎた頃、久方ぶりに天照が声をかけてきた。

「古墳を見に行くのはいいいけれど、アイツはどうするの？ きちんと連絡した？」

そうだった。特別ゲストを呼びに行った僕の兄弟、先輩的に言う「アメーバー」。そのことをすっかり忘れていた。アイツはこういう

ことにはうるさいってのに、いざという時に僕の脳内は小休憩を入れるものだから困ったものだ。と自分の脳に責任転嫁しても意味があるまい。仕方なく僕は、携帯を取り出し生涯でもっとも話してであろう人物にダイヤルする。

「おう、薙か。もうちよつとで着くから。今どこにおるん？」いかにも元氣ハツラツな声で那実は電話に出た。

久しぶりに彼女と会うから機嫌がいいのだろう。しかし、それを少しでも損ねてしまうとこいつの場合どうなるか分かったものじゃない。

「そのことなんやけど、沖田先生が仁徳の古墳見たいって言うから。そっち向かってるねんけど」僕は、またしても怒号を聞くことになるだろうと決意して言った。

「一分一秒でも惜しいのにどこ行つてんねん！ あんな森行つてもしかあないやろ！ とめらんかいアホ！ はよ引き戻せ」

と聞こえたのはあくまで妄想であつて、実際は、「そうなん？ ほなしゃあないな。俺と香美は適当に暇潰すから、森林探索楽しんできて。公園に戻ってきたら電話くれよ」と軽快に電話を切った。

「あとから連絡頂戴つてさ」と業務連絡のように伝えた。

「そう。ありがとう。」無愛想にそう言つて天照はすぐ側を歩く黒猫を抱いた。

もうこいつの無愛想なところにもなれてきたので、いちいちイライラすることはなくなつたけれど、やっぱり少しだけ腹が立つ。

どうすれば天照に嫌がらせを出来るだろうと考えてると、今度は沖田先生が話しかけてきた。と言うよりは、延々と独り言のように古墳の説明を始めた。

「仁徳陵古墳に行く前に知識を与えてあげるわ。これも勉強のひとつよ、心して聞くように」

初めだけでも聞いているフリをしようかな。

「仁徳陵古墳に眠っている仁徳天皇は古事記と日本書紀で第16代天皇と伝えられて、本名は大雀^{オオササキ}って言うの。仁徳天皇と言うのは

8世紀頃につけられた、死語に送る称号だから本当の名前じゃないの。そこは重要よ」

それほど重要とは思えないけど。ていうかその説明要るか？

「この人すごく長生きさんで、古事記じゃ83歳で亡くなってるよ。かれていて、他の説じゃ143歳まで生きてたって言われてるのよ。どちらにしろ当時じゃありえないくらい長生きよね。」

それに彼は天皇としても立派に仕事をして、一般の民にも色んな良いことをしたから、ヒシリノミカド聖帝ヒシリノミカドって称えられて、理想的な天皇って言われてるの。そんなすごい人の古墳なのよ。覚悟して拝みなさい！」
長い長いセリフの結論はしっかり見なさいってことか。律儀に聞いてしまったのはどうやら僕だけらしく、天照は黒猫と戯れ、先輩はまた失踪。崎野さんは遠くを見つめながら目を輝かせている。一体どうしたんだ？

「ちよつと聞いているの？ コノつち」さすがの沖田先生も彼女の異常に気付いたらしい。

「聞いてたよちゃんと、仁徳天皇ってすごいね」と、どんな質問にも当てはまるような答えを崎野さんは言った。見た目よりも彼女はしたたかな様だ。

「そんなことより先生、もしかしてあの森つちいのが仁徳さんのお墓？」

「え！？ どこどこ？」首を縦横無尽に振り、辺りを見渡す沖田先生。そんなに首を動かして筋肉痛になっても知らないよ。

僕はこのままだや明日筋肉痛で首が動かなくなる沖田先生の首を守るため、古墳の方向を指差した。

「あれやで沖田先生。木がいっぱいある」

そうすると「キャー！！」と発狂しながら、手を回して仁徳陵古墳へ走っていった。どうやらとうとう脳内の興奮メーターを振り切ったらしい。

僕らは彼女に慌てて着いて行くこともなく、のんびり向かった。もう先生に付き合うのも疲れた。それは満場一致だろう。

森としか捉えられない程大きな仁徳陵古墳。なぜ昔の人間はあんなにも大きな墓を作ったのだろう。権力の大きさを示す為だとは言うけれど、それにしても少しやりすぎやしないだろうか？　きつとこれを作る為に何人もの命が失われたのだろう。そう思うと尊くて仕方がない。

「力があるものが力を示す。そのどこがいけないと言うの」

「いや、別に悪いとは言わないけれど、やりすぎじゃないかなと思うだけだから」この女の沸点はどこにあるのかさっぱりわからない。

「弱肉強食よ」

「確かに天照さんの言うとおりだけど。ねえ先輩、先輩なら僕の方で言うこと少しは理解してくれますよね」知らない間に戻ってきた先輩に、僕はしばらく会話をしてないことを気遣い少し強引に話を振った。

しかし「平和」と、これまた無表情で言う上筒先輩。

この人の言動にいちいち脳内を働かせていると、いくらカロリーがあっても足りやしないので、僕は、「そうですね」と適当に相槌を入れる。今日で「そうですね」は何回目だろう？　彼と話すたびにその言葉を口に出している気がする。つまり話しても無駄ということだ。

「本当に大きい。ちよつと予想以上やわ」

やっと普通に会話できる人間が口を開いてくれた。仁徳陵古墳を30秒ほど見つめながら口を意味もなく開かせて、無駄に目を輝かせていた彼女がまともと言えるかわからないけれど。

「ありえへんやろ？　中学の頃はようこの周り走らされたわ」

「へえ、なんかロマンチック」

果たしてそれがどのような『非現実的で甘い美しさ』なのかは地元民にはわからない。というよりそれをロマンチックと感じるのは崎野さんだけかもしれない。

超巨大古墳へ走り去った沖田先生を追うのではなく待つことにし

た僕らは、自然の成り行きでそれぞれ時間を潰すことにした。

僕と崎野さんは、バドミントンを。天照と黒猫はベンチに座りじやれ合い、先輩はずっと空を眺めている。もう彼のことは深く考えないことにしよう。

崎野さんは見かけによらず、なかなか運動が出来るようで、どれをとっても平均的にスポーツをこなす僕と同等の動きを見せた。女子の方じゃ明らかに上手な方だろう。

戯れも束の間。先生は5分もしないうちに戻って来た。腕を組み頬を膨らませながら。

「何あの大きさ？ 信じられないわ。もうお腹空いたからお昼にしましょ、少し早いけど」

完全無欠な気分屋発言をし、沖田先生は先頭を切って広場へ歩き出した。

僕は当然のように着いて行き、それと同じように、携帯を手にする。

「那実やけど、もう古墳巡り終わった？」

「そうやな、沖田先生腹減ったみたい」

「そうなんや。ほな今から向かうわ。場所はカラス広場でいい？」
カラス広場は本来、大芝生広場と言う名前だけれど、あまりにカラスが沢山いる広場なので、僕らの間ではカラス広場と呼ばれている。芝生が広がっていて、昼ごはんを食べるにはうってつけな場所である。カラスがいることを除けば。

「ええよ」しかしカラスのいない場所などこの公園にないと言っても過言じゃないくらいたくさんいるので、そのことは反対の理由に含めないのが当然OKだ。

僕は久しぶりに会う香美ちゃんを想像した。

高校に入ること何かしら彼女は変わったかもしれない。それは化粧の濃さであったりファッションであったり髪型であったり。それが間違った方向に進んでいないだろうか？ 彼女の誇るべき清潔さはまだ健在なのか、なんて答えのないことを考えながら、カラス

広場へ向かった。

しかし変わってしまったのは香美ちゃんではなく僕の方だとこのときは気付かなかった。僕らというほうが正しいだろう。

そう、僕らは超能力者なんだ。

その18 天照も気を抜けば唐に当たる

カラス広場には見知れた男女が向かい合い笑っていた。僕らが来たことにも気付かず。それは幸せそうに、心を満たすような微笑ましい光景であった。にじみ出るような仲のよさだ。この2人に遠距離だとか中距離だとかそういうことは関係ないのだろう。そんな非現実的なことを現実に思わせてくれるのがこの2人。

伊佐那実、横前香美。

2人は本当に仲が良い。それは付き合いだしてからずっとだ。

那実と香美が付き合い始めたのは中学2年生の頃。

恋愛に対して幼い考え持つ僕は、一体中学生同士の恋愛にどのような必要性があるのだろうと、悩み倒していた。しかしこの2人の醸し出す幸福感はそんな僕の悩みをうやむやにさせるくらい奇跡的なものだった。そりや喧嘩だって、しただろう。いや、しょっちゅうだった気もする。那実の機嫌がすこぶる良いときはほとんど香美ちゃんと喧嘩中という合図だった。少し変わっているが、那実とはそういう男なのである。どこかで幸せと不幸を零にしないといけない性分というかトラウマに近いものがあり、機嫌がいい日は携帯の着信音は鳴らず、また今にも八つ当たりしてくるのではないだろうかという目をしている時ほど、携帯の着信音は頻繁に鳴るのだ。

そのことを考えると香美ちゃんと付き合いからの約3年は、いい日が5割、悪い日が2割、残りの3割は普通つてとこだ。

2人はどれだけ喧嘩の数を重ねても別れることはなかった。

いつか忘れたけど、あんまりにも機嫌のいい日が続いたので僕は那実に、そんなに喧嘩するのなら別れればいいじゃないか、と無責任なことを言ったことがあった。

すると那実は、「嫌いだから喧嘩をするなんて、お前はバカか？」と呆れ顔で言った。

今思うとあのときの僕は本当にバカだったと自伝にも書いていい

くらい今は認めている。

なので僕は恋愛対象外ってわけだ。この場合は、恋愛が僕を拒絶するという意味だけだ。

そんなどうでもいい思ひ出はこいつらの結婚式の祝辞まで置いて、久々に合う香美ちゃんに挨拶と、変人達の紹介をしないとな。

「久しぶり香美ちゃん。元気してた？」

「もちろん！ そっちこそ元気そうやな」とニマァと笑う彼女。

オレンジのキャミソールにハーフのジーンズを履いて、薄めの化粧の彼女は、どうやら見た目は中学卒業後とそれほど変わらない様に見えた。もう少しくらい変わっていてもいいだろうと思う反面、ほっとしたのも事実。変化したのは艶のいい黒髪が肩辺りまで伸びたくらいだ。

香美ちゃんは左手を変人どもに向け、「その人たちが学校の友達？ 那実の彼女です、ってこんなこと言うのも恥ずかしいな。どうもよろしく」と浅く頭を下げた。

「紹介するわ。この人が崎野心花さん」そう言って、すぐ斜め後ろにいる彼女を右手で示す。

「よろしく。これまた可愛い人やな、ちょっと驚いたわ、へへ。今日一日よろしくね。というか仲良うしてなあ」崎野さんは右手を差し出し、それに香美も答えるように左手で右手を握り、「そうやね、よろしく」と、愛嬌よく答えた。

「そんで、この黒猫と戯れてるのが天照沙希さん、そしてその横が上筒先輩、そんであのお姉さんが歴史を担当してる沖田先生」と崎野さんの紹介より簡潔に行ったことをわざわざ説明する必要があるだろうか？ 答えは否だ。

「今日はよろしく願います」

そう言ったのは香美ちゃんではなく、意外な人物、天照だ。

先ほどまでローテンションガールっぷりを発揮していたのに、今では気持ちのいいくらい笑顔で香美ちゃんを見つめている。一体どうということだ？ さっきまでの仏頂面はどこいったんだ？ お前

の表情はそれじゃないだろ、はやくのつぺらぼうの面を被れつての。でも空気が和やかになることを、僕はガリガリ君が当たるくらいには望んでいたことだし、意外や意外だけど、取り越し苦労だったというなら、そんな苦労は昼食前に無くせてよかったよ。

でもなんでだろう、天照は那実のことを相当嫌っているはずだ。それならその彼女のことも嫌うだろう。なんて考えは安直過ぎたかさすがにそんな精神年齢の低い高校生はいないよな。

「今日は保護者としてきたけれど、堅いことは言わないわ、お酒でも何でも飲んじやいなさい、つてな感じの先生だけどよろしくねえーつと……、ごめん何ちゃんだっけ？」

さつき自己紹介されたのにもう忘れたのか？ それとも聞いてなかったのだろうか。ねじの一本外れた人間の考えてることが僕にはわからないので、この二択じゃないかもしれない。

「面白い方ですね、初めまして香美と呼んで下さい、沖田先生」
そう微笑みながら返す香美ちゃんは人として出来てるなと改めて感じさせる。

「ごつめんねえ、名前忘れちゃって。良い名前だね香美ちゃん、よろしくねえ」

良い名前なら忘れるなよ。少しくらい香美ちゃんのこと見覚え、どの部分でもいいから。

「ところでもうあたしお腹空きまくりなの、香美ちゃん？ ちょっと早いけどお昼にしない」

「ええ、いいですよ。けど他のみんなは」

「もう許可はもらってるの。さあ食べましょう！ 薙くんブルーシート」

はっ！ 殿。てな感じで右手に持っていたブルーシートを広げた。そのブルーシートは文字通り青く、かわいいモンスターやうさぎや猫、犬など描かれてはいない。いわゆる安物だ。

けれどそのブルーシートは安かったわりに大きく、今いる7人ちようど座れるくらいだ。もちろん弁当を真ん中に広げた場合。

「ナイスシートだね薙くん！」

「いや沖田先生、それ選んだの那実です」

「そう？ どっちでもいいや。グッジョブ！」と親指を突きたてナイスガйнаポーズをとった。

僕的には猫なで声で一言「うれしい」とかなんやら可愛く言ってくれる方がよかったりするのだけど、そんな器用さを持ち合わせていないのが沖田薫。そこがよかったりする。

「はい、たーんとお食べ」とさっきまで僕が背負っていたリュックから、崎野さんはノートパソコンサイズのお弁当を2つ取り出した。これが遅刻するほどの力作か。少し、いや大分楽しみだ。

ふたを開けると、一つ目のお弁当箱にはおにぎりがビシッと敷き詰められていて、もうひとつにウインナーやら玉子焼き、ミートボール。日本人が選ぶ弁当のおかずランキングがあるとするならば、1位から10位までを引き抜いた。というくらいありふれたおかずだった。

現在の風習で個性的なものが、意味もなく評価される場合があるけれど弁当は別だ。そこに意外性は一切不要なのだ。もしも白身のフライの変わりに鯛の御頭焼きが弁当に詰められていたらどうする？ プチトマトではなく普通のトマトが丸ごと入っていればどうする？ ゆで卵ではなく生卵が入っているとどうなる？

どうもしない。ただ周りの人間から家庭事情について不信に思われ、そして笑いものになるかあるいは引かれるかどちらかだ。

なので世界で弁当ほど普通を愛される代物はないだろう。

そういう考えの持ち主なので、ついつい言葉に出てしまった。

「ここまで完璧なお弁当は久しぶりに見たで」

「えへへ、そうかな？ そこまで言われると作りがいあるわあ。ありがとお」

少し褒めすぎたかな？ 崎野さんは真っ赤な顔で満面の笑みを向けた。

「沖田先生と共同作業？」

僕が崎野さんに尋ねると、崎野さんは沖田先生と顔を見合わせて、「それは言われへん」と悪戯な笑みで2人は僕を見つめた。

その言葉の意味を考えてみるが、想像がつかない。この弁当に何か裏があるのだろうか。弁当に裏？ そんなの存在するわけがない。毒味かもしれない、けど2人が作ったのならそんな必要はないだろう。もうよそう、そんなことを考えながら食事を行うと八百万の神に罰を与えられそうだしな。

僕らはそれぞれ、適当に弁当を囲んで座った。

僕から時計回りで、崎野さん、上筒先輩、那実、沖田先生、香美ちゃん、黒猫、天照。あ、黒猫は余計だったかな？

俺以外は何故恋人同士的那実と香美ちゃんは隣り合って座らないのだろうと、ちょっと疑問に思っただろう。普通に考えれば、恋人ならそうするだろう。いや、そうしないと2人は喧嘩、又はそれに近い状態ではないだろうかと考えてしまう。しかし、この2人にはその事柄が当てはまらない。2人は普通ではないのだ。2人で遊ぶときはその世界を大事にし、第三者の侵入を許さないけれど、多数で遊ぶ場合は、その世界を壊し、那実と香美ちゃんは友達同士に戻る。それがポリシーのらしい。理由は聞いたことないけれど。

崎野さんがお箸と皿を配り終え、「いただきます」

その直後、一番早く弁当に箸を付けたのはこれまた意外な人だった。結構な勢いで口の中にウインナーやら玉子焼きやら何やら放り込んでいる。

僕は崎野さんに出来る限り小さな声で訊いた。

「先輩って食に執着する人なん？」

「えっ!？」

僕の声が小さすぎたようだ、それにカラスの声のお陰で聞き取りにくいようだ。

「先輩ってよく食べる人なん？」

「声小さいよ雑くん。もっかい、言って」と、崎野さんが普通の声量で言うもんだからみんな僕の方を見てしまった。崎野さんには

空気を読む能力が欠けているのかも知れない。

すると、隣からボソツと、「いつもはそんなんじゃないわ。ゆっくり食べる人よ」と天照が答えてくれた。続けて、「それに崎野心花が知っているはずないわ。彼女はまだ関わりが浅いから」

「関わり？ 何の？」

僕がそう言つと、天照は上から覗き込むような視線で睨んできた。何か悪いこといったか僕？

「呆れるわ」

そう言つと天照はおにぎりを手に取つた。

何が呆れるんだろう？ 崎野さんが何かとの関わりが浅いことを、僕が知らないことで何で天照に呆れられなきゃいけないんだ。まあいいや。

僕はお弁当箱の中で一番大きなおにぎりを手に取る。

やつぱり米がなきゃ食事は始まらない。米を食べなきゃ食事をした気にならないしな。

僕は勢いよくかぶりついた。

「ガリ」

何か米粒とは違う感触が歯に響いた、その瞬間、口の中全体に嫌な辛味が広がった。

「誰や、おにぎりの中に唐辛子入れたの」

恐らく僕は涙目だろう、そして汗もかいてるだろう、顔も真っ赤だろう、そんな気がする。

すると

「あつたりい、コノつち。どうやらあたしが先抜けだよ」と沖田先生は大笑いしながら言つた。

やられたか。たちの悪い悪戯だ。

「早く飲み物、飲み物は無い？」

「あれー、どうやら飲み物は忘れちゃったみたいだよ」と明らかに探すフリをしてわざとらしく言つた。

このクソ教師め、その年になってこんな幼稚な悪戯するか？

僕は呆れて物も言えず、（というか辛さで舌が回らないから何も言えないんだけど）振り向き様に靴を履きダッシュでトイレに行くことにした。あそこなら水がある。

「いつてらっしゃーい」

後ろに目が付いているわけがないので沖田先生の顔は見えないけど、恐らくものすごく輝いた笑顔で見つめているだろう、そして周りは状況を読み込めずポカンとしているはずだ。

「あなたもなの？ バツカねえ、いつてらっしゃーい」という沖田先生の声が聞こえた。すごく上機嫌な声だ。きつともう1人僕と同じ目に遭ったのだろう。

そんな気の毒な奴を確認する為に後ろを向くと、

天照だ。

これは意外、あいつもキャラに合わないことをするもんだ。

「早く行きなさい！ もう追いつくわよ」

必死の形相でもものすごいスピードを出し僕の方へ走ってくる。

慌てて僕もギアをフルに入れなおす、が、ものの数秒で追い抜かれた。

「走りながら道案内して、あたし道わからないから」

どうやら僕を待つほどの余裕はないらしい。

「そこまっすぐ行って左行ったらあるから」

天照はさらにスピードを上げてトイレに向かって行った。もちろん僕も。

この公園にあるトイレは比較的キレイなので、口をゆすぐことにそれほど抵抗は感じなかった。というか、清潔かどうか選ぶ余裕なんてなかったけど。

口の中に水道水を放り込み、音を立てながら水を混ぜる。吐く。その行為を10回ほど繰り返すと、やっと舌の痛みが和らいできた。戻ったらなんて言ってやろう？ 怒ったフリをするのもいいかな？ それともジューズでもおごってもらおうか慰謝料として。

そんなことを考えながらトイレから出ると、頬に水滴が落ちてき

た。
「雨や」

その19 香美は思案の外

「何が、『雨だ』よ。口ゆすぐだけなのに時間かかりすぎよ」

そんな2、3分程度のことで怒ることでもないだろう。お前は知らないだろうけど、俺はすごく辛さに弱いんだよ。一味唐辛子なんて調味料を食卓で利用したことがないくらいにな。辛さだけでなく、そういう刺激物的なものは全てダメなんだよ、からしやわさびも。レモンは好きだけど。

なんて僕の好みなど、天照にとって乾燥注意報並にどうでもいいことだってことはわかりきってるので、その言葉を脳内で留めた。ついでに謝っておこう。

「ごめんやで、ほんま舌、やばかって」僕はその「やばさ」を少しでも伝えようと、舌を出した。

「見てわかるわけじゃないじゃない」少しくらい舌がどうなってるか見てくれてもいいだろう？ 見向きもしないでそっぽを向くとはなんて冷たい奴だ。「どうでもいいから早く行くわよ。みんな帰る用意してるだろうし」

本当、冷たい奴。

天照があせる理由はよくわかる。だんだん雨足を強め、さっきまでのピクニック日和とは打って変って天気は早変りした。

山の天気ならまだしも、こんな平地で天気がすぐ変わるなんて、さすが五月雨だ。

「五月雨はそんな意味じゃないわよ」と、的確なツッコミを受ける僕とした天照は、突然の雨に打たれ必死に片づけをしているであろう、安いブルーシートの元へ急いだ。

そういえば、ひとつ気になることがある。恐らくさっきから心をもややませていたのはこのことだろう。

彼は普段とは違い（らしい）、必死になって、おにぎりやらウイナーを口の中に放り込んでいた。

もしかすると、「上筒先輩は、雨振るって知ってたんかな？」

「……………」

無視かよ！

「あたしに言ってたの？ 独り言かと思ったわ」

「独り言だと声がでかすぎるだろ」

なんて突っ込みを見事にスルーして天照は、

「あいつの能力はそんなじゃないわ」とぼやいた。

「能力？ 能力って何？」

「あんたって本当にアホなの？」

「質問を質問で返すなんて、会話の基本を知らないのかお前は」
軽蔑するような目で僕を見つめ、しばらく時間をおき「超能力」
と言って溜息をついた。

超能力。

超能力。

…………… そうだ、僕は超能力者だった。

あまりにも今日が普通の日常過ぎて、そういうことを忘れていた。
僕の3級品以下の思い出で、唯一希少価値のあることを忘れるなんて、僕もどうかしていた。そりゃ関東人に「アホ」なんて言われるよ。

けど僕はイマイチ自分の能力を実感した覚えがない。スプーン曲げとか、ああいう判り易いのなら僕も自覚できるだろうけど、そういう能力じゃないしな。といってもスプーン曲げは超能力ではなく、力学を上手に利用した科学マジックということを現在では小学生でも知ってることで、約16年生きてきて、スプーン曲げをリアルに超能力だなんて認識している人間と出会った事がない。そんなことを言うと、世界的に有名なポケットのモンスターの名前とよく似た人に訴えられるかもしれないけど。

なんて失礼なことを考えている僕はありえない光景を目にした。
片付けをしているであろう那実達は僕と天照の予想に反し、口の中をもごもごさせていた。

僕はこんな体を張ったボケをしているのだから、精魂込めた突込みをしないと失礼だと思い、全身全霊で突っ込んだ。

「何で、食ってんねん、雨降ってるやん！」

僕の声は広場に響いた。が彼らに聞こえなかったようで、僕を一瞥すると、雨に濡れた弁当に向かい、箸をいつもの2倍速で動かした。

天照は僕の肩を軽く2回叩いて、

「あなたは出来る限りのことを尽くしたわ」と言った。

天照よ、その言葉はもつと先に取っておいた方がいいと思うんだけど。

結局僕の力では手に負えないと思い、天照に助けを求めようと目をやるが、そこに彼女はいない。この一瞬でどこ行っただと、思い、ふと弁当の方へ目をやると……。

僕は一瞬目を疑った、けれど何度見てもその光景は変わらない。

香美ちゃんが玉子焼きを口に含みながら「ないうんもほあ、ほいしいいで。すてたらもつたいないある？」

そんな幸せそうな顔をして言われると行儀が悪いなんて言えないじゃないか。

天照も食ってないで何か言っちゃれ、というと思ったが、この集団で一番、箸と口を動かしてるのがこいつなのでこいつにも言えない。

「ね、おいしいでしょ天照さん？」

「おいしいわすつごく」

嘘つくなバカヤロウ、そんなびしょ濡れのおにぎりやウインナーがおいしい訳ないだろう？ 一体どうしたんだ？ いつものお前なら「こんな雨なのにノホホンと食ってないで早く片付けなさい」とか言っつて、ブルーシートを引っかくはずだろう？ 何を一緒になつて食ってんだ？ しかもおいしいだつて？ ……おいしいのか？

呆然と立ち尽くすこと早2分。脅威のスピードで弁当を食べ終えたバカ共は、すばやく片付けを済まし、ブルーシートを傘代わりに

して、その場を後にした。

薄暗い空。音を吸い込む雨。染み付く泥。それらは憩いの場で公園を不気味なものに変える。それよりも不気味なのは、ブルーシートを獅子舞のように覆いながら全力疾走する僕らなんだろうけれど。雨のお陰といっってはなんだけど、行きは5分以上かかった駅までの道のりも、帰りは2分程度で着いた。周囲の視線が痛かったけれど。お世話になったブルーシートはそのままゴミ箱へ。

羞恥心をありがとう。

香美ちゃんは駅のホームまで見送ってくれた。

まあ思いの8割は那実に向けてなんだろうけど。それは嫉妬することもない。

電車に乗り込む那実を見つめて、香美ちゃんは今にも泣き出しそうだった。僕らの前では明るく振舞っていたけれど、本当はずっと悲しい思いをしていたのだろう。それは那実と離れる寂しさなのか、正直に泣けない自分の心を嘆いた思いかどうかわからないけれど、胸を引き裂くような想いとはこのことを言うのだろう。恋愛経験値の低い僕にはよくわからないけれど。

ホームに響く電車の発進音、そして駅員の声。別れは目前だ。

なんだか、3月のことを思い出し、僕まで泣きそうになった。誰とも別れるわけではないのに。変なの。

発車まで残り10秒ほどだろう、いよいよさよならという場面で、香美ちゃんの目から雫が流れた、それは雨ではないかと思うくらい自然に。

思わず香美ちゃんはドアのギリギリまで近づき、「抱きしめて」という目で恋人を見つめる。もちろん彼もそれに答えるように近づく。

「今日で最後なのに」とささやく声が聞こえた。

その瞬間、僕の背中から鳥肌が一瞬で広がり、邪魔だといわんばかりに押し出された。

想像しえなかった。

彼女は那実の首に手をかけ、華麗に唇を奪った。那実は微動だにしない。

彼女とは香美ちゃんのことではない。

天照だ。

天照は口付けを終えると香美ちゃんに向かって、

「残念だけどあなたは前の女なの、これでわかったでしょ」

閉じるドア。

立ち尽くす横前香美。

誇らしげな天照沙希。

どうしてお前なんだ？ このまま那実と香美ちゃんが抱き合つてドアが閉まれば、ベタではあるけれど、どう考えても幸せなラストシーンだったのに。どうして……。

僕は過ぎていく香美ちゃんを見つめて、もっとしっかり立っていれば押し退けられずこんなことにはならなかったのに。と、どうしようもないことを考えていた。

その20 心花が万事

今起こった出来事が気のせいならいいのに、ドッキリだったらいいのに、なんなら夢、妄想の類ならもつといい。なんて考えたところで、プラカードを持った芸人が出てくるわけがない。押されたときに残った、天照の手の温もりがしっかりと感触にあるので、そんなことは毛頭ない。なら残った選択肢は二つだけ。

昨日、天照と不良がケンカしたときに見た幻想、いわゆる自分の持つ超能力が危険を察知してその光景を見せたのか、あるいは現実か。

どちらも認めたくない事実だけれど。

でも、そんなことは考えなくても僕には答えがわかっている。こんな余計なことを考えているのは、ただ、現実逃避をしたいだけなんだ。いつも現実には卑怯なくらい、思ったとおりに進んではくれない。

乗り遅れた電車、テストの日に限って遅刻、好きな人に恋人がいる事実、自分の才能がわからない苦悩、いざという時に発揮できない超能力。

最愛の人との間に授けなかった命。

その言葉が脳内に巡った瞬間、僕は正気に戻った。

ただ驚いた。自分の行動に。

右手と左手で天照の胸倉を掴んでいた。

どうやらこの状況を見ると、僕は無意識のうちに天照を殴りつけようとしていたらしい。

その行為だけみれば、自分の温厚な性格からすると驚愕な事実であるけれど、この自体の重さを感じれば別段驚くこともないだろう。むしろ必然だ。

今更後には戻れないので、僕は天照の体を両手で力いっぱい前後に揺らした。天照の表情は『無』意外何も無い。

「何でこんなことしたんや！」僕は結構冷静だった。後日談でこんなこと言っていると信じてくれる人は少ないだろうけど、ここまではそうだった。

表情を変えずに天照は答えた。

「仕方のないこと」そう。ただ、その一言が許せなかった。

僕は、彼女の胸倉を掴んだまま電車の端へ追い込み、閉じたドアに体を押し付け、右手を強く丸めた。

心の隅でこいつなら避けてくれるだろうとか、ガードしてくれるとか、あるいはカウンターなんて決めてくれるかもしれない。なんて奇妙な期待をしながら右手を振りかぶった。

しかし、僕の予想に反し、その右手は見事に天照の頬を打った。殴った。

その瞬間、彼女の頬の骨、柔らかい感触が手に響き、刹那に鈍い音が電車内を覆った。

どうやら僕の渾身の右ストレートは天照にヒットしたらしい。

でも本当に当たってしまったなんて思ってもなかった。多分みんなも驚いてるだろう、けれど僕が一番驚いていると自信を持って言える。ほら、情けないことに足が震えているし。

不良を三人まとめて退治する程の武術の腕前を持つこいつなら、僕のパンチをかわす事なんてバナナの皮を剥くくらい簡単だろう。けれどこいつはそれをしなかった。

天照は唾を吐くようにして口内に溜まった血を吐き出した。

「これで十分？ もっと殴りたいなら殴りなさい」

まだ言うかこの女。

僕は再度胸倉を掴もうと天照の側に寄ろうと右足を踏み出した瞬間、右後方からタックルしながら、腰を両手で押さえつけられた。

「やめて、もうやめてよ、二人とも！」

どうやら僕の暴拳を止めてくれたのは崎野さんのようだ。その声を聞くことで、やっと正気に戻れた。

「酷い色してる。薙くんもなーくんも沙希ちゃんも。だからもう

やめて」

そう言って崎野さんは両手で顔を覆いながらうずくまった。……色？

「この中で一番悲しい思いしてるの薙くんでもなーくんでもないの」

「天照さんが一番辛いつていうんか？」

僕が尋ねると崎野さんは涙を流しながらうなづく。

「なんでそんなことがわかるねん？」

誰がどう考えてもこの中では那実が一番心に傷を付けたって考えるだろう。だいたい天照は加害者だ、何故加害者の方が辛いんだ？いつも奈落の底に落とされるのは被害者の方であって、突然の不幸を起こす加害者が辛いはずはない。

「それは……あたしの……」

崎野さんが何か言いかけるのを遮るように沖田先生が、「こちら、こんなところで何をぶっちゃけようとしてるの？ 公共機関の中じやそういう話は禁止よ」

「大丈夫です、もう車内に人はいません」とテンポよく、そして久しぶりに上筒先輩が口を開いた。

「どうやら先ほどの騒動のお陰で少ない乗客が隣に移動してくれたようです。さあどうぞ、続きを」

上筒先輩はあくまで冷静に、そして冷徹な目で崎野さんを見つめた。

当然、両手で顔を覆っている崎野さんはそんな彼の目には気付かず、ただ、「ありがとうです」と。

「あたしの能力は……、人の心の色が見えるの。うれしい気持ち、悲しい気持ち、そういうのが色で表されるの。……どれだけ隠しても」

そんな超能力を聞いたことがない。テレポーションや千里眼、ハンドヒーリング、あるいは念力なんかはTVや漫画なんかで見たり聞いたことはあるけれど、人の感情を色で表す超能力なんて……。

「今、薙くんは灰色。沙希ちゃんのことを憎くて許せないみたい」
ビンゴだよ、崎野さん。でもそんなのこの状況を見れば誰だって
わかるだろう。

「なーくんは…こんな色初めてみたよ。でもわかる、うん。黒と
黄色が混ざった色。でも本当キレイに混ざってるの、ありえないけ
ど」

そりゃそうだよな、ありえない。白以外の色は黒が入ってしまう
と完全に混ざり合うことは無理だ。黒は全てを飲み込む。

「なーくんは、どこか諦めた感じ。これが正解やって無理やり思
い込もうとしてるけど」 「ホンマか？ 那実」

「コノカの能力を信じてないのはこの中でお前だけや」と虚ろな
目を向けた。

すごい。まるで占い師だ。

「沙希ちゃん…」

「や、やめて。言わないで」

と天照は崎野さんの心理診断を遮った。酷く怯えている様子だ。

「これはケジメなんだ」天照をかばうように、渋々那実はその言
葉を吐き出した。

「何がどうケジメなんだよ？」

「超能力に目覚めたら、組織に関わったら俺自身に危険が迫るこ
とは承知や」

そんなこと、僕は承知した覚えがないんだけど。

「でも危険は俺に親しい人にまで及ぶんや」

「なんで？」

「理由なんて要らんやろ？ それだけ危険やと思われてるんや、
俺たち超能力者は。平和の源を潰したいんやろ」

平和の源か。

そんな大それたものなのかな超能力って。

「だから天照沙希はああいっ行動をとったんや。俺が甘えてしま
ったんや。すまん天照沙希」

「なんでいいことしたのに誤られなくちゃいけないの？ 良いことしたのに、そういう時はありがとうございます。でしょ」

「ありがとうございます」

那実は丁寧な礼をした。

「言われてから言ったんじゃ意味ないわ、それにこいつの誤解を解くなんて行動しなくていいからね。ただあたしがあんたに好意を寄せてないってわかれればそれでいいんだから」

こいつって僕のことか。別に誤解なんて解かれたってお前への評価は変わらないけどな。

するとドアが開いた。って駅に着いたら開くに決まってるよな。

僕らは快速に乗り換えるためその駅で降りることにした。

マークの後ろに並ぶ僕らを尻目に、天照はスタスタと駅の改札の方向へ歩いていく。

僕は思わず上筒先輩に訊ねた。

「天照どこいくんですか？」

「この空気じゃ一緒にいると疲れるだろう？ だから私たちとは別で帰るんだよ」

確かにそうですけど、もしかして先輩も、「そうなんですか。って先輩もなぞなぞみたいに話さなくなりましたね。疲れました？」

「君があまりにも難しそうな顔をするからね。それにそんな状況じゃないだろ、今は」

なるほど、意外と常識をわきまえてるんだなこの人。たしかに那実は最愛の人と別れ、柄にもなく酷い落ち込みようだ。崎野さんもさつき能力を使ったのでお疲れのようだし、天照に限っては言うまでもない。まともに話せるのは上筒先輩と沖田先生か。ん？ 沖田

……先生？

「沖田先生って車で来たのに何で電車で帰ってるんですか？」

僕がそれに気付くと同時に沖田先生は駆け出し、

「本当だ、あたし車だったよね。やつちゃったよ。あとよろしくね上筒くん」

答えるように上筒先輩は左手を肘から上で振った。

そういうことだったのか。

何だか全てがキレイに廻っている気がする。

これから天照はきつと沖田先生の車に乗って帰るのだろう。

先輩のホームレスのフリ、天照が黒猫を連れて来た理由、遅刻した崎野さんと沖田先生、スペシャルゲストが香美ちゃん、合流時間が遅れると言って怒らなかつた那実、香美ちゃんと合流してから急変した天照の態度、崎野さんと沖田先生が車で帰らなかつた訳。そしてピクニックの場所が大仙公園だった理由。

つまり、僕だけが最初から知らされてなかつたのか、このこと。

何だか除者にされたみたいで嫌だけど、この集団ならいくらかその気持ちも和らぐ。

わからないことは、おにぎりに唐辛子が入ってたことくらいかな？

僕は何だか忘れている気がしてならなくて、胸をモヤモヤさせながら愛しき故郷へ別れを告げた。

理不尽な運命によって引き離された恋人。

僕はまだ他人事だった。例えば兄弟であつてもその辛さを知ることとは不可能だ、想像してみてもそれは所詮妄想と同じことであつて、現実の出来事には程遠い。

思いを巡らせるうちに、電車は京都駅に到着した。

上筒先輩は帰り間際に最後のひとことだと言つて呟き、微笑んだ。
「アメーバは時に失明させる危険性もあるのだよ」

その20 心花が万事（後書き）

第三章の終わりです。

もしよろしければ感想などいただければうれしいです。

その21 ウノゼロの狭間の三月美代（前書き）

第四章突入です。

以後よろしくおねがいします！

その21 ウノゼロの狭間の三月美代

五月蠅い。

うるさいという字はどうして五月に蠅と書くのだろう。五月に蠅が多いからか？ そんなこともないだろう、七月や八月の夏場の方がそういう害虫は多い気がする。

なんて考えても考え付かないことをまた考えてしまった。いや、考えは付くだろうが何よりも面倒だ、睡眠欲には勝てない。

鼓膜を微妙に響かせる音楽のお陰で、下らない事で脳を働かせてしまった。

僕は布団を頭まで深くかぶり、音を遮るようにした。

日曜日だったのに、誰だ？ こんな朝早くから、電話なんて。僕の携帯の目覚ましは十時に設定している。ちらつと掛け時計を覗いたけれどまだ七時過ぎだ。

昨日は色々あったからまだ眠っていたいのに……。

……………？

七時過ぎ？

僕は何か違和感を感じた。眠気の詰まった思考回路で。

確か昨日もこの時間に起きたよな？ 起きたというが無理やり起こされた気がする。どこに行くために休日なのにそんな早い時間に起こされたっけ？

……………。

そうだ、ピクニックだ。

こんなデジャブが起きるなんて、もしかすると、昨日のことは全て僕の超能力によって見た幻影だったことは考えられないだろうか？ つまりピクニックに行き、天照によって関係を悪くされた那実と香美ちゃん、それと僕が天照を殴ってしまったこと、あの最悪の出来事は夢、幻だったことだ。

きつとそうだ。あんな昼ドラチックな出来事が高校生という身分

で体験できるわけがない。いや、わけはあるだろうけど、身近にそういうことが起きるとは考えにくい。

よってその最悪を塗り替えるために今日があるんだ。だから昨日というか幻影の中じゃ、僕は先の出来事を見れなかったのだ。その世界自体が幻影だったんだから。それならすべて納得がいく。

僕は気を取り直して布団から身を起こし、昨日起こった出来事を思い出しながら行動することにした。あと少しで携帯を鳴らしても起きない僕を起こしにドアを叩くだろう。チャイムではなくドアを。僕は思い出しながらドアに近づく。

すると予想通り、けたたましいドアを叩く音が部屋と廊下に響いた。

「薙！ はよ起きれや。間に合わんぞ」

やっぱりな。僕は恐らくにやけていただろう、そして今まででも味わったことのない幸福感に浸っていただろう。

未来を予測でき、それを変換できるなんて最高じゃないか。タイムマシンなんて存在しなくても、僕は嫌な出来事を事前に察知し、その最悪に触れることで最悪を防げる。ということは僕の世の中に失敗なんて無くなるのだ。対策さえ立てれば、まるで答えを知っているテストを解くようなことだ。

僕は意気揚々とドアを開けた。

「よお那実、おはよう。今から用意するからちよい待っ……て？」

僕は直感的に、那実に可笑しい箇所を見つけたので、幻影と現在の那実の姿を照らし合わせた。

服装が違った、それにラケットを持っていない。

幻想ではジーンズに上着は白シャツとジャージ的なものを羽織っていたけれど、今日の那実の格好は、

「何で制服やねん」思わず突っ込んでしまった。

「当たり前やないか？ 学校行くんやぞ？」那実はわけがわからないという目で僕を見つた。

わけがわからないのは僕の方だ。これから大仙公園にピクニック

へ行くのだろう？　なら学校の制服なんて着る奴がどこにいる、お前は修学旅行生か？　確かにこの時期、世界三大古墳のある大仙公園にも、そういう生徒を見かけるけるかもしれないけれど、お前は修学旅行生じゃないんだから着る必要ないだろ。

ってこんなダラダラ長いツツコミをしていたら、『生涯突込』の烙印を押された僕の名が廃るのでの口に出して言わないけれど。ってこいつ何か余計なこと言わなかったか？

「どこ行くって？」

「学校」と言って僕を睨みつける。

学校？　ああ京都文化芸能高校だっけ？　なんか違うような気がするが、眠気眼の僕にはあの長い学校名を思い出せる気がしない、まあいいや京都文芸高に行くんだよな。

だから何で？

「何でもくそもない！　めんどくさい奴やな、ええからはよ用意せえ！」

朝から怒鳴り散らす那実のせいで、まだまぶたの重い鼓膜は悲鳴を上げた。この場合耳たぶが正解なのか？　そんな鼻で笑われるような冗談は頭の隅の隅の隅に置いて、僕は言われるがままに制服を着た。

どうやら未来は変わってしまったようだ、私服でバス停に行く予定だった幻想とは違い、現実には制服を着用して学校に行くらしい。でも何度考えても学校に行く理由が見つからない。

「どうして学校に行くん？　別にバス停でもええやんか」

「沖田先生と心花が待つてるからや」唇を尖らせながら那実は言った。

そういうことか。バスで行くのではなくて沖田先生の車で大仙公園まで行くんだな。なるほど、天照と先輩は後から来るというパターンでも十分こいつらの作戦に差し障りはないだろう。僕が着替え終わると同時に那実はドアを慌しく開き走っていった。騒がしい奴。僕は幻想で起きた出来事を頭に叩き込み、それに対する対処法を

必死に考えていた。そして、そのことよりも必死に足を動かさせていた。

那実が言うには、どうやらこのままだと遅刻らしい。

僕は息を切らしながら問う。

「何時に学校集合なん？」

那実は左手で汗を拭いながら、「七時四十分！ ええからはよ走れ」

那実はそう言うと、あきれたという顔で僕の顔を一瞥して、ペースをさらに上げ走っていった。眠気満載の僕の体ではとてもじゃないがそのスピードについていけないので、差はどんどん広がっていき、気づいたときには百メートルは離されていた。

今のところ、現実の方がよっぽど疲れる流れになっているな、このペースで僕は公園までたどり着けるだろうか。

僕は那実に追いつくことを諦め、体を冷やすため近くの自動販売機でスポーツドリンクを買うことにした。それだけの理由じゃないんだけどね。

自販機の前には文芸校の制服を着た女子が立っていた。セーラー服なので女で間違いないだろう、というか男だとしたら大問題だな。

朝日に反射して艶よく光るストレートな黒髪、そして後ろから見ても惚れ惚れするような体のライン。これはきつと美少女に違いない。これは一度顔を拝めておかないと、神様に失礼だ。という本能丸出しの理由だけど。

僕はまずセーラー服の襟元を見た。真っ青のラインが襟元を彩っている。

青色ということは二年生か。

こうやってうちの学校の生徒の学年を調べるときは、女子なら襟元のラインの色、男子は残念ながら制服で見分けることができず、名札の色で判断するしかない。ちなみに一年は白で二年は青、三年は緑だ。

ともあれ、こんな普段の通学時間よりも早く学校に来るなんてお疲れ様だ。クラブか何かだろうけど、休日なのにこんな朝から練習することもないだろう、つくづくクラブに入らなくて正解だったよ。まあ今はもつと厄介なものに肩入れしているけれど。

彼女は僕が買おうとしていた百二十円で五百ミリのスポーツドリックを購入した。

「あつー！」

僕は思わず声に出してしまった。不幸もいいところだ、タイミングよく彼女が購入した分で売り切れたようだ。ボタンのところにうつすらと赤く『うりきれ』とご丁寧にひらがなで光っている。

彼女はその声で僕の存在を気づいたらしく、ジュースをとろうと屈みながら僕の顔を見た。

矢を射抜くように目が合ってしまったので、思わず僕は視線を鼻辺りにそらす。

一瞬見たただだが、思った以上のビジュアルではないようだ、まあ平均を超えてはいるが、天照と比べると月とスッポン、は言いすぎだから、小惑星くらいだろうか？ まあ比べる相手が間違ってるか。

彼女はジュースを右手で持ち、僕の正面に立った。

僕は何を言われるんだろうかと少しドキドキしながら彼女の第一声を待つ。

彼女の大きな瞳が刹那に開き刹那に閉いた瞬間、僕の手にはジュースを握らせ、

「相当な汗ね、仕方ないから譲ってあげます」彼女は微笑んだ。

なんていい人なんだろう、僕は心の底から感謝を示し、それだけじゃ伝わらないのは百も承知なので、快活に、「ありがとうございます」

すると彼女は上品に手を口に当て笑いながら、思ってもいないことを言い放った。

「どうしたの、那実さんらしくもない」

「えっ!？」

「いつものあなたなら二カ一つと笑って、ありがとうつす、とか言って一気飲みしそうなのに」と嬉しそうに話す。

ありがとうつす、と言いなれていない言い方がなんとも可愛らしいことは置いとして、那実を知っている他学年の生徒ってことはもしかして、

超能力者？

「何当たり前なことを言ってるの？ おかしいわね」彼女は不安そうな表情で見つめた。

もうそろそろ『彼女』という表記にも飽きてきた、そろそろお名前を伺うことにしよう。

「どちらさまでしたっけ？」

すると彼女はあつけにとられたように目と口を大きく開けて、

「変な那実さんね？ 三月よ、私は三月美代^{ミツキカヨ}。この間まで覚えてらしたのに、本当に大丈夫ですか？」

どうやら現実と幻想は大きく違い、僕は新たなる超能力者であるう三月美代という女性と出会った。

今の僕はきつと右手に持った缶ジュースよりも汗をかいているだろう。大げさではなく。

その22 ノンフィクション（前書き）

2月21日に三月さんの設定を少し変えました。
21日以前に読まれた方は申し訳ないですが、もう一度確認してください。

その22 ノンフィクション

僕は考えた。

このまま、三月さんに自分は那実じゃないです、薙なんです。と伝えるかどうか。上手にいけば、彼女に恥をかかすこともなく、変な空気になることもなくその場を後にできる。

でも、嘘をついたところで、その先の先に何があるのだろうか。何もないうちに決まってる。

いつもこうやって嘘をついてごまかすのは僕の悪い癖だ。確かにその方が楽だろうけど、人は楽に流されるだろうけど、そういう当たり前はもうやめようかな？ 高校生になったきっかけとして。そしてこれが新生伊佐薙の第一声だ。精一杯作り笑いして言ってる。「僕は那実と違いますよ、薙です。名前も顔も紛らわしくてすいません」

僕は、彼女が当たり前のように驚いた顔をするのだろうと思ったけれど、実際は違った。

「那実さんが言っていたこととは違うみたいね」
へっ？ 僕は恥ずかしくも、おどけたような声を出してしまった。けれど決して本当におどけたわけではない、ただ彼女が感情表現するだろうことを、自分がしてしまっただけだ。

「何もそんなに驚くことはないのでは？ 薙さんのことは那実さんから伺ったことがありますよ、楽な方へ楽な方へ逃げたがる性格だ」と彼女は微笑を含めて言った。

さっきの新生伊佐薙の第一声は撤退だ。まさに正直者が馬鹿をみるだ。それにしても那実の奴、言ってくれるな。お前も人のこと言えないだろ、この学校の推薦だってほとんど即決だったじゃないか。それに三月美代さんだっ？ 初対面の人にそんなこと言うなんて感じ悪い人だ、愛想笑いもそこまでにしろよな。

「実際は違いましたね、本当に逃げる性格なら『どうも』で済ま

せてしまえばいいはずですから。薙さんは苦しみから逃げない良い心の持ち主です」手で口を押さえているけれど、わかる。今度は本当に笑った。

前言撤回。

三月美代さん、あなたは感じの良い人だ。いや、良すぎる人だ。

僕はあなたの期待に応えるため、これからも嘘をつかない人生を目指します。

「薙さんも今から学校へ？」

「ええ、何故だかそういうことになっちゃいました」

本当はバス停へ行って駅に直行して大仙公園というパターンだったのに。

「三月さんもこれから学校へ？」

「そうよ、人がせっかく総長の散歩を楽しんでいたのに呼び出されてしまったの」

そしてイレギュラーな登場人物。いったいあの幻想はどうなってるんだ？

結局先輩はジュースを買わないで自販機を後にした。

そして何も話さないまま学校についてしまった。

僕には他人に話題を提供する余裕なんてなかった。この現実が一体どうなっているのか、それだけで頭がいっぱいだったからだ。三月さんも微笑を浮かべたまま口を開かないし、どうやら口数の少ないおしとやかな性格のようだ。まあ雰囲気でなんとなくわかったけれど。

僕は校門をくぐった瞬間、大事なことを思い出した、いやそれほど大事でもないか。

さっきのジュース代を渡しそびれたこと。それと、

「三月さん、あなた僕を騙しましたね」

「騙す？」正面を向いたまま質問を返す。

「僕が那実じゃないってことに気づいてたのに、三月さんは気づ

かないフリしたじゃないですか」僕は百二十円を彼女に差し出す。

「あら、それはごめんなさい。気にしていたのね」彼女は小銭を僕の手のひらからとり、「それではこれが賠償金でいいかしら？」彼女は口を閉じながら笑い、僕の手のひらにもう一度置いた。

「そういうことなら、ありがたくいただきます」僕は百二十円を握り締めた。

あなたのその笑顔と込みならお釣りが出るくらいです。

なんてエセ二枚目のようなことは死んでも言えないので、心の中にとめておく。

そのやり取りを終えると、三月さんは少し表情を曇らせ零すように言った。

「でもせっかくの日曜に呼び出したなんて、あたし達についてないですね」

「そうですね」

そうですよ。

そうですか？

そうなの？

この場面では「えっ」と叫ぶべきなのだろうけど、生憎驚きすぎて声は出なかった。

さてはまた、騙そうとしているんだ、と彼女を疑い、僕は携帯電話で曜日を確認した。

「日曜日だ」

ということとは、昨日起こった最悪の出来事はすべてノンフィクションであり、実在する人物、その他団体とは一切関係あります、ってことか。

笑えないよ。

僕の超能力で見た幻影じゃなかったてことか。

「何が超能力なの？」

「い、いや、ただの独り言です」とつさに僕は答える。

あまりに衝撃的過ぎて思わず声に出してしまった。危ない危ない。

もう考えることはなくなっただけで、僕はまた三月さんと話すこともなくただ彼女の左斜め後ろをついて歩いた。どうやら彼女は黙って歩くことにそれほど抵抗がないようだ。

やっとの思いもせずにとどろきだした職員室は、休日のおかげか、いつもより静けさを増してどこか僕の心を嫌な気分にした。嫌いな場所が静かだと余計気色が悪い。

沖田先生は職員室にはいないようなので、とりあえず隣の教室、いわば超能力者の集う場所へ行くことにした。

三月さんは、それでは、と言って足音も立てず階段を登っていった。何だ、沖田先生に呼び出されていたわけではなかったのか。

ちよつとした落胆を抱え、教室のドアを開けるとクラッカーのような騒がしい声がした。

「薙くん遅いよお、まあ別に良いけど、先生の言うことは聞いてくださいね」大して思ってもいないような言い方で沖田先生は注意した。

「すみません、新たな超能力者に会いました」

「一体誰のことだろ？ ハヤハヤかな？」

「いやハヤハヤではなくて、三月さんです」にしても、ハヤハヤ何て絶対呼ばれたくないな、たとえ名前に由来したあだ名だろうとこんな良く晴れた日曜日に一体何のようなんですか？ と聞こうとしたが、言うまでもなく向こうから言ってくれた。

思っても、望んでもいないことを。

「まあハヤハヤでも何でもいいっか。それじゃ、今から君達伊佐兄弟のお引越しするから、がんばりましょう」

もう一度聞いても良いですか、誰の引越し？

「ついでにコノカっちも」

どうやら僕はどこかに引越しをするらしい、本人の了承もなく。

その23 その姿勢（前書き）

2月24日に大幅修正しました。

お手数ですがその日以前に読まれた方はもう一度読んでいただけるとうれしいです。
すみません。

その23 その姿勢

一体どういうことだ？ 不可解極まりない沖田先生の発言に僕は戸惑った。

僕と那実は学校の寮で生活をしていて、そのことに対して何の不満もないし、満足しているくらいだ。寮母さんのご飯はおいしいし弁当も作ってくれる、それに寮にはクラスメイトしか住んでいないから気も楽だし、楽しいし。理由によっては沖田先生のお言葉を却下させていただく。

崎野さんに至っては、引越すことで学校から遠くなるだろう。

崎野さんの家は学校から約五分、それよりも近い寮を僕は知らない。那実も不安そうな顔をしているだろうと思い、顔を伺ってみると、さぞ納得したような、決め事を当然のごとく果たすような表情をしていた。また僕だけ除者か？

このまま僕だけ知らないのも癪なので、

「どこに引越すんですか？」と当たり前前の質問を沖田先生にした。

「薙くんも一度は聞いたことあるでしょ？ ていうか、説明会の日に聞いたかな？ 特別寮のこと」とさも常識のように言った。

はて、『特別寮』？ 一体何のことやら。聞いたことあるようなないような、というより説明会はほとんど寝ていて話を聞いてなかったからなあ。

でもそれは那実も同じことだろう、あいつも眠っていたのだから。それなのになんで知っているんだ？

「話の要所を見極めて寝るのが本物や」と那実は大して自慢にならないことを誇らしげに言った。何に対しての本物かどうか少し気になるけど、構わないでおこう、こいつのためだ。

それにしても本当に僕だけ知らないみたいだ。知らないと恥ずかしいような空気がしたので僕は知ったかぶりをすることにした。

「さわり程度には知ってるけど、詳しく教えてくれたらうれしいです」と言うと、沖田先生は教師らしからぬ「えー、面倒くさいわ」と問題発言をした。この人がこの言葉を口にするのと、話してもらえ
る確立はほとんど皆無だ。諦めるか。

「理由なんてなくてもやらなきゃダメなものはダメなの。さあ早く引越ししましょう！」そう言って沖田先生は僕らを教室から追出し、鍵を閉め一目散に駆け出していった。どこに行くんだ？ 口に出さず心で突っ込みを入れた瞬間、心を読んだかのように「裏門で待っててね」とやまびこの様に廊下に響いた。ああいう天然タイプの人間は静かに日常を過ごして欲しいものだ、忙しनीとなると他人にまで迷惑がかかってしまう。まあそこを憎めないのが天然の利点なのかもしれないけれど。

「お前に似てるな」

「何が？」

「沖田先生のああいうところ」那実はうれしそうに、ひひっと、悪戯に小さく笑った。

僕と沖田先生のどこが似ているんだ？ ああいうところっていうとこの話の流れからくると、僕が天然で人に迷惑をかけてるってことか？

んなアホな。

「マイナス十点。突っ込みが遅い」

そんなことはお前に言われなくてもわかってる。それにさっきのは突っ込みの部類に入れてもらっては困る。ってそんなことよりもっと話すことがあるだろう、この馬鹿。

「引越して何やねん？ それに特別寮もようわかってないんやけど」

「やっぱりさっきの『さわり程度』っていうのは嘘やったんやな。説明会るときグッスリ寝息立てたもんな」

「わかってるんやったらはよ教えるよ、いちいち回りくどい」

「お前こそいちいちしょうもないことで見え張って。知らんかつ

たら知らんって言ったらいいのに」

「うっさ」

いや、このままこいつのペースにつられると話が先に進まない。悔しいけど折れるか、元はといえば僕が聞いていなかったのが悪いんだし。

「わかったわかった。すみませんが教えてください」

「まあ全部話すのは面倒やから、大まかなことを言っと」

「言うと？」

「認められたってことや。組織から晴れて仲間として、そんで超能力者としてな」

「というと、今まで認められてなかったってこと？」

「簡単に言うと、そやな。何年か前に裏切り者が出て、組織がかなり弱体化したらしい。そっからこの特別寮制度、それに超能力者の情報が秘密とされることになったらしいで」

なるほど。だから先生や超能力者本人は、会うまで能力を隠していたのか。ババ抜きときに手持ちのカードをさらけ出すと勝てるものも勝てないしな。

特別寮については？ と那実に訊こうと思ったけれど、その声は携帯の着信音に消された。

「はい、那実やで。あー、ごめんごめん。すぐ行くからおいて行かんといてなあ」と手短に通話を終え、「沖田先生がはよ来いってお怒りや、はよせな置いてくぞ、やって」そう言っただけは廊下を駆け抜けていった。

やれやれ、どうも僕の周りには忙しい奴が多いようだ。

仕方なく僕も那実の背中を追った。確か裏門って言ってたよな？ と言うことは職員専用の駐車場か。僕は考えることをやめて走ることに集中した。と、いつでも大して速度は速くならないけれど。

少し息を切らしながら駐車場にたどり着くと、思ってもいない光景を目にした。

一台の車が門をくぐろうとしていた。僕はまさかそんなわけはないだろうと思つて運転席を確認すると……くっそ、あの天真爛漫女め。那実の奴ももうすぐ来るからつて引き止めてくれればいいものを　　つてやつても無駄だろうな。あの人の場合は。

傍若無人が良く似合う。人としてはどうかと思うけれど。

僕はそんなことを考えながら、ゆるいスピードで発進したばかりの軽トラックのドアを開け、飛び乗った。

溜め息なんてついていたせいで危うく置いていかれそうになった。恐るべし沖田薫。

「つてお前どこ座つてるねん」

「考えなくてもわかるやろお前の上や」

この車は引越しをするためか、軽トラックなので、言わなくてもわかるように座席は二つしかない。

運転席の沖田先生の上に座るのもそれはそれは魅力的なことではあるだろうが、命にかかわる。ということでお前の上に飛び乗ったわけだ。

「そんなこと言わんでもわかつてるわ！　後ろにスペースがいっぱい余つてるやんけ」

そう言つて那実は親指を立て後ろを示す。

「アホなのかお前は。警察に捕まるやんか」

「あら？　あたしのことなら別にいいのよ」沖田先生はポケットから学生証のようなものを取り出し「これがあればちよつとした法律違反は何てことないのよ」と言つてそれをしまった。

そんな行政の権力を握るような、怪しいものを使うのは、少しながら恐怖を覚えるので僕は先生に突っ込むことなく無言で那実を椅子にした。どうやらさっきの先生の言葉を聞いて那実も納得したようだ。

車内にはラジオなどは設置されていないので、エンジン音と横切る風の音が流れていた。いつもは無駄に口ばかり動かす二人も、何故か話す気配を感じないので、僕は感じていた疑問を口に出すこと

にした。

「沖田先生」

「なあに、薙くん」先生は運転中にもかかわらずこちらに顔を向けた。すかさず「いや僕のほうを見なくていいですから、前見て」僕が慌てることなく落ち着いて言うところ「ごめんね、癖なんだよ」といつて頭をかきながら正面に向きなおした。

沖田先生のことだからなんとなく、話しかけるとこちらを向く気はしていたけれど、癖？ 一体何の癖なんだ？ っていちいちこの人の言動に頭を働かしていたらシナプスが足りなくなる。僕は沖田先生の言葉を記憶の奥の奥の奥にしまい、気を取り直して、

「組織の裏切りっていつあったんですか」

「えっ!？」

またこっちを向く……。今に事故するぞ。

ガタン。と、鈍い金属音を鳴らし、車は左斜めに停車した。

「何してるんですか先生」僕は呆れた感情を押し出した。

「タイヤ落つことしちゃった」

そんなことは言わなくてもわかってるよ。僕は何でこんな一本道でタイヤを落つことするようなドジをしているのですかと？ 聞いているんだよ。と言っても仕方ないので僕は車から降り、車を持ち上げることにした。がそこであることに気付いた。

「左側のタイヤ、全部落ちてるやん」前輪か後輪だけなら持ち上げてアクセルを踏めばどうにかなっただろうけど、さすがに左の前輪後輪が制御不能だとコースインできないだろうな。

「どうするんですか」

「大丈夫よ、安心して」そう言うと、沖田先生はかばんから携帯を取り出した。恐らく保険会社か自動車連盟にロードサービスでも頼むのだろう。もし僕がこんなまっすぐの道で脱輪なんてしたら人を呼べる度胸はないな。かといって乗り捨てる度胸もないけど。

「ごめん、ちょっと助けてくれないかな？ えっ!?! 場所？

裏門からスパーーとまっすぐ行つて五分くらいのところ」

そんな適当な説明でわかるほど日本のロードサービスは発達しているのか？ でもこの人は常連さんっぽいから向こうもリストに載せている可能性もあるか。

沖田先生は、あと十分もあれば来てくれるって、そう言いながらステップを踏み運転席に戻った。少しも自分のミスと実感していな、この様子だと。僕は再び那実と肌を合わせることはせず、壁にもたれながら外の風を感じていた。

こうして春の生暖かい風が肌を抜けるととても幸せな気分がする。夏のように不快な湿気を背負わず、冬のように肌を刺すわけでもない。かといって秋だと少し風は冷たい。冷風じゃない温風の春風が一番体に優しい。

春の穏やかな午前半ばに感謝しつつロードサービスを待ちながら景色を眺めていると、遠くの方で人影が見えた。そりゃ、ランニングくらいする人もいるだろうと思いい気に留めないようにしようと思ったけれど、ついその服装に目がいつてしまった。

「制服？」

約二〇〇メートル向こう先に見えるのはわが高校の制服……、しかもセーラー服。

沖田先生はバックミラーでその姿を捉えたのか、車から出て大きく手を振り、こっちだよ、と近所迷惑な声量でセーラー服を呼びかけた。言わなくても世の中でストレートの道に脱輪する人はあんたしかないよ。

彼女はほとんど距離を縮め、すぐ顔を捉えられるほど近付いた。まあ確認しなくても誰だか大体見当はついてるけどね。

確か今朝会った。

「みよっぺ！ ありがとう。よくぞ駆けつけてくれました」

「いえいえ、こちらこそ少々時間がかかってしまい申し訳ありません」彼女は深々とお辞儀をした。何だか立場が逆なような気がするが、しかしこんなか細い、しかも少女がこの問題を解決できるように思えないけれど。

「先生、この人でどう脱輪を解決出来るんですか？」

「決まってるじゃない、ねえみよっぺ」

「ええ、決まってますね」と微笑を浮かべながら「これは先程ぶりですね、那実さん」

「からかつてます？」

「その通りですよ」そう言っただけで彼女はさらに微笑を続けた。

沖田先生は「早速だけど」と三月さんに拝み、彼女も「御安い御用です」と制服の袖をまくった。何が御安い御用なのか、そのことを思い知るまでに五秒もかからなかった。

三月さんは軽トラックに近づき、まるで鉛筆を拾うように軽い手つきで、片手で持ち上げた。

何を？

軽トラック以外ないだろう。

僕は自分に言い聞かせるが、いざ目の前に超現象を目にすると疑いたくもなる。そりゃ誰も超能力を信じないわけだ。御船さんを疑った学者達の気持ちもよくわかる……猛烈に。

気がつく僕は、自分の引越す理由を三月さんに聞きながら引越し作業をするという不可解なことをしながら、段ボール箱に衣類積みこんでいた。

車内（正確に言うと荷台）で聞いた話だと、どうやら引越す理由は、僕が超能力に目覚め、この組織に入ったから（本人の了承なしに）、身の安全を確保するためらしく、そして。

「その引越すを正当化するために、特別寮っていう制度ができたのよ。一般の生徒には特別寮とは、すごく学力の高い生徒、もしくは先生に特別な才能を認められた生徒に限る、ということになっているの」と常識はずれにも程があることを話すには最も似合わない、『淡々』という喋り方をした。

「特別寮の場所は知ってるでしょう？」

「いいえ？ 全く」と答えると三月さんはあからさまに常識知らずな人を見る目で見て、「文芸高の敷地内にあるわ」

そりや呆れるわけだ。

ところで那実と沖田先生はというと、僕らと同じく隣の那実の部屋で引越しの準備をしている。

那実も引越すと知っているなら、準備していればよかったのに、そしてそれを僕に教えてくれればよかったのに。

「急遽決まったことらしいわ。私もいきなりな呼び出しだったんだから」と少しふくれてみせた。

そんな無表情でふくられられてもおどけているようにしかおもえない。

それから四五分後、僕の梱包作業は終了した。この部屋に来てまだ一ヶ月程しか経っていないので、荷物も思ったより少なく、早い時間で終わった。まだ隣の部屋から物音がするから、那実の部屋は終わってないのだろう。

隣の部屋も手伝わないといけないんだろっけれど、久々に引越し準備をしたので少し疲れた。ちよつと休憩ついでに三月さんと会話することにしよう、準備優先でほとんど話さなかったからな。

「今日は手伝ってくれてありがとうございます」

「あら？ 私はまだ何もしていないわよ？」いやいや、脱輪を直してくれただけで大仕事ですよ。

「まだ運ばないといけないですよ？ この段ボール達を」僕はそれらを見つめ溜め息を吐いた。

「そう憂鬱にならないで、私がいれば雑さんたちは軽いものを持っていただければ大丈夫なので」

「どういことですか？ 沖田先生のトラックまで三月さんが運んでくれるんですか？」

ここへは沖田先生が軽トラックを運転して来たので、新しい寮まで運ぶ手間はさすがに省かれるけど（というかそんな手間があったなら引越しは中止だ）、ここは3階で、しかも寮にはエレベーターが設置されていないから、机やら物置などを持ちながら三月先輩はトラックまでの距離、約一〇〇mほど移動しなければならないこ

とになる。けれど彼女なら容易だろうな。

「そろそろ休憩を終わりにしましょ、次は隣の部屋の手伝いをしなければいけないわね」

「そうですね」

「じゃ、私も箱詰め手伝いますね」

「お願いします」

僕は三月さんと那実の部屋の手伝いをするために、隣の部屋に移った。

ざっと、那実の部屋を見渡すと、どうやらまだ作業は半分も進んでいないようだ。そのくせ二人とも中学の卒業アルバムを見て雑談してるではないか。本当にこいつらはなんてマイペースなんだ。「僕の部屋は終わったで、そんなもん見らんではよ作業進めれよ」不機嫌な僕とは裏腹に、二人は実にご機嫌のようだ。余計イライラする、そんなに卒業アルバムが面白いのか？

「すごい泣いちゃって、可愛いところもあるのね薙くん」
ためらうこともなく、「こら、返せ」と言う前に僕はアルバムを引っこくた。

そのアルバムの五ページ目には、卒業式で泣きじゃくる僕の顔が携帯電話くらいの大きさで写っている。僕の人生で消しておきたい物の一つだ。

「返せって、これは俺のんやぞ」

「だまれ、弟の恥を兄がさらすな！」

「ふふ、恥ずかしいことじゃないわよ、逆に良いことよ、卒業式で泣けるなんて」

「うるさい、泣き顔を見られたい奴なんてお涙頂戴なTVに出てるタレントか俳優だけじゃ」

本当に見かけによらず性悪だ。というか綺麗なものには毒があると言うのだから、見かけによるのかもしれない。天照なんて言わずもがな性悪の固まりだしな、ということは崎野さんも性格が悪いと言うことになるのか？ いや、彼女は例外だろう、世の中何事にも

例外はある。

なんて、都合のいい解釈をしながら、僕は那実の引越準備を進めた。

しかしこいつの部屋は物が多い、何たってこんな物が増えるんだ？　一ヶ月やそのらの量ではない、僕だと半年過ぎさないとこれほどまで増えないぞ。ボーリングのスコアやらレシートやら学校で配られたどうでも良い内容の学級だより。こんなもの僕なら即ゴミ箱行きだ。

「物より思い出なんて言うけれど、あれは嘘や。物あつての思い出。人の記憶なんてしょうもないもんやからな」

というポリシーを持つ那実なら仕方ないことが。

それから四五分かけてやっと梱包作業は終了した。

これからまだ荷物をトラックに乗せて、それから……。もう考えたくもない。

いくらなんでも三月さんが全て荷物を荷台に載せてくれるとは限らないし。

疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた。

「薙くん、うるさい。言っただとこで疲れはとれないでしょ！」

なんてまともなことを言うんだ、沖田先生らしくもない。

「ここからは楽なはずよ、特別に美代っぺがまた能力発揮してくれるから、ね、美代っぺ」

「はい、発揮しますよ」と輝いた目を沖田先生に向け、前髪を掻き上げた。

どうやら超能力を身につけてしまうと人は変な方向に向かうらしい。

その24 十三人の異端者

僕と那実とは沖田先生に言われるがまま一階と二階に配置された。

「誰か来ないかちゃんと見張つていてね。こんなところ見られたらみよつぺ大変だから」

引越しするだけなのに何故そんなリスクを背負うのだろうか？ 普通に僕と那実が運べば時間はかかるだろうが何の問題も生じないはずだ。

「だって超能力、見たいじゃない？」……あんたのわがままかよ。こんな個人の欲望のために危険を犯して能力を使う三月さんを哀れに思うよ。

「僕たちが運びますから三月さん。超能力はやめましょうよ」

「大丈夫ですよ。那実さんがそう思ってるならきつと大丈夫よ」

「薙です」

「わかつてるわよ」

こいつ、わかつてるならわざと間違えるなよ。だんだん突っ込むのも嫌気がさしてきた、こんな奴もう知らない。

僕は怖いもの見たさというか、何というか、先ほどの光景を思い出すとちよつと胸が高鳴った。

何故だろう？ 目に見て取れる超能力を見たのは初めてだからだろうか？

テレビに映る、マジックともつかない超能力ごつことは違う本物を見たからだろうか？

世の中にはそういう不思議なものが存在する、と言葉を認識しても、事には認識できないのが大抵の人間、というより一般大衆だろう。どつちかというとなんなもの信じる方がどうかしている。でもそれは僕の目の前で実際に起こった。

トラックを持ち上げるくらいの筋力を持つ人間も少ないけれど存在するだろう。けれどそんな人間があんなか細い二の腕を所持して

いるわけがない。少なくとも四倍は必要だろう。

それに彼女は『少女』なのだ。

しばらくすると、勢いよく僕の部屋の扉が開いた。そこにいるのは間違いなく三月さんで、その両腕には間違いなく僕の部屋の荷物が持たれていた。

僕は慌てて自分の部屋を確認した。……まさか。

「もしかして三月さんあの荷物、全部持てたんですか？」

「何を不思議がってるの？ さっき私はあなたの前で軽トラックを浮かせたじゃないですか？ そんなことができるのならこれくらいのは容易ですよ。不思議なのは薙さんです。あなた仮にも羊なんですよ？」そう言っただけで彼女は、天井ギリギリまで積まれた荷物を持ちながら、器用に階段を下りていった。

確かにあなたの言ってることは間違いじゃないけれど……。誰でも驚くだろう。

それあと三月さんは手際よく荷物を荷台に載せ、僕らの監視も、何事もなく終わった。

引越し二人分の荷物をたった三分で……。僕はただ息を飲み、頭にその光景を詰め込んだ。そうしないと飛んでしまいそうだから。

無事に荷物を積むまでの作業を終えた僕は、歩いている。行きは車で来たのに歩いている。

「お前がごちゃごちゃした小物ばかり持つてからこうなったんやぞ」僕は不満をこらえきれず那実を睨んだ。

「なんやねん。確かに俺のせいやけど、ええやん歩いて一〇分くらいなんやし」

助手席には那実の所持するガラクタ共が乗せられることになった。荷台に乗せると飛んでいくのでそこしか場所がないのだ、かといって荷台には三人も乗るスペースはない。だから徒歩。まあこの季節の正午辺りというのは散歩にはちょうどいい気温だ、走るとなると

汗ばむけれど。まあ、そんなことよりも、

「詫びろ。僕はともかく三月さんに詫びろ」

「あら、いいわよ私なら。ちょうどよかったんだから」三月さんは足を前に踏み出し僕らよりも先に歩き出した。

「何がちょうどよかったんですか？」僕が三月さん訊くと、少し目を俯かせて、結局「なんでもないわ」と言って歩みを速めた。

「そうや薙。美代大先生はこの組織をかなり詳しく知ってるで。なんか訊きたいことあったら聞けば？」

「ってなんでお前はそんな偉そうなんだ？ お前の知識じゃないだろうが。」

「いいのよ、そこが那実さんのいいところなんだから」

どこがいいのか全く理解できないけれど、当の本人が許可してくれたのだからまあいいのか。僕はあごに手を当て、胸の引っかかりを探した……。ここ、一カ月と半分で疑問に思った組織のこと……。

多すぎてわからん。これが新入社員が口にする聞きたいこともわからないです、ってことか。しかし、それじゃ折角の機会がもつたいない、もう少し考えてみよう。

そのまま何の会話も交わされることなく二〇〇メートルほど歩き、やっと一つの質問が浮かんだ。

「この組織には確か三年生が三人、二年生が六人、それと僕ら含め一年生が四人いるんですね」

「そうよ」三月さんは僕の目をじっと見つめ「それがどうしたの？」

「あの、もしよければその人たちの能力とか教えてくれませんか？ ちょっと気になるので」

「うーん……。そうね」と言いながら目を瞑りながら右手で首を添えた。しばらく考えた後、

「いいわ、あなた達二人が特別寮に移るって事は、身の回りの調査を終えて問題ないってことだから」

なんか色々突っ込みたいところがあるけれど、変にそうしてしまうと貴重で異常な話を聞けなくなるので、落ち着くため、僕は心の中で三回ほど同じ突込みをした。

「折角だし、フルネームもつけて教えてあげましょう」

「そうですか？　ありがとうございます」

確か総勢十三名だよな？　時間的にちょうど学校に着くくらいかな。

「まず三年生。彼らは超非三猿と呼ばれているの」

「三猿って、見ざる聞かざるとかいっあの？」

「そうです。上筒乃雄うわつつのさんは約百キロ先の遠くの物まで見えるらしいです」

「はあ」余りに非現実過ぎて僕は声にならない声でうなずいてしまった。ていうかあの人そんな能力を持っていたのか。

「中津夏平なかつなづかさんはどんな声でも出せるの。大きい声も超音波もそして声質も変えられるわ。大底都斗おおそこみやとさんは犬並の聴覚。簡単に言うると人の四倍の聴力があるわ」

なるほど、だから超非三猿か。確かに彼らは見えるし聞けるし言える　異常なまでに。けれどその例えはちよつとかわいそうな気もするけれど……。と新しい呼び名を考えてるうちに三月さんは話を進める。

「二年生はあたしを含め六人いるわ。どんな衝撃も吸収する大名鳴弥めいくん、透視ができる稻生橙芽いのなるめさん」

透視！？　リアルにそんな人いたのか！

「ちなみにいのうさんって方は……」

「女やで。何を期待してんねんアホわ」

那実に言われると余計腹が立つ。期待してたさ、何が悪い。っていうかお前も期待していたのだからそういうこと言えるんだろ！

三月さんは僕らの言い合いを、ため息をつくことで収め、残りの超能力者の名前と能力を告げた。

「神尾尚かみおなおさんは全く寝ない能力を持ってるわ」

それは不眠症とかじゃないのだろうか？

「そして灘梓玖、彼女は言葉では表しにくいけれど絶対的な直感を持つているわ」

「何だか僕のと似てませんか？ その能力」

「あなたは自分の能力にまだ気付いてないようね。今説明してもいいけれど、自分で実感したほうがいいから説明しないけれど、いいかな？」

「そのほうがいいなら」

本当は知りたいって気持ちが強いけれど、それよりも怖さのほうが強い。まだ僕は認めたくないのだ、異端者だつてことを。

「じゃ、続けるわね。竹須佐速雄、彼は一般的に言うサイコキネシスの使い手」

そんな言葉ゲーム以外で始めて聞いたよ、なんか便利そうでいいな、その能力。

「そして私は筋力のリミッターを外せる能力を持ってるわ」

「筋力のリミッター？」

「そうです。通常の生活では必要のない力を脳が制御しているのですが、私はその制御を意のままに操ることができるのです」

「でもそれって骨や筋肉に支障はないんですか？ あるから制御してるんでしょう？」

三月さんは軽く鼻で笑うと「人間と言うものは不思議なもので、繰り返すことで慣れていくのですよ」

「そんなものなんですか？」

「そんなものなのですよ」と微笑と話を続けた。

「一年生のお名前はご存知なんですよね？」

「ええ」

「ちなみに誰の能力はご存知で？」

うーん、と考えなくてもわかっていたけれど、その場の流れでそういう素振りをしてしまった。

「崎野さんは感情を読み取る能力。で、天照は蘇生ですよね？」

僕がそう言うのと、いきなり那実が吹きだした。今のところで笑う場面なんてなかっただろう？ 笑うならもっと別なところだろう、全く寝ない能力とかの方が面白いだろ。

「蘇生って…。そんなアホな能力あるかい」今までの能力も十分馬鹿らしいぞ。

よく見ると三月さんまで口に手を当てて笑っている。
すごく腹が立つ。こっちは真剣に言ってるのに。

やっと笑い終えた三月さんはその理由を説明してくれた。

「神様じゃないんだから。蘇生までいかないわ。でも治癒能力は持ってるわ」

「でも僕、車に轢かれた猫を天照が生き返らせているところを見ました」

「じゃ、その猫さんは死んでなかったってことよ」

まあ、そうだろうな。それしか答えは見つからない、それに死んだものを生き返らせるなんて馬鹿なことだよな。僕がどうかした。

淡い期待ってやつか。

「にしても、薙さんは面白いです」

だから、もうからかうのはやめてください。と言おうと思ったけれど、そんなうれしそうに見つめられると文句を言う気も失せてしまふ。これだから女ってのは……。

「どこ行くねん、薙」

その声に僕は気を取り戻した。あれ、もう学校着いたのか？

「明後日の方向見てボーっとしてんちゃうで」正門を通り過ぎた僕に那実はため息交じりで言った。

そうか、まだそんなこと考えていたのか僕は。

僕は頭をかきながら、申し訳そうなフリをして校舎へ向かう二人を追いかけた。

その25 ナチュラルトリックスター

校門をくぐり、体育館を通り、中庭を超え、そこから少し歩くと特別寮があつた。やはり寮ということもあつてか、他の施設からは離れた場所に配置されていた。

沖田先生はもうご到着のようで、車の姿はここから見えないが、エンジン音が響いていた。恐らく特別寮の裏に車を止めているのだらう。

「おーい、薙くん」

と和みを含む、軟らかいイントネーションで僕を呼ぶ声がした。

この声は、

「崎野さんですか？」

「そうやでえ、こつちこつち」

だから、こつちつてどこだよ……。僕は辺りを見渡すけれど、どうも姿が見えない。

「お前は天然か」と那実は溜め息交じりで突っ込みを入れた。そして特別寮の方を指差し、「あそこや、どう考えても寮の方から声してたやんけ」

「うるさい！ それくらいで人を天然とか言うな」

「あら？ 天然も一つのチャームポイントじゃないですか？」

「生憎、僕はそういうキャラじゃないので」

「それは手痛いな、男の天然なんて可愛くないし」

こいつはいちいちと、……人が気にしていることを言うなよ。それに僕が天然だったとしてどこがチャームینگなのか全くわからないです三月さん。

僕はうなだれながらも先生の車が止めてあるだらう、特別寮の裏へ回った。

そして呆気なくも目を疑った。光の屈託により映し出す世界を僕

は疑った。

全身が恐怖に包まれた。なんだかジェットコースターの急降下のような気分だ。

余りに驚きすぎると人は声が出なくなるんだと、このとき初めて知った。これぞまさに、

絶句。

「なんで？」

目の前には風船のように、ゆらゆらともふらふらとも形容しがたい動きでダンボールが浮いていた。すかさず僕は三月さんに答えを求めた。

「どうなってるんですか！？ これ」

「さ、さぁ……これが俗に言うポルターガイストと呼ぶものかしら」

三月さんの声はどこか上ずっていて、いつもの凜とした綺麗な声ではなかった。明らかに恐怖している、どこことなく体も小刻みに震えているし。

もしかすると、これが僕ら超能力者達の敵なのか？ 目に見えない存在。まさに超心理、超現象だ。そしてこれから、こういう得体の知れないものを相手にしなくてはならないのか 不安というよりも……死という言葉を浮かべるよ。

「三月さんは離れてください、今のうちです！ 早く！」僕はもしかするとこちらに突撃してくるかもしれないダンボールから、彼女をかばうため目の前に立ち、近くに落ちていた箒を咄嗟に拾い、見よう見まねで武士のように構えた。なんとなく箒を斜めに持っているのは強そうに見えるからだ。

僕はもう一度、気を引き締めるために箒の柄を強く握った。

「ははっ、こりゃ傑作だ」と高らかな笑いと共に僕の斜め後ろ辺り、寮の屋上から、ハキハキした朗らかな声が響いた。

何が傑作だ！ と突っ込むよりも先に僕は斜め後ろに構えると、その朗らかな声の持ち主は僕の眼を見つめた、自然と視線が交わり

あう。

妙に眼力があるそいつは、少し短めの茶髪をした、僕らと同年代くらいの少年に見えた。赤いＴシャツがなんともお似合いだ。

この雰囲気からすると、どうやらこいつがポルターガイストの元凶か？ 確かテレビか何かでポルターガイストは、その言葉通りの意味の心霊現象とは違い、人が引き起こす第六感という説もあると聞いたことがある。

「お前は何者や！」僕は声を荒げて言う。

すると芝居染みた風に「お前こそ何者だ、聞かなくてもわかるがな、超能力者よ」と力強く答えた。

何？ アイツは僕の正体を知っていると言うのか？ それもそうか、この特別寮にいるってことは僕らを襲いに来たってことだよな。僕は一瞬だけ三月さんの顔を見る、俯いたままの震える彼女は絶望の淵にいる。そんな雰囲気が漂っている。

ここは僕が何とかしないと。

「俺は見ての通り魔法使いさ」そう言って奴は七色に光る、赤色のステッキのような物を持ち出し僕を指した。

さしずめ超能力者対魔法使いか……。異種格闘技戦とも呼べるがどこか似た感じもする。超能力とは自分のエネルギーで超現象を起こすもので、草木や他の生物から力を分けてもらいその力を使えるのが魔法使いだと言う話を聞いたことがある。

「さあこの平成のトリックスターに勝てるかな？」そう言って彼は屋上から飛び降りた。

僕は心臓が急激に冷えるのを感じた、正確に言えば胸の辺りなのだろうけど、その胸をグツと握り締められるような感覚に見舞われる。こんな五メートル程の高さから飛び降りて無事で済むわけがない。

しかし、そこはさすが魔法使いと言うところか。地面とぶつかる寸前で、煌びやかに輝くステッキを地面へ向けると、ランポリンで弾んだように体は軟らかに空中を跳ね、何事もないように着地し

た。こりや思っていた以上に強敵だ。

僕はこれから約三年間、こんな得体の知れない相手と戦いながら高校生活をしていくのか。 さしずめ、『超心理的青春』と言ったところか。

魔法使いは高らかに笑い声を上げながら、ステッキを上に掲げ、二回、三回と大きく振り、「ダンボールアタック！」と安直な技の名前を叫んだ。

その名の通りダンボールが僕をめがけ飛んできた。僕はどうもすることもできず、余りの恐ろしさに眼を瞑ってしまった。きつと算すら構えていないだろう。

すると、瞬間的に風の音が耳元を鳴らした。その風の音を鳴らしたのは先程まで震えていた三月さんだった。

人間の走力を超越した速さで魔法使いに向かって行き、飛び交うダンボールを華麗なステップでかわし、その勢いのまま魔法使いの顔面へ飛び膝蹴りを食らわせた。

魔法使いは三メートルほど吹っ飛び、「ぎゅあ」と間抜けな声で無様に着地した。いや着地じゃないか。

「いつてえ。何すんだよ三月」とうめき声を上げながら魔法使いは三月さんの名を呼んだ。

どういうことだ？

もしかしてこの二人はグルだつてことか？ そういえばさっきから那実の姿が見えない、目を離れた際に三月さんにやられたのかも。しれない。くそ、これは絶体絶命だ。けれど何故三月さんは魔法使いを吹っ飛ばしたんだ？ 余りにもあいつの手際が悪いからなのか？

いや、違う、多分ダンボールアタックを繰り返されると、自分にも危害が加わると思ったからだ。十箱以上あるダンボールが空中を舞うと、寮の裏という狭い空では共倒れの可能性もある。さすが三月さん、頭が切れる。

せめて崎野さんだけでも逃がさないといけないと思い、二人を背

にし、寮の入り口へ向かおうと地面を蹴った。

「調子に乗るのもいい加減にしなさい」

どうやら魔法使いは三月さんに叱られているようだ。

そりゃそうだろ、あんな場所を考えない攻撃をすれば、叱られても仕方がない。

「途中まで付き合っただけだけれど、おふざけが過ぎます」

うんうん、敵ながら納得だ。こんな間抜けな奴と組んでいればいつか痛い目に遭うだろう。そもそも屋上から飛び降りるなんて子供が喜びそうな演出なしで、屋上からダンボールを操れば安易に僕を撃退できたはずだ。ここまで僕らを誘導した三月さんの苦労も考えてみるっての。

「ちよつとふざけただけじゃないか、あいつもノリよかつたしよ」
ちよつとどころじゃないだろ。いちいち突っ込ませる奴だ。って
ノリ？ 何に乗ってたんだ？ その直後、僕は忌まわしき言葉を耳にする。

「あの子は天然なの」

「違うう！ 僕は天然なんかじゃない」

やってしまった。二人が揉め合ってる隙に崎野さんを助けに行こうと思っていたのに、思わず突っ込んでしまった。何をしてるんだ僕は、こんな非常事態にいちいち突っ込んでるからだ。口に出さなくても心の中で突っ込めば集中力が欠けるに決まっている。

三月さんは少し強張った声で僕に尋ねた。

「じゃ、この男は何者ですか？」

そんなこと愚問じゃないか。一＋一や一の段よりも簡単だ。

「魔法使い」

「天然」

今日はやけに天然という言葉が僕の耳を通り抜けるけれど、天然物のうなぎや鮎は確かに魅力的だが、僕の辞書では、人を天然にするとその言葉の対義語は馬鹿者だ。

「誰が天然なんですか？ もう怒り心頭や、どっからでもかかっ

て来い」僕は足元に落としていた箒を拾い上げ、さつきと同じように構えた。

「こいつ本当に俺を魔法使いだと思ってるのか？」

「みたいね」

「傑作」そう言つて彼は力行を巧みに使つて笑い転げた。

何がそんなに可笑しい、僕はもう真剣そのものだぞ。というより何だこの温度差は？　まるで赤道直下と春の風のような。三月さんは北極なんて比べ物にならないくらい冷たい目で僕を見つめている。これが人を殺そうとする眼なのか？

「もういいです。一度気絶させちゃつて、ハヤ。そうすると頭も冷えるでしょう」

ハヤ？　僕はその名前の主を思い出す前に、ダンボールアタックによつて打ち伏せられた。

ものの見事な瞬殺劇。

その26 ヒーローはいつもピンチから

眼が覚めると僕は布団の中にいた。

眼が覚めたといつても、まだ眼を開くまでには至らない。辺りは何故か騒々しい。

「それにしてもホンマに大助かりやったでえ。ハヤくんには感謝やわ」

「これくらいなら御安い御用。いつでも頼ってくれよ」

毎日耳から離れない声と忌々しい声とが重なり合つて、輪唱りんしょうしているようだ。まあダンボールを思い切りぶつけられたら脳震盪うごくらい起こすだろう。その後遺症が輪唱か。

……ダンボール？

僕はその言葉を脳内にインプットすると同時に掛け布団を勢いよく舞い上げた。

「お前！ まだおつたんか！？」

僕は眠気眼なのに鋭く睨みを利かせる。どこか矛盾している気がするのは僕だけだろうか。

「やっと起きた。よっ！ 特技は一次妄想さん」

「誰が一次妄想や！ てかどういう意味や」

「それでもツツコミのつもりか？ 大阪はお笑いの町と聞いたけど大したツツコミしないね、知識も足りないし」

こいつは僕にダンボールをぶつけた拳句、唯一の特技であるツツコミまで侮辱するのか。

「せやでな、薙くんはどっちかと言うとツツコミよりボケやでなあ」

崎野さんまで僕のことを……。同じ関西圏なら僕のツツコミのすばらしさを理解してくれると思ったのに。って僕は生まれてこの方、ボケたつもりなど一度もないのだけれど、それはどういう意味だ？ 「って、ここはどこや」最も重要なことをすっかり忘れていたよ。

きつとあれから僕と崎野さんはさらわれて、この部屋、つまり魔法使いの秘密基地に収容されたのだろう。そして僕らの持つこの特殊能力はこれから色々な悪事に利用されてしまうのだろう。例えば地球征服だとか、宇宙征服だとか、なんとかに。

「お前も大体わかってるはずだろ？ 俺は魔法使いだぜ」そう言っ
てニヒルな笑みを浮かべた。

やっぱりそうか。

「いい加減にしなさいと何度言えばわかるの？ この馬鹿」その
声が鼓膜に響いた瞬間、ピシャンと、肌と肌が触れ合う高い音が響
いた。触れ合うという表現を間違ってることは言うまでもない。

「また殴ったな」先ほどのニヒルな笑顔はどこへやら、涙をため
て赤くなった頬を押さえながら魔法使いは三月さんに問いかけた。

「まだ殴って欲しいの？」

「なんだと！？ 俺がお前に負けるとでも」「魔法使いはそう
言い返すが次第にポリウムを下げていく。僕はフェードアウトす
る元を一瞥し、咄嗟に眼を離れた。背中に悪寒がした。こりや魔法
使いの判断が正しい。

「薙さん、もう体調はいいの？」と先ほどの雪女の如く、冷やや
かな表情とは打って変わって最上級の温雅な笑顔おんがを向けた。

「ええ、どこも痛くないです」そんな顔をされると、お前も敵な
んだろうとは言えない。

「そういえば自己紹介まだだったわね、ほら、ハヤ」

「おつ、おつ。そうだったな」魔法使いは立ち上がり、腰に手を
当てた。

別に座りながらも自己紹介などできるだろう、という言葉は胸
に秘めておこう、これも彼のポリシーなのだろう。

「俺は特別能力開発科の二年、竹須たけすけ佐速雄さおすけ。またの名をトリック
スターと呼ぶ」

たけすさ？ どこかで聞いたことがあるのはハヤという名前だけ
ではない気がする。その珍しい苗字を僕は脳内の検索機能を用いて

探す、いかんせん立ち上がって数分だ、僕の脳は高性能とは言えない為、もうしばらく『たけすさ』という名を思い出すのに時間がかかりそうだ。

「あなたがハヤさんですか」

「おう、これからはトリックスターと呼んでくれ。天然ツツコミ師」

天然という言葉が引っかけ、返事をしようかしよまいか考えていると三月さんが口を開いた。

「トリックスター？ ややししいのよ横文字なんて、それにしつこいから却下よ」

「ガーン」

口に出して言う奴を初めて見た。効果音など口に出す奴の脳内が正常な訳がない。

「回答が遅れたわね、ごめんね雑さん。ここは特別寮、あなたの部屋よ」

ということとは、僕と崎野さんは魔法の国などに連れて行かれず、事なきを得たということか。でも、目の前には魔法使いがいるしあなたもいる。どういふことなのか全く理解不能だ。

「もしかしてまだハヤのこと魔法使いだとか思っているんじゃないでしょうね？」下から覗き込むように僕の顔を見つめる三月さん。その表情には先ほどの冷たさが残っている。

「い、いや、そんなこ、とないっすよ。うん。今日からここが僕の部屋か、思ったより狭いな」

「ははっ。まだハヤくんのこと魔法使いやと思ってるんや！」と手を叩いて喜ぶ崎野さん。あなたを笑顔にできたのなら、僕の天然にも意味があったのですね、実にすばらしい。

ちなみに三月さんのことも疑ってましたよ。

「こいつめちゃ動揺してるっ！」

うつさい、元はと言えばあんたがあんな三文芝居をするからこんな目にあっただんじゃないか。それに引っかけた僕にも問題がある

のはこの際無視しよう。都合が悪すぎる。

「遊びのつもりだったのにさ。でもお前氣に入った、はい」と竹須佐さんは僕に手を差し伸べた。一体何のつもりなのかわからないけれど、なんとなく場の雰囲気では彼の手を握った。

「はい、仲直り。いやー実に単純明快だね人の心は」

何を言っているのか全く理解できない。人の心ほど複雑で理解できないものはないぞ。

「さっきのご無礼をお許しください。ってことでコンビニ行こうか？」

どういふことなのかはさて置き、僕は昼飯も食べていないこともあり、腹は限りなく小さな音を立ててギョルルと気味の悪い音を鳴らしている。これは非常警鐘といって違いない。しかし、僕がこの場を離れると、崎野さんはきつと帰ってしまうだろう。うーんどうしよ。

「おごつてやるからさ、行こうぜ」

「どこまででも」

そういうことで僕らがコンビニへ行くことにすると、案の定、崎野さんと三月さんはゴーホーム。男二人、コンビニへ向かうことになった。僕は三月さんに手渡された部屋の鍵を指でクルクル回しながら校門をくぐる。

「僕、あんたの名前をどこかで聞いたことあるんやけど……、誰でしたっけ」

「どういう質問だ？ 俺は誰でもない、竹須佐速雄、通称ハヤだ、それにト」 最後の辺りは無視して、そりやそうだけど、と言い、僕は彼の名前を、記憶に重ねることをやめた。これだけ考えても出てこないのなら、はつきりって思い出すことは無理だろう。

「にしても、お前本当に俺を魔法使いと思ってただなんて。傑作だ」

「お褒め頂きありがとうございます」僕は過剰に、不機嫌そうに答える。

「そのお陰で香代にビンタされたけどな」彼はまだ赤く染まる頬を右手でさすった。

心の中でいい気味だと思いつつ、僕は、「天然ですみません」と自重した。まあフリだけど。

僕はコンビ二まであと少しというところまで来ても、鍵を指で回しながら歩いていった。この落ちれば鍵がコンクリートと衝突し、欠けるかもしれないというスリル感と、指の周りをなでる金属の感触がなんともいえない。それになんかカッコいいだろ？

ただ回すだけだと飽きてしまうので、指を上に向けたり横に向けたりしながら難度を上げながら歩みを進める。

とコンビ二を目で確認した瞬間、鍵は僕の目前でペットボトルロケットのように、綺麗に斜め前へ上がった。その放物線上、約一メートル半という近い距離に竹須佐さんがいる。こりゃ後頭部直撃だな、と思ったが、竹須佐さんは少し歩く速度を速め、後ろで鍵の位置を確認することなく、腰を少しかがめ、背中でキャッチした。いや掴んではないか。そして、腰を上げる反動で鍵を僕のほうへ放り返した。

なんて器用な真似をするんだこの人は。大道芸、いやサッカー選手か。

サッカー選手？

もしかしてあんた、竹須佐速雄！！思わず僕は声を張り上げてしまった。

「だから、何回言ったら覚えるんだ？」

いや、覚えてるけど、この場合思い出したんだ。

「何を？」

「僕、あんたのファンでした。いや、でしたじゃない、です」僕は進行形で彼を心底好いている。もちろん恋愛方面ではない、生憎僕にはそういう趣味はない。

「おつ、珍しいな、俺のこと知ってる奴なんて久しぶりだ」竹須佐さんは得意げににやける。

彼はアイドルでも、歌手でも芸能人の息子でもない、かといって僕を見事に騙した演技力で俳優業なんてできるわけがない。

竹須佐速雄、彼はサッカー日本代表だ。正確には「だった」というべきだろう。当時僕は十三歳、その頃、十七歳以下のサッカー世界選手権がテレビで放送されていた。その頃の日本はなかなか強く予選リーグを突破し、準決勝までコマを進めるほどの活躍だった。その立役者がこのすぐ目の前にいる竹須佐速雄。彼は十四才なのに一世代上の代表チームに所属し、スーパースブとして重宝された。実は言っと、決勝リーグは全て一点差の逆転勝ちであり、その全ての逆転ゴールを決めたのが彼なのだ。まさにありえないの一言だ。それも含め、中学二年生が高校二年生と一緒に試合をするなんて僕の中では考えられないことだった。それくらいこの時期の三年間は大きい。

「まさかこんなところで出会うなんて思ってもなかったです」

「いや、別にさっきまでの話し方でいいぞ、敬語は好かないし」

そんなこと言われても、いざ憧れを目にすると、なかなかタメ口や中途半端な敬語など使えなくなる。

彼は僕の憧れだった。

竹須佐速雄は右サイドハーフだったのだ。彼のドリブルにはスピードがあり、手でボールを操るよりも華麗に操り、かといって当たり負けなどしない。そんなドリブルが好きだった。それに彼の唯我独尊振りは異常で、ボールを持つとほぼ八割以上ドリブル。相手にフールをされるか、タツチラインにボールを蹴りだされるかしない限りボールが彼の足元を離れることはなかった。もちろんシュートはちゃんと打つ、人並みの上手さだけど。

そしてワールドカップで五人抜きした選手が彼に付けた名は、サッカーボールに取り付かれた少年だった。

しかし今はその呪縛から解けているようだ。だってこの学校に来たのならクラブなんてやってる暇などないだろう、しかも超能力者だし。

「昔の話は恥ずいからまた違うときにしよう」

竹須佐さんはコンビニのドアを押した。

コンビニに入り一番最初に耳にしたのはいつも有線から流れてくるミュージックではなく、いつも授業中に聞く声だ。

「莓大福なんでないのお」

「で、ですからお客さん、今は七月なので在庫がないです。申し訳ないですが」

コンビニの店員は理不尽なクレームに対し、真摯な対応で深く頭を下げた。

「ぷー。だったらいいわよ、自分で作るから！ あんた、あたしの作った莓大福のおいしさで他の食物を食べられないようにしてあげるんだから」とブランド物のカバンを大げさに振りながら肩にかけ、大きな足音を立てながら大またで歩き、入り口付近にいた僕の右肩と見事にぶつかった。

「痛い！ どこ見てあるいてんのよ！」

どうやら怒りで周りが見えていないようだ、って莓大福ごときでそこまで昂ぶるなよ。

「どけて言ったのが聞こえないの？」

あれ？ まだ気付いてないのか？ こりや重症だな。

「薙ですよ、付き合いは浅いですけどさすがに覚えてるやろ」というか、本日二度目の再会なんですけど。

僕の眼をじっくり見つめ「なーんだ薙くんか」と溜め息をついたかと思えば、もう一度見つめなおし「ラッキー。ちよつと外出てくれるかな？」一体どっちなんだ。

「何で？ 今から僕は昼食を買うんですけど」

「すぐ終わるから。一分もかからないよ」

「ならここで話せばええやんか」

「超」僕は慌てて沖田先生の口をふさぐ。こんなところで何を言い出すんだこの女は、余計頭が痛い奴だと思われるぞ。親から貰ったそのすばらしき容姿を台無しにするなんて真似はしないでく

れ……。って、手遅れか。

僕は竹須佐さんに、手のしわとしわを合わせながら、また暑い外へ出るようになった。

「なんのようですか先生」

「ちなみに莓大福は関係ないよ」そんなことはどうでもいい、というか夏間際の莓大福にそれほど魅力を感じない。

「超能力者、伊佐薙」

沖田先生の瞳の色が変わる。それと同時に回りを包んでいた莓大福オーラも消え、この空の下は暑いはずなのに、鳥肌が全身を包む。

「第一任務よ」

一体何をすればいいのだろう。まだ得体の知れないこの超能力、それを用いてどのような世界の悪の根源と戦うのだろう。僕は本当に迫り来る非現実にしたじろいだ。

しかし今更拒否しようなんてもう遅い。

僕は 異端者なのだから。

覚悟を決めて、口の中に溜まってもいない唾を飲み込んだ。

「あなたには明日から三日間安田太助になってもらうわ」

もちろん僕には理解できなかった、その人物が誰なのか。もつと一般的に言ってくれればいいのに。

シャーロック・ホームズとかね。それだとかっこよすぎるか。

その26 ヒーローはいつもピンチから(後書き)

第4章おわりです。

その27 初任務初日（前書き）

第5章のはじまりです、お待たせいたしました。

その27 初任務初日

「どう？ もう見つけましたか？」

「ええ、今もちゃんと追ってますよ」

「見つからないようにしーっかりお願いね」

はい、わかりました。と僕が返事をする最中に沖田先生は電話を切った。

なんだか空振りみたいで少し恥ずかしい。まあ誰も僕の通話なんて聞いてないと思うけど。

僕は見失わないように一人の少女を目で追う。沖田先生に言われた場所にきつちりと寸分の狂いもなく時間ちょうどに現れるその少女を。そりゃいつもの登校時間なんてそんな変わらないよな。

追っていることに気付かれないように五メートルほど離れ、さりげなく視線に入るかは入らないかギリギリの位置に少女を置き、なるべく人の影に隠れるように進む。

少女がエスカレーターに乗ればもちろん乗るし、動く歩道に乗ればもちろん乗る。付け加えれば電車も一緒の車両に乗る。

僕は彼女を尾行している。

それは昨日のこと。

引越しが終わり、竹須佐先輩と僕はコンビニで昼食を買いにコンビニへ行くと、たまたま沖田先生に遭遇して、組織に加わってから第一任務を与えられた。

それは三日間、市営地下鉄難波駅の四番ホームに毎朝七時一九分発の梅田方面の電車に乗る、小柄で団子のように髪を結んだ少女を学校まで見届ける。とのことだった。

絶対してはいけないことは二点あって、一つは少女に話しかけること。もう一つは、当たり前だけど少女を見失わないこと。

それさえ守れば何をしてもいいってことは尾行で間違いないよな。あの先生も何が安田三郎だ、誰のことかと思ったら漫画の登場人

物じゃないか。しかも脇役だし。もつとマシな例えがなかったのかと訊ねてみたくもなるけれど、あの先生には何を言っても無駄だろうな。

なんて、こんな無駄なことを考えるのは尾行二日目だからであって、初日はそれはそれは大変の一言だった。いや一言じゃすまない、それこそ四百時詰め of 原稿用紙を二十枚書けといわれれば少し苦勞しながらやり遂げるくらい、僕は緊張していた。

いつもの登校日より僕の携帯電話のスムーズは二時間近く早く鳴り、睡眠時間は強制終了させられる。僕はその鬱陶しく鳴り響くアラームを停止させ、もう一度毛布に体を包めた。なぜこんなに寝起きの毛布やら布団は気持ちいいのだろう、一生このままでもいいと思ってしまうほどに心地良い、それに途方もない中毒性がある。まるで誰かに催眠術をかけられているようだ、もう一度眠りなさいと……。

再び携帯電話が鳴る。

今度はスムーズではない、着信音だ。僕は適当に手を伸ばし、ゆつくりと携帯電話を耳に当てた。

「ぐつどもーにんぐ！そろそろ起きないと遅れちゃうわよ」

誰かと思えば沖田先生じゃないか、それにしても思いつき日本語丸出しな英語だな、いくら社会の教師だからといってもその発音はナシだろう。それに朝からそのテンションの高さは社会人としてはどうかと思うけど。

「こんな朝早くから何のよう？」僕はすぐにでも睡眠という安息に身を包みたいので、それほどイライラはしていないけれど、言葉に棘を含ませた。

「何の用じゃないでしょ、お仕事は？」

あー、と叫び、携帯電話をベッドに放り投げ、適当に髪を水で濡らしすばやくドライヤーで生乾きにさせて制服のズボンはチャックだけ閉めベルトは外したままでシャツをズボンの中に入れず金曜日

の時間割の教科書が入ったままのかばんを肩にかけ部屋の鍵もかけず部屋を抜け出した。

今から七時一九分までに難波か、ちょっと厳しいかもしれない。思っていたけどいざ難波に着くと予定時刻よりも10分程度早く着いた。

心臓の音がしつかりとくつきりと感じられる。それは時間に間に合わないから走ってきたので心拍数が上がっている、なんて単純なものじゃない。でもそれは少し考えるより単純なことなのかもしれない。

僕は緊張しているのだ。

これから起こるかもしれない出来事に。

先の見えない未来に

初めての出来事に

ただ怖気づいているだけ。

そりやそうだろ？ あんな念力でダンボール飛ばしたり、トラックを片手で上げるような奴らがいる組織に監視しなければいけない存在。それがどれだけ大きなものなのか僕には想像ができない。

もしかしたら大阪を仕切るヤクザの娘かもしれないし、中国マフィアに縁のある者かもしれない。そんなことよりもっと危惧すべきことは、その少女がもしかすると

超能力者かもしれない。

ただそれだけが僕には気がかりだった。

尾行していることを気付かれてしまったら銃口を向けられるかも知れないし、そのまま誘拐され海外に売り飛ばされたりするかもしれない。でもそんなことよりもっと僕の心を締め付けるのは、もしかすると

超能力を使われるかもしれない。

こんなこと言うと笑われるかもしれないけれど、あのふざけた『ダンボールアタック』なんて技が結構トラウマだったりしてる。そりや向こうは遊びの気持ちだったんだろうけど、こっちはそんな感

情ではいられなかった。猫がネズミと遊んでるなんて言うのも最もな例えだろう。どこかの仲良しなおてんば猫さんと利口なネズミさんじゃない、もちろんナチュラルな方だ。

軽くじゃれていて噛み付かれたらこの様だ。自分の運命を呪うよ。自分が超能力者であることを呪うしかないそんな心境。

笑っている膝を見て苦笑いながら、ふと携帯電話に表示されている時計を見ると七時一五分。このまま逃げ出すのもアリかな？ と思つて振り返ると、目の前に団子が見えた。

何でこんなところに？

本当の団子じゃない、髪を結ってるのか。つてことはこの少女が、それにしても小さい。

頭の上に握りこぶし程に団子を結つても一五〇センチくらいだろう、そのヘアスタイルでも僕の目線にギリギリ入るくらいだ。言つておくが僕の身長も一六〇半ばなので、あまり他人に小さいなどと口にできない。けれどその僕が小さいと言うのだから本当に小さいのだ。それにその服装は……僕がよく知る制服。京都文芸高の物、それに襟元の白いライン。ということは同じ学年ということか。

しかし何度見ても小さい、これだと小学生に間違われたつて文句は言えないだろう。

と心で唱えた瞬間、少女の少し釣りあがつた目が僕の目を捉えた。慌てて僕は視線を逸らす。まだ尾行を始めてもいないこんなところで、禁止事項に触れかけては笑い事で済まされない。会話をしないなんて簡単なことだと思つていたけど案外難しいのかもしれない。まあ、僕が余計なことを考えていたからこうなったんだけど。

これ以上ないほどの人口密度の車内。肌と肌が触れ合うほど近くに尾行相手がいる。なんて度胸のある尾行者なのだろう。いや、僕には度胸なんてこれっぽちもない。

電車が揺れるたびに触れ合う体。その度に心臓が止まるような感覚に陥り、ゾツとする。恐らく難波駅から新大阪駅という約十五分間で僕の寿命は五年は減つただろう。

終電の新大阪駅に着き、ドアが開くと同時に人が炭酸飲料の泡のようにあふれ出る。その中からひとり、その流れを無視するように早歩きし、人の泡に埋もれていく。僕はそれを見失わないように、そして不自然ではない速度で歩き、横目で少女を追う。少女は短い足を細かく素早く動かしながら速度を上げていく。僕はできるだけ足を伸ばし、かかとから地に着きつま先を蹴り速度を上げる。

それにしても何でこんなに急いでるのだろうか？　ちらほら見かける同じ制服の生徒は急ぐことなく人の波に溶けて歩いているのに、ただのせっかちなのだろうか？　それとも付かれている事に気付いて僕を撒^まこうとしているのか？　でもただ速いだけで僕を惑わすようには歩いてるように見えない、やはりただトロトロ歩くのが嫌いなだけだろう、僕もそうだから気持ちはわかる。などと変な親近感を抱いて気を抜くとまた先ほどのように寿命を縮めながら登校しなくてはならないので、僕は最低限のことだけはする。先ほどのように少女の横に立つことのないように。

乗り換えの新大阪駅ではさっきみたいな超至近距離から逃れるため、少女が並ぶ列の最後尾に並ぶことに成功し、車内でも手が届く範囲でいることはいたが、僕と少女の間には人の壁と言うものが何重にも重なっているので見つかることはないだろう。

僕は尾行中のひとときの安らぎを、京都に向かうにつれて広がる畑ののどかな風景を見つめながら過ごした。

そののどかな風景がコンクリートに包まれ始め、学校が建てれるんじゃないかと思う程広い線路を通りかかると京都駅に到着した。

少女は京都に着いても忙しなく足を動かし、エスカレーターに乗り右端をすり抜けていく。僕も見失わないように追う。エスカレーターに乗って気づいたけど大阪じゃみんな右寄りに乗っていたのに、京都だと左寄りなんだな。

駅を出て、通学路になればもう今までの緊張状態を続ける必要もないだろう。周りには同じ制服の生徒もたくさんいるし、もちろん僕も少女と同じ高校の制服をまとっているのだから彼女に着いて歩

いたってどこも不自然はないはずだ。ここで通学路からそれた方が変な奴になってしまう。

緊張の糸が切れると、春から夏に変わり始める風の匂いが感じられずごく清々しかった。気温も湿度もいい具合だし、こうやって無事、銃撃戦や超能力に遭遇することなく登校できた事をうれしく思うよ。今日は雲少ししかない晴空だし。

そんな感じなので昼食は教室じゃなく中庭に出て食べようかな？と季節の変わり目で上機嫌になっていると、僕の目の前にハンカチが一枚落ちていた。誰か落としたのかもしれないと思い、何の疑念もなくそのハンカチを手に納めると、目の前に頭上団子極小少女が僕を見つめていた。

目が合うと少女は僕の方へ歩みを寄せ「あら？ どうも」と言っ
て、呆然とハンカチを持つ僕の手から華麗にハンカチを奪っていった。

もしかしてばれたのかもしれない、僕が尾行者であることに。なんて間抜けな事をしてしまったんだ、普通尾行する相手のハンカチを拾うか？ 拾わないだろう？ 華麗にスルーに決まっている。

でも気づかれてないよな、顔は見れなかったけどハンカチを返したとき『尾行してるの？』なんて台詞を吐かれなかったもんね。よし大丈夫、気を取り直してあと数百メートル先のゴールを目指しましょう。

気持ちを入れ直し前方を見ると少女は一〇〇メートル程先の曲がり角を右折していた。相変わらず歩くのが速い女だ、そう言う女が嫌いだったのに。僕は駆け足で少女を追った。

午前中の授業を終えた昼休み。

禁止事項をギリギリ守り任務初日を終えた僕は、歩みを中庭へ向
けず、あの忌々しい職員室へと向けていた。それも不機嫌に。

せっかく穏やかな風に包まれながら優雅な昼食を取ろうと思って
いたのに。

3 時限目の社会、もちろん担当は沖田薫、の授業が終えると、教壇から沖田先生が「昼休みが終わったら職員室で待ってるからね。楽しみにしてるわ」と色っぽく言うものだから、クラスの奴からは変な目で見られるし、禁断の恋やら何やら盛り上がられる始末。その色っぽい声も許せないけれど、もっと許せないのは『楽しみにしてるわ』だ。は明らかに余計だろ！あの先生の頭には一般常識というものが大きく欠けている。

その怒りを込め職員室の扉を開くと……。いない？隅々まで見渡したけれど、やはりいつも花を身にまとっているような女性教師はここにはいない。となると……あそこか。

僕は早歩きでその場を立ち去り、素早く隣の部屋の扉を開いた。

「ぐっどいぶにんぐ！ 薙くん」

「アフタヌーンですよ沖田先生」と僕は溜め息まじりで突っ込む。「あつ！じゃあ、あの雑誌ってこんにちわってことなのね」

もういいから本題に入っていていいですか？あなたの天然にはついていけないので。

「ごめんね。じゃあ気を取り直して、薙くん！」

つと、またいきなり目の色が変わりやがる。どうやってたらこんなスイッチの切り替えができるんだ？

「どうだったかしら？あの子普通に登校してたかな？何事もなかった？」

「はい、なぜ尾行しなあかんのか疑問がわくくらいの普通っぷりでしたよ」

あの子の変なところと言えば妙に身長が小さいところと歩くのが速いっただけだし、変わったことも特になかったよな？ハンカチを落としたくらいだし。

「あの女子は何者なんですか？うちの学校と一緒にやし。なんかとてつもない裏事情抱えてるんですか？」

「べーつに。そこまで怪しい子じゃないわよ。薙くんの方が怪しいくらい」

ってそんな笑顔で言われても、それにそれはどういう意味なんだ？

「薙くんに危険が及ぶ事はないから安心して。ただ何かあれば報告してほしただけだから」

その『何か』を聞きたいんだけど……。ってどうせ訊いても答えてくれないだろうな。

「あとコノカっちと天照さんのことだけど」

「へっ!？」

「あれ？　もしかして忘れてたの、この薄情者」とからかいながら僕の肩を持つて揺さぶるのは別に良いんですけど、ちょっと揺らし過ぎです、これ以上は脳が揺れますから。

「正直忘れてました。崎野さんも天照がいるのかどうかも」

「初任務で緊張してたんだろっね、仕方ないっか。コノカっちはただの風邪さんで天照さんは任務中だからお休みよ」

崎野さんが風邪を引いてる？　こんなところでグダグダやってる場合じゃない、早く寮に行ってお見舞いをしなければ。

「じゃ、沖田先生、明日もモーニングコールお願いします!」それだけ言つて、背を向けると、「ダメよ」と言う声が背中に響いた。一瞬その声の違いに沖田先生が発したのか疑問を持ったけれど、この教室には二人しかいない。さすがに教師にモーニングコールを頼むのは調子に乗りすぎたかな？

「コノカっちのところに行っちゃダメよ。風邪が伝染^{うつ}って任務に支障が出ると困るからそつとしてあげて。明日には治せるようにがんばるから、もちろん組織がね」と先ほどの声を忘れさせるようなウインクをして微笑んだ。

まあ、一日で治るような風邪なら大丈夫か「わかりました、大人しく昼飯でも食べときます」

「了解!」

扉を閉め教室に戻る廊下で、ふと校内がいつもとは違い静かなことに少し不安になりながら、初日の任務は無事遂行された。

その28 二日目の転校生

まあそんな感じの初日だったんだけど、本日二日目は何事もなく終われそうだ。

少しだけど、ほんの少しだけ気になった事は、彼女は昨日ほど歩く速度が速くない事だ。昨日はそれこそ人ごみの中を矢を射るような競歩並みのスピードだったけど、今日は人の波にきれいに溶け合い、同調するような速度だ。

なんだろう？ このギャップの激しさは。僕のように速く歩く性格ではないと言うことか？

僕は人の歩調に合わせて歩くことが苦手だし嫌いだしストレスがたまる。ゆっくりとまではいかないけれど、人と同じような速度でよく歩けるな。少しでも、一分一秒でも早く駅のホームに着けば、もしかすると座席をものにすることができるかもしれないし、電車に一本早く乗れる可能性だってある。良いこと尽くめじゃないか。まあ早く学校に着いたからといってやることなんて特になんないんだけど。

早く学校に着く？

そうか、あの子は日直だったのか。だとしたら急いで学校に向かう理由があるってことだ。日直ならいつもより一〇分程早く来て学級日誌やら、黒板消しや教室の空気の入れ替えとかしなきゃいけないもんな。

ちなみに昨日、尾行を終え教室の席に着いたのが八時一五分くらいだったからこの推理で間違いないだろう。まあ推理なんて呼べる程のものでもないけど。

でも日直の仕事をこなすなんて真面目なんだな。実際、日直の担当になって一〇分前に来て仕事をこなすなんて、うちのクラスじゃごく少数しか行っていない。

そっぴや、うちの学校って全国でも指折りの進学校だったな。僕

の属する学科は勉強があまり得意じゃないけれど、他の学科はそうではなく得意の部類に入るはずだ。イコール真面目ってことか。

勉強ができる奴が真面目なんて偏見がすぎるかもしれないけれど、日本の人口の総対比で勉強ができない奴とできる奴、どっちが真面目な奴が多いかというと明らかに後者だろう。例外があることは言うまでもないけれど。

でも尾行する上で、相手が真面目に日直をこなすかどうかなんて関係ないか。こいつが朝少し早く来て日直をこなすなら、僕はいつもより二時間早く起きて意味不明の尾行をしているのだから、こいつよりも僕の方が圧倒的に真面目だろう。いや、大真面目もいいところだ。

二日目の尾行は団子頭と目が合うことやハンカチを拾うことなく終え、もちろん彼女にも変わった動きは見られなかった。やっぱり朝のニュース番組の占いの結果が良かったからだろうか？　ちなみに昨日は11位で今日は3位と中々良好だ。

僕は学校に着いてから、教室ではなく職員室へと向かった。昨日のように、脳が少し溶けた女教師から昼休みに呼び出されることを防ぐ為だ。

他の奴らはわからないが、僕にとって昼休みは一日で最も楽しみにしている時間なのだ。約三十分も休憩時間があれば、十分すぎる程雑談もできるし、運動場でサッカーやドッチボールなんかもできる。少し汗臭くなるだろうが、それは高校生の特権みたいなものと思つてそつとしておいてほしい。

そんなことよりも、朝一番で先生に会って確認しなければならぬことは他にあるんだけどな。

何の変化もなく、ただつきまとっただけで終わった今日の尾行のことをどう報告しようかと考えながら職員室の扉を開けると……。やっぱりいいか。

とぼとぼと職員室を出て、いつも不穏な空気が流れる隣の教室の扉を開いた。

『ぐつどもーにんぐ。薙くん』といつもなら間髪入れず聞こえてくるその声が聞こえてこない。けれど、沖田先生の姿はそこにあった。

沖田先生は、僕が教室に入ってきたことに気づかず、黒板に白いチョークや赤いチョーク、黄色いチョークで何やら描いてる。一体何してんだ？

「おはよう、沖田先生！」ちよつとテンション高めで言ってみたのだがまるで反応がない。

僕はちよつとした悪戯心で、黒板消しを右手に持ち、沖田先生が描くものを一つ消してみた。そーつと、一枚ずつ花びらを千切るように。

残り一枚となったところでやつと沖田先生と目が合った。ーが、そんな悪戯する余裕を一気に消し去るような目で僕を睨みつけた。

「何をしてるのかな？ 薙くん」

僕は沖田先生が描いた、黄色く塗られた円の周りに赤色の角が丸まった長方形の絵をみつめながら、「一枚ずつ花びらを千切って、乙女チックに恋占いでもしてみたんですけど……」と遠慮がちに言った。

沖田先生の顔つきが更に凄む。そんな状況の説明をしているような場合じゃないようだ。

「すみません、ちよつとした悪戯やったねん」

「誰と」とぼそつと沖田先生は口からこぼした。

どういう意味だ？

「誰と誰の恋占いをしていたのかしら」凄みながら言う台詞じゃないだろう。

でも思っていた通り、やっぱりそう言う質問か。さて、どうやってこまかそう……。

「いや、つい口に出ただけで恋占いをやってたわけとちやいますよ」

「じゃあ、なぜあなたはあたしが描いたお花さんの花びらを消し

ていったのかしら？　しまいにはおしべさんとめしべさんまで消してしまう勢いでしたよね」

あの絵のどこにおしべとめしべが描かれていたのかは気になるところだけど、今はそれに対して突っ込める雰囲気じゃない。どうしよう、全部が全部嘘なのに。僕はただ、教室に入ってきてても気づかない沖田先生に対して、かわいく小さな悪戯をただけなのに、まさかこうなってしまうとは。もうこの人には悪戯なんてするべきではないな。

「何で消したの？　さつさと答えなさいよ」怒鳴りはしないが限りなく小さく低い声でつぶやく。こんな声を出すのならいつそ怒鳴られた方がつきりするよ。

こりゃ言い訳の仕方によってはえらい目に遭いそうだな。さて、どうしよう……。

あつそうか、この手があった。この際訊きたかったことを訊いてしまえばいいんだ。ナイス僕、ナイス発想の転換。

「恋占いとちゃうねん。実は言うと、崎野さんが今日来るか来ないか占っててん、こうやって」

僕は黒板に描かれた、幼稚園児でも描けるような花の青色をした花びらを一枚消して、「来る」そしてまた一枚消して「来ない」

黒板を見つめながら、最後の一枚を消して「来ない」

「沖田先生、崎野さんは今日休みっぱいですね」

振り返り沖田先生を見つめると、うつむきながら体を小刻みに震わせている。どうやらやってはいけないことをしてしまったらしい。今にも『何で消しちゃったのよ！』と言う言葉が飛んできそうだ。

僕はその場から逃げ出す為に、ゆっくりと後ろ歩きで出入り口まで近づき扉に手をかけた瞬間、思ってもいない声が聞こえてきた。気色の悪い笑い声と同時に

「やっぱりアホやであいつ！　何が『来る、来ない』なよ」いくら顔が似てるからと言って僕の口まねをするな。

「このか、ずっとここにおったのにな」ふふふ、と聞こえてきそ

うな程、柔らかい声だ。

その声の方向に視線を向けると、窓際の一番隅の椅子に二人がちょこんと座っていた。にやけながら。

「あれっ、何でここに？ 崎野さん、もう風邪大丈夫なん？」

「風邪？ うん、大丈夫。ばっちし」

その間は何だ？ と訊いてみたくなっただけど、まだ風邪が完治していないってことだよな。

「しんどなったら言ってな。保健委員の僕がすぐ案内するから」

「あり」

「薙くん！ ちょっとそこに座りなさい！」

せつかく、崎野さんが感謝の言葉を述べようと口を動かしている途中にむやみやたらと叫ぶなよ。くそ、耳がキーンと鳴り響く。

「コノ力つちと那実くんはちよつと廊下に出て。薙くんとこれから大事なお話があるから」

二人はその声の恐ろしさに、何も言わず、すばやく席を立ち教室をあとにした。

僕だけに話す大事な話とは何だろうと先生の話に耳を傾けていたけど、どうやら黒板の絵を消したことに大変お怒りのようで、あの花はすみれだったの、あの花は菜の花だったのとか、あの花たちを描くのになんか分かったかと思ってるの！ など、そのようなことずつと怒鳴られ続けた。本当に今日の占いは三位なのか？

そして沖田先生の怒りが冷めないまま予鈴が鳴り、僕はそれと同時に教室から飛び出し「予鈴が鳴ったので失礼します！」と逃げ出した。もしかすると追いかけてくるのかもしれないと思ったけれど、さすがに予鈴が鳴ったのに職員室へ戻らない程の常識外れではないようだ。

全速力で廊下を突っ走り、右カーブを曲がった瞬間、目の前に人が突っ立っていた。僕は危うくぶつかりそうになったので、無理矢理体を傾け、廊下を転びながらその人間を避けた。

危ないところだった、もう少しでぶつかって怪我するかもしれない

いところだったな。やっぱり廊下は走ると危険だ。

「無様ね」

廊下に転がり、ゴミを払う僕にそんな言葉を吐く人間はこの世に
那実とこいつ以外にいないだろう。

「天照さんか、もう任務終わったん？」

「そうよ。あなたはまだ途中なのよね」天照は一度も僕に目を向
けることなく冷えきった声で続ける。「いくら又ルイ尾行だからと
いつて気を抜くと痛い目に遭うから気をつけなさいよ」

「なんだ？ お前僕を気遣ってくれてるんか？」

さつきよりさらに冷えた声で、さらに絶対零度の瞳で睨みつけ、
一言「そうだったら愉快ね」と吐き捨てた。

そんなこと言ってるお前の雰囲気は全く愉快そうじゃないんです
けど。

そうだった、こいつに訊いておきたいことがあったんだ。こ
ういうことはこいつにしか訊けない気がする。

「なあ、天照さん」

僕が名前を呼んでも『何？』とも言わないし、顔もこっちへ向け
ない。こいつは年中不機嫌なのか？

かまわず僕は話しを続ける。やりにくいにも程があるけど。

「最近、というか昨日からこの学校、妙にいつもより静かな気が
せえへん？」

「どういう意味？」

やっと反応してくれてたか、そうじゃないと話しも進まないしな。

「いや、そのままの意味だけど」

「あなた、今二年生がどこにいるか知ってる？」

何だ？ その質問は。意味深すぎるだろ。どこにいるも何ももち
ろん教室だろう、学校に来て行く場所などそこ以外にないだろう。

でも、そんな簡単なことを訊ねる天照じゃないし。

もしかして、二年生全員誘拐されたとか？ 一番超能力者が
多い二年生を誘拐したのかもしれない。悪の組織もいちいち超能力

者を探すのが面倒だから全員を誘拐したなんて……。

「誘拐されたとか？」と言葉を発した瞬間、ものすごい速さで拳が飛んできて、目の前で止まった。その風圧で僕の前髪は少し揺れたけど、驚いた声や、ガードをするような身構えは一切できなかった。気がつけばそこに拳が、って感じた。

「ふざけてるの？ それとも真剣？」

「こ、後者です」いつもならここで、『ふざけてる』と選択してさっきの言葉をなしにするのだけど、今の僕にはごまかす精神的余裕がない。それともう絶対占いを信じる気にはなれない。

「どうしようもなく痛い奴ね。生んでくれた親も頭を抱えすぎて悶^{もた}えてるでしょうね、きつと」

なんで他人のお前が僕の親を敬う必要がある？ ほっといてくれ。それに親はもう僕のことなんて諦めてるよ。

「二年生だけど、修学旅行よ」

「修学旅行！？ もうそんな時期か、どこに行つたん」

「沖縄よ」

沖縄？ 私立の高校なのに国内だなんて保護者が怒りそうだけだな。

「帰ってくるのが日曜日の夕方、それまでこの学校は妙にいつもより静かなはずよ」

いちいち、嫌みな奴だな。人間ミスが付き物だろう？

僕は少しふてくされながら教室の扉を開けた。

「遅いぞ、伊佐、それに天照。もうHRは始まつてるぞ」

あれ？ いつの間に本鈴が鳴つたんだ？ 僕は天照の顔を見て、どうやってごまかそうか考えてると、先生の目をみつめて離さない天照が、僕といたときは全く違う態度で、仕草で、言葉で、言つた。

「すみません、遅れてしまつて。廊下を歩いていると偶然階段から彼が転がり落ちてきたもので」

天照は僕の膝を指さした。天照の目を見ると『ズボンをまくりな

さい』と言った気がしたのでまくると、いつの間にか膝に擦り傷ができています。さっき曲がり角で天照をよけようとして廊下に転がったとき膝を擦りむいてたのか。

教室からは『さすが薙』なんて言葉が飛び交っているが、いちいち突っ込んでいたらキリがないのでスルーだ。

「それで保健室に行くか行かないかで少し話しをしていたら遅れてしまいました。申し訳ございません」と言って天照は綺麗な礼をした。こいつは一体どこまで猫をかぶれば気が済むのだろう。

「そういうことなら仕方がないな。早く席に着きなさい、今日は転校生が来てるから自己紹介をしなければいけないだ」

転校生？ 僕は疑問に思い、席へ移動しながら教壇を見ると、髪をゆるくカールさせた女子が微笑みながら僕に小さく手を振っていた。

そうだった、崎野さんが転校生だってことをすっかり忘れていたよ。

その29 二日目の陰鬱

僕と天照が席に着くと、先生が口を開いた。

「じゃあ自己紹介してもらおうか、崎野くん」

「はい、今日からこの学校に通うことになった崎野心花といいます。先生からこの学校は色々な都道府県から来てるって聞いてるんで楽しみです。よろしくお願いします」

顔を赤らめ、少し慌てながら小動物のような身ぶり手振りで話す崎野さんの姿は本当にほれほれする程かわいらしい。

「そうしたら質問タイムといこうか」と先生が言った瞬間、手が雑草のように無数にのびた。言うまでもなくほとんどが男子だ。そりや女子もいるけれど、見た感じ八対二の割合かな？

みんな気づいてないのかな？ 崎野さんが学校の近所の花屋の娘だってことに。登校時にほとんど毎日、休むことなく店の手伝いをしていた崎野さんのことを。

先生は適当にのびる手を指差し「じゃあ加藤」と指名していく。

「崎野さんはどこに住んでたの？」

「中学校のときは高槻でそれから京都に引っ越したねん」と加藤に微笑みかける崎野さん。

おい、今のでなんだ加藤？ その顔は。恋に落ちましたと物語ってるかのようだぞ。くそ、ニヤけやがって。

次第に手を挙げる者が少なくなっていく、口々言いたい放題になつてきた。

「好きな男のタイプは！」「何のドラマが好き？」「好きな歌手は」「嫌いな芸能人は」それに対し、崎野さんは律儀に答えようとするが、当然のように間に合うはずもなく、教室は質問をする男子の声で溢れた。

「なぜ、昨日じゃなくて今日転校してきたのですか？」

「風邪をこじらせてしまったので一日遅れたの、だから今日自己

紹介することになったん」

「じゃあ体調悪くなったら言つてよ。俺が保健室に連れて行くからさ」

だまれ加藤、その役目は僕と決まっている。

「さつき天照さんに手を振ったけれど友達なんですか？」

僕にも手を振っていたぞ。

「えーっと、簡単に言えばそうなるかな？　ちなみに薙くんとかーくん、いや那実くんもお友達だよ」

その瞬間、僕と那実に男子の視線が集まった。男ってこうだから嫌なんだよ。なんでもかんでもむさ苦しいんだよ。那実なんて気づくことなく窓から景色なんか眺めてやがる。早く気づけこの状況に、このアホ。

先生はこの異様な空気を察したのか、そこで質問タイムを強制的に終わらせ、崎野さんを席に案内し朝のホームルームは終わりを告げた。

その後、クラスの男子からは色々と質問攻めにあつたり『禁断の恋の次は浮気か』なんて訳の分からないことを言われたり散々だった。それ以上に散々なのは崎野さんだろう。休み時間になる度に机の周りに男子が集まり記者会見のような目に遭つてるんだから疲れるだろう。

なるほど。高嶺の花の天照より、ちょっと天然でかわいらしい転校生ってわけか。確かに崎野さんは天照よりは話しやすいよな。

でも彼女にもどこか人を近づけさせない、これ以上踏み込ませない何かが漂っている気がする。まあいつもの勘違いだと思っけど。

そして昼休み。僕は保健室にいた。あの擦り傷が悪化したのだ。これくらいどうってことないだろうと思いついておいたのがいけなかったらしく、砂利がこびりついた傷口は菌だらけだったみたいで、しまいには痛みが伴いだした。膝を水で洗い、沁みる消毒液に小さな声でうめいて、細菌からがこれ以上僕の膝に住み着かないように絆創膏を貼って保健室を後にした。

そういえば今朝、沖田先生に尾行の報告をしていなかったな。そのまま職員室ではなくその隣の部屋に向かった。どうせあの先生は職員室じゃなくってこの部屋にいるんだろう？　と思い、扉を開くとそこには崎野さんがいた。どうやら僕が入ってきたことに気づいていないらしく、机に向かい何やら手を動かしている。転校の手続きでも書かされているのかと思い近づいて机の上を見てみると、そこにはトカゲがいた。見かけによらず爬虫類は苦手じゃないんだ、って小学生じゃあるまいしトカゲと戯れるのはどうかと思うけど。すると崎野さんはスカートポケットに手を入れ、何かを取り出し、それをトカゲに向けて打ち込んだ。

僕は戸惑い、絶句し、ただその動きを見つめていた。

右手に持たれたカッターナイフはトカゲに向かい勢い良く刺さり、そして勢いよく引き抜き、また刺す。

この娘は何をしてるんだ？　不気味に思い、僕は崎野さんと視線を合わせて話をするため屈み、顔を見つめると、彼女はうつすら笑っていた。でもその笑みには楽しいやら憎しみやらそういう感情と言ったものの類は含まれていない気がした。僕はその顔を見つめることでやっと正気に戻り、トカゲを取り上げた。崎野さんはトカゲを取られたことに気づいていないのか、何もいない机を刺し続けるん？　何だこのトカゲ、やけに弾力性があると思ったらゴムでできたおもちゃじゃないか。そりゃ本物なんて刺さないよな。僕は机に手の平を置き崎野さんに話しかけた。

「こんなとこで何してるん？　トカゲのおもちや串刺しゲームなんてあんまり趣味がええとは思われへんな、僕が言うのもなんやけど。さあ教室に戻るか」

返事はなく、崎野さんがカッターナイフで机を刺す音だけが教室に響く。

どうしようか、どうやら反応はなさそうだし、仕方ないけど沖田先生でも呼んでくるか、あの人なら彼女がこうなった理由の少しくらいはわかっているだろう。

机から手を離そうとする直前に、刃物が身に刺さる感触を手の甲に感じた。確認してみると、やっぱり刺さってやがる。

手の甲には折れたカッターナイフの刃が刺さっていた。血がにじみ出る。

崎野さんの力が弱かったのが幸いしたのか、それとも刃こぼれしてよく刺さらなかったのか、両方だろうけど、そこまで深くは刺さっていない。でも今は麻痺しているだけで後から痛くなるのかもしれない、そう思うとテンションが下がってきた。って刺されたときに下がるのが普通か。

机ににじんだ血が崎野さんの肌に付くと、崎野さんは眠りから覚めたように目を大きく開き、僕の顔と傷口を交互に見て叫んだ。

「血いや！ 血が出てる！ わーっ」あの？ そろそろ突っ込んでいいでしょうか？

いや、突っ込むべきではないか、崎野さんは僕を刺したことに気づいていないんだし、それならその方がいい。僕にとって崎野さんに刺されたくらいじゃこれからの付き合いに何の変化もない（どうやらあの様子からすると訳ありのようだし）。でも崎野さんが自分で刺したことを知るとこれから気まずい関係になってしまうかもしれない。それは大問題だ。地球環境なんて目じゃないくらいの問題になってくる。ということで僕は慌てながら「大丈夫、これくらい唾付けときゃ治るから」そう言っ教室から、崎野さんから逃げ出した。

教室を出たことは良かったとして、この傷口の手当はどうしよう……。保健室に行つてこんな傷口を見せると保健の先生が黙ってないだろう。速攻生徒指導の先生とバトンタッチされ、誰にやられたか尋問が始まるに決まっている。かと言って放ったらかしにしていると膝にできた擦り傷どころの痛みじゃないのは明らかだ。

とりあえずカッターの刃を抜いて洗面所で血を流すとするか。そう思い洗面所に足を進めようと思ったとき、肩に手を添えられた。

誰だ？ もしかして崎野さんが心配して追ってきたのか？

振り返ると天照がいた。何でこんなところにいるんだ？

「手を怪我してるでしょ？ 私見ていたんだから。ちよつと来なさい」

そう言つと天照は僕の返事を待たずに、僕の手首をつかんで駆け出した。

「一体どこに行くんだよ！ それにそんな体動かしたら血が余計に出るだろ」

「いいのよ、あんたうるさいからちよつと黙ってなさい」

何が『いいのよ』だ？ お前の体ならその言い方はわかるけど、この右手は僕の手だ、お前にとやかく言われる筋合いはないぞ。

なるべく校内の人が少ないところを天照は誘導し、二人きりで合う場所としてはかなりベターな部類に入る場所へ連れてこられた。

そこは体育館裏。少量の木が生えていて、東寺を見に来た観光客の声も少し聞こえてくる。けれど辺り生徒の姿はない。

「体育館裏？ 告白つてわけちゃうやろな」

「本当にあなたはうるさい。他愛のない冗談を言う暇があれば早く右手を出しなさい」

僕はこれ以上こいつを不機嫌にさせることに危機感を覚え、大人しく右手を差し出した。

天照は僕の右手の上に手をかざし、大きく深呼吸して瞳を閉じた。こいつは何をしてるんだ？ そんなわけのわからん宗教くさいことをして治るわけがないだろう、いたいいたいの飛んでいけ、なんて子供だましで癒える様な傷でもない。

「はよ止血せー」

天照は閉じていた瞳を大きく開くと、僕にかざした大きく開いた両手の平から人肌より少し暖かい、けれどお風呂だと少しぬるい程度の温風を出した。僕は思わず口を閉じる。

この風に色があるなら金色なんだろうな、と思っっているうちにみるみる傷は映像の巻き戻しのようにふさがり、痛みも和らいだ。

なんだこの神話的な出来事は、どこかの宗教に出てくる神ではあ

るまいし。そこで僕の手を医療器具なしで手当てしているのは普通
とは言いがたいが女子高生だ。僕は何を目の当たりにしているのだ
ろうか。

「これで傷はふさがったでしょう」

何度見ても、どこをどう見ても僕の手だよな？　僕は天照の手に
カイロ的な物が張り付いていないか確かめるために、その手を雑に
握り、甲と平を何度も見直した。

だって可らしいじゃないか、普通の手から生暖かさを感じたんだ
ぞ？　カイロかドライヤーくらいしかそういうことはできないじゃ
ないか。

すると天照はその手を引っ込めて、僕を罵倒することはなく、笑
った。

「何で笑ってんねん」

「似てたのよ」笑ったのはほんの一瞬で、すぐに僕の手から逃げ
るように手を振りほどいた。

「師匠に、というか先生にね」

「先生？　沖田先生か？」

「さあ、想像だけなら好きにどうぞ」そう言つて天照は黒い髪
をなびかせ走り去つていった。

それにしても不思議だ。これが天照の超能力か、こんなの誰に言
つても信じてくれないだろうな。見れば誰もが信じるけれど。

僕はさっきまで傷ついていていた右手をじっくりと見てみたがどこに
も変わりはなく、匂いもかいでみたが何も香っていない、ただ傷が
引つ付いた痕だけが残っていた。なんて便利な能力だろう、今まで
見た超能力の中で一番世の中のためになるんじゃないか？　傷口を
ふさぎ治したのだから癌細胞とかそういうのも手を添えるだけで倒
せるかもしれない。世の中じゃなくて人のためか。でもあいつは確
かあの黒猫も治したんだよな？　だとしたらそれは人以外にもため
になるって訳か。もしかすると草木にも適用できるのかもしれない。
そんなことを考えながらゆっくり歩いていると予鈴が鳴り、また

しても僕の昼休みは何の楽しみもなく終わってしまった。でも一部の人からすれば非常に楽しみで好奇心をくすぐられるかもしれないけれど。

その次の授業には天照は現れなかった。一体どうしたんだろう？僕の怪我を治してすぐに駆け出して行ったのに。教室ではないどこかへ行ったのだろうか。また任務か？ あいつも忙しいな、まああれだけの超能力と体術の能力の高さを持つていればうなずけるけど。

その後の崎野さんは特に変わった様子もなく、いたって普通。僕の手が怪我をしていない様子を見て、あれを夢か何かだと思い込んだのかもしれない。でも崎野さんは天照が能力者ってことは知ってるんだよね？ そこまで考えが回らないか。こちらとしても幻想の類と思ってもらうほうが助かるし。

そして放課後、寮にカバンやらを置いて着替え、僕は暇つぶしにコンビ二へ向かった。昨日はバタバタしていたので、いつも楽しみにしている漫画週刊誌の立ち読みを逃したからだ。まだ売り切れていなければいいんだけど。

部屋を出て、裏門を抜けたとき携帯電話が震えた。

クラスの奴かな、放課後遊ぼうとか？ 今日はずり気じゃないんだけど……。

着信者表示を見ると『三月香代』と表示されている。いつの間に登録したんだろう？ あの人に番号を聞いた覚えなんてないけど。

それに修学旅行中だろ？ 何の用だ？

「はい、どうしました三月さん」

「あつ、薙さん、どうも。今ちよつといいかしら」この人の声はいつ聞いても控えめという言葉がよく似合う。

「はい、大丈夫ですよ」

「えつと、心花さん、崎野さんに何か変わったことはなかったかしら？」

その言葉を聞いた瞬間、背中に氷を入れられたようにヒヤツとし

た。

なんて確信をつく言葉なんだろう。何かあったなんてものじゃない、カッターナイフで右手の甲を刺されましたよ。こんな経験一生味わえないだろう、味わいたくもないが。

「嘘をついても無駄ですよ薙さん。私は彼女のことを知っているから、じゃないとこんな質問しないでしょ」受話器から悟るように響く三月さんの声は優しさ以外何も含まれていないような気がした。なら言ってしまうしかないだろう。

「実はカッターナイフで手を刺されました」

「えっ！ そんなことされたの！？ 私もさすがにそこまではされたことはないわ」

「まあそれは事故に近いんですけど。僕も驚きましたよ、狂ったようにトカゲのおもちやにカッター向けてるんですから」

「カッターねえ、いつもはハサミなんだけどね」

「ハサミ？」

「そう、植物を切り刻んでいるわ。もちろん狂ったようにです」
狂ったように……。その言葉の恐ろしさに身震いがした。

あのときの彼女は何も耳に入らず一心不乱にカッターを振りかぶっていた。目標物を失っても。

一体彼女の心の、どこからそこまでの破壊衝動が生まれているのだろう。

「心花さん、多分学校が怖いんだと思います」

「学校が、怖い？」

「ええ、私も詳しい事情は知らないのですが、この学校に、この組織に来る以前、中学生の頃に深い傷を負っただけは聞きました。その後は高等学校に進学することなく、学校近くの花屋で働いていたと聞かれています」

そういえば超能力を使える条件として、心に普通では考えられないほどの傷を負わないといけなくて、でもそのことをよく思い出しってしまう困った脳内をしていなければならぬのかなんとか。さら

に、それに耐える心の強さを持つていなければいけないんだよな。なんとも矛盾しまくった条件だ。

「そういうことがあったなら話しは早そうですね。心花さん、恐らくまた夜か深夜辺りにあのような発作を起こす可能性があると思うんです」

「そういうことが前にもあったんですか？」

「ごくたまにですけど。でもその発作の法則性みたいなのがあって、起こってしまう日のほとんどは、次の日に新しい出会い、つまり知らない人と関わらないといけない日だったらしいのです」

「なら、花屋の仕事なんていつも知らない人と会ってるじゃないですか」

それに崎野さんは店に行くことのない、登校途中の僕に微笑みかけてくれた。だとしたらあの笑顔はなんだったんだろう。

「関りの度合いが違うわ。ただすれ違う程度なら大丈夫らしいのですが。お店だというっしやいませ、ありがとうございました。それと話しをしたとして少しの雑談でしょう？　でも学校に行くとなると違うでしょう？」

「確かにそうですね……。ってことはこの組織の人と会った日もそういうことになったのかも」

「普段ならその係りは私がしなければいけないのですが、今は沖縄です」

確かにそういう、人の心を和ましたり癒したりするには三月さんはうってつけだろう。清楚な話し方もそうだけど、天照のように嘘偽りじゃない、心の底から感じる品位ある優等生的な態度、それとなんといっても人を落ち着かせるオーラは絶大だ。

「なので、私の変わりに崎野さんの衝動を抑える役目を行なうて欲しいのです」

「僕がですか？」

何で僕なんだ？　あなたのそのすばらしい性質を僕はひとつも持ち合わせていないぞ。面倒くさがりだし、脱力感あるし、和みや癒

しなんて言葉を一文字すら持つていないぞ。

「そうです。あなたなら出来るでしょう」

「僕が人を慰めるなんて出来ると思います?」

「以前のあなたなら無理でしょうね」

笑いながら言ってるけど、結構ひどいこと言ってますよ三月さん。

「でもあなた好きなんでしょう? 崎野さんのこと」

なんでそれを!

「見ていればわかるわ。それにあなたは先見ですから」

千件? そんな莫大な店舗数を構えているのはあれしかないだろう。でもあなたはつてどういうことだろう?

「コンビニですか? それやつたら今向かうとこですけど」

「ふふつ、がんばってくださいね。お土産買ってきますので」

「ホンマですか? ありがとうございます」

それではいずれ、と言つて三月さんは電話を切つた。

結構安請け合いしてしまつた感じがするけれど、仕方ないか。好いた人の情緒不安定を和らげる役目、いいじゃないか、崎野さんとの関係を深めるチャンスだと思えば。

電話終了直後は楽観的でいれて気分も良かったのだけど、コンビニで漫画週刊誌を読んでるうちにだんだん事の重大さと難しさに気が付き気分が悪くなり、半分くらいで読むのをやめ寮に戻り、晩飯を食べることなく眠ることにした。本当にダメな奴だ僕は。

八時くらいに起きる予定だったのだけれど、思つた以上の深い眠りについていたらしく、時計を見ると深夜の〇時を過ぎていた。

なにか忘れていることがあつた気がする……。なんて考えるわけもなく、僕はすぐに身を起こし、崎野さんの部屋に向かつた。

チャイムを鳴らしても反応がない、扉を叩いてももちろん反応はない。もしかしたら鍵が開いているかもしれないと思ひドアノブを回すと、

回つた。

まさか、鍵が開いてると思わなかつたので僕は驚きながらも扉

を押し、中に入った。

部屋は暗い。やっぱりもう寝ているのか？ でも鍵を開けたままなんて無用心すぎるだろ。僕はリビングの方へゆっくりと足音を立てないように歩いた。

気配がした。耳をすますと呼吸をする音がする。やっぱり起きているのかな？ 手探りで部屋の電気のスイッチを探したけれど見つからず、仕方ないので携帯電話のフラッシュを使って辺りを見渡した。

部屋の窓際。その隅に三角座りをしている崎野さんを見つけた。

瞳は開いたままで、ただ窓の外を見つめていた。あのトカゲのおもちやを刺しているときのようにうつすらと笑いながら。

僕の放つフラッシュに気付きこちらに振り向いたので僕が「気分はどう」なんて夕方から用意していた言葉を投げかけたのだが、無反応。ちよつとキザ過ぎたかな？

さらに近づき、手を伸ばせば届く所までくると、崎野さんは視線を僕のほうに向けた。

やっと僕がいることに気付いたのかな？

「来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで」と小さな声で話すと言うより、ただ並んだ言葉を読むように、ピアノを一音だけ連続して鳴らすように発した。

「心配で、来てみたんやけど……」

「来ないで！」

その声は先ほどのように小さな声ではなく、窓が割れるくらい大きな声で部屋中を響かせた。僕はその声に驚いたと同時にドアへ駆け出し、逃げるように部屋を飛び出した。

一体なんだってんだ。そんなこと言われると慰めも出来ないじゃないか。

でもああいうことを言われなくて、部屋に居続けることが出来たとして、彼女の傷を少しでも癒せることが出来たのだろうか。

自分の部屋に戻りながら、自分が人に何を出来るのだろうか、何を与えられるのだろうかと柄にもなく真剣に考えてしまった。

その30 三日目の決意

三日目の朝は沖田先生のモーニングコールで目が覚めた。初日と同じセリフとテンションで、僕を眠りの淵から救ってくれた。

確か今日で任務は終わりだったよな、三日間って言っていたから。でも最終日だからと言ってもやる気など出るわけがなく、気が滅入る一方だ。せめて尾行する意味さえ知ればもう少しやる気が出るっものだけど。結局最初から最後まで意味がわからないまま終わりそうだな。

僕は横目で見たニュース番組の占いが、七位だということに少しほっとしながら部屋を出た。

追尾すべき少女は昨日、そして一昨日と同じ時間にホームに来て、同じ車両の電車に乗り、ほとんど同じ時間帯で学校に着いた。

無事に最後の尾行を終え、思ったよりも感慨深くもなく、思ったよりも何もなかったことに少し拍子抜けをした、そんなところだ。このことを二日前の自分に言っても信用してもらえないくらい普通だったよ。

報告のために職員室へ歩いていると今最も会いたくない人と会ってしまった。無視しようと思ったけれど、そこは僕の愛が許さない。なんてな。ただ、無視する度胸もないだけだよ。

「おっはよ、薙くん。尾行は順調？」

「そんな大声で言ったらやばない？ 崎野さん」

「あつ、そうやな。ごめんごめん。コノ力危機感なさすぎやな」
てへっ、という効果音が聞こえてきそうな笑顔を向け、いつも通りの天然具合を垣間見る辺りは、昨日の深夜のことは覚えていないってことか。ここで確認の為に踏み込んだ話しをしてしまって、また絶叫されるのも嫌だしあえてスルーするとしよう。

「薙くんは職員室に用あるん？」

「いや、ちやうよ。沖田先生に朝の報告を」

「そっか尾行のね。じゃ、しつかりせなあかなあ」

そうですね。と言いたところだけど、尾行はNGワードだって。「心花ちゃんごめん待たせた？ 行こっか。あっ伊佐くんおはよ、じゃね」

「がんばってなあ」

そう言いながら手を振って崎野さんは脇に学級日誌を抱え、クラス的女子と教室の方へ歩いて行った。日直のやり方でも教えてもらっていたのだろう。あの様子だと男子以外とも仲良くやれてそうで良かったよ。初日の男子からの人気振りから妬む女子もいるだろうと思っただけどそこまで精神年齢は低くなかったか。

ちなみにクラスの女子がなぜ僕のことを下の名前で呼ばないのかと言うと、単に仲が良くないとかそういう理由じゃなくて、僕と那実の見分けがつかないからだ。少し残念だけど仕方ないよな、似てるんだし。

職員室には毎度おなじみ沖田先生の姿はなく、お決まりのように隣の教室へ向かった。

「おっはー、薙くん。調子はどう？」

「ちよつと古くないですか？ その挨拶は」

「何？ いいじゃない、あたしが大学生の頃はすぐ流行したんだから」古くても流行に乗ってなくてもいいか、挨拶してくれていいのだから。

「はいはい、おはようございます。ちなみに今日の朝も特に変わった様子はなかったで」

「そうなの、そりや残念」と言ってるわりに、顔から『何もなくて当たり前よ』と読み取れたのは僕の気のせいだろうか。

「それより崎野さんのことやけど」

昨日からずっとあの発作のことが気になっていて、どうすれば少しでも症状を和らげることができるだろうと考えた結果、やっぱりこの人しかいなかった。ちよつと癪^{しやく}だけど。

「昨日崎野さんの変な発作を見たんですけど、何であんなことに

なるんですか」

「あら？ 見ちゃったの。前に言わなかったかな、あのクラスは傷者の集まりだって」

「言いましたけど、あんな精神科に行かなきゃ行けないようなレベルのものと思ってなかったんですよ」

沖田先生は面倒そうに頭をかきながら「精神科に行ってもダメだからここにいろんじやないの。いざとなれば精神安定剤でも飲んだり打ったりしときゃいいのよ」と吐き捨てた。

「なんちゅうこと言うねん、人を物みたいに言いやがってアホか」「失礼ね、物なんて思ってないわよ。あなた達はこの世で一番大切な仲間よ」

さつき吐き捨てた言葉を聞いて、誰がその思いをを信じれるというんだ。

「さつきもコノカっちもらいに來たの、精神安定剤」そう言っ
て沖田先生はポケットからピルケースを取り出し錠剤を慣れた手つきで出し、手の平に転がした。

「これさえ飲めばある程度は収まるの。でもどうしてもって時は、ちつと痛いけど注射しなきゃだけどね」

「でも薬って副作用とかあるんじゃないですか？」

「もちろん、当然。まだ今はどういふ副作用があるかわかってないけど、体には良くないでしょうね」

「そんな危ない薬与えていいんですか？」僕は必死だった、何でだろう。精神の不安定が薬を飲んで治せるならそれでいいじゃないか、例え体に支障があつたとしても。それはそれでしょうがないじゃないか、それくらい重度の精神障害だというのなら。そんなことはわかってる、だけど……。

「なら薙くんが精神安定剤の代わりになつてあげなさい」

「えっ！？」

「あなたの超能力を上手に活用すればきっといい結果が生まれるはずよ」

そんなようなことを昨日も聞いた気がするけど。

「僕的能力って、超能力って一体何なんですか？」

僕の発した言葉がよほど不思議だったのか、沖田先生は目を丸め、その大きな瞳で僕を捉えて言った。

「まだ気付いてなかったの？ てっきり気付いているものと思っていたのに。ちょっとびっくり」

その表情はちよつとどころじゃないだろ？ 驚愕の域まで達していると思受けれるが。

「それじゃ教えてあげる」

えっ、教えてくれるの？ ちよつと待って、まだ心の準備とかできてないから。

「あなたは一般的に言われる予知能力者よ」

.....

一瞬空気が止まったけれど、そんなものを止めている場合じゃない。

「よちのうりよくしゃ？」

よく聞く言葉だし、超能力の中でも一番知られている部類の能力じゃないか。でもその中では胡散臭い度ナンバーワンだけど。

「ある人はあなたの持つ能力のことを先見とも呼び、また予言とも呼ぶわ」

「はあ」

「何？ ボケーつとしちゃって。すごいじゃない！ 人間国宝なんて目じゃないくらいすごい能力なのよ？ その辺わかってるかな雑くん」

「でも今までにもいたんじゃないですか？ ノストラダムスとかモーセとか」

沖田先生はその言葉を聞くと一気に表情を固くした。

「そんなの信じてるわけ？ ちなみにモーセは預けるほうの預言者です。」

いや、そんな本気で怒らなくても、確かに予言書や預言書なんて

信じてませんけど。

それにしても予言と預言の違いがいまいちよくわからないけど。

「預けるの預言って何が違うんですか？」

「神の啓示を受けるとか、そういう感じのことを言うの。薙くんは超能力使ったときに何か聞こえた？ 聞こえないでしょ、聞こえたらあなたにもこの錠剤をプレゼントよ」授業中の二倍程目を輝かせながら自慢げに言う沖田先生は、幼稚園児のようにかわいらしくもあり、憎たらしくも見えた。こんな表情をするのは、僕が超能力者だと教えてくれた日以来かな？

「もつと自分の能力に自信を持ちなさい、これ以上の超能力をあたしは知らないわ」

「はい、わかりました」全くわからないけど。

「超能力者で人助け。いいじゃない。あたしも超能力欲しかったな……」その言葉を吐いた瞬間、勢いよく僕の瞳を見つめた。

「あたしに超能力がないってわけじゃないのよ、あるんだから。あるけど、あなたのような能力が欲しかったなって言う意味よ？ わかった？ わかったでしょ」

そんな勢いに任せて言われるとわかったとしか言えないだろう。この人はまだ自分が超能力者だという嘘がばれていないとでも思ってるのか？ でも思ってなきゃこんな真似できないか。

「わかりました、当たり前じゃないですか沖田先生は超能力者ですよ」

「その通りあたしは超能力者」と言つて、手を強く丸め胸を誇らしげに叩いた。

「そういえば、今日で初任務終了ね。ご苦労様」

沖田先生は右手を僕の方に差し出してきたので、あわてて僕も握り返す。

「いえいえ、あまり実感はないのですけど無事に終わってよかったです」

沖田先生は僕の手を離し、大きく腕を前に伸ばしドッチボールで

アウトを取った少年のような顔をしながら親指をグツと立てて、「
上等上等計算道理。後は任せておいて！ 本当におつかれさま」

「は、はい。お疲れー」と最後まで言う前に予鈴が鳴った。本当に間の悪いチャイムだ、いやもしかして間が悪いのは僕か？ なんてことを考えていると、先生は僕の横を颯爽と歩き、軽く優しく頭を二回叩いて職員室へ戻っていった。

本当にこれでいいのかな、僕の初任務は。

その思いは四時限目が過ぎても拭うことはできず、崎野さんのことと絡み合い余計にわからなくなり、授業なんて聞いている余裕なんてなかった。休憩時間も机に頬をつけ眠っている振りをして、クラスメイトからのコンタクトをさけた。そんな僕を見かけて気になったのか、僕の前に鏡のように映したあいつが弁当を持って一言「中庭行けへん？」と誘いをかけてきた。

兄弟仲良く昼ご飯なんて年齢じゃないだろうと思いつつ、あのことを相談できるのはこいつしかいないと思い、僕はカバンから駅の売店で買った弁当を取り出し後に続いた。

中庭に出ると、穏やか日差しと一定して肌をなでるような風が吹いていて心地よかった。昨日より天気がいいってことはないけれど、あまり広くない我が校の中庭は道がレンガのようなもので覆われていて、その真ん中に花やら木などが植えられている。ベンチなどは全くないので、ほとんどの生徒はビニルシートを敷いて昼食を食べている。が、もちろん僕ら兄弟が、そんな準備がいいわけがなく、そのままレンガにあぐらをかいて座った。

那実はウインナーとご飯を口に放り込み、大げさに口を動かせながら飲み込みお茶を飲む。

僕も脳が少しでも働けるようにと願いを込め、箸を割った。すると那実が口を開いた。

「弁当を食べる前に少し話があるんやけど。胸に突っかかりがあると飯も旨ないやろ？」

「お前はもう食ってるやないか」

「俺は突っかかりなんて気にせえへんよ。それに、俺の弁当は寮のおばちゃんを作ったからうまい。けどお前の弁当はインスタントの方がマシって言うような程不味そうな弁当や。それ以上不味なったら食べ物ちゃうやろ」那実は口元に付いた米粒を親指で取り、舌で舐め取って言った。

売店弁当を侮辱しすぎだろう？ そんなに不味くないぞ。

「だから何があったのか喋れ。ほら、出汁巻きあげるから」

僕は出汁巻き卵を弁当のフタの上に置いてから口を開いた。言うておくが出汁巻きをもらったから話すわけじゃないぞ。

「崎野さんが精神不安定なのはお前知ってる？」

「もちろん、組織に入った時期はさほど変わらんし。何回か狂ったところも見ただことあるで」

あの崎野さんの姿を見たのにどうしてそうやって平然とした顔で話せるのかよくわからない。以前からこんな奴だったか？ でもそのことは今関係ないな。

「僕やったらどうにかできるって。沖田先生ならまだしも三月さんにも言われたから、どうすればええんか……」

「何をどうするん？」

「崎野さんを不安定から救う方法や」僕は少し乾いたのを潤わすために、那実の持ってきたペットボトルのお茶を口に含んだ。

那実はあごに手を当て少し考えてから話を進めた。

「救うか……。オコガマシイな」

「はあ!？」

「人の心の傷なんかそんな簡単に治せるもんやなんて思ってるんか？ ましてやお前はまだあいつと出会って間もない。傷を治すにはそいつのそのときの痛みを十分知らんとアカンと俺は思う。お前にその覚悟はあるんか？ ちなみに俺にはない」

「あるに決まってるやろ」当たり前のことを聞くんじゃない、アホが。

「あのときみたいになってもか」

その言葉を聞いた瞬間、にぎやかだった周りの音、心地よかった風の流れが消え、僕の鼓動だけが響いた。

あのときのような過ち、別れを繰り返すことになってもいいのか僕は。そんなことをするとあの子はもう僕を許してくれないだろう。

「ちよつと言い過ぎた、ごめん。でもあれや、お前の傷を知ってる俺も、お前の傷の治し方はわからん、血は繋がってるのに。ってことはそれくらい難しいってことや」

こいつが謝るなんて珍しいな。それくらい僕の顔には悲壮感が漂っていたってことか。あれからもう一年以上も経つのに、まだ忘れることができないなんて僕は本当にダメだな。

「それにこれがきっかけでお前の傷も少しはマシになるかもせえへんし」

「そうやな。オツケ。でも超能力を使ってどうやって崎野さんの傷を癒そう？」

「あー？ まどろっこしい。そんなもん力使うなよ。お前やつたら多分普通にすれば大丈夫や」そう言って那実は腕を組む。

「普通？」

「そうや。お前考えるの苦手やろ？ 直感や直感。もし超能力使って失敗したらそのせいにするやろ」

そりゃしないと言いきれないよな。

「なら気持ちでぶつかるとは言えないやろ。お前やつたら出来るなんて安っぽいことは言えへんけどどうにかなるやろ」

人の一生に関わるかもしれないことに『どうにかなるだろう』はないだろう？ まあお前らしいと言えばお前らしいけど。

「そやな、いちいち悩んでるのもアホらしいしな」

沖田先生の教えを無視することになるけど、やっぱり僕にはこっちの考えたかの方が賛同できる。超能力はもしものの為にとっておこう。それに必殺技は最後ってお約束だし。

「ちよつとくらいは考えて行動せえよ」

わかってるわ。何も考えないで行動に移せる程僕は肝が据わっていないよ。

「ほな、よっこいしょ」そう軽快に言い放って立ち上がり、弁当を片手に持った。

「どこ行くねん？」まだ食べ終わってないだろう？ それに僕は一口も食べ物を口に含んでいないぞ。

「中庭で二人で飯食う男子なんかおらんやろ？ それに似た顔と一緒に食ってたらドッペルゲンガーか！ ちゅう話しや」それだけ言つと那実は教室へ戻っていった。

いやいや、誰もドッペルゲンガーなどとは思わないだろう。まあ男子二人が中庭で昼食をつつき合っている姿は何かと誤解されそうだがな。

僕は先ほどのちょっとした緊張感を吐き出すように小さく溜め息を吐いた。

たまには一人で中庭で食べるのも悪くないか。僕はそう思いながら那実にもらった出汁巻き卵を口に入れて周りの景色を見渡した。

あれ一人で飯食ってる奴なんてここにはいないぞ？ 普通に考えればそうだな。一人で、しかも中庭で昼食って不自然すぎる、どれだけロマンチストなんだよ、詩人か？

僕は正気を取り戻し、慌てて弁当を持ち中庭から走り去った。

その31 三日目の瞳

決意が決まっただけからの午後の授業も、相も変わらず集中できず、結局なんて話せば彼女を癒せるだろうというところで考えは止まり、そのたびに消しゴムを投げ、表なら癒せる、裏なら癒せない。なんてジंकウスみたいなことをして過ごした。

崎野さんかというと、いつもと何の変わりもなくその天然爛漫な雰囲気、教室の空気をいつもより二倍程和ませ、また男子からは熱い視線を送られていた。

そんな彼女が精神安定剤を飲みながら授業を受けているという事実を思い出すと胸が痛む。

結局何の打開策も思いつかないまま放課後が過ぎ、夕食を食べ風呂に入り、気づくとまた消しゴムを投げていた。

こんなことしている場合じゃないだろ、早く部屋を出て崎野さんの部屋に行くんだ。

僕は立ち上がった、ドアノブに手をかける。さあ、行くぞ。今度こそその扉を開けるんだ。

ちなみにドアノブに手をかけては座り、手をかけては座りを何度繰り返したことだろう。この三時間で八回は固い。

また決心がつかず、テレビの前に座り直した瞬間、頭上で物が割れる音がした。

この上の部屋は崎野さんだ。

僕はすぐに腰を上げ、さっきまでこの世の物とは思えない程重たかったドアノブを難なく回し、物音のする部屋へ急いだ。

きつとまた発作が起きたのだらう。くそっ、迷ってないで晩飯食ってから行けばこんな後悔しなくて済んだかもしれないのに。自分への苛立ちのせいなのか、インターホンも押さず勢いよくドアを開け、崎野さんの部屋に入った。

「崎野さん、どうしたんですか！」

目の前には、瞳に涙を溜め、机にうつぶせになっている崎野さんがいた。左手にはピルケース、右手には錠剤が持たれている。

「アカン崎野さん！」僕はそう思うと同時に叫び彼女のもとへ駆け寄り、右手を押さえた。

「うるさい、だまれ」

僕は驚いた。

それはいつもの言葉使いと雰囲気の違い崎野さんに、そして何よりも右手だけで吹き飛ばされた事実。

天照ならまだしも、あんな細い手をした崎野さんに、しかも片手で吹き飛ばされると思っていなかった。仕方なく僕は右手に持たれた錠剤を奪うことを諦め、左手に持たれたピルケースを奪った。

すると崎野さんは視線を僕に向け机に置かれたハサミを左手に握りしめ、嗚咽まじりで近づいてきた。ピルケースを返さないと殺すぞと目で語りかけてくる。

そして彼女は躊躇無くその左手を振り下ろし、僕の眼に突き刺さった。

僕は物が割れる音で目が覚めた。

何だ、テレビを見ているうちに眠ってしまったのか。それにしてもひどい汗だ、さっきの夢のせいだろうか。

そしてもう一度物音がした。

こんなことを考えている場合じゃない、速く崎野さんの部屋へ向かわないと。僕は夢と同じように階段を上り、扉を開き、夢と同じ言葉を吐き吹き飛ばされピルケースを奪った。

なんだよ、現実でも片手本で吹き飛ばされるのかよ。追い込まれると人って怖いな。

っておい、このままじゃ崎野さんはハサミを持って僕にめがけて振りかぶってくるぞ。

戸惑っているうちに崎野さんは左手にハサミを握り、さっきの夢

の繰り返し見ているような、それほど同じ動きで近づいてきた。

やばい、このままじゃ夢のように目を刺さされる。でもどうすりゃいいんだ？ 避けられて言われても僕の動体視力じゃ、この至近距離から目に向かい飛び込んでくるハサミを眼で追うことすらままならないだろう。そしたらどうすればいいんだ、この場から逃れようと思っても体は動かない。ほら足はおもいつきり震えてるし、手なんて力も入らずただ体の付け根から垂れ下がってるだけだ。

あの夢が僕の超能力、先見だとするなら、予知夢だとするならあと五秒くらいで僕の目が潰れる。

このままじゃ僕を刺したことで更に彼女の傷が深まるかもしれない。何をやりに来たんだ僕は、逆だろ。

体が動かないならあと一つあるだろ？

やめてくれ、崎野さん！

……………。

あれあれあれ？ 声も出ない。

それは明らかに自分でもわかった。声帯も震えていないし、器官から空気の流れを感じなかった。ただ口を動かしたただけだ。崎野さん読心術とか使えるかな、って使えるわけないよな。一人でボケて突っ込んでる場合じゃない。どうする、どうするんだ。もう万策尽きたぞ。

夢の終わりまで残り一秒を切り、いよいよ眼球とさよならだな。

なんて思っているとあのときのあいつの声が聞こえてきた。

『薙の眼が好きだから、好きだからいいと思ったの』

と聞こえた気がした。

思いからふけなおり、タイムリミットだと気づいて右目を押さえると、まだそこにはハサミが突き刺さっていなかった。どういうことだ？ 加害者になる予定だった人物を潰れるはずの右目でとらえた。

予定加害者は僕の方に四つん這いでうつむき、息を切れ切れにして「ご、ごめ、ん、またや、ってしまい、…う……うあう」と右手

の錠剤を必死に口に押し込みながら言った。

その姿を見ると、さっきまでどうやっても動かなかった体が勝手に動きだし、彼女の右手を押さえ、体を抱きしめた。

その体は思っていたよりも軽く、そして骨の感触が肌に伝わった。崎野さんの息の乱れが落ち着きだした。彼女の体は妙に熱い。泣くことはそれほどエネルギーがいるのだろうか。その手を首もとから背中に伸ばした。

「あつっ！」

思わずその手を背中から離してしまい叫んでしまった。

すごく熱い気がした、ホットプレートのような。そういう熱さが崎野さんの背中から僕の手伝わったのだけど気のせいだろうか。もしかすると火傷しているかも知れないと思い両手を見つめたがそんな外傷はなかった。やっぱり気のせいだよな、ありえないだろ背中にホットプレートだなんて。

「薙くん、ちょっとごめんやけど飲み物買ってきてくれへん？」

泣いたら喉渴いたから」

どうやら気持ちも落ち着いたらしく、涙を拭うその顔にはいつもの暖かさが見えた。

「わかった、ほな行ってくる」

どうやら正気じゃなかったのは僕の方だ。彼女の声が聞こえた瞬間、一気に顔が火照りだし、さっきの自分の行動がいかに愚行なのか気付いた。そしてその恥ずかしさから僕は素早く部屋から逃げ出した。

扉を閉めると、少し火照った体を冷ますような肌寒い風が吹いた。昼は汗が出るかもしれないって程暑いのに夜はまだ寒いんだな。

そんなことはどうでもいいけど、崎野さんにどのジュースにすれば良いか訊くことを忘れた。

今更戻って訊けないし、あの何ともいえない空気が漂う部屋に戻る気がしない。ここはセンスが試せると、今日一番のポイントになりそうだな。本当なら豊富な品揃えのコンビニへ行きたいとこ

るけど、この時間に門をよじ上ると警備会社が来そうなので、僕は頭を抱えながら学食の前にある自販機へ向かった。

――明かりが灯る自販機を見つめて何分くらい経っただろう？
本当に何を買えば良いかわからない。

天真爛漫といえばオレンジジュースって気もするけど、乾いた喉にはちよつと違うよな。だとすれば、スポーツドリンクかお茶になるだろう。でも女子ってスポーツドリンクって好きなのかな？ 微妙な気がする。かといって家でも飲めるようなお茶なんて買えないし、炭酸飲料なんて論外だろ。いや、でも無類の炭酸好きの可能性もなくはないか。

このままじゃ埒があかない、仕方ないから自分の好きなジュースとお茶でも買っていこうか。女子って何だかんだ言ってカロリーとか気にしそうだし。

僕は自販機に二〇〇円を入れて、グレープフルーツジュースと日本茶のボタンを押した。

ちよつと時間かかり過ぎだよな、もう五分以上過ぎてるよ。炭酸飲料を買っていないのでほとんど全速力で崎野さん部屋に戻った。

部屋に着くと崎野さんはいつも通りの笑顔で僕を迎えてくれた。

しかし、ちよつと頬を膨らませて。

「ありがとー。でもちよつと遅ない？」

「ごめんごめん、部屋に財布取りにいったら遅なつて」と、とつさに嘘をつく。

あなたの好みがわからなくて自販機の前で悩んでいましたなんて言える訳がない。

僕は両手に持っていたジュースとお茶を机の上に置いた。

「これ買ってきたんやけど」

悩んだ結果こうなったのだけど、これ以上の答えは見つからない。これがダメなら僕のセンスが悪かったってことか。ちよつと、いやかなり残念だけど。

その判定結果を見ようとおそろおそろ崎野さんを見ると、愕然と

した表情でグレープフルーツジュースを持ちながら震えていた。

そんなに好きだった？ そのジュース。でも震える程なんてドラマや漫画じゃないんだから。

「もういや」

ん！？ よく聞こえなかったけど。

「これも組織からもらったんやろ？」

何のことやらさっぱりだけど。

「やめてよ、人の過去を探るなんて……。出てって」

まさかの退室願いだ。

「出ていけ言ってるやろ！ 嘘つき、偽善者、コノ力を慰めるなんてただの命令やったんやろ」

命令と言えば近くなるけど、でもあくまで僕の意味で行ったんだ。それにしても彼女はなぜそんなにも怒っているのだろう？ もしかして選んだジュースが悪かったのだろうか？ それに探るって何を？

「僕は自分で選んだジュースを買ってきただけや」

「うそ」怒りで潤んだ瞳が僕を見つめる。

「ホンマや！ そんなしょうもない嘘付けへんよ」僕も負けじと崎野さんを見つめた。睨んだに近いのかもしれない。

ちよつとした沈黙のあと、崎野さんはグレープフルーツジュースのパックにストローを突き刺し、ちゅーちゅーと音を流しながら涙を流し「やっぱり帰らん」と呟いた。

また泣いたよ、本当によく泣くなこの人は。言われなくても帰る気なんてさらさらなかったですよ。

「グレープフルーツは嫌いやった？」

「ううん。大好き」

「ほな、何で？」

泣き止んだ崎野さんは、少し長くなるけど、と言って手に持っていたジュースを机に置き話した。

「中学校のときに好きやった人がこのジュースおいしんでって教えてくれてん。で、色々あってその人と付き合うことになったんや

けど、結局その人に振られたあげく裏切られて、コノ力学校行けへなったねん。それからグレイプフルーツを見たり、あと裏切られた日と同じ占いの順位を見たりしたら変になるねん。まだいっぱいそついうのあるけど思い出されへんくらいあるから……、それに思い出したらまた体が熱くなつて気持ち止められへんなるし」

あの狂った姿を想像すると、恐らくその裏切られ方が半端じゃなかったんだろう。細かいところまで訊きたい気もするけれど、今の僕じゃこれが限界だろ。

「でも薙くんすごいな」

「何が？」

「コノ力がハサミ持ったときの顔も、出て行つてつて言つたときの顔もすごかつたで」悪戯をする子供のような声で崎野さんは言う。

「どういう風に？」

「それはコノ力だけの秘密。でもあの人……、好きやつた人にちよつと似てたかも」と言つてはにかんだ。

そんな彼女の幸せそうに頬を赤らめる姿を見ると、言つてしまいたくなるじゃないか。

好きだと。

「ん？ そんなことわかつてるで」

「何が？」

「今、薙くん好きつて言つたやろ。そんなん少し前からなんとなくわかつてたで」

えつ、どういうことだ。僕が何か言つたのか？ ちよつと待て、何がどうなつたのか全然理解が出来ない。崎野さんに思いを伝える度胸なんて僕にあるわけじゃないじゃないか。

「薙くん今すつこい青いで」

顔が青ざめているってことか？ いや、今はすごく赤いだろ。ということは青二才つて意味か？

「心の色がすつこい青くてあつたかい」

そうだった、崎野さんは人の感情を色に例えられる超能力を持っていたんだった。

「青はわかるとして色の表現に暖かいつて何ですか？」

「コノ力にはそう見えるんやからいいやんか。青くてあつたかい、あたしが一番好きな色」

つてことは……。

「答えはちよつと待つて、まだちよつとあれやから」

あれの意味はよくわからないけど、待ってくれと言うのならいつまでも待ちましよう。少なくともあと五年は待てる心構えでいますので。それ以上悩むつてことはないよな、まさか。

崎野さんの様子を見るとなんとか落ち着いたようだ。僕の無意識の告白も良いのか悪いのかわからないが、それほど動揺させなかったし。でもこのタイミングで言うのはなしだろう。

「ほなもう遅いし部屋に戻りますね」僕は立ち上がり玄関の方へ歩き出した。

「あつ、そやね」そう言つと崎野さんはジュースをすすりながら僕の後ろについて歩き「おやすみー。また明日なあ」と微笑みドアを閉めた。

閉じたドアから「トラウマを消す為に今回の任務はがんばらないと」と小さな声が聞こえた。

鍵を閉める音が廊下に響いたことを合図にして、僕は自分の部屋へ足を踏み出した。

その32 四日目のコンタクト

色々な出来事があった任務最終日が終わり、次の朝。僕は五時過ぎに起床した。

何でかと言うと、昨日部屋に戻ってからすぐに布団に潜り、眠りについた為、携帯電話のめざましを前日の、つまり任務の為に早起きする時間帯にセットしたままだったからだ。すっかり忘れていたよ。

それにしても久しぶりに眠りが浅かった。まさか鳥のさえずりで目が覚めるとは思ってもなかったよ。もちろんそのあとすぐに二度寝体制に入っただけ、思ったように寝付けなかった。

洗面所の鏡に写った顔の目元にうつすらと黒いふちのような物が付いていた。あと二日も徹夜すればスラッガ-のような目元になるな。

さて、何をしようかと、延々繰り返される近畿地方の天気予報を見つめながら考えた。

やっぱ、することといえばあれしかないよな。昨日よりも少し時間が早いけど僕は制服に着替え、カバンを持ち、昨日思い残したことを片付けに向かった。

昨日と時間が違ったからか、電車の乗り換えや、快速電車などスムーズに乗り換えて思ったよりも三〇分ほど早く着いた。

あと三〇分をどうやって時間つぶししようかと考えながら四番ホームに突っ立っていると、予想外の出来事が起きた。

これは好都合なのだろうけどなぜこの時間に？ 七時一九分ではなく。少し戸惑ったけど、僕はあの三日間と同じように彼女を尾行した。ただ一つ違うのは命令ではないということだ。

彼女が昨日までと違ったところは時間だけではなくその行動もだった。いつもなら売店や自販機にすら寄り道しないのに、今日は駅に隣接されている地下街に向かって歩いていった。

どういう風の吹き回しだろう。こんな早朝に開いている店なんてあるわけないのに一体何が目的なのだろうか。

この三日間で身に付けた尾行の技術で少女を追って、少しでも尾行をしなければならなかった理由を見つけようと思っていたけど、こりゃいい感じで事が進みすぎてちよつと怖いくらいだ。

この調子で少女を追っていくと白い粉やワシントンな取引などに遭遇できるかもしれない。

上手く行きすぎている出来事に鼻歌でも口ずさみたくなるような上機嫌だった。が、やはり世の中は甘い物ではない。

地下街を歩き始めて一五分が過ぎた頃、僕は少女を見失った。

少女は間違いなくトイレに入った。それは僕の目で確認したのだから間違いのないことだ。しかし、もうそろそろ一〇分経つぞ、女子ってこんなにトイレに時間がかかるのか？ 仕方ないあと一〇分待つか。

待つても待てども少女はトイレから出てくることはなく、やっと見失ったことに気付いた。

そして昼休み。僕は那実と崎野さんを連れて中庭に来ていた。

「一体何の用やねん、昼休みは貴重やろ」

どうせお前の昼休みは寝て過ごす七割方決まっているくせに。

「薙くん返事はもうちよつと待ってて昨日言ったやろ」

その話しはしないでください、もう思い返させないでください。

「訊きたいことがあるんや」この二人ならきつと知っているだろう。

「僕の尾行相手は一体何者やねん、教えてくれ」

崎野さんはあからさまに困った顔をして、ごまかすように僕からの視線を外し、那実は腕を組んでから少し考え、まあいいか、と適当な物言いで話し始めた。

「俺らもよくわからんけどあの子は一年の普通科三組の眞瀬明菜ませあきなって奴で、数学が学年トップっていうことしか知らんわ」

学年トップ!? この学校でトップってことは日本でもトップクラスってことになるぞ。あのちんちくりんがそんな数学力を持っていたとはかなり意外だ。

「それによく学校を遅刻したり早退したりするな」

「僕が尾行してたときはきつちりと時間通り現れたで」

「どういうことだ? あの子は確か、尾行一日目は日直の仕事をするためにすごい急いで学校に行ってたじゃないか。そんな子が遅刻や早退ってなんかすごく矛盾してないか?

「その顔は信じられへんって感じやな」

那実は少し驚いた顔をして、正門の方を指差した。

「ナイスタイミングやん、ほら眞瀬が遅刻してきたで」

那実の指差す方向には、この四日間の登校中に追い続けた少女の姿があった。地下街で見失ってからあの子学校に行ってなかったんだ。だとするとあの子は何をしていたんだ? 朝から昼まで。

「ホンマにあいつ何者が知らん? めっちゃ怪しくない?」

「そうか? ただのサボリ魔としか思われへんけどな」

しばらく僕ら兄弟は少女を見つめていた。確かに見た目はただのチビなんだけど、何かすごく禍々(まがまが)しい出来事を持ちかけてきそうな雰囲気をするのだけど。

「しゃあないな、俺がちよつと話しかけてくるわ」

ちよつと待て、そんな大胆発言を僕は望んでいないぞ。と止めるまもなく、那実はなんの躊躇(ちゅうそ)もなく少女に近づいた。そしてその第一声が最悪だった。

「こんなところに小学生が入ってきてはダメでしょう? お嬢ちゃんは何年いくつなの、どう考えても一一歳か一二歳にしか見えないよ」

おい、背の小さい奴に向かってそれは言っちゃダメだろ! 小学生はいいすぎだ、せめて中学生にしろ。

「あんた誰? アホ? 制服見てわからんの? そんな観察力で今までよく生きれたな」

そう言って立ち去るのかと思ったのだが、少女は那実の顔をじつと見つめ、「あんたどっかで見た気がするんやけど気のせい？」

やばい、やっぱりこの四日間で顔くらいは覚えられていたか。どうするんだ那実？　こんな危機を迎えたのはお前の好奇心という名の自業自得からだぞ。

「いや、自分かわいいなと思って。電車っておっさんばかりやる？　だから目の保養に」
「させてもらったねん」

あいつアホか！　そんなこと言っただけで話を聞いてくれる奴がどこにいる、ほら眞瀬さんも顔を赤くして伏目がちに歩いていくじゃないか、しかもすごい不機嫌そうだし。それに一番重要なのは眞瀬さんが那実を僕と勘違いしていることだ。

本当に那実はアホですよね、なあ崎野さん。と言おうと崎野さんの方へ振り向くと、彼女はうずくまり、両手で顔を覆って小さなうめき声を上げていた。もしかして那実の行動が笑いのツボに入ったのか？　僕はどこにも面白さを感じなかったんだけど。と思いたいところだけど実際は違うよな。

「どうしたん？　崎野さん」訊かなくてもわかってるだろ？　例の発作だよアホ。

崎野さんは酸素を多量に求めるように深く短い呼吸をしながら、「目を見せて」と言った。

僕は少し戸惑いながらもうずくまる彼女に視線を合わせるために屈み見つめた。

すると次第に呼吸の荒さがなくなっていく、崎野さんに付きまわっていた沈鬱感も消えていった。もう大丈夫かな？

僕は確認するためにあえてあの言葉を口にし、崎野さんがあの言葉を発することを願った。

「崎野さんジュースいる？」

「う、うん。ほなグレープフルーツお願い」

よかった、もう大丈夫そうだ。そんな笑顔を向けられると果汁三

〇%を一〇〇%にしたいくなってくるじゃないか、って意味不明だよな。でもそれくらいうれしいんだよ、僕は。

自販機に行くためにその場から離れた僕に、那実はついてきて、戸惑いながらもうれしそうに言った。

「まさか薬なしで発作を治すとは、お前もなかなか役に立つやないか、やっぱり気持ちちが大事やろ」

確かにそうだけど、あれも大事なんじゃないか？　那実、僕らに持っていない能力。奇跡の産物とも言おうか？

「そうやな。でも、まさか死にかけるとは思ってたよ」と今更のことだけ思い出してしまい、噴出して笑ってしまった。

それにしてもさっきの場面のどこにトラウマが潜んでいたのだろう？　まさか那実の発言や行動に何か問題でもあったのだろうか、やっぱりこいつは要注意人物だ。

そして放課後、僕は正門をじっと見つめ、中庭の木陰で息を潜ませていた。

そんな面倒なことをする理由は一つしかないだろう？　眞瀬明菜の尾行だ。やっぱりどう考えてもあの子は怪しい。それは昼休みで確信が持てた。明らかに崎野さんと那実は隠し事をしているようだ。先見である僕の感が外れることはしないだろうと、こういうときだけは自分の超能力を信じてみた。

その木陰にたたずみ三〇分が経過し、もしかして部活動しているのかもしれないと可能性を思いつき、僕は校内を周ろうとひとまずその場を離れようと体を校舎のほうに向けた。

すると尾行初日と同じように颯爽と校舎から歩いてくる少女が見えた。あの身長、短い足をせわしく動かす姿。眞瀬明菜しかない。

僕は待つてましたといわんばかりの気持ちを抑え、ばれないようにそっと陽の射すほうへ歩き出した。

その33 四日目の異星人

夕暮れ近い京都の町並みは、慌しない夜の前の静けさのように穏やかで、陽の光も人の動きも緩やかに思えた。そんな中、異常と思える速さで僕は歩いていった。その原因は言わずもがな眞瀬明菜だ。ませあきなあの小学校高学年と間違われそうなスタイルから、どうすればそんなに早く歩くことができるんだ？ もう走った方が楽な気がする。歩くって結構疲れるんだな。

京都駅に入ってもその速度は緩むことなくさらに速くなっていた。そろそろ休憩させてくれと思っただくらいにちょうどホームに着き、僕は設置されている椅子に座り電車を待った。眞瀬明菜は四番ホームに突っ立ったまま電車を待った。

思っていたより電車内には人が少なく、今日の昼、一度顔を合わせていることになってるのでいつばれるんじゃないかとドキドキしていたが、結局そういう雰囲気すらなく、事なきを得て難波駅に着くことができた。

改札を抜けると眞瀬と僕は地下街を抜け、大手電器店の連絡通路に着いた。

さらにビル街の奥へ入っていくとだんだん道は狭くなり、人がすれ違えるかギリギリの幅にまでなった。

一体どこに行くんだ？ こんな怪しい場所僕だったら絶対一人で来れないぞ。いかにも背中に絵画を背負ったような人達がうろろろしていそうな場所じゃないか。

そして眞瀬は右折したところで消えた。

これだけビルが入り組んだ場所だから見失って当たり前か、それに空ももうオレンジ色だし仕方ない、帰るか。

そう思い、来た道に戻ろうとすると、背中の方で声がした。

「おい」

僕は無視して走り去ればいいものの思わず振り向いてしまった。

そこには二〇代前半の男性が立っていた。すごくダサイ格好で。僕は思わず笑ってしまいそうだった。

下はこのメーカーかもわからない学校指定のジャージのようなもの、上には大阪のおばちゃんでも着ないような大きな虎のイラストが描かれたシャツを着ていた。

変な奴にあってしまった、ここは走って逃げるしかないと考えたけど、こんな服装で外を出歩く奴の顔が見てみたいと思い、思わずそいつの顔を見てしまった。

それが間違いだった。

僕は彼と視線を合わせた。しかし合わない。これは彼が僕を見ていないわけじゃなくて、彼ももちろん僕と目を合わせている。しかしそこに人と人と、いや人と動物が目を合わせたときの暖かさというものが存在しなかった。

「お前一体何者や」立ち去るつもりだったけれど咄嗟に出た言葉がそれだった。

何者だ？ ってどう考えたって人間だろう、その姿かたちを見てそれ以外の生物の名を上げたほうが拍手だ。

「お前こそ何者だ」質問に答えるよこいつ。

「ちよつと道に迷ってしまっ」

「違う、そういうことを訊いてるんじゃない。……お前、人間じゃないだろう」

はあ？ 何言ってるんだこいつ、どっからどう見ても僕は人間じゃないか。それはお前に返したい言葉だよ。

「僕は人間や。あんたこそこんなとこで何してんねん。関西弁と違うからこの辺の人と違うやろ？ 東京からきたんか？ それとも韓国？ 中国？ 道に迷ったんなら駅まで案内したるけど」

「私は異星人だ。そしてお前は人間ではない。改めて気付いた」やばい、観光客じゃなくて宗教関係だったか。

「その瞳の色は間違はなく人類のものとは違う。そういう人間を私は二体ほど見かけたことがある、お前と同じ服装をしていた」

「何を言っているのか全くさっぱりなんですけど」

「そうか？ 私にはお前が異質だとはつきりとわかるが」

「僕から見てもあんたは異質だとはつきりとわかるよ、そんな虎の服どこで買ったんや？」

「これは私の意志ではない。彼の意味だ、欲しいのなら分けてやるのか」

いるか！ こいつ感情を読み取ることができないのか？ 嫌味だということもわからないのか？ このまま嫌味を言い続け、気分を害させて立ち去らせようとしたのだけど。困った、どうやって逃げ出そう。

彼はいきなり顔をキョロキョロと首を右へ左へ九〇度回し、微笑みながら、

「残念だ。邪魔が入った。またどこか出会おう、私達と最も近いき存在」と言って路地を走っていった。

邪魔ってなんだよ、それにあいつと僕が近い存在？ 最近の宗教勧誘はああいう捨て台詞を吐くのか？ にしてもあいつ全然口から発する言葉と表情が一致しなかったな。

世の中には変な奴がいるものだと思い耽って、角を右に曲がるとまた声をかけられた。

次は一体誰だ？ 宗教の次は占い師か？

「探したで、うちが二人になれる場所に案内したって言うのにとこ行つてたん？」

最悪だ、さっきの宗教勧誘の男よりも会いたくない奴が現れた。

「どちらさまでしたっけ？」

腕を組み、不機嫌そうな表情をして横目で見ると眞瀬明菜はどこか堂々としていた。

「四日間も付きまとってどちら様もないやろ？ それに昼も会ったやんか」

「いや、あれは僕じゃなくって」

「わかってるよ、あんたじゃないってことくらい」

何だよかった、僕じゃなくって那実がやったってわかってくれたんだ。っておい、何か今、僕の最近の努力を無価値にするようなこと言わなかったか？

「ちよつと待って」

「何よ、人が機嫌よく喋ってるのに」

何だ、機嫌よかったのか？　じゃあ、その目つきの悪さは生まれつきってことか。そんなことよりも、「今、四日間付きまとってるとか何とか言わなかった？」

「めでたいなあんだも。ほな、なんや自分？　尾行ばれてへんと思ったん？」

僕が小さく首を縦に振ると、眞瀬は「鉄板や！」と言って引き笑いをしながら大きく手を叩いて喜んだ。こいつ僕がどれだけ傷付いているかわかってないだろ。

「もうひとつ質問やけど、何で昼、僕と違うってわかってるのにあんな真似したん？」

「あんたがどんな顔するかちよつと気になってな。それも面白かったで、鉄板までは行かんけど」

てことは、この四日間まんまと僕は眞瀬明菜の手の平の上に転がされていたってことか。見た目もそうだけどやることもいけ好かない奴だ。

「どの辺で僕が尾行してるって気付いた？」

「うん！？　うち早く歩いたり遅く歩いたりしてたやろ？　それにまんまとあわせてついて来るなんて」

「日直じゃなかったん？」僕は自分の推測違いに驚き、思わず声を大きくしてしまった。その声に少し驚ろき眞瀬は体を少しビクツとさせたが、すぐに堂々とした姿勢と瞳で僕を睨^{にら}んだ。

「はあ？　うちがそんなことするわけないやん面倒くさい。てか、余りにもバレバレすぎて拍子抜けしたわ。ってあんた、もしかしておとりやないやろうな」

おとり？　何のだ？

「実はうちの予測やけど、あんた以外にもうちを付けてる奴がおるねん」

「自意識過剰と違うんか？」

「アホか！ それよりあんた誰に命令されてこんな面倒くさいことやってたん？」

「沖田先生」

って言ったらダメじゃないか僕。これは組織の任務だったのに。任務中にばれるならまだしも、全くのプライベートだし、自分の勝手で行なったことじゃないか。どうしょ……。

「あいつね……」としばらく僕とその斜め上辺りを交互に見つめながら難しい顔をして、いじらしくニヤツと笑うと「そういうことか」と言い、今度は斜め上の幻像を見ることをやめ、僕だけを見て「ほなまた明日」と言って駆け出していった。

あいつは一体何をしたかったんだろう？

っておい、置いていくなよ、僕は適当にお前について来たただから全く道がわからないんだぞ、空もほとんど陽を灯していないし。結局僕は大阪のビル街を二時間ほど迷い、寮に着いてからは帰りが遅いと耳が機能停止をするほど叱られた。

散々な一日だった。どこが一二星座中七位だ、ここ最近で最悪だったじゃないか。ってことはこの埋め合わせに同じ星座の奴が得をしてるってことか？

そう考えるとイライラして寝付けず、それをなだめるため、あの異星人とかアホなことを言っていた宗教勧誘の奴の虎のシャツのイラストを思い出しながら眠りに付いた。

やっぱり最後まで最悪だ。

その33 四日目の異星人（後書き）

第5章終わりです。ここまでお疲れ様でした。
つぎはいよいよ最終章です。

その34 眞瀬明菜の事情

大阪のビル街でさまよった翌日、とつくに朝のホームルームも終わり、一時間目が始まる時間だつていうのに僕は職員室の隣、例の部屋へ沖田先生に呼び出されていた。

校内放送があつたのは朝礼前の予鈴が鳴ったくらいだった、スピーカーから鬱陶^{うつとう}しいくらいはつらつとした沖田先生の声が聞こえてきた。

「一年生で特別寮に住んでいる人は早く私のところに来てください。すなわち、天照さんと那実ちゃんとコノカっちと……えつとえつと、あつそうだ薙くん！ 薙くん薙くん。その四人は職員室の私のところに来てね」

ツツコミ担当が何人必要なのか指折りして数えなければならぬような、馬鹿放送の指示を受けて僕ら四人は職員室ではなく、もちろんその隣の部屋へ向かった。

「薙くん忘れられてたなあ」

そうですね、あまり言わないで下さい、結構ショックですから。崎野さんは僕の非常に奇天烈^{きてれつ}なタイミングで放たれた告白を気にすることなく、いつもと何の変わりもなく会話をしてくれている、ありがたいことだ。もしかしてこういうことに慣れているのかもしれないなんていう考えは今すぐ捨てろ、僕。

対照的に僕の方は告白から二日経つたというのに会話は出来ても目を見ることはあまり出来ないでいる。情けない限りだ。

「やつぱりお前って影薄いねんな」

「やつぱりってなんや！ 誰が影薄いねん、濃いつちゅうねん、めちやめちや濃いつちゅうねん。保健委員なめんなよ」

「ほら、保健委員やって影うつすっ！ 図書委員と双壁をなすぞお前」

「今すぐ保健委員をやつてる人間に謝れ」

中には将来介護や医療の仕事に就く為の勉強としてやっている人もいるかもしれないのに何てことを言うんだ、こいつはやっぱり失礼極まりない。

「天照沙希も思うやろ？ 薙は影薄いつて」

僕らの前をスタスタと先を行く天照からは、話しかけてくるなというオーラが惜しみもなく振りまかれている。空気を読めないという言葉と那実、つまり僕の兄は同意語である。

「いいじゃない。影が薄いと言うことはそれだけ他人から求められていないと言うことでしょう？ なら恨みを買うこと売ることもない。実にうらやましいわ」

それは褒めているのか？ そんなわけないよな。自分の存在感を棚に上げてアホにしゃがって、こういう奴は絶対良い死に方しないんだ、そうじゃないと世の中不公平すぎる。

でもこいつに限っては良い死に方も悪い死に方も関係ないとか言いそうだから全く張り合いがない。

サバイバルナイフで斬り付けるような言葉を吐いた天照は、職員室の隣の部屋の扉を開いた。

「来たわね、おっはよー。遅いからもう一度放送しようかと思っちゃったよ」

語尾に八分音符が飛び交うような明るい声で沖田先生は朝の挨拶をした。もう一度放送なんて絶対にやめてくれよ、あんたならもう一度やつても僕の名前を忘れそうだからな。

その若年痴呆症教師（じゃくねんちほうしょうきょうし）の隣を見ると、昨日僕をコンクリートジャングルに置き去りにした団子頭が座っていた。この二人何の関係？

それに僕らに用って何なんだ？

「この子は一年五組の眞瀬さん。ねえねえマセマセって呼んでもいい？ ダメ？ ならいいわよ。まちゃあきは」

「まちゃあきって何やの？ それも嫌！」すかさず眞瀬のツッコミが飛ぶ。よっぱど嫌なんだなそこまで勢い良く突っ込むことは。

「てふてふみたいにな瀬明菜を言ったらこうなるのに……。本人が嫌がっちゃ仕方ないわね。このマセマセの両親を助けてほしいの」そう言って沖田先生は、かばんからA4サイズで印刷された二〇枚ほどあるプリントを取り出し、クリップでまとめ僕らに一部ずつ配った。

その書類の一番最初には、親指程の大きさの字で「な瀬家救出計画」と書かれていた。

な瀬明菜の親か兄弟に何かあったのか？ そうだとしても何故僕らがこいつの親を助けなくちゃいけないんだ？ っておい、お前らもなんとか言いやがれ、書類を読んで『なるほど』何て言ってる場合じゃないぞ。

そこである異変に気付いた。

「な野さんどこいったん？」この教室に着くまでニコニコしながら僕らの後ろを着いて歩いていたのに。

「心花やつたら教室入る前に『トイレ言ってくる』って行っただけ、教えてくれるのはいいがな野さんの声真似をするのはやめてくれ、そついう似ていない物真似を平然と出来るのが大阪人の悪い癖だぞ。それに気色悪すぎる。」

な野さんはトイレか……。そついえば昨日の発作が起きたときもな瀬がいたよな、もしかしてこの二人は因縁の仲とかそつ言う類のものなのか？

「ちよつと聞いてる！ 薙くん」

「あつ、聞いてなかったです」今はそれどころじゃないつてのに、まあいい、あとでな野さんがな瀬に訊けばいいことか。

「しつかりしてよね、もう一回言っつわよ。いちいち言っつの疲れるし時間かかるから、日曜日のことはその紙束に書いたからちゃんと頭に入れておいてね。わかつた？」

「はい、わかりました」

「じゃ、解散！ さつさと授業に戻りなさい若人よ」

自分から呼んでおいてその言い方は非道だろ。

そう言つて立ち上がった沖田先生に対し、那実は思い出したといふような顔をして、「かおるちゃんって一時間目七組で授業ちゃうかった？」

こちらも口元を押さえ思い出したという顔をして、「忘れてた、じゃねー」と勢い良く教室を飛び出していった。

朝からこのハイテンションと、どたばたした雰囲気には僕は少し疲れ、伸びをして、さあ眞瀬に事情を訊こうかと正面を向くと、そこには誰もいなかった。慌てて教室中を見渡すが那実や天照でさえいない。あいつら鍵閉め嫌だからって先に教室へ戻りやがって。

この教室には人情を持った人間がいないことを改めて思い知らされた。

そして昼休み。僕は弁当を片手に持ち、一年五組の教室に来ていた。もちろん理由は眞瀬と話しをするためだ。教室の入り口付近をふらふらしていると後ろから声をかけられた。

「こんなとこで何してんの？ 伊佐薙」

「お前を待つてたんや、眞瀬明菜」

「あんた飯食った？」

「いや、ほれ」僕は右手に持つていた弁当を彼女の目の前に差し出した。

「うちも弁当持つてくるからちよつと待つてて」

そう言つて彼女は教室に入つていき、自分の席に座り弁当を取り出した。すると三人ほどの女子が眞瀬を取り囲み何やら話を始めた。

「明菜どこで飯食べるの？」

「ごめん、今日は連れがおるから」と言つて眞瀬は僕を指差した。「もしかして彼氏？」

「そんなわけないやん、あんな気の抜けた顔の奴」

その女子達の反論を待ったが「だよー」などという声しか聞こえてこなかった。メガネと化粧の濃い女と異常にエクステをつけた女、僕はお前たち三人の顔を一生忘れないだろう。

「ほな、行こか」

「お前のせいですごく飯が不味くなりそうだけどな」

「ふーん、ほな食べらんかったらええやん」

こいつは本当に人をイライラさせることに長けている。呼び出した方は僕なのだから何も文句を言えない、それを逆手にとって言いたい放題言いやがって。自分の娘がこう育ってしまったら、間違いなく家にいる時間は減るだろうな。

そして僕らは体育館裏で食事をするようになった。薄暗く人気がないところでの食事なんて好んでする奴はいないので、昼休みでもここは誰もいない。

中庭で食事することも初めは考えたが、昼休みに男女二人で食事するなんてなると、馬鹿な高校生なら喜んでありもしない噂を流すだろう。崎野さんとの噂なら僕も全然かまわないけど、こいつとの間に噂が立つことは我慢ならない。それは眞瀬の方も同意の上だった。なのでこいつも、飯の旨さが半減するような場所で朝食をとることに文句を言わなかった。

「で、話ってなんなん？」

「お前の両親に何があつたねん？ 沖田先生からもらったプリントにはそういうことは一切かかれてなかったからな」

書かれていたことは日曜日に誰が何を担当するかと言うことだけだ、それ以外の詳細なことについては全く書かれていなかった。

眞瀬は弁当箱を開き「こういうことや」と言っつて、弁当の中を見せた。

そこにはただ、トマトが一玉入っていた。白米すら入っていない。トマト弁当？

どういうことだこれは。家が農家？ 両親が喧嘩中？ はたまた親子喧嘩？ これだけだと深すぎて何もわからない。

困った顔をしている僕を見つめ、浅いため息をつき、今まで見せたことのない哀しい表情をしながら言葉を続けた。

「うちのお父さん最近リストラにあつてな、そこまでやったらそ

んなに困らんかったんやけど、うちのお父さんちよつと頑固つて言うかなんていうか、自分の力不足で会社をクビになったって信じられへんかってん」

「能力以外でクビになる理由なんて年齢くらいだろ？ それ以外は？」

「うちのお父さんはまだ四〇代入ったばっかりやから年齢は関係ないと思う。話は飛んだけど、うちのお父さんはリストラの理由を守護霊のせいやとか悪い悪霊に憑かれてるとかそういう風に考えたねん」

「あちゃー、最悪のパターンだ。気持ちわかるけど。で、それで金がなくなっただってことは、

「靈感商法つて言うんかな？ 電話帳でそういうところ調べて、家族で行ったんやけどな。初めて行ったときはそんなに高くなかったねん、しかも御札もタダでくれたし。それでうちのお父さんも調子乗ったんかわからんけど、体調が悪くなったとか、今年から花粉症になったとか、そんな理由でもそういうところに通い始めて」

「霊と花粉症がどう関係するのか、是非お前の父親と語り合いたいところだ。」

「拳句の果てに靴の紐が切れたとか黒猫を見た、くらいのことでも通い始めて。そうこうしてる内にお母さんもまりだして。そうならもう誰も家計をセーブできへんなって……。今、家の中にはようわからん掛け軸みたいな家系図とか、ありきたりなでっかい壺とかお経とかそういうのだらけになってもうて、今はその借金でいっぱいや」

「たまにテレビとかでそういう事件を見たことがあったけど、それは演出か何かで決して本当の出来事ではないと思っていただけ、実際にこれほどまで見事に騙された人がいるなんて思ってもなかったよ。やはり人は追い込まれると怖いな。」

「それを僕ら四人が助けるってことか」

「そんな洗脳されきった大人を子供四人が救えるのかちよつと不安

だし、身の危険も考えなければいけないな。霊なんかいない、なんて言って逆上され、サクツと刺されるなんて、可能性としてすごい高いだろう。特に那実なんかそういうこと何も考えずに言いそうだな。

「頼む、お願いします。この通り」

眞瀬はそう言いながら弁当を膝元からのけて、土下座をした。

いきなりの行動に僕は驚き、どう答えればいいのか戸惑っている
と、眞瀬は何を勘違いしたのか涙を流しながら、身の上話を続けた。

「このままやったらうちの妹の弁当もこうなっちゃうねん」

妹……。それは僕にとって、僕ら兄弟にとって現実に限りなく近い夢のような存在だ。

「妹の弁当はまだトマトやないんか？」

「当たり前やろ！　せやからうちの弁当が質素なんや」

いやいや、質素とかそういうレベルじゃないだろその弁当は。ギヤグ漫画でも出てこないぞ。

「こんな弁当持って行ったらあの子も、うちみたいに友達減っていくねん」

「どういうことだ？」

なぜ弁当がトマトだけだと友人が減るんだ？　逆に面白い奴がいるぞって寄ってきそうなものだけだな」

「男やったら面白いですむやろうけど、女やったらそうはいかないのや。だいたいトマト入った弁当食ってる奴と一緒に昼食べたいと思う？」

そんなこと思う女がいれば僕はそいつを崇めるね。

「やろ？　だからうちも最近はこそそって昼休みに抜け出して、ひとりで弁当食ってんねん。最近は付き合い悪いって言われてしんどいねん」

「でもお前さっき昼飯一緒にどう？　みたいなこといわれてなかった？」

すっかり覚えている。あのメガネと化粧とエクステだ。憎い、憎

すぎるトリオだ。

「あーあいつら？ 最悪やねん。あれは嫌味」

「嫌味？」

「そう、あのメガネかけた子おったやろ？ あの子がうちのトマト弁当目撃したねん。それからああやって三人で昼時になったら一緒に食べへんって言うてくるねん」

なんて性根の腐った奴なんだ。あんな大人しそうな顔してるのに、人間なんて見た目でわからないものだなやっぱり、天照や沖田先生みたいに。

「ホンマにお願い！ うちのことはどうなつてもええねん。ただ、親は、いや、妹だけでも普通に生きて欲しいねん。このままやったらあの子中卒やねん」

中卒はちよつとかわいそうだな。僕のような高校生活を送るならまだしも、普通の高校生になるなら助けてあげたいところだ。

それに、国を守るとかそういう大きすぎる問題じゃないから、僕のような平々凡々な人間にはこういう任務はもってこいかもしれない。やってやるうじゃないか、お前の家族を救ってやるよ。僕らの家族のように不幸になるなんて耐えられないしな。

「ところで、お前、僕らが何者か知ってるん？」

「ん？ あんたらの親って坊さんとか霊能力者なんやろ？ 那些人達に来てもらって洗脳を解くって沖田が言ってたで」

そういうことになってるのか。あの先生の考えそうなことだ。

「わかった、できるところまでやってみる」

僕が自信満々に言うと、眞瀬は涙を拭って姿勢を崩し、僕の隣に座って、大きな口を開き豪快にトマトをかじり、涙交じりでありがとうと呟いた。

何だ、愛想が悪かったり口が悪かったりしたけど、その身長と一緒くらいかわいらしいし、素直なところもあるんじゃないか。そう思ったのも束の間。

「あつ、その出汁巻きうまそう！ ちょっともらうな」と言つて、

僕の出汁巻きに箸を伸ばし、すばやく奪い去り小さな口へ押し込まれた。

「ところでお前崎野さんと何の関係？」

眞瀬はリスのように、出汁巻きを頬に蓄え、「そんな奴知らんで」と言ってから慌てて口に入ったものを飲み込んだ。

「うまあー、もう一個頂戴！」

「誰がやるか、アホ！ 調子乗るな！」

やっぱりいい奴だ。

その35 天照沙希の願い

そして土曜日、僕は一日の半分を寝て過ごした、これは惰眠を貪っていたわけではなく、ちゃんと沖田先生が書いた書類に書かれていた命令だ。

一番最初のページ大きく『明日は深夜行動となるので惰眠を貪るように、最低でも八時間は眠れ』と書かれていた。

ということはやはり僕の一二時間睡眠は惰眠だったってことか。そりゃそうか、朝飯はもちろん、昼飯も食わず、ボーっと新喜劇を見ている僕を、惰眠を貪ると言わずなんというのだろ。しかしあれだけ眠ったというのにまた眠気が……。

僕は部屋の呼び出し音で目を覚ました。

時間を確かめるためにカーテンから外を眺めると、うつすらと暗い。何時間寝てたんだ僕は？

呼び鈴も一度や二度鳴るくらいなら居留守でもしようかと思ったが、指で数え切れないほど鳴るから、何か騒動が起きたのではないかと思い、心は慌てているが、体は眠ったままなのでゆらりのろりと寝癖のついた髪を掻きながら扉を開けた。

「あら、睡眠中だったの？　ちよつと失礼するわ」

僕の返事を待たず、勝手に上がりこんだのは自由三昧という言葉がもつとも当てはまる女だ。

「珍しいな、お前から僕の部屋に来るなんて」

「あなたからあたしの部屋に来ることが今まであったかしら」

命に関わる出来事が起きても行くかどうか迷ってしまうな、お前の部屋なら。

「で、話ってなんや」

天照は僕の部屋を見渡し、「新聞は？」と訊いてきた。

「ないよ」

「じゃ、ニュースは見た？」

「新喜劇やつたら見たで」

僕の言葉を無視して、そばにあったテレビのリモコンを持ち、電源を入れ、民間放送から国营放送にチャンネルを変えた。

「この放送局ならもうすぐニュースくらいやるでしょう」

天照の予想も空しく、三〇分後にやっとニュース番組が放送された。

綺麗で可愛い女性のニュースキャスターではなく、いかにも有名大学卒業ですという雰囲気男性がニュースを読み上げる。こういうところを見ていると国营放送だって気付かされる。

「今日の午前一時くらいに沖縄県でアメリカ兵同士による暴行事件が起きました、死者は出ておらず」

僕はニュースを見ることをやめ、天照に事情を聞くことにした。

「これがどうしたんや？」

「あなた今、二年生がどこにいるか知ってる？」

……沖縄だ。でも事件が起きたのは深夜のこと、修学旅行生とは何の関係もないんじゃないか？

「この事件を起こさせたのは間違いなく組織の二年生と、本居よ」

「そんなことができるのか？」

「超能力を使えるのよ？ これくらい容易いことでしょうね、しかも六人もいるんだから尚更よ。さらに言えば本居もいる、あいつは相当頭が切れるから」

確かにあの先生は頭が切れそうだ。いかにも数学教師って雰囲気があるけど、実は社会担当なんてところがさらにそう思わせる。

でも、何でアメリカ兵にそんなことをさせる必要があるんだ？

「近年、沖縄ではアメリカ兵による事件が多発してるでしょ、その警告じゃないかしら。初めはジャブ程度にしておいて、次やればストレートを放つ。そういうこと」

いわゆる脅してやつだな。世界一の軍事力を持つアメリカに何てことするんだうちの組織は。国専用の警察、その言葉の意味を考えさせられるよ。

「でもずいぶん危険なことをするんやな」

「そうね、確かにその通りよ。だからあなたの部屋に来たわけ」
「いやいや、『だから』の意味がさっぱりわからないんだけど。」

僕が訳がわからないという顔をしてると、天照はさっきまで視線を不安定にさせていたのに、急に僕の眼を見て話した。その顔は決意に満ちている。そんな気がした。

「あたしと仲間になつてくれない？」

いきなりなんてことを聞くんだったのは？ それに今でも一応は仲間だろ。

「そういう意味じゃなくて、この組織とは別の二人だけのチームよ」

「何でお前と二人だけのチームというのを組まなあかんねん。僕は面倒なのは嫌いや」

お前と二人で行動するなんて考えるだけでも身震いがしてくる。

恐怖だ、これなら霊山にひとり置き去りにされたほうがまだマシだ。
「お願い。あたしはただ、これ以上、組織の人間を失いたくないの」

「どういう意味だ？」

「あなたはまだこの組織に入つて間もないからわからないでしょうけど、これくらいは知っているでしょ？ この組織に属していた人間の中でこの学校を卒業した人間が一人しかいないことを」

そんなこと初耳だぞ、なんだよそれ。ということはこの学校の七不思議であつた、特別能力開発科の生徒が毎年いなくなるつてのは本当だったってことか。

「その顔だと知らなかったようね。これは本当の話よ、この組織にいる人間はほとんど狂つてるようなものだからそういう死に値する出来事でも平気でできてしまうのよ。まるで戦時中の特攻隊のようなものね」

「狂つてるってどういうことだ？」

「宗教よ」

宗教。そのいかにも怪しい響きに僕は戸惑った。いったいこの組織と宗教に何の関係するんだ？

「二年生や三年生はどっぷりその世界に浸かってしまっているわ。人をコントロールする手っ取り早い方法は、その人間の心に神を与えることよ。あたし達が属する学科には過去のトラウマを持った人ばかりよね。それはもちろん、あたしもあなたも含め。そういう人間はもう心にガタがきて、ひどいことが自分の周りに起きてしまうと精神崩壊に近い状態に陥るの」

「『そういうこと』とは例えば？」

「例えも何も必要ないわ。ただ一つ、友人や仲間を失うことよ」その言葉に言葉を失った。

呆然とする僕のことを気にせず天照は続ける。

「失い傷付いた心に宗教の教えを説くのよ。そうすればもうその教えから抜け出すことは難しいわね」

「その宗教って有名なん？」

「信者の数は日本国民の六％と言われているわ。名を『大和神道教』聞いたことくらいあるでしょう？」

聞いたことも何も、たまにテレビでも取り上げられる新興宗教じゃないか。芸能人やスポーツ選手からも信仰者が多く、この国じゃ誰しも名前くらいなら知ってるだろう。それに京都で行われる世界的に有名な花火大会『大和花火の祭典』もその宗教が主催だと聞いたことがある。

「日本国民の六％って何人や……」

「約七二〇万人よ」

「埼玉県の人口くらいいるのか!？」

「暗算は出来ないのにそういうことは知ってるのね。確かに数にしてみると多いわね」

そうなのか……、埼玉県と言えば日本でも五番目の人口数だぞ。そんなに多いのか。それに六％ということはクラスに約二人程いる計算になるのか。そう考えるとびっくりだな。ということはクラス

に二人は埼玉県民がいるってことか？

そんなわけないか、と視線を天照の方に向けるとすごい形相で睨んでいた。今にも殴り回して無理矢理にでも仲間にするという目だ。

「あたしは真剣に言っているのよ、しっかり聞いてくれる？」

「何で僕なんだ？ 別に那実でも崎野さんでもええやんか」

「まず第一にあなたの能力よ、予知能力を駆使すればみんなを救えるかもしれないわ」

また超能力かよ。そんなものに頼ってたらいい大人にならないぞ。便利なものに頼っていてもダメなんだよ。どこかの猫型ロボットに甘えた少年は例外ってことを、この年になっても気付かないのか？

「それにあなたの能力は特別だから、組織も必死であなたのことを守ると思うの」

何だよ、やっぱり超能力関係かよ。守られているから危険なことをしても大丈夫だというのか？ なら命綱をつけて東京タワーに上れるか？ 絶対無理だろ。理論上は大丈夫だとしてもそんな危険なことをする勇気など僕には持ち合わせていない。

「あなたは信じるものが何もない、そしてこれからもきっとそうはず。だから宗教にも関係しないと思うの。それに、その超能力を身につけた理由、それがあなたを仲間にしたい一番の理由よ」

未来を見たいと思った理由。

そんなこと誰だっと思ってるだろう？ 那実は今更になんかわかってしまうと死んでしまうと言った。けれど僕はそうではないと思う。それが理由か？ そういうことではないような気がするけど。

「わからないって顔ね。返事はこの任務が終わってからでいいから。よい結果を祈ってるわ」

天照はそういうと立ち上がり、静かに歩き玄関に行くと、振り向いて僕の顔を見つめ「あなたとあたしならきつと救えると思うの。みんなの傷ついた心も、みんなの身の危険も。そのことを考えていて」

それじゃ、と天照はドアノブに手をかけた。部屋から出て行こう

とする天照に僕は思わず聞いてしまった。

「天照さんは宇宙人なんていると思う？」一昨日のことが何故だかずつと頭から離れない。

そんな突拍子もない質問に天照は面倒くさそうな顔もせず、真剣なまなざしで、「さあ、でも宇宙が本当に広大なら可能性はあるかもね」それだけ言つて部屋に戻つていった。

最後の会話は必要かどうか分からないけど、あいつから頼みごとをされるなんて、生きている間にあると思つてもなかったよ。

でもこれから任務だというのに迷わせてどうするんだ？

身を挺^{てい}してみんなを守るか、挺さずに自分の身を守るか。

みんなを守りたいのはやまやまだけど、さっきのニュースを見る限りこの組織はすごく危険なのかもしれない。平然とアメリカに喧嘩を売るような組織だぞ、というかあの行為はどちらかというとテロ行為に近いように思う。そんな危険な立場に置かれ、自分ではなく他人を守る余裕などあるだろうか？ はつきり言つて自信がないきつと自分のことではいいっぱいだろう。

日常さえ、いっぱいいいっぱいで生きているのに、そんな状況に置かれれば自分を守ることもままならないだろう。

すまないが天照、この話は断らせてもらう。僕はまだ死にたくないのだ。

思つていた以上に考え込んでいたのか、時計を見ると十一時を回つていた。確か集合は十二時に裏門だったよな。僕は若干慌てて出発の準備を始めた。

集合時間五分前に裏門に着くと、みんなはもう沖田先生の乗用車に乗り込んでいた。

「雑くん、ギリギリじゃない。早くしないと間に合わないから」と沖田先生は運転席の窓から上半身を乗り出し、手招きをした。慌てて車に飛び乗る。助手席には天照、後部席の左には崎野さん、中央は那実、そして右に僕は座った。

僕が席に着いたことを確認すると、沖田先生は勢いよくアクセル

を踏み、それによりエンジン音はけたたましい音を上げ、遠慮なく深夜の静寂を包んだ。こりや地域住民から通報されても文句は言えないな。

僕たちは京都の右京区にある、嵯峨さがトンネルへ向かっている。

そこは近畿地方でも有名な心霊スポットで、色々な噂がある。例えばトンネルの手前にある信号が青だと女性の霊がボンネットに落ちてくるとか、トンネルから黄泉の世界につながっているとか。あとトンネルを越えたところにあるカーブミラーに自分の姿が映らなければ、帰りは事故に遭うとか……。

なぜそういう噂が多いかと言うと、そのトンネルの上には江戸時代の頃、首切り場、いわゆる罪人の処刑場があったらしい。

……考えると鳥肌が立ってきた。

「よう知ってるな薙くん」

そりやそうですよ。インターネットを駆使して色々情報を集めましたから。

「薙はビビリやのにそういうの好きやもんな」

ビビリは余計だ。でも好きなことは確かだ、そういう心霊スポットとかは。でも何だかちょっとのどが渴いてきたぞ、これは緊張の表れか？ 体も少し震えている、武者震いとかいうものだろうか。

「実は怖いから先に情報だけでも知っていないと不安だったんじゃない？」

何だそのもつともらしい理由は。僕は別に怖くなんかない、暗いところが嫌なだけだ。というか、あんた僕と話すよりもすることがあるだろう。

「もう一時間以上経ってるで沖田先生。学校から嵯峨トンネルまで約一〇キロやのにどれだけ時間かかってるんですか？」

「うるさいわね、あたしは悪くないの。この子頭が悪いのよ！」
カーナビが付いているというのにどうやって道に迷うんだ？ 目的地設定もあっているし、本当にこの人は自分ひとりで生きていくのだろうか。

「那実、お前地図見るの得意やろ？ 機械の代わりに案内したてよ」

「お前がしたらええやん」

「俺は地図見ることができへんねん」

「方向音痴」

うるさい！ それを言われると何も言えないじゃないか。そうですよ、僕も方向音痴ですよ。何が悪いと言っただ、そんな地図如き見れなくても生きていける。目的地に迷いながらも着けるならそれで十分じゃないか。

ちなみに天照はというと、何も文句を言わず、ずっと外の景色を眺めている。そんなにじっと見つめて何かいるのか？ 少し不気味だからせめて前を見てくれないか。

崎野さんは「コノ力車酔いするからちよつと不安やー」とか言いながらも、大人しくする雰囲気は皆無で、平然と僕らと話しをしている。全然大丈夫じゃないか、ちよつと心配していたのに損したよ。もしかすると車酔いするのは天照の方か？

その後は那実の指示により、無事嵯峨トンネル付近まで近づいた。やはり僕の判断が正しかったな、なんて満足感に浸っていると、生い茂る木の間から人が出てくるような気がした。

まさかな、幽霊なんて人の恐怖心が生み出す幻。感動錯覚という言葉で科学的に証明されてるはずだ。変なシミや落書きを人や動物と見間違えるのはパレイドミアって言われている。

心でそういうことを理解していてもやはり怖いものは怖い。ほら、今だってドアを叩くような鈍い音が聞こえたじゃないか。やっぱりそういう気持ちが強くなると、普段気にならない音とかが聞こえてそれをラップ音などと聞き間違えるんだよな。

「わあ！！」思わず僕は声を上げてしまった。

だって間違いなく今、音がした。ドアを叩く音が間違いなくしたよ。

「先生！ サイドミラー！」

思わず目を向けたサイドミラーには車を追いかけてくる人影が見えた。これが噂のジェット婆と言う奴か？

もう僕はパニック状態だった、何が起きているのか全く理解ができない。明らかに聞こえたラップ音、確実に見えた霊体。次々と起こる心霊現象。やっぱり噂は本当だったのか、そういえばさつき信号を青で通過した気がする。

沖田先生は僕の声でサイドミラーを目視すると車を急ブレーキさせた。お陰で後部座席にいる僕たちはシートベルトに締め付けられる。

急ブレーキをしたってことは異常事態だよな。何なんだこのとんでもない展開は。もしかしてこれから超能力者対悪霊なんてシネマ的出来事が始まるんじゃないだろうな？

僕は出来るならこの恐怖に失神していたかったが、残念ながら心臓は全力疾走をした後よりも早く圧縮を繰り返し、眼を覚めさせた。

その36 沖田薫の緊張感

僕は寒気がするし、悪い予感しかしないので、全く車から出る気はなかったのだが、那実が早く開けるとうるさいのでドアをスライドさせた。

「はあっ！！」

スライドさせると、そこにはおっさんの顔があり、じっと僕を見つめた。

何でこんなところに、こんな時間に人が出歩いてるんだ？ 幽霊だろ？ 幽霊しかいないだろ！ はやく霊を捕まえる掃除機みたいなよこせ、那実！

「何アホなこと言うてんねん。この人は今日のゲスト、奥村安大さんおくむらやすひろやんか。どうも大妙院那波だいまういんなみと申します。本日はお手柔らかにお願いします」

那実が何やら物騒な名を名乗ると、その中年の男性に手を伸ばした。

「ええ、私もこの日を待ち望んでいました。よろしくお願いいたします」

一体この二人が何をよろしくするのかと言うと、沖田先生に渡された資料によるとこういうことになっている。

この僕の目と鼻の先にいる奥村安大さんは最近知名度が上がりつつある霊能者で、その若干の知名度を巧みに利用し、多くの利用者に法外な金額を請求しているらしい。そしてこれから何をするかという、新米霊能者対有能霊能者の対決を行う訳だ。新米霊能力者とは那実のことで、設定では十六歳という若さで霊能者になり、様々な悪霊も退治した霊能者業界きつての秘蔵っ子とされている。

これからどうやってこの自称霊能者と偽装霊能者が勝負して、その後眞瀬明菜の両親を救うのかは書類には書かれていなかった。ほとんどが白紙で、ただ僕の名の横にカメラマン役としか書かれてい

ない。

まあだいたいのは想像はついたけどな。

「はい、いくわよ。三……二……」天照はカメラの画面に自分の手だけを映し、数を降順に数えていく。数がなくなるとともに声のボリュームを落とし、天照の手が画面から消えると沖田先生が声を上げた。

「みなさんこんばんわー、みんなの六等星沖田薫子です。今日は京都心霊怪奇事件簿の五〇回目の放送を記念して、こちらのゲストをお呼びいたしました」何だその怪しく古くさく堅苦しい番組名はそれに心霊スポットだろこは？ そんなにハイテンションでいいのか沖田先生？ いや司会の沖田薫子さん。六等星についてはあえて突っ込まずにしよう。

「なんとあの超大物霊能力者、取材できないラーメン屋のようにテレビ出演を拒んでいた奥村安大さんに来ていただきました。今日はよろしくします奥村先生」沖田薫子はそのへんのアナウンサーよりも手際良くマイクを奥村に向けた。

なんだこのテンポの良さ。もしかしてこの人、一人で練習していたんじゃないだろうな？

「よろしく願います。おっと、ここは怪しい霊気を感じます。まあ私が付いているから安心ですがね」と言って小さく奥村は笑った。

一体何がおかしいんだ。怪しい霊気を感じているのなら少しくらい動揺しやがれ。

「先生はこの番組はよくご覧になられていますか？」

「ええ、もちろん。毎週欠かさず観ていますよ。実にいい番組です」

何て当たり障りのないコメント。というかこいつはアホか？ こんな番組放送されているわけないだろ。

「そしてもう一人のスペシャルゲスト、霊能者界のホープ。ちま

たで天才少年霊能者として名をはせている大妙院那波先生です。本日はよろしく願います」

「よろしく願います。今日は良い怨霊日和ですね」なんて縁起の悪いことをいいやがる、って奥村、うんうんとうなずくな。

「本当ですか！？　そう言えば少し寒気がします」とうれしそうに話す沖田薫子からは、全く恐怖という言葉を思い浮かべられない。

「最後になっちゃいましたけど、今日もよろしくね京野花^{きょうのはな}さん」

「もちろんです。ちよっぴり怖いけど今日はスペシャルなのでがんばっちゃいます！」と見事にアイドルという役柄をこなす京野花こと崎野さんにも恐怖心は微塵^{みじん}も感じられない。僕の隣で何も言わず照明を持ち佇む天照の方がよっぽど顔色も悪く気分悪そうだけだな。こいつの場合、そういう現実的じゃないことは信じそうにないから顔が青白いのは車酔いの影響だよな。

何だか番組的にも、そして任務的にも成功するのか不安なオープンングだ。

せめて自分だけでもしっかりしなければと思い、カメラを肩に担ぎ直し、左手で眼鏡をくいつと上げた。

なぜ眼鏡なんてかけているのかというと、その童顔と大妙院那波と瓜二つの顔を隠す為だ。カメラマンとスペシャルゲストが同じ顔なんて明らかに怪しいだろ？

「この霊能者二人にはここ、京都でも有名な心霊スポット、嵯峨トンネルで幽霊探知&除霊対決を行ってもらいます！　ルールは三〇分間でいかに多くの幽霊を探知し、除霊出来るかを競ってもらいます。勝つ自信はありますか奥村先生！」

「もちろん、私にまかせれば三〇分で最低でも六体は除霊できるでしょう」話し終わるとまた薄気味悪く笑う奥村。

どうでもいいけど、三〇分で六体が多いのか少ないのか基準がわからないのだけだ。

「それはすごいですね、さすが大霊能力者です。で、大妙院那波先生は何体程除霊できますか？」

大妙院那波は何も言わず静かに指を七本立て、奥村を睨みつけた。何の演出だそれは。

「これは若さ故の宣戦布告なのか、それとも圧倒的自信からでしょうか？ 気になるところです！　ところでコノカっちじゃなくて花ちゃんはどうしが勝つと思いますか？」

うつかりでもコノカと言う名前は出しちゃまずいだろ。

「えつとー。あたしは同年代の大妙院先生を応援したいですけど、やっぱり相手が奥村安大先生だから勝つのは厳しいと思います。なので奥村先生の勝利だと思います」にしても本当に演技上手だな崎野さん。これが全て茶番だと知っているのにそこまで感情豊かに話せるなんて。もしかしてこの子、普段もキャラ作りしてたりして。

「カーツ」といきなり隣で照明を持っていた天照が声を張り上げた。お前は一体何役なんだ？

「二時前まで少し休憩しましょう」それだけ言つと天照は照明器具を持ち沖田先生の乗用車に小走りで乗り込んだ。

僕も大きさの割に異様に軽いカメラを置き、道路に座り込んだ。

すると奥村が出演者一同の輪から抜け出し、僕の方へ近づいてきた。一体何のようだ？

「どうも、今日はお世話になります。奥村です」

「いえいえ、こちらこそ。まだ若いスタッフばかりで何かと迷惑をかけるかもしれないけどよろしく願います」

「私の方こそ、まだテレビ出演はこれで二回目です。お互いビギナー同士、手を取り合いましょう」

ただの気色悪い中年男性かと思っていたけれどちゃんと挨拶してくるし、感じも良さそうだ。この男が本当に法外な靈感商売を行っているのだろうか？

と少し疑った自分が馬鹿だった。

奥村は僕の耳元に顔を近づけ、小さな声でいやらしく呟いた。

「それにしても本当にいいんですね？　あの沖田さんでした？　あの方と一夜を共に過ごせると言うのは。思っていたよりも綺麗

な方なのでちよつと確認をですな」

やっぱりこいつ最低だ。もしかしてその愛想の良さも、番組出演もそれが理由なんじゃないだろうな。でも大人なんてこんなものなのかなど思ってしまうのも事実。

「そこであの……、なんていうんですかね」中年のおっさんにもじめられるとこれほどまで気持ちが悪いとは思ってなかったよ、いいから早く言いやがれ。

「私は沖田さんよりどちらかというと、京野さんの方が好みなのでその辺り、ご検討お願いします」

うわっ、本当にビックリだ。こいつエセ霊能力者で詐欺までしてロリコンときたか。こんな奴に騙された人々を思うと言葉にならないよ。

「なぜ僕に言うんですか？」

「だってさつき車に乗った人がプロデューサーさんでしょ？ あの人目つき悪いしこんなこと言う又何言われるかわかったものじゃないから。どうかあなたの方から伝えといて下さい。もし断ったら、放送をやめていただきたいとも忘れなく」

そんなことを真面目な顔をして言える奥村に違う意味で尊敬の意を表し愛想笑いで返すと、彼は満足そうな気味の悪い笑みで、また出演者の輪に戻って行った。

奥村が僕の元から離れたことを見計らったようなタイミングで天照が照明器具を引っさげ、車から出てきた。

天照はもしかしてこのことを計算して車に戻ったのかと一瞬疑いなくなるような絶妙なタイミングだ。いくら何でもそこまで推測力はないだろう。

「さあ始めるわよ」僕の隣に来て天照は青白い顔を引きつらせて笑った。お前が幽霊なんじゃないかと突っ込みたくなる程、その笑顔は不気味だった。お前気分悪そうだけど、何気に楽しんでないか？

天照の一言で集まった出演者一同は、それぞれの定位に立ち、いよいよ本番が始まった。

「では丑三つ時になったと同時にスタートしますね。準備はいいですか？ 奥村先生、大妙院先生！」

本当にこの人のテンションは、ここを霊の集まる場所だと忘れさせてくれる。心霊スポットへ遊びにきた友人としては頼もしいが、心霊番組の司会としては最低だな。

沖田薫子の問いに奥村は数珠を八の字に振り「よろしいです」と典型的な霊能力者のように振るまい、大妙院はポケットから扇子を取り出し、扇ぎ、余裕の笑みを浮かべた。

「準備は整っているようなので始めたいと思います。二時まであと五：四」

沖田薫子は左手を目の前にかざし、腕時計の秒針を慎重に読みあげる。

「それではスタート！」

その37 伊佐那実の傷心

二人の霊能者もどきは、よいいどん！と小学生のかけっこのように駆け出さず、ゆっくりと暗いトンネルの中へ入って行った。奥村は霊能者として仕事をしているからこういう場所には慣れているだろうけど、那実の奴は怖くないのだろうか？

トンネル内には意味不明な落書きが描かれていて、気味悪さを助長させる。しかもトンネルには全く明かりが灯っていないのに、霊能者二人には懐中電灯すら渡されていない。沖田薫子いわく、霊視できるなら暗闇なんてどうにかなるでしょう、というんでもない理由だったのだけれど、粹がったエセ霊能者二人はそれを承諾した。霊視が出来るからと言って何故暗がりを歩けるのか理由は全くわからないと突っ込みたいところだけど、僕の役割はカメラマンだ。

霊能者以外はトンネル内部にいても意味がないので、トンネルの入り口で彼らが霊体を発見するのを待ち、呼び出されるとその霊能者に近づき撮影開始することにした。

「今気付いたんやけど沖田先生、ここって有名な心霊スポットやのに何でこんなに人が少ないん？ さすがに日曜日でも二組〜三組くらい普通おるやろ」

「……………おい、聞いているのか？もしかしてこの先生のことだ、役になりきっているからその役名を言わないと返事しないとかじゃないだろうな。」

「沖田薫子さん？ 聞いてますか」

「あら、薙くんどうしたの？」

予想的中、本当に面倒くさい性格をしているよ。

「聞いてたやろ、何でなん？」

「交通の規制をしているからよ、これくらい容易いわ。何たってこのー。薙くん、みんな！ 行くわよ」

トンネル内には中年男性の声が響く。何も知らない人が聞けば十

分心靈現象と間違えるんじゃないかというような不気味な声だ。

僕らも慌てて沖田薫子について走り出した。

トンネルの真ん中まで行くと、道路の中央辺りに奥村が立ち何やらお経のようなものを唱えていた。

「どうやら奥村先生が霊を発見したようです！ どうですか先生？」

薫子は霊と対話中の奥村に対し声のボリュームを落とすことなく遠慮なく訊ねる。

この世に霊が本当に実在して、本気で除霊をやりにきてこの対応をされると僕なら間違いなく怒るけどな。

「はい、ここに子供の霊がいますよ。今事情を訊いてみますので」
奥村は大きさに『ハ』と『カ』を叫び、数珠を大きく振り回す。

「この女の子は、親子で近くにある愛宕山へハイキングに来ていたそうですが、途中で迷ってしまったそうです。結局両親とも会えず、山で息絶えてしまいました。今もこの子は両親が来ることをこの霊が集まるトンネルで待っているのです」

なんとというありきたりな設定なんだろう。そんな話しは今まで何度聞いただろうか。どこかの名犬を少しもじって話しているだけじゃないか。

隣で泣き声が聞こえたので振り向くと、京野花さんが涙を流していた。その本気で泣いているのか？ もしそうだとしたら、どこかの芸能プロダクションへ行った方がいい。きっと快く迎えてくれるだろう。

「おっ、奥村先生！ 早くす、す、救ってあげてくだひゃい、かわいそうれしゅよ」おいおい。こんなところで迫真の演技が拝めるとは思ってもいなかったぞ。

「わかりました。その涙はきつとこの子を救うでしょう」

戯言は言いからはやく除霊しろ。どうせ適当にその数珠を振り回して適当な言葉を並べて終わりだろ？

案の定、奥村は僕の想像と全く同じ行動し、彷徨える魂を求めて

トンネルの奥深くまで歩いて行つた。

すると今度は那実の声が聞こえた。全く忙しい。どうせ見つけたフリなんだからもう少し間を与えてくれよ。

「大妙院先生も霊を発見したようです！」いつまで薫子のテンションが続くのか不安だったけど、それも余計だったよ。きっと死ぬまでこの状態を保っていられるんだろうな。

僕らはさっきと同じように走り、大妙院の元へ向かう。

すると大妙院の手元が赤く光った。もしかして火の玉？　と一瞬でも思つた僕がアホだった。

「おっと、大妙院先生、それは一体なんでしょうか？」

「これは霊探知機です。俺の霊力を使って作動させてるんだけどね」

なにが霊力だ、明らかに電力だろ。それにお前が赤く光らせているのは僕がおもちゃ屋で買った携帯ストラップじゃないか。確かに霊探知機能付きとは書いてあつたけど、一二〇〇円でそんなもの見できるならオカルト研究者も苦労しないよ。

「さっそくですが、すごい大物釣り上げちゃいましたよ」

「どういうことでしょうか？　大妙院先生」

大妙院は扇いでいた扇子を閉じ、正面に魔法陣を描くように振り、三〇メートルくらい離れた奥村に聞こえる声で、

「霊の行列を発見しちゃいました。ざっと三〇体と言うところでしょうね」と言つた。

おいおい、そりやさすがにやりすぎだろ？　遠くから「何？」と言う声が聞こえてきたじゃないか。そりやセオリーとしては一体ずつ見つけて除霊するものだからな。やっぱりこいつはアホだ。

「それでは除霊するのに時間がかかるのではないのでしょうか？」

「いえいえ、僕ほど霊力が高ければこれくらいの怨念と数なら三分もあれば十分です」

大妙院がそんなことを言うから、奥村も「ここには五〇体もいたぞ！　私もこの数なら三分で十分だ！」と言い出したじゃないか。

もうやってられん……。

沖田先生もすっかり飽きたのか崎野さんと一緒に山手線ゲームを始めた。

「絞殺!」「銃殺!」「溺死!」「刺殺!」

別に山手線ゲームはいいのだけど、お願いだから心霊スポットで死因をお題にするのはやめてくれないか。気味が悪いどころではない。

しばらくトンネル内には死因を言い合う女性の声と霊の数と除霊の時間を叫び合う男性の声が響き合った。

制限時間三〇分が経ち、トンネル外へ出た僕たちは奥村対大妙院の霊能力対決の結果発表を行うことにした。

まあ結果は見えてるけどな。

「それでは、結果発表ー! 千二十一対一億三千三十で大妙院先生の勝ちです」

そりやそうだろ、那実の奴、終了時間を見極めて、最後の最後に一億二千人とか言い出すんだもん。それまで二十体さで負けていたけど、なんとという大逆転劇だろう。

沖田先生も山手線ゲームしながらちゃっかり数を数えていたんだな。聖徳太子かと突っ込みたいところだけど本当にすごいので突っ込めない。

でもこれじゃドラマも何もありませんだろう。最後の方はお互い数を言い合ってただけじゃないか、これが本当の番組ならどうなっていたんだろうかと思うと寒気がする。

「まさか大妙院先生が勝つ何て思ってたんです。絶対奥村先生が勝つと思っただけです」

京野花さんは本当に悲しそうに涙を溜めて言う。

「ですよー。奥村先生、敗因はどこにあると思います?」

おいおい、この人一応有名な霊能力者だろう? そんなプライドを傷つけるようなこととしていいのかよ。ほら、暗くても顔が真っ赤

だとわかるぞ。

「人を馬鹿にするのもいい加減にしろ！ 何が一億人だ！ そんなに霊がいるわけないだろうが、このエセ霊能者が！」

人のこと言えるのか？ 確かにあんたの方が霊能者らしいけど、それはあくまでらしいだけであってそうではないだろ。

那実は閉じた扇子を振り、音を立てて広げて扇ぎ、悟るように奥村の怒号にもとれる質問に対し答えた。

「なんで一億人がありえへんの？ 人は死ねば幽霊になるんやろ？ その中の何割が現世に残るか知らんけど、この場所に恨み、やりきれなさを持ったまま死んだ人が霊になって現れるんやったら、人類が生まれてから一億人くらいおつても不思議やないやろ」

確かにその考えには頷けるけどこのトンネル付近で一億人は多すぎだろ？

「だまれだまれだまれ！ そんなに霊界は単純じゃないんだよ！ 死んだことのないお前に何がわかるって言うんだ？ せめて死んでから言えよこいつ。」

あくびをしながらそんな言い合いを見ていたのだが、那実がとんでもないことを言い出した。

「そしたら見せたるわ。幽霊を」

はっ？ お前いつからそんなことをできるようになったんだよ。

奥村も何言っただこいつ、って顔してるじゃないか。いや違うだろ奥村、お前はそんな顔してはいけないだろ、一応霊能者の肩書き持つてるのだから。

那実は呆れ顔の奥村を気にすることなく、自信満々の顔で大きく目を開き、親指と中指を擦り合わせ乾いた音を響かせた。

その瞬間トンネルの方から白い女性のような形をしたモヤのようなものが僕の前を通り、立ち止まり肩で息をして煙のように消えていった。

あまりに唐突な心霊現象で僕は驚きすぎて声も出ず、その光景の一部始終を見送った。

「奥村さん、これで信じてくれたか？」

奥村は背骨を抜かれたようにその場に座り込み、顔を霊が消えた場所に向けてただ呆然としている。

「これで、わかったやろ。あんたのありえへんくらい高い靈感商売をやめて、更にその人達の洗脳を解くんやったら、さつきおった霊をあんたに取り憑かせへんようにするけどどうする？ 多分取り憑いたらあんた死ぬやろな、散々こいつらを金儲けに使ったんやから」

奥村は首だけを大きく立てに振り、声を挙げて泣きながら情けない声で謝罪の言葉を吐いた。

「まさか本当にいるとは思っていませんでした。ごめんなさいごめんなさい、もうしないから！」

これで一件落着か。でもさっきの白いもやはなんだったんだろう？ 明らかに霊のように見えただけで、どうせ組織が作った何かだろうな。

僕は腰を抜かした奥村を置き去りにして、その場を後にした。

「任務大成功ね、みんなお疲れさま。あいつ前から嫌いだったのよね、下っ端のくせに調子の上で」沖田先生は今日一番の上機嫌で僕らを褒めてくれた。まだ一日が始まって三時間程だけ。

「下っ端ってなんですか？」

「あつそうか、薙くん達は知らないか。あいつうちの組織と関わりの深い教団がよく仲介している霊能者なんだけど、大したホトリーディングも出来ないくせに依頼者からぼったくるから苦情来ていたらしいの。だからちよっとお仕置きをね」

教団というのは『大和神道教』と考えて間違いないだろう。この任務にそう言う意味があつたのか。

「じゃあ、失礼やけど眞瀬の両親を救うつてのはおまけやったんか」

「違うわよ。この任務名を忘れたの薙くん？ 『眞瀬家救出計画』」

だったでしょ。まあ今からマセマセの家に行くから着けばわかるでしょ」

「どういうことだ？　もしかして眞瀬もこの組織と関係の近い人物だつて言うのか？　着けばわかるのなら考えるだけ無駄か。そんなことよりも聞かなければならないことがあるだろう。」

「那実。今僕らに見せた女の人の幽霊みたいなの、あれ何やねん？」

「あれ？　あれはただ、あのトンネルに肝試しに来た大学生の女で、鳥の鳴き声を心霊現象と勘違いして、慌ててトンネルから抜け出したんや」

「いやいや、僕の目の前で消えたんだぞ、それを普通の出来事みたいに言うな。」

「そんなこと聞いてるんちゃうねん、あれをどうやって見せたのか聞いているねん」

「俺の超能力や、お前が予知なら俺は？」

「そんなこと訊かれても。僕が予知能力ならお前も同じ顔してるから予知能力か？　でもあんな人のモヤなんて出せる能力じゃないだろう？」

「ホンマにお前は鈍いな」

呆れて溜め息をついて話を続けた。言いたくないと言う気持ちがすごく伝わってくる。これは面倒とかそう言う類ではないと何となく気付いた。

「俺は過去を見れるねん。詳しく言うとなが残した強い気持ちを物を通じて読み取ったり具現化する超能力や。半径三メートルくらいまでやったら読み取ったのを俺以外にも見せることが出来るみたいや。この範囲は回数を重ねるごとに広がってるな」

「すごい超能力じゃないか。思い出を読み取る能力か……。でも絵画のように描いた人の思いだけじゃなく見た人の思いも強い場合はどうなるんだ。」

「上書き上書きで、強い気持ちが残っていくねん。さっきのトン

ネルの場合は比較的最近の出来事で気持ちも結構強かったから簡単に読み取れたわ」

でもすごい汗だぞ、あの涼しい山道で滴るほど汗をかくなんてとてもそれが簡単だとは思えないけど。

「いや、一番インパクトある思い出を探してたらついこうなつてもうてん。でもよかつたやろ？」

確かにすごく驚いたけど、その為にそこまで疲れるなんてお前は本当にアホだな。おい、汗が僕に付くからちゃんと拭けよ。

「あー？ 失敗せえへんようにがんばった俺になんちゅう口訊くねん！」

アホにアホと言つて何が悪い？ 久しぶりにやるか口喧嘩でも。臨戦態勢の僕たちを察したのか、沖田先生が停戦を求めてきた。

「もう、せっかく大成功なんだから仲良くしなさいよ。マセマセに報告が済んだら、ご飯でも食べに連れて行つてあげるから」

「あたしハンバーグがいい！ カレーと目玉焼きのん」

さっきまで眠たそうにうとうととしていたのに、ご飯をおごつてもらえるくらいで目を覚ませるなんて精神年齢はいくつなんだ崎野さん。まあ天照のように何の反応もなく外を眺めてるのは愛想がなさすぎるけど……、だからやめてくれないか？ じつと外を眺めるのはちよつと不気味だからさ。

「マセマセの家まで三時間くらいかかるから眠つてていいわよ」
ここから三時間……、何か嫌な予感がするんだけど。

「眞瀬の家つてもしかして泉南方面？」僕はあえて遠回しに言うてみたが、その行為は瞬間で意味をなくす。

「堺だよ。ほら、薙くんの住んでいた近所だった気がするけど」
的中。

でもあんな奴聞いたことがないぞ、いや近所つてただだから隣の中学かもしれないので知らなくても当然か。那実は聞いたことあるか？ と訊ねようと思つたが、小さな寝息を立てていたのでやめた。汗を流しながら眠る那実を見ると、超能力を使うと体に負担

がかかるんだと言うことが伝わってきた。

それにしても眠れるかな僕は。なぜかすごい胸騒ぎがするのだけど、きつと気のせいだろうな。

窓から見下ろす京都の街並はすごく綺麗で、統一されたネオンの色が輝き、ここに教団やら組織や偽霊能者なんて気味の悪い存在がいることを一瞬でも忘れさせてくれた。

その38 伊佐薙の絵空事

目を覚まし外を見ると、空は少し明るく、懐かしくも見慣れた街並が広がっていた。

その角を曲がると、この前行った大仙公園があつて、更に信号三つ先を右に行くと僕の実家がある。けれど、今からそこに向かうのではなく、あくまで用があるのはその近所にある眞瀬家だ。久しぶりに我が家を眺めたい気持ちもあったけど、それはまたいつでもできるだろう。あと二ヶ月もしないうちに夏休みだし、そのときまで楽しみに取っておこう。

隣では崎野さんと那実が寢息を立てている。もちろん天照は起きたままだ。

「天照さんは眠たくないん？」

「人がいると眠れないのよ、だから眠たくないと言えば嘘になるわ」

それは実に神経質だな。僕なんてどこでだって眠れるし、どの時間帯だって眠れるのに。少しお前にそういうところをわければ僕の睡眠バランスがとれるかもしれないな。

こんなことを話している場合じゃない、もっと大事なことを訊かなければいけなかった。

「沖田先生は異星人だ、とか名乗るファクションセンスのない見た目二十歳ちよつと過ぎの男つて知ってます？」

「知らないわ、そんな変な人。でも宇宙人と言わずに異星人と言つてる辺りに魅力を感じるわね。何星かしら？」

そんなの知るか。異星人の存在なんて、自分の妄想と現実の区別がつかなくなつた精神異常者のことを呼ぶのだろう？

「いや、出身は知らんけど。眞瀬が僕以外にも尾行されている可能性があるつて言つてたから、もしかしたらそいつかと思つて」

「へー。その異星人は気になるけど、マセマセを尾行してる人が

いるのは今に始まったことじゃないわよ」

それはどういうことだ？　もしかしてボディーガードか何か？　四六時中見張っているとか、ある秘密結社の重要情報を握っているとかそういうことなのか？

「ほら、着いたわ。ここがマセマセのお家よ」

またもや急ブレーキで止まれシートベルトに締め付けられた。この衝撃でも寝ていられるその二人に、危機察知能力なんてものがあるのだろうか？

車から出て、沖田先生が人差し指で示す先、眞瀬家を見つめた。それは家と呼べる物ではなく、どちらかというとビルに近かった。それも小さい4階建てほどだ。

場所は僕らが通っていた中学校の校区とは違い、その隣の校区だった。

沖田先生はさっそく電話を耳に押しあて、眞瀬に連絡を取っている。

「あれ？　どうしてだろ、さっき電話したときは出たのに、どうかしたのかな？」

何度も電話を切り、かけ直しているが繋がらないらしい。こんな時間だから二度寝でもしたんじゃないか？

「仕方ないなあ。那実くん起こしてくれる？　二度目の出番よ」

僕は車に乗り、生まれたての子犬みたいに力なく眠っている那実に「でばんですよー」と言いながら体を揺さぶり目覚めを待ったが、一向に目を開く気配が感じられない。こいつ死んだのか？　最終手段で耳に息を吹きかけるとやっと目を覚ました。

「キモっ！　お前やったんかい。心花やと思って起きたのに最悪の目覚めや」

いいから早く沖田先生のところに行け、何やらまた超能力の出番らしいからな。

僕と那実は再び車から降り、那実は沖田先生の元へ行き何やら話し始めた。

暇なので眞瀬の家を観察していると、何やら胡散臭く怪しげな看板が見えた。

『眞勢易占 堺支部』易占って箸みたいなのをジャラジャラして占うやつだよな。何で眞瀬の家が占いの館なんだ？ それに両親が詐欺にかかり一家は破綻寸前だよな。占い師のくせに靈に頼るなんて一体なんて不届きものなんだ。でも眞瀬は言ってたよな、お父さんが会社をクビになったって。じゃあ、その後この占い屋を作ったのか。でも、どこかつじつまが合わない。

「早く乗って薙くん！ 急ぐわよ」

思っていた以上に声を張り上げた沖田先生は素早く車に乗り込みエンジンをかけ、発進させた。おいおい、まだ僕乗ってないぞ。

那実がドアを開けてくれていたので、僕は走り出す車に飛び乗った。どれだけ一刻を争う事態なんだ？ さっきまでののはほんとした雰囲気が一気に消し飛んだじゃないか。

「これから大阪空港に向かうわ！ 本当にしてやられたわよ」

「何があつたん？」

――沖田先生に訊ねるが全くの無視だ。状況説明するくらいなら車のスピードを少しでも上げたいところか。那実は崎野さんを起こし、今の状況とこれからすることの説明を始めた。

「眞瀬家には眞瀬明菜がおらんかった。数分前まで電話をしていたにもかかわらず。そこで俺があいつの家の玄関の過去を読み取ったんやけど、そこでわかつたのは……騙されたんや」

騙された？ 全く話しの流れがさっぱりなんだけど。ほら崎野さんも、天照でさえ呆然としているじゃないか。

すると運転中の沖田先生が不機嫌に吐き捨てるように説明を付け足す。

「マセマセは普段隠しているけど結構有名な占い師なの、それこそ易学から星座占いまでおこなっちゃう天才さん、それが一つの顔。もう一つが組織の情報部としての顔を持つ。占いて言ってみれば先を読んだりすることではなく相手の心をいかに読むか、そして

どれだけその心にあったアドバイスを言葉巧みに説明するかと言うことだと思ふの。マセマセはそれがすごく上手だから人を騙してとんでもない情報を集めたりして、情報部で欠かせない存在になって、組織でもすごい頼りにされてたの。そんなマセマセがあたしたちを裏切るなんて」

沖田先生はひどく落胆した表情だった。よほど眞瀬のことを信用していたのだろう。でも組織を騙すなんてあいつってすごい奴なんだな。

「裏切ることとはわかってたわ」わかってたのかよ！　じゃ、その顔は何だよ。

「でもまさかこんな形で裏切られるとは思ってなかったのよ。こちだつてマセマセが怪しいかもって思っていたから大仙公園にピクニックがてら、那実くんにもセマセの家に隠しカメラつけてもらったり、天照さんにマセマセの家に占いさせにたり、薙くんにみんなの動きを目立たさないようにカモフラージュとしての尾行もしてもらって、さらに監視のプロが五人と三年の三人でマセマセを見張っていたのに、ここまで注意してたのにどうしてなの」沖田先生はイライラを抑えられずハンドルを強く叩いた、おかげで車が揺れる。やっぱり僕の尾行はバレること前提だったのかよ。あんなに真剣にやらず適当でやればよかったよ、といつても後の祭りか。そりゃそうだよな、素人に尾行をさせる程この組織は甘くないって話だよ。

「あいつは相当この組織を恨んでる。それが読み取ったときにすごいわかった。あんな強い気持ちは初めてや」

那実は柄にもなく、通り魔に殺されかけた一般人のように顔を恐怖心をまとい、足をふるわせている。

「お前大丈夫か？」

「それより二年生や、あの人らがヤバイ」

「わかってるわよ！　だからこんなに飛ばしてるんじゃない！」

「何で二年生が危険やねん」

「まだわかんないの？ バカ」と久しぶりに天照が言葉を吐いた。
「今、眞瀬側には三年生の超能力者が見張っているでしょ、そして今あたし達が向かっているのは大阪空港。二年生が修学旅行で利用した空港よ。よく考えてみて、組織の中枢を担っている超能力者が一番多いのは二年生よ、その二年生がいつもより無防備でいるし、昨日の事件で力を使っているから万全の状態ではないでしょうね。もちろん携帯なんて空の上じゃ繋がらないから連絡も出来ない。あたしならまとめて超能力者を撃退するこのタイミングを狙うわ。あいつは組織の情報をほとんど握っているから本当に危険よ」

「じゃあ警察は？ 僕らが国専用警察ならあいつらだって助けてくれるじゃ」

「もう応援は呼んであるわ。二年生の予定到着時間は九時二〇分。道が混んでいなきゃ間に合うけど大丈夫かしら」

「なんでそんなにこっちに着く時間が早いん、普通夕方とか違うの？」

「事件を起こした場所にいつまで留まらせたいとは思わないですよ危険だから。それがまさか、帰ってきた方が危険だなんて笑い事にならないわよ！」そのイライラが十分伝わるハンドルさばきで僕は重力を奪われる。

これから起きる出来事が不安で車の中は沈黙に包まれた。

こんな荒い運転をしていたらいつか事故するんじゃないかと不安になったけれど、何にも人を轢いたり、車と衝突したりすることなく、ガードレールにドアが擦り、傷が付く程度ですみ、伊丹市に着いた。

伊丹市に入ると那実と沖田先生は突然慌ただしくなった。那実は携帯電話を片手に沖田先生に「その角を右！」やら指示を出している。恐らく電話相手は三年生の誰かが眞瀬を見張っていた組織の人間だろう。

「この辺やで」現場の近くに着いたのか那実がそういうと、また

急ブレーキで車を止めて、真っ先に沖田先生が飛び出した。一人で行動するのはまずいんじゃないか？　と思った瞬間、聞いたことのないような重たい音が響き、思わず目を閉じてしまった。

目を開くと胸から血を流す沖田先生が倒れていた。

何かの間違いなのだと思った。いつもテンションのメーターをぶち壊しながら生きていて、ありえないくらい数の花をいつもまき散らしてくせに騒がしい沖田薫が一ミリも動かず、ただ血を流しコンクリートにうつむせになっている。実際の出来事なのでよくわからないので、近寄って確認したかったがそんな勇氣など僕にはなかった。

僕らはどこから飛んでくるかわからない銃弾におびえながら、うつむせになる沖田先生の横を通り過ぎた。一瞥もせずに。

崎野さんは涙で前が見えないらしく、ふらふらと走っているので僕が手を引く。

「こんなときにご、ごめんな」

うるさい、何も言わず走れ。と言いたかったけど、今それを言うてしまうと僕の気がおかしくなりそうだからギリギリまで出てきた思いを絡み付くタンと一緒に飲み込んだ。

那実が携帯電話で会話をしながら先頭を走る。恐らく詳細な位置を訊いているのだろう。

角を曲がるとそこには銃を構えた男性が五人程いた。まるで僕らを待っていたかのように一斉に銃弾を放つ。

僕らはギリギリ壁に身を隠すことでその銃撃から免れた。すると天照が那実の携帯電話を引ったくり、地面に叩き付け、カカト落しで粉碎した。

「何すんねん！」

「こういうときに落ち着かないでどうする。通話相手も私たちの敵よ」

そうだよな、行くところ全てに銃弾が飛んでくるなんて、とんだおっちょこちょいの誘導人だよ。

「でもそれやったら先輩のところに行かれへんで」

「先見がいるじゃない、初めからそうしておけばよかったのよ」

えっ？ 僕ですか。

「あなたには先の出来事が見えるんでしょ、なら二年を助けたいって思うならたどり着くはずよ」

そんなこと言われたって僕は未来の見方なんてわからないんだぞ、いつもいきなり見えるんだから。なんて逃げてられないよな、この状況で。

「どうなつてもしらんからな」僕は先頭に立ち、直感の赴くままに、来たことのない住宅街を地図も見ずに駆け出した。

これでもし、先輩達の元に辿り着いたってどうするんというんだ。沖田先生は応援を呼んでいると言っていたが、さっきの曲がり角にいた奴らのことを考えると、もしかしたら応援もやられているかもしれない。だとしたらこの四人で助けなくちゃいけないと言っているのか。

天照は回復ができて武術の使い手、那実は過去を見れる、崎野さんは感情を色で読み取れる、そして僕は先の未来が見える。このパズルを上手くはめ込めば最悪な状況を打開できるとは到底思えない。そして直感で左の角を曲がるとそこは地獄絵図が広がっていた。

五メートル先の十字路で、二年生と思われる制服を身にまとった男女が、武装した数人に囲まれ、たじろいでいた。そして武装者が一斉に射撃を始めた。僕はただ、それを眺めることしか出来なかった。その圧倒的恐怖に。

銃声が鳴り響く中、男子と女子が一人ずつ立っていた。これは奇跡でも目撃しているのだろうか、男の方は銃弾をまともに体に受けているが全くの無傷だ。女の方は全ての銃弾を避けている。

いつ二人がやられてしまってもおかしくない状況に那実はたまらなくなつたのか、ためていた力を爆発させるように、一気にその男女の元へ向かい走って行った。

「くっそお、これでもくらえ！」

那実は武装者に恐れることなく近づき、指で乾いた音を鳴らした。すると男達は一斉にしゃがみ、そして気絶した。一体どれだけ恐ろしい過去をあの人達に見せたのだろう。

二年生を救ったかに見えた那実だったが、次々とわいてくる武装者に何も出来ず、あけく囲まれ銃声と、那実そして残り二人の二年生の叫び声が響いた。

僕は胸の奥が熱くなるを感じていた。まさかこんなにもあつけなくやられるなんて、あの那実が。

いつも訳の分からないことを言って、僕を困らせたり怒らせたり、希望を与えてくれた、唯一血のつながった存在だったのに。家に帰ってお母さんに何て言えばいいんだ。見殺しにしましたよ僕だけ死ねないで、と言えというのか。そんなアホなことが出来るか。

でも本当に熱いぞ、まるで隣から火が噴いてるようだ。

その熱さの元をたどると、隣で人が燃えていた。

誰かを考えなくてもわかった、僕の肩くらいまである身長、それだけが全てだった。

崎野さんあなたが何故そんなに惨い殺され方をしなくてはならないんだ。きつとあなたの人生は裏切りの連続だったのだろう、何となく雰囲気でわかったよ。その作られた笑顔も涙も、全ては裏切りの人生から逃れる為だったのに。結局こうなってしまったんだね。さよなら最後の人。

僕はもう足で立つ力をなくし、燃え盛る崎野さんのよこで座り込んだ。それと同時に武装した人たちが銃を構え、僕を取り囲む。

もう終わったか。やっぱりこんな学校来るんじゃないよ、人生楽はしない方がいいな。やっぱり上手い話なんてなかったんだ、平々凡々な中学生が国内最高基準の高校に進学できるなんてこれくらいリスクがないとダメだったんだ。

僕は目を閉じ終わりを待っていたが、終わりを示す銃声が待てども待てども聞こえてこない。気になり目を開けると僕の両隣には念力使いの竹須佐先輩と筋力のリミッターを外せる三月さんが立

っていた。

「おまたせしました。これで、残ったのは私たちだけと言うことになりましたね」三月さんは肩で息をしながら言う。

ちよつと待って、今気付いたけれど天照はどこに行ったんだ？

三月さんはさつき残ったのは私たちだけとか言っていたけど……もしかして。

「天照は俺たちをかばってくれた。あいつには本当に感謝だ」

竹須佐さんは目を武装者達に据わらせて、大きく息を吸いこんだ。するとどこから来たのか、銃が空を舞い竹須佐さんの「ハッ」という声とともに発砲され、みるみるうちに武装者達を倒して行く。さすが念力。こういう場面でこれ以上、役に立つ能力があるだろうか。三月さんかというと筋力のリミッターを外し、ものすごい俊敏性で地面を軽やかに蹴り銃口の定めをつけさせないスピードで進み、凄まじい蹴りやパンチを繰り出し、武装者達をコンクリートに叩き付け、鈍い音を響かせる。

「佳代はスマートじゃないなあ」

「あら？ ハヤに言われたくはないわ」

困んでいた武装者達を一気に倒すと、二人は背中合わせで立ち微笑した。

あつという間に数十人も倒したのだから、もしかするとここから脱出できるのかもしれない。

そんなことを思ったのも束の間、現実はそのほど僕たちに甘くはなく、後ろや前からは先ほどの倍以上の武装者達が銃を構え現れ、一斉射撃。

あのとき、道案内などせず逃げればよかったんだ、二年生など放っておいて。

そうすれば一年生だけでも生き延びたかもしれないのに。とんだ予知能力者だよ。僕はひよつとして死神かもな。

倒れ行く竹須佐先輩と三月さんを見つめながら悠長にそんなことを考えてしまった。

その39 崎野心花の目的

頬がヒリヒリする。そうか人って死ぬと頬が痛むのか、死んでも人間というものはよくわからないな。

「うなってるんやったらさっさと起きろ」

那実の大きな声と同じくらいの音がでる勢いで、那実に頬をぶたれた。

「あれ？ みんな生きてる」

そうか、大阪空港に着くまであまりにも静かだったから気付かないうちに寝ていたのか。

ということはさっきの出来事は……。

「その顔やと未来でも見て来たようやな」

緊迫した車内の中、それを打ち壊す、場違いな童謡の着信音が響いた。

「はい沖田です。あつ案内してくれる？　じゃ、ちょっとあたし運転だから代わるね」

沖田先生は携帯電話をこちらに差し出し、那実が手を伸ばす寸前に僕はその携帯を奪い取り、電源を切った。

「何てことするの薙くん、一秒でも早くあの子達を探して救い出さなきゃいけないのよ」

僕は夢の記憶を辿る。確かこの発信者は僕たちを二年生の元へ案内せず、敵の陣地へ誘導していたはずだ。

僕は携帯電話を指差し、「こいつも裏切り者です、さっき見た夢で、この電話のおかげで沖田先生が死んだで」

「うっそ、それは危ないわね。薙くんの予知能力なら間違いないわよね。で結局最後はどうなったの？」

沖田先生はドラマの最終回のあらすじを聞くような気軽さで訊ねてきた。これを言った後、動揺して車をぶつけなきゃいいんだけど。僕はアイコンタクトで天照にハンドルを持つように指示した。

言うぞ、もしかするとここが二年生を助けられるかの十字路になるかもしれない。

「全滅です」

あれ、何の反応もなしですか？ 沖田先生の顔をのぞくと目がうつろで前なんか見えていないのがすぐにわかるくらい動揺していた。僕は慌てて沖田先生の頬を叩き、ハンドルを握る。どうやら天照に送ったアイコンタクトは通じなかったようだ。

「ほなどうしたらええねん、全滅を免れる為にはこのまま京都に帰るしかないんか？ 二年生を見捨てて」

「ちよつと待つて、今から夢を思い出すから」

「早くしてよ薙くん、時間はお金じゃ買えないのよ」

うるさい、ちよつとくらい黙れ、一番最初に飛び出して死んだくせに。

確かあの地獄絵図では二年生四人ほどが武装者に囲まれていたんだよな、ということはその人たちを助けるのはほぼ無理と言うことか、じゃあ、残るは三月さんと竹須佐先輩か。

あの二人はどこから来たのだろう、目を開くと隣にいたのでよくわからない。一瞬でいい、一瞬の未来を見たい。

「天照、僕を手刀して眠らせてすぐに起こしてくれ」

理由を聞かれると思っていたが、そんな間もなく僕の首に衝撃が走り気絶した。無意識で適当に二人の場所を案内するには少し危険すぎる、だからちゃんと映った未来が必要だ。

目を開くとそこは何もない路地で、さっきの地獄絵図のような住宅街が嘘のようだった。耳を澄ますと発砲する音や人の叫び声が聞こえる。僕はその方向へ足を進めず、脳内に竹須佐先輩と三月さんを思い浮かべ、音とは逆の方向へ全力疾走した。

三分ほど走り右へ曲がるとそこには神社があり、ついではないけれど竹須佐さんと三月さんが必死の形相で武装者と戦っていた。やっと見つけた。ここの場所はどこなんだ？ 周りを見渡すと『

岩屋神……。

僕は天照に睡眠から目覚めるツボと言うものを押され目を覚ました。ギリギリ二人の場所を特定できてよかった。

「竹須佐さんと三月さんは岩屋神社にいます」

「他の二年生は？」

「敵に囲まれて救うのは厳しいと思う。というか助けに行っても囲まれて終わりやった」

僕が平然と言うと沖田先生は涙を流しながら声を抑えるように泣いていた。

那実の地図案内により五分もしないうちに、さっきの夢で見た道路に着いた。後少して岩屋神社だ。

「この辺やで、ほらあそこに鳥居が見えるやろ？」

その声と同時に天照は車から飛び降り、外に出て僕を手招きした。えっ！？ そんな危険なことするのか？ でも僕しか現場を見ていない訳だから仕方ないか。

決心し、車から降りようすると鳥居から二人の男女が飛び出してきた。竹須佐先輩と三月さんだ。

沖田先生は二人を見つけるとものすごい瞬発力で声を発し「こっちよ！ 早く」と車を停車させて、二人を車に乗り入れた、しかし、扉を閉める瞬間に銃弾が飛び込んできて竹須佐先輩の胸を打った。

「おい、竹須佐先輩。しっかり」車は急発進し、その勢いでさらに竹須佐さんと密着する。

いくら揺さぶっても反応はなく、全身の力が抜けたように僕の膝の上にのけぞっている。

そんな状況なのに那実も崎野さんも興味はなさそうな顔をしている。いつの間にか助手席に座っている天照も一緒に車に飛び込んできた三月さんでさえも、ついでに言うときまで皆を助けられないことを知り、泣いていた沖田先生すら一瞥もせず運転をしている。

「おい、竹須佐さんが死ぬかもせえへんのに何でみんな無視なん」「大丈夫よ」

沖田先生は今までに聞いたことのない落ち着いた声でそう呟いた。
「この子達は超能力者よ、殺すなんてもつたいないでしょ？　だからあいつらは麻酔銃で撃って捕獲するの。人体実験の為に」

「マジですか？」人体実験なんて言葉を本気で口にした人を見たのがこれが初めてだ。というか当たり前だよな、そんな法律違反。

「だから死ぬ方がマシかもしれないわねもしかすると、どんなことされるかわかったものじゃないし」

その言葉に反応したのか、三月さんが那実の膝の上で暴れた。だした。「ダメ、薫先生！　みんなのところに行かないと、大名くんや橙芽、それに尚や梓玖はどうするの？　見殺しにするわけ？」

いつも清楚で落ち着いた雰囲気の三月さんがこんなに取り乱すなんて。そりゃそうだよな、仲間が拉致されるのを見過ごすことになるんだ、これくらいが当たり前かもしれない。

「死なないわよ」沖田先生は涙を流して呟く。

「無理矢理にでも止めてや」

天照の軌道が見えるほど綺麗な手刀によって三月さんは気絶した。ナイス判断天照。確かに今の状況じゃこれ以外方法はないよな。

僕の目の前には竹須佐先輩と三月さんが背中合わせで窮屈そうに座りながら寝息を立てていた。

「きやつ」今度は何だ？　やっと一段落したと思ったのに。

声を出した崎野さんの方を向くと泣きそうな顔で、「なんか後ろから物音がした」と爆弾発言をした。

もしかして後ろから武装者がよろしく！　とか言っ出てくるんじゃないだろうな？

「まだこの辺りは危険だからもうちょっと都会に出てからトランクを確認しましょ」

沖田先生は先ほどの悲しみの表情を忘れさせるかのような笑顔をこちらに向け、涙を拭いた。

今までにどれだけの生徒がこのような目に遭ってきたのだろう。そして彼らを幾度となく失ってきた沖田先生。彼女が超能力者だと

言い張る理由が少しわかった気がした。

しばらく車を進ませ、吹田方面に向かう国道に出ると快調に飛ばしてきた車を一旦停止させた。

「じゃ、確認しましょうか」

その声を合図に僕は車から出て、トランクの前に集まった。竹須佐先輩と三月さんはぐっすりと眠っている。くそ、あの銃弾が僕に当たればこんな緊張感を味あわないでよかったのに。

天照以外、みんなでトランクに手をかけ、「いつせいのーで」で勢いよく開け、一目散でその場を離れた。

トランクの前で立っている天照が何やら口を動かしている。トランクの中に知人でもいるのだろうか？

隣にいる沖田先生にどうしたのか訊こうと思い、首を横に向けると、巻き戻しをするように沖田先生は戻って行った。もしかして、安全ってことか？

「あずくー！ 大丈夫だったの、よかったー」

その声に反応し、那実も崎野さんもトランクへ近づく。

するとトランクから上半身を出したショートヘアの女子が現れた。予想通りというべきか制服をまとっている、ということはこの人も超能力者か。

「沖ちゃんだ、よかった助かったんだね。沖ちゃんの車だと思って適当にトランク開けて飛び乗ったんだけど」

思い出した、この人は確か夢の中で見たぞ。乱射された銃弾を華麗なステップで避けていた人だ。僕も小走りでトランクへ近づく。

「えー、助けれたの佳代もハヤも。ありえないよ！ あんなに敵がいたのにどうやったの？」沖田先生は僕を指差した。

「那実に似てるってことはあんたが難ね。ということは先見かあ。思ってたより便利な能力なんだね。本当にありがと、マジうれしいよ」と子供のような無邪気な笑みを浮かべると「ねむー」と言っ

トランクの中へ沈んでいった。

「さすが直感力の灘梓玖ね。運命すらも直感で変えてしまうなん

て。その代償として三日は目が覚めないでしょうけど」そう言うとき天照はトランクを閉めた。

「上筒くん生きてる？　よかった。もうマセマセの追跡はいいから学校に戻りなさい、危ないから。わかった？　うん、じゃね」

再び車は走り出す。絶対安全を誇る京都の中心わが母校。京都文化芸術大学付属高等学校に向かって。

学校に着くと、とりあえず眠っている二年生をそれぞれの部屋に運び、それを終わるとみんなは食堂へ行き昼飯を食べて、後は眠って過ごすだろう、色々あったからな今日は。

でも僕の一日はまだ終わっていない。最後の締めをつけに行かなくてはならないのだ。

飯も食わず、睡眠の誘惑を押し切って体育館裏へ向かった。

「何時間待った？」

「うーん、約三時間と二〇分かな？　体内時計やけど」

伸びをしながら事件の顛末の中心にいた高校生もときは、そのいけ好かない目で僕を睨んだ。

「でもよく三人も助けられたなああの状況から。うちはすっかりあんたらだけ逃げ出すんかと思ったけど」

意外と超能力者同士の絆は深いってことだろうな、僕は除け者気分だけ。

「もう会うことはないやろ？　ほなホットやらコールドなんかの話術は使わんと腹わって話そか」

「いつ気付いたん？　うちの得意技やったのに」

「体育館でお前が『妹』っていう言葉を発したときや、あれは正直ぐつときたけど、その反面怪しいとも思ったな」

「やっぱやりすぎたか、でもあーでも言わなあんだ同情してくれそうになかったからな」そう言いながら眞瀬は木の枝を鉛筆代わりにして地面に円のような物を複数描き始めた。

「あの家族の話しはホンマやったんか」

「半分ホントで半分嘘かな？」

どういう意味だよ、それは。

「一応血は繋がってる親やで、あんたのように血の繋がりのないようなのじゃなくって。でも幸福感はなかったな。いつつもいつつも占いの勉強ばかりさせられて。うちの家、江戸時代に有名やった占い師の末裔みたいでな、ホンマようやったで」

お前の苦労話なんてどうだっていい、早く両親の説明をしやがれ。
「あんたもせっかちな。そうやな、あんまりゆっくりしてる時間もないし、チャッチャと話そか」

眞瀬はズボンのポケットからタバコを取り出し、口にくわえた。

「一本どう？」

「いるかボケ。時間ないんとちゃうんか」本当にこいつとは気が合わない。

「こいつとは？ みんなとやろ、あんたの場合」

こいつう心を読んでくる辺りが一番嫌いなんだよ。

「ほな、本題いこか。うちの両親がリストラされたっていうのは間違いじゃないねん。うちの占い屋は日本でもいっぱいあってな五店舗くらいかな？ 最近売り上げの伸びへん堺支店、つまりお父さんが経営してる店やけど、店長交代しろって言われたねん、一番先祖との繋がりが濃い偉いさんに。ほんで実力だけやったら日本では一番あるうちが若くして店長になったねん」

「すごいんだなお前」見た目は小学生か中学生だけど。

「あんたもチビやん、まあええけど。で、あたしと交代したら売り上げがドンドン上がって、それでお父さん自信喪失して、友達の霊能力者にみてもらうようになったねん」

「嘘をつけ」そんなに上手い話があるわけないだろ。

「えっ！？」

そんなわざとらしく驚いた顔をするな、お前の正体が分かっていたらこんな話し信じる気にもなれないよ。

「どうせお前の話術でそういう方向に持っていったんやろ？ ほ

んで沖田先生に助けを求めることで組織の中枢になってる超能力者の行動をバラバラにさせて一気に壊滅させようと思ったんだと違う？」

「おー、さすが未来予報士」タバコを指で挟んだまま小さく手を叩き、いやらしい笑みをこちらに向ける。

「妹は？　もしかしてこれが事件の発端ちゃうんか」

あの傍若無人で恐れを知らない那実が、眞瀬の過去を読み取って震える程の恐怖を覚えたほどの強い恨み。

「そうやけど、正確に言えば妹じゃないな、何でって妹はうちやもん」

どういうことだ？　妹は妹で姉じゃないぞ、もしかして身長的なことを言っているのか？

「姉ちゃんは三年前にこの高校通ってて、あんたらと一緒に、超能力者やったねん。でもある日、組織の幹部にいきなり裏切り者とか言われて。そっから逃げるように暮らしてたんやけど結局見つかってどっか連れて行かれたわ」

なんでそんな奴の妹を情報部なんかに入れたんだ？

「気付いてなかったんやろな、うちが姉ちゃんの妹やって。名字変わってるし、うちかて過去の痕跡消すようにがんばったから」

ということは妹の人生が無茶苦茶になると言っていたのは本当の話だったんだな。こいつのことだから三年間恨みを晴らす為に必死に試行錯誤してきたのだろう。

「結果的に三人の超能力者と変なおっさん五人くらいしかしばかれへんかったけど、気持ち的にはスッキリや」

「お願いがあるんやけど、捕まえた二年生には人体実験とかせんとしてほしいんやけど」

「それは無理や、捕らえたのはうちじゃなくなつて手助けをしてくれた組織やからな。あんたら結構、敵多いから気をつけりや」

まさか悪の手下が正義の味方に注意をするなんて思ってもいなかっただよ。

「お前もな」僕が嫌みでそう言つと「ありがと」と嫌みで返し眞

瀬は立ち上がった。

やっとこれで眠れるか、と思いながら振り向くと体育館の脇から崎野さんが現れた。銃口をこちらに向けて。

「崎野さん、どうしたんそんな物騒なもん持って」

「止まれ眞瀬明菜！ あんたのおかげでコノカの人生が狂ったんやからな！ あんたを追ってこの学校入って、やっとチャンスが来たわ！」

どういうことだ崎野さん？ 冗談と思っていたけど、その充血した眼と瞳孔が開ききった目を見る限り、もしかしてまた例の発作か？ ということは眞瀬はやっぱり崎野さんのトラウマに何か関係していたのか。

「うちこの子の顔しか知らんけど……。もしかしてこの子があんたの言ってた崎尾さん？」崎野さんだけだな。

「あんたの占いであたしは友達から裏切られて好きな人にまで裏切られた……。死ね！」

それは八つ当たりじゃないのか？ ちょっとは落ち着けよ。と言う前に崎野さんは引き金を引き、鼓膜を突き破るような重い音がした。崎野さんは発砲の衝撃に耐えられなかったのか、体を吹き飛ばされ、頭を強く打ち起き上がるうとしなかった。

こんなに余裕をかまして崎野さんの姿を眺めている場合じゃないな、さよなら眞瀬。

と言いたいところだけど、素人が発砲して、目標体に当てられるはずもなく、その銃弾は眞瀬の隣にいる僕に向かっていった。本当に、弾がゆっくり見えるよ。すごいんだな人間の追い込まれたときの力っていうのは。

なんて感心してる場合じゃないどうやって避けようか。もしかして体は早く動くかとも思い、動かしてみたが全く動かない。そりゃそうか、見ることにだけに集中しているんだからそうなるよな。

僕の人生にふさわしいよ。流れ弾に当たって死亡、しかも愛する人の。

死を覚悟した瞬間、その銃弾目がけ人が飛び込んできた。その瞬間スーパースローモーションは終わる。

「大丈夫か天照」

僕の前へ飛び込んでそのまま倒れたのは天照だった。思わず呼び捨てしてしまったじゃないか。

天照は僕をかばい銃弾を腕の当たりに受け、辛そうな顔をして「大丈夫」と言っただけで気絶した。

そそくさと逃げようとする真瀬に僕は最後の質問をした。

「なんで僕ら一年を先に殺さへんかったねん、せめて僕だけでも殺したら復讐は成功したやろ！」

真瀬は立ち止まり、上半身だけをこちらに向けて、うつむきながら答えた。

「そこにおける天照以外はシロートみたいなもんやからな一年は、だからどうでもよかったねん。あとは……青春の悪戯かもせえへんな」

そう言っただけで小学生のような天才占い師は、僕に暖かい温もりを、それ以外には大きすぎる傷を付けて去って行った。

最終話 超心理的青春

占い師兼組織情報部員による復讐劇を中途半端に留めた二日後。もちろん僕は通学していた。

那実も遅刻しながらも授業には出席していて、崎野さんと天照は二日連続の休みだ。この二人については現在入院中で、組織運営の病院で治療中だ。そこには三月さんも入院していると沖田先生から聞いた。

僕と那実は食堂に向かっていた。昨日竹須佐さんと約束したからな。

「今日は何食べる？ またラーメンか」

「続けて一緒のもの食べたらあかんって気分になれへんか？ そやな今日はうどんや」

結局麺類かよ。確かに味と太さとかは違うけど成分は一緒だぞ。せめて米類にしろよ。

食券を買い、那実は食券を食堂のおばちゃんに渡しに、僕は席取りのため食堂をフラフラ歩いた。

「こつちこつち、那実」

「あつ、竹須佐先輩、どうも。というか僕は雑ですよ」

「そんな普通のツツコミするなよ、わかってるわかってる。ちょっといじつただけ」そう言って竹須佐先輩はうどんをすすった。

あんたもうどんかよ。隣を見るともう一つ空の器が置かれていた、形を見る限りこちらもうどんだな。

「あれ？ 誰かおったんですか隣。もしかして上筒先輩？」

「いや、上筒さんはまた任務に行ったよ、残りの三年もな。そこはアズが座ってたんだけど、今アイス荒らししてるよ」

アイス荒らし？ 僕は気になってアイス売り場へ近づいた。

そこにはアイスの山を手で掘りながら「これは違う、いやこれも違う」とか呟くアズこと灘梓玖さんなだあずくがいた。

「どうも灘さん、何してるん？」

「おっ先見くんこんちは」そう言うと灘さんは僕の耳元に近づき小さな声で「直感で当たりを探してるの。ちつと待っててくれ、今三つ見つけたからあと一つだよな」

超能力をこんな軽い気持ちで使ってもいいのだろうか？僕は呆れながらも一応礼だけは言って、さっき取った席に着いた。正面にいた二年生も腕を正面に伸ばし手を開きそれを上下に動かしている。すっごい怪しいな、おい。

その手の先を見るとティッシュが空を舞っていた。

いくら何でもやり過ぎだろ、確かに風に乗って飛んでるように見えるけど、食堂内にはそんな風は吹いていないぞ、吹いているのは扇風機の風くらいだ。

「先輩、こんなところで能力使っていいんですか？」

竹須佐先輩は集中した面持ちを崩さずに答えた。

「こういう日々のトレーニングが大事なんだ、こいつはちょうどいい重さだしね能力的にも物質的にも。それにサッカーでもイメージトレーニングが大事だと言うだろ？あれといっしょだ」

サッカーと超能力を一緒にするなよ、あんたは物の区別が出来ないのか。全く二年になると超能力に対してこれほどまでルーズになるのかな、この二人には危機感が足りない気がする。

それにしても那実の奴、どれだけ時間かかてるんだ？食券渡してからおばちゃんがすぐ料理を作ってくれるだろ、それなのにかれこれ五分は戻ってこないぞ。

僕は再び席を立ち、那実がいる冷水機に行った。

「いつまで待たすねん、アホが」

那実はコップを左手に持って指を鳴らし、また違うコップを持ち替えて指を鳴らし、それを繰り返していた。

もしかしてこいつも超能力の乱用か？

「ちよつと待てよ。今かわいい子が使ったコップを探してるんやから」こいつはやっぱ最低だな、そんなことに能力を使うなんて

「おつ、これは食堂で彼氏と一緒に飯食べてるときに二年の牧瀬さんが使ったコップやんか、これはキープと」

キープなんてしないでいいから早く行くぞ、そうじゃないと灘さんが超能力を使って当てたアイスが溶けるじゃないか。

「早くせえや、お前のうどんものびるぞ」

僕が那実を急かすとコップを冷水機の横に置きポケットから食券を取り出した、しかも二枚。

こいつは本当にしょうもない奴だ、呆れて物も言えないよ。食欲より性欲かよ。この変態野郎。超能力を与えてくれた科学者の方達もこの姿を見ると嘆き悲しむだろうな。

仕方なく僕は那実の手から自分の食券だけを取り、井コーナーへ向かった。

「おばちゃんビビンバお願い」

「はいよ！」と言う声が響き、一分も経たないうちにビビンバは完成し、僕の目の前に置かれた。

「特別に大盛りだからね、薙くん」

「マジで？　ありがとうおばちゃん」と言いたいところだけど、この人はおばちゃんじゃないんだよな。歴史の先生なんだよな。僕はあえて突っ込まずに無視をした。

「あつ薙くん。いつもみたいなツツコミちょうだいよ」

もう面倒くさい、はやくまともな人間が一人でも戻ってきてくれないかな？　三月さんとか三月さんとか三月さんとか。

もう僕一人じゃこんな日常からはみ出した奴らをコントロールできないよ。人と違うところはせめて超能力だけにしてくれ。

そんな憂鬱な昼休みをなんとかやりきり、授業は寝たきりで、放課後を迎えた。

僕は素早くカバンを担ぎ、寮には戻らずそのまま京都駅へ小走りで向かった。行き先はもちろん病院だ。

そこは病院と言っても診療所くらいの大きさだ。理由は組織の人間しか利用しないから病室を何十室も作っても意味がないからだ。

しかし見た目は綺麗で、そこからは組織がそれほど古くないということが考えられる。

扉を開けると、切望の二人が楽しそうに会話をしていた。

「あつ、薙くんやありがとーお見舞い来てくれて」

「毎日面倒なのがありがとうございます、電車に乗ってわざわざここまで来てくれて」

一応二人は精神に支障をきたしているという理由で入院しているが、そんな雰囲気をまるで感じさせない。どちらかというと学校にいるあいつらのほうが精神異常者だと思ってしまう。

精神障害を起こしている二人を一緒にの部屋に置くんなんて危険じゃないかと思っていたけれど、二人の心のバランスがすごくいいらしく、同室で治療中のような。三月さんの明の心、崎野さんの清の心、それらの状態がよくなつてはやく共に高校生活を送れることを望んでいますよ。

しばらく話をして、みんなでりんごを一個食べ終わり部屋を出た。

そして一番奥の部屋の扉を開く……がやはりいいない。

あいつは本当に、一昨日腕を撃たれたんだからもう少しくらい安静にしてろよな、傷口が開いても知らないぞ。

「あら薙さん、天照さんならいいわよ」

「三月さん、あいつまた出歩いてるんですか？ 腕の怪我まだ治ってないのに。でもあいつやったら自分で治せるか」

「それは無理よ」そう言って三月さんは口を手で覆って微笑んだ。

「あの子は自分のことが嫌いだから治せないのよ」

どういう意味だそれは？ まあいい、とりあえず向かうとするか。僕は三月さんに二度目の別れの挨拶をして病院出て、あの公園に向かった。

全ての始まりの場所へ。

木々が揺れる小さく遊具も少ないので子供ですら近寄らない公園。

そこを好むのは一匹の黒猫と容姿と性格が正反対な女子高生だけだろう。

「おい、病院抜け出して何してるねん」

「別にいいじゃない、あたしの体でしょ。あなたに心配される必要はないわ」ベンチに座る天照はそう言っただけ膝元にいる黒猫をそっとなでる。

「関係あるよ。お前がああとき僕の代わりに銃弾当たってなかったら、僕は今頃チーンやったで」

「命の恩人に対する物のいい方かしらそれが」

カツコ付けたこと何て言わなけりゃよかったよ。本当にこいつはいちいちわずらわしい。

「崎野さんのことやけど許したってくれへん、あの子も抱えてる物があるやろうし」

「別に恨んでもいないし、怒りもしてないわ。言っただしょ？」

あたしは比較的あの子を好いているって」

そう言えばそんなことも言ってた気がするな。お前以外と心が広いんだな、よかったよかった。

「ところで天照、言い忘れてたことあったけど」

「何？」

「お前、仲間になっただけって言ったやん」

「あああのことね。別にいいわよ、あたし一人で出来る限りするわ。あんなものをほとんど初任務で見てしまったら、そう言う気持ち無くすのもわかるわ。それにあなたは」

「違うんや天照、聞いてくれ。こんな僕でよ、よかったら」

何を緊張しているんだ僕は。相手は天照だぞ、顔はよくっても性格は最悪……でもないか。

「事件の中心人物を逃がすような僕でもよかったらその仲間になつてもええ……で」

風が心地よく吹き、天照の長い髪がなびく。

「そういうところがいいんじゃない」

やっと僕の目を見て話したかこいつ、やっと笑ったなこいつ。僕もそういう顔を見れると思うとこれからもやってやろうと思うよ。

「よろしく、薙」

そう言えば崎野さんに告白の返事聞くの忘れてたよ。毎日答えが怖くてビクビクして過ごすのが嫌だから今日こそはと思ったけれど……まあ、いいか別にこのままでも。きっと、この日常は続くんだろっし、僕と天照がいる限り。

大丈夫、きっと出来るだろう。国を守ることも、敵を守ることも、仲間を守ることも。今ならそんな気がする。あの笑顔を思い出せば、それだけでどうにかなるだろうなんていい加減な気持ちになる。やっぱり単純なのかな人の心って。

決して最高の幸せとは言えないけど、思っていた以上に辛いけどでもどうにかなりそうだ、普通の高校生もやってることは違ってても思っていることはきっと一緒だろう。

ずっと続けばいいと思うこんな青春が、……超心理的青春が。

最終話 超心理的青春（後書き）

全40話、ここまで読んでいただき本当に感謝しています。

何かと問題点があったでしょうけれど楽しんでいただければこれ以上の幸せはありません。

この物語には続きがありますし、伏線も沢山含ませていますが、いったん終了とさせてもらいます。

またいつか青春超能力者達が活躍するのを待っていて下さい。
本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0675d/>

超心理的青春

2010年10月9日05時08分発行